時代小説の楽しみ 12

波濤風雲録

縄田一男 編

新潮文庫

時代小説の楽しみ

■縄田一男＝編

全12巻
別巻1

待望の文庫化！

1. 秘剣、豪剣、魔剣
2. 闇に生きる
3. 関八州の旅がらす
4. 八百八町捕物控
5. 江戸市井図絵
6. 大江戸指名手配
7. 剣に生き、剣に死す
8. 戦国英雄伝
9. 維新の群像
10. 仇討騒動異聞
11. 魔界への招待
12. 波濤風雲録
- 別巻 時代小説・十二人のヒーロー

（巻数の白抜きのものは既刊です。）

新潮文庫

カバー装画　蓬田やすひろ

時代小説の楽しみ 12

波濤風雲録

縄田一男 編

新潮文庫

時代小説の楽しみ 12
波濤風雲録
縄田一男 編

な 29 12
新潮文庫
640

9784101397221
1910193006408

遣唐使、南海の富を求める御朱印船、あるいは万延元年の遣米使節――無数の船が、この国の港を出ていった。元寇、キリスト教、黒船――未知の世界からの渡来者は、常に海からやって来た。男たちは苛烈な天意と対峙して荒海に数々の英雄譚を残し、渡来者たちは日本史に新たな１頁を書き加えた。日本国の原風景に触れる新鮮な視点を提示する、海洋もの時代小説の先駆的名作13編を収録。

定価640円（本体621円）

ISBN4-10-139722-8

C0193 P640E

新潮文庫の歴史・時代小説

安部龍太郎	黄金海流
池波正太郎	雲霧仁左衛門（前・後）
伊藤桂一	隠し金の絵図 ―風車の浜吉・捕物綴―
井上 靖	風林火山
井沢元彦	忠臣蔵 元禄十五年の反逆
遠藤周作	王妃 マリー・アントワネット（上・下）
海音寺潮五郎	西郷と大久保
小松重男	秘伝 陰の御庭番
五味康祐	薄桜記
酒見賢一	後宮小説
塩野七生	ロードス島攻防記
司馬遼太郎	燃えよ剣（上・下）
柴田錬三郎	赤い影法師
子母沢寛	父子鷹（上・下）
白石一郎	幽霊船
滝口康彦	鬼哭の城
津本 陽	人斬り剣奥儀
永井路子	わかぎみ
南原幹雄	幕府隠密帳
縄田一男編	波濤風雲録 ―時代小説の楽しみ⑫―
新田次郎	きびだんご侍
平岩弓枝	花影の花
藤沢周平	密謀（上・下）
山本周五郎	赤ひげ診療譚
山手樹一郎	朝晴れ鷹
吉村 昭	桜田門外ノ変（上・下）
隆慶一郎	死ぬことと見つけたり（上・下）

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

波濤風雲録

—時代小説の楽しみ⑫—

縄田一男編

新潮社

波濤風雲録

縄田一男編

新潮文庫

波濤風雲録

—時代小説の楽しみ⑫—

縄田一男編

新潮社版

5512

目　次

南條範夫　燈台鬼……9
新田次郎　元寇秘話……35
新田次郎　意地ぬ出んじら……77
白石一郎　いれずみ国姓爺……97
新宮正春　安南の六連銭……137
久生十蘭　呂宋の壺……185
菊池寛　碧蹄館の戦……221
陳舜臣　桃李の剣……241
山田風太郎　スピロヘータ氏来朝記……291
村上元三　ポーハタン号の密航者……323
綱淵謙錠　朔（さく）……353
戸川幸夫　維新の狐……441
宇井無愁　開化飛龍車……471
編者解説　縄田一男

波濤（はとう）風雲録

時代小説の楽しみ⑫

燈台鬼

南條範夫

南條範夫（なんじょう・のりお）
明治四十一（一九〇八）年、東京生れ。東大法・経済学部卒。戦後、国学院大学や中央大学などで教鞭をとりながら創作。昭和二十六年『出べそ物語』で朝日文芸賞を、二十八年『子守の殿』でオール新人杯を、三十年『あやつり組由来記』でサンデー毎日大衆文芸賞を各々受賞し、三十一年には『燈台鬼』で直木賞を受賞。五十四年、教職を辞して執筆に専念、五十七年、吉川英治文学賞受賞。

一

唐の大暦十四年三月上巳、代宗皇帝が在京各国の使臣を蓬萊宮に招いて曲水の宴を催した時、ちょっとした紛争が起った。

皇帝出御の少し前、列国の使臣たちが参入して、各々定めの席に案内されたが、日本の遣唐使小野石根は、指し示された席に就こうとはせず、らんらんと輝く眼で殿内を眺め渡した揚句大音声で叫んだのである。

「この席次は我等、承服致し難い。見れば東列には新羅が大食国（サラセン）の上、第一位にあり、我は西列、吐蕃（チベット）の次におかれている。新羅は我朝に朝貢すること久しい国であるにも拘らず、我国より上席に位するは如何なる訳でござるぞ。接待係の手違いか。速かに我等の席と新羅使臣の席とを換えて頂き度い」

何事を憤り出したのかと驚いた列席の人々は、訳語司がこれを通訳するのを聞くと、一斉にどよめき、中にも新羅大使理伯は満面に朱を濺いで異議を唱えた。接待役の将軍李回が慌てて近寄ってきて石根をなだめすかそうとしたが、石根は聴き入れない。

「この事は既に玄宗皇帝天宝十二年正月朔日拝賀の席上、我遣唐使大伴古麿が主張し、唐朝

に於てもしかと認められた筈である。今更それを覆されては、何の面目あって日本へ戻れましょうぞ」

三十年近くも前の事をいい出されても、李回将軍は即座にその正否を答える知識を持っていない。いずれよく記録を調べてみるから、今日のところはこの儘に、と懇願するように云ったが、石根は頑強に自説を固執し、そっと袖を引く副大使大神末足の手を振り切って、つかつかと東列に進み、新羅大使の上席に突き立ったのである。

理伯が憤然としてこれを押しのけようとした時、皇帝の出御が報らされた。李回将軍は理伯の傍に飛んで行って、殆ど両手を合せん許りにして何か囁くと、その両肩を抱きかかえて無理やりに、西列第二席、日本に予定されていた席に連れてきた——ちょうどその時、皇帝の姿が現われたので、一同は何事もなかったかのように低く頭を垂れたのである。

当日の招宴はどうやら終ったが、新羅大使からは、当然手きびしい抗議が提出された。記録を調べてみると、天宝十二年元旦拝賀の席上、日本使節から席次の序列について発言のあった事は確かに記されているが、その要求が容れられたとは明記されていない。大伴古麿は、単に一応主張しただけの事を、あたかも実現したかのように、帰朝報告したのかも知れないのである。だが、石根は飽迄譲らなかった。元来剛毅な性である上、大使佐伯今毛人が病の為渡唐出来なくなり、上席副使である彼が事実上の大使の役を引受けるようになった事からくる必要以上の力みかたもあったに違いない。もし記録に明示されていないのなら、今度こそはっきり書き止めておいて貰いたいと逆襲した。

事面倒とみた李回将軍は、日本使節の正式謁見日を繰上げ、その後早々、都を去らしめるように取計ってしまった。

退去を数日後にひかえた或日のことである。石根は、留学生高階遠成を連れ、馬にのって、左街崇仁坊の客館を出た。長安城外の逝く春に、最後の名残りを惜しもうと云うのである。

右街が主として庶民の街であるのに対して、左街は貴族大官の邸宅苑圃が多く、長く清らな土塀がつづき、その磚の上に小さな白いすももの花が散っている。

竜首山の斜面に築かれた大明宮が城内を見下ろして、遠く薄ぐもりの空の中に、悩める美女のように艶めかしく霞んでいた。中書、門下両省の大きな建物の背後に緑の樹々を一きわ高く抜けて見えるのが、先日謁見式の行われた延英殿であろう。

東の正門である春明門を出て少し馬を進めると、あたりは急に広々とひらけ、田畑の彼方に覇水の面が鈍く光ってみえる。河辺の草も大きく育って、春は既に過ぎ去ろうとしながら、しばしためらっている風情である。

ゆっくりと馬を打たせながら、石根は、故国においてきた妻と児を思い出していた。

奈良の廷臣たちの間で、石根は、功名心に燃えた剛胆な青年として知られていたし、自分でもそう信じていた。だから遣唐副使大伴益立が病弱を理由に渡唐を忌避しているのを知ると、自ら進んでこれに代るように運動した。大使今毛人の病気の為、持節副使とされた時も、責任の重大さに少し固くなったものの、内心勇躍するところがあった。——その石根も、妻の衣子が夫の渡唐を歎き悲しむことの激しさには、甚しく当惑した。衣子と、その間に生れ

た道麻呂とを、ひどく愛していたからである。

もう二度と会えぬかのように泣き沈む衣子に、必らず無事で戻ると繰返し、いってきかせ、今のままではいつ迄も左中弁従五位下だが、副使となれば直ちに従五位上播磨守に叙任され、無事帰朝すれば位階の陞叙は疑いなく、あとの出世は思いのままになるのだからと、若々しい希望を一心に説いたのだった。

あれからもう十カ月余、使命は立派に果した。夏迄には日本へ戻れる。再び衣子をかき抱くであろう日も近い。

心の底のどこかにふいと夢のなごりのように浮んだなやましい情感に、思わず顔をあからめて苦笑した時、後から遠成が、声をかけた。

「何やら妙な風体の者が参りますが」

振り返ると、なるほど、明かにこの国のものではない異形のいでたちのものが五騎、自分たちの通ってきた路をやってくる。

「どこの国の連中かな。何しろ今、長安には、塞外、西域、南海諸国の使臣従者合せて四千人近くもおると云うから、我等がまだ一度もお目にかかった事のないみなりの者もあるだろう——ところで、もうそろそろ戻るとしようか、坊門の刻限には大分時間もあるが」

二人は馬首をめぐらせた。

そして、向うからきた五騎と、二人の馬とが行き違おうとした時、先方の一騎が、石根と遠成の間を隔てるように、馬を横ざまに入れた。と見るや、他の一騎が、突然刀を揮って、

石根の馬の尻に切りつけたのである。

「何をする！」

棒立になった馬の首に抱きついて、石根は叫び、辛うじて馬を制御すると、素早く、腰の太刀を引抜いた。

「遠成！　ここは構わぬ、早く城内に知らせろ！」

そう云う間にも、左右から打ち込んでくるのに向って、激しく切り返していた。太刀を使うすべも碌に知らない遠成は、自分が石根を助ける途は、云われた通りにする他はないと覚って、左腕に一太刀切りつけられたのを夢中で引きはずし、城門へ向って一散に馬を飛ばす。

襲撃者たちは、それを追おうとはせず、石根をとり巻いて、隙間もなく打ってかかった。かなり永い間、石根は必死の力闘を続けた。

「殺すな、生捕れ」

と囁き合う短い言葉で、彼等が、新羅の者らしいと気付いた時、脇を長槍の石突きで強く突かれて落馬した。打ち処が悪かったか、起き上ることも出来ずもがいていた処を打重なって縛り上げられ、肩や腰を乱暴に蹴り上げられた揚句、馬の背にのせられた。

そのまま何処へともなく連れられてゆく中、後の方から喚声を挙げて追ってくる救援隊の蹄の音をきき、やがて、馬の背から、傍の溝の中に叩き落され、背中を深く槍でつき刺された。

「石根様、石根様」

遠成の探し廻る声を聞いたように思い、ここにいるぞ、と力一杯叫んだつもりが、全然声に出ず、目の前が真暗になった途端、石根は完全に気を喪ってしまったのである。

二

往路はつつがなく、唐に渡ることの出来た遣唐使の一行四船も、復路は惨憺たるものであった。

どうやら無事だったのは、最初に戻った第三船だけで、これにつづいた第四船は乗員の大半が、途中で漂着した耽羅島（済州島）で抑留されてしまい、第二船は飲料水を波に奪われて全員半死半生の態で薩摩に辿りついた。最後に肥後天草についた第一船は、更にひどかった。もはや船と云うよりも、雑然たる木材の集積と云った方がよいような状態で、その船体の残滓にすがりついていた人々は、自分たちが生き残って故国に帰りついた事を自ら信じ得ない程、呆然としていた。

生存者の報告によると、船は常熟の港を出て三日目、早くも大暴風に遭遇し、船体は真二つに裂け、忽ちの中に、持節副使小野石根等三十八人の日本人と、答礼使趙宝英等二十五人の唐人とが、激浪の中にさらわれてしまったと云うのである。

石根の死を報らされた衣子は、全身の骨がなえしぼむのを覚えた。もし、彼女の傍に、道麻呂のあどけない顔がなかったとしたならば、彼女は恐らく幾月もたたぬ中に、石根の後を追うことになったに違いない。

遺族に下賜された御衣一襲も、黄金百五十枚も、石根に追贈された正五位の名誉も、もとより衣子にとって何の慰めにもならなかった。

何の悦びもなく、ただ生きているだけの日が続いた。

そして、三年――ある秋の夕、ひっそりとしずまり返った衣子の邸に、珍らしい人が訪れてきたのである。

石根と共に唐に渡って、そのまま彼地に残っていた留学生高階遠成であった。遠成は、衣子と、既に九歳になっていた道麻呂とに、夢にも思いがけなかった事実を告白した。

「石根様は海に沈みなされた事になっておる由、承りました。なれど誠は、長安城外で何者かに襲われて行方不明になられたのでございます。使節の身が、そのような災に会われたとあっては、石根さまの面目に拘ることと思われて、帰国前、大神末足さまが大伴さまと謀って、船中で病歿されたと奏上することに決めたのでございます。偶々暴風雨で多くの人が波にさらわれたので、その内に石根さまも数え入れたものでございましょう。

ただ私は、石根さまの最後のきわ迄お伴しておりました身、不甲斐なくもお姿は見失いましたが、何としてもまことの事をお伝え申さずには気が済みませぬ故、帰国の挨拶を上司に済ますと、すぐにやってまいりました。寔に申訳もない事でございます」

奇怪な報らせに肝つぶるる思いで聞いていた衣子は、遠成が語りつつある間に、何か大きな希望が胎内に湧き上ってくるのを感じた。

「私も留学の三年間、出来得る限り、石根さまの行方を探しましたし、長安の京兆尹（守護

職）も随分と力を添えてくれましたが、どうしても分らなかったのをみれば、或は石根さまは暴漢の為にお命を奪われたのかも知れませぬ。だが、私には、何となく、まだ石根さまは生きておられる。必らずどこかに生きておられる——と、そう思われてなりませぬ」

遠成は何度もそう云った。自分の言葉が、衣子の蒼い面を美しく輝かしたのをみて、衣子を更に元気づけたいと云う気持もあったに違いないが、それよりも、自分の責を幾らかでも自分に弁解したい心から、彼は真実、石根の生存を信じ、それを切願していたのである。

傍で聞いていた道麻呂は、遠成の話を聞くと、頬に血をのぼせ、拳を握って、ふるえる声で叫んだ。

「母様、道麻呂は唐へ、父上を探しに参ります。あの強い、立派な父上が、むざむざ死なれる筈はありませぬ。必らず必らず生きておられます」

その日から衣子親子には、新しい生活の目標が生れた。何年後に達せられるものか分らないし、唐へ探しに行くこと自体、石根と同じ危険を冒すことになると云う事さえ、不思議に二人の念頭に浮ばなかった。

何としても、唐に赴き、石根を探す——それだけが、抜き難い固定観念として、二人の心にしっかりと根を下ろしたのである。

渡唐を、最大の唯一つの目的として、道麻呂はひたすら勉強し、殊に唐の言葉は、韓人連源について、自由に操れるまで習熟した。

父の不運を憐れむ人々の情もあって、元服すると直ちに召出されたが、その勤勉と怜悧と、

母に似た優美な容姿とに助けられて、道麻呂の官途は順調に進んだ。

その中にも歳月は、標野の果ての千草の下を流れる水のように、人知れず流れて行った。都が平安の地に移り、新しい内裏に移し植えられた桜が、紫宸殿のいらかに届く程になった頃には、道麻呂もいつしか三十の声を聞いて、父石根が渡唐した齢になっていたのである。

三

延暦二十三年七月六日、肥前松浦郡田浦を発した遣唐四船の第二船に、鋳銭次官従七位下小野道麻呂は、准判官として乗込んでいた。そして、その同じ船に、往年の留学生高階遠成も従六位上の判官として乗っていたのである。

延暦二十年夏、遣唐の朝議が決定し、大使藤原葛野麿、副使石川道益が任命されると、道麻呂は勇躍して随行を願った。それから足掛四年、造船使と播磨・丹波・備中の船匠たちの紛争や、伊勢神宮始め、畿内七道諸社への度重なる祈願、大使の病気、と色々の問題があり、漸く難波を出たと思うと暴風に遭って吹き戻され、葛野麿が怖気づいて使節辞退の意を洩らすと云うことなどあり、道麻呂と遠成がどれほど焦慮し、憤激したことか。

だが、遂に、待望の船は今や支那海を横断しつつあるのである。道麻呂は全身に亢奮と期待とをたぎらせていた。遠成に、幾たび幾十たびとなく、同じ父の憶い出を繰返させ、二十数年前、同じこの波の上を渡った若い日の父を憶った。

母からも父の容貌を詳しく聞いていたものの、さて両眼を閉じて思い浮べようとすると、

幼い日別れに臨んで最後迄握りしめていた父の束帯に垂れた襴の美しい模様しか浮んでこない。

遠成にしても、二十数年の歳月を経て、よし仮に長安の巷で石根に行き会ったとしても、果してすぐにそれと見分け得るか否か、甚だ心許ない。それにも拘らず、彼は何となく、石根を必らず探し出せるものと信じているようであった。道麻呂の余りにも激しい信念が、いつしか彼をそうした心理に引きずり込んでいたのである。

二人の乗り込んだ第二船は、出発後三日目に、他の三船とはぐれてしまい、北西の方へ向って吹き流された。激浪に翻弄されること十日余り、急に風が変って波が鎮まり、船は滑るように進んで八月初め、炎天の下に燃え上っているような明州の港に辿り込んだ。

そこで他の船を待つこと五十日、容易に安否が分らないので、一先ず揚州へ乗り込み、観察使兼勅使閻済美に、着到を正式に報告し、都からの使者に迎えられて、長安に入ったのは十月も半のことである。

使院に落着くと、道麻呂と遠成は直ちに、石根捜索を開始した。

とりあえず遠成の案内で春明門外の遭難地点に赴いた道麻呂は、その辺一帯を、凡そ人家とみれば必らず立寄って、根掘り葉掘り尋ねたが、二十数年も前のことだけに、何一つ信用し得るような情報を提供できたものはなかった。多くの場合、魯鈍な顔つきをした農民は、却ってこちらの正気を疑うかのように、しげしげと眺め、蝕んだ歯をむき出して笑った。

道麻呂はまた、内使（接待役）趙忠に事情を打ち明けて捜索を依頼した。趙忠はひどく同

情し、京兆尹に頼んで古記録を調べて呉れた許りでなく、広く布告を出して、異国人の拘禁されているものを訴えさせた。凡てこれらの事を運ぶため、道麻呂は、かねて用意していた黄金や布帛を惜気もなく散じたのであったが、石根の痕跡は杳として知れなかった。

十二月になって、漸く第一船に乗った大使葛野麿以下が入京してきた。殆ど難破しかけた第三、第四両船を伴って漂流し、辛うじて福州の港に辿りついたとか。一同は、手をとり合って再会を悦んだ。

大使の入京によって直ちに日程が決まり、二十四日国信別貢の奉呈、二十五日宣化殿に於て礼見、引きつづいて麟徳殿で対見の式が行われた。

正月拝賀の式は、皇帝の急患によって催されなかった為、日本側でひそかに予期していた席次争いの憂いはなくなったが、二十三日徳宗帝急逝し、皇太后王氏摂政となる事などあって、一切の行事が殆ど中止されたので、大使一行は留学生等の処置、招聘の高僧技匠等の交渉が済むと、三月早々退京することになった。

帰路は二手に別れ、大使葛野麿以下二船は明州から、副使石川道益等の二船は揚州からと決定された。

石根の行方は依然として解らない。

「遠成殿、大使一行退京の日は近づきましたが、私はこのまま長安に残って探索を続けたいと思います」

道麻呂がそう云うと、遠成はしばらく考えていたが、

「いや、それよりも、副使の組に加わって揚州へ行ってみたらどうでしょう。私もこの前、長安許りを探しましたし、今度もこれ程探してみても分らないのは、もしかしたら石根さまはどこか遠くにおられるかも知れませぬ。とすれば揚州、蘇州の辺は、各国から船の集まる処、長安についで多くの異国人がまぎれ住んでおります。是非探してみるべき処の一つでしょう。揚州についても、船待ちに少くも一カ月かかる筈、その間充分に探してみても見出し得ないようなら、その時改めて残留を願うことにしては如何です。及ばず乍ら私も、共々残ってお探ししましょう」

四月初、副使一行と共に、監使高品宗惟澄に送られて揚州大都督府に着くと、二人は又しても熱心な探索を続けた——が一切が徒労に終った。

遂に五月半、好天を期して出発ときまり、揚州節度使陳大勉が、一行に対して最後の別宴を張ってくれることになった。

それ迄幾たびか都督府の宮殿で行われた招宴と違って、節度使の別邸で、副使判官等数名を招いて、なごやかな宴にしたいと云う先方の希望である。

別邸とは云いながら、さすがに驚く計り広大な苑内の一隅にある風仁堂と云う華麗な客殿に当日の席が設けられた。

涼州の美酒が乾され、七絃の玉琴がかなでられ、主人側は豊富な贈物に対する謝意をも含めて、大いに接待につとめたが、風波の旅を一両日の後に控えた客たちの、別離と危惧の想いは賑かな席上に一抹の哀愁を消し難いものにしている。その気配をみてとると、陳大勉は

傍の者に目くばせした。

すぐに、騒々しい銅鑼の音がうち鳴らされ、異様な芸人の一団が四方開け放たれた広間の中程に姿を現わした。

奇怪な笑いを浮べて踊る崑崙の黒奴もいた。悲し気な瞳をして胡笳を吹く紫髯緑眼の胡人もいた。宝石を縫いつけた腰帯をひるがえして雲の如く舞い狂う片手片足の吐蕃美女もいた。

盲いた三つ児の娘が、巧に絃を合せた。三人とも余りよく似て、しかも盲目計り揃ったものだと感心すると、元来盲目だったのはその中の一人だけで、他の二人はこれに合せて殊更らに眼をつぶしたのだと云う。

「あれは？」

幅二尺高さ三尺位の殆ど長方形に近いものが動いてきたので吃驚していると、ひょいとその上辺に人間の首がつき出した。うなだれていた首をあげたのだが、足は五寸とはなく両手はきっちり胴の長さで垂直に伸ばされているので、その首は、四角い壺の上部のつまみのように見える。

「あれは広州で拵えている箱櫃児と云うものです。見世物にするつもりで、幼児の頃から四角い箱に入れっきりにして育てるそうですが、面白い形になるものですな」

得意気に答えたが、対手に却って理由の分らぬ嫌悪感を与えているらしいのに気附くと、陳大勉は、自ら笙を吹いてみせた上、客人たちにも是非一芸をと所望した。

一番若い道麻呂が真先に立たされた。

少し酔った頭の心が熱く、遂に効果の上らなかった捜索、残留後の採るべき手順、故国で待っている母のことなどが、胸の中に入り乱れて、彼の舌を重くしていたが、やがて顔を振り上げると、道麻呂は哀切の思いを籠めて唱い出した。

「秋萩を妻問ふ鹿こそひとり子に、子持てりと云へ、かこじもの、我が独り子の草枕――」

京を出る時、母が贈ってくれた歌である。

「吾が思ふ吾子、ま幸くありこそ」

一たび結んで、息を休め、返し歌を二度繰り返した。

「旅人の宿りせむ野に霜降らば、吾が子羽ぐくめ、天の鶴むら」

唱っている間に、彼の眼の前の明りが、二三度大きく動いたのを感じた。

風は全くない夜である。

酔のせいかな、と思ったが、よく見ると、客殿の奥に立てられた三つの大きな燭台の一つが、確かに揺れている。唱い終えて、主人の求めに応じて歌の意をあらまし唐言葉に訳して聞かせている時、ぴしりぴしりと、きびしい鞭の音がした。

その方へ眼をやると、下役人が先程の燭台の背面を烈しく鞭打っているのである。その奇妙な仕草に、呆気にとられて見詰めていると、傍にいた節度掌書記の王希逸が笑いながら囁いた。

「客人には今迄お気がつかれませんなんだか。あれは、燭台は燭台でも、人間の燭台――燈台鬼と云うものです。本物の燭台のように完全に静止しているのが値打なのですが、彼奴、怠

け心を起して身動きしおったので鞭打たれているのですよ」

道麻呂は立上って、その人間燭台の方へ歩いて行った。一番近くの燈台鬼の前に立ってよく見ると、なるほど生身の人間である。

下帯一つ、全身不気味な絵具で彩られ、顔は悪鬼の相にかたどられている。両手両足の頸は背に立てられた三尺余りの鉄くいに、鎖でしっかり縛られており、頭には鉄の箍がはめられ、そこに十本の蠟燭が立てられていた。

融けた蠟が額から頬に流れて固まり、人の顔とも思われない怖ろし気な相貌をしたその燈台鬼は、まだ二十歳をいくつも出ていないと見える逞ましいからだをしていたが、憤怒と怨恨との交錯した凄愴な瞳を光らせて道麻呂を睨みつけていた。

道麻呂は思わず眼を外らせて次の燈台鬼の前に立った。これは前のに比べれば、からだも細く弱々しく、そうして立っているのが精一杯らしい。哀願と絶望の色を小さな瞳一杯にたたえて、おどおどと道麻呂を見るのである。道麻呂は堪え切れなくなって、自分の席に戻ろうとしたが、傍に残ったも一つの燈台鬼が先程強く鞭打たれたのだと気付いて、ふと、その方へからだを向けた。

骨組は大きいが、肉はすっかり落ち、首すじの辺りに僅かに残った毛の白いのを見れば、齢も六十を超えているであろう。涙を滲ませた両眼をぴたりと閉じているが、何かを必死の思いで堪えているような激しいものが、鼻翼から口辺にかけての筋肉を微かにふるわせ、あばら骨のみえる胸が、はっきりとそれと解るほど上下に波打っている。

「どうしたのです。何をそんなに見ているのです」

いつの間に来たのか、遠成が背後に立ってそう云った時、燈台鬼の、睫毛の一本もない上瞼がビクビク動いた。その瞼が、それ程大きく開かれようとは思いも掛けなかった程大きく開かれ、鈍く澱んだ視線が、じっと道麻呂の顔に注がれた。次の瞬間、燈台鬼は、

「ぐわッ」

と奇矯な叫びを発し、首を前につき出すと、上下の歯で唇を喰い破った。たらたらと床の上に滴った血潮を、足の指先につけて、

——石根。

と書いたのである。

四

数日後、遠成と道麻呂の乗り組んだ船に、頭からすっぽり黒い衣を被った男が連れ込まれた。遠成はそれを持衰だと称した。

持衰というのは、当時遠く海上を往く船に乗って、航行の間、一切髪も梳らず爪も切らず精進をつづけて、海神の怒りをなだめる役である。何人もこれを希望する者はなかったから、遠成が異国人を傭入れてきたとしても誰も不審に思うものはなかった。

持衰の正体が、かの老いた燈台鬼——前遣唐副使小野石根であったことは云う迄もない。節度使の送別の宴席で、燈台鬼が父親石根だと知るや、全身わらわやみの起った如くふるえ、

亢奮の余り一語も発し得ないでいる道麻呂を、ともかく座席にかえしたのは、遠成であった。石根の耳許に、

「必らずお救いします。しばらくお待ち下さい」

と囁いておいて、道麻呂を客館に連れ戻ると、二人は徹宵採るべき手段を相談した。あの惨憺たる姿になった石根の正体を、唐の人々は勿論、日本の副使以下にも知られたくない、と云うのが、二人の一致した考えであった。

翌日、答礼をかねて節度使の館に現れた遠成は、副使の希望と称して、かの珍奇な燈台鬼を一個譲り受けたいと述べた。陳大勉は、その物好きにやや驚いたようだったが、もとより異存はない。同じことなら若い丈夫な方を、と云ってくれるのに、慌てて、

「いや、あの若いのは、瞳孔の中に凶相が現れていますから」

と口実を設け、強いて石根を乞い受けた。

道麻呂が二十七年ぶりに、変り果てた父の膝にとりすがったのは、船が纜を解いた夜である。見れば見るほど、浅ましい迄に変ってしまっている。熱い蠟の滴に頭髪は殆ど焼け切れ、頭皮に蠟が鉄の如く固くこびりついている。眉も睫毛も全くなく、顔一面に醜い彩色を深く塗り込まれ、口は耳まで裂けたように入墨を施されている。その上、何か薬を飲まされたらしく言語を発し得ないのである。

もどかし気に手を動かして筆と紙とを求めたが、握ろうとすると筆をポロリと落した。指の先が十本とも一寸位の短かさに切りとられていたのだ。幾たびか試みて、漸く文字が記せ

るほどになった時には、もうしらじらと暁の色が船窓を射していた。

日中は、判官や准判官が持衰の間に這入っている訳にはゆかない。毎夜、人々の寝入るのを待ちかねて、二人は石根の許に飛んで行き、左右により添って、語り且つ泣いた。そして、石根は船の揺れに、ひとしお筆を操り悩みつつ、覚束ない文字で、二十数年の過去を物語ったのである。

あの運命の日、新羅人たちに路傍の溝に叩き落され、背を深く刺された石根は、救援の人人に発見されず、翌朝早く通りかかった雑戯師に救われた。否、救われたのではない、その毒手に落ちたのである。

怪し気な宿に連れこまれ、薬らしいものを与えられるままに夢中で飲み、昏々と眠ってしまったが、眼の醒めた時は言語を発し得なくなっていた。

脱出を図ると惨虐な殴打を加えられ、せめて書信を以て知らせようと筆を握った処をみられると、十指を切り捨てられた。

長い旅路を引き廻され、遂に明州都督府に燈奴（燈台を捧げる下僕）として売られた。その後は、反抗する毎に売られ売られて、揚州に来たのが十一年前、ただの燈奴から、聞くも無惨な燈台鬼に、仕立てられたのである。

もはや、憤りも、悲しみも、訴えも、凡てが全く無駄と知って、身心共に虚脱状態になり、この上は一日も早く死んでしまいたいと願いながら、どうしても死ねない己れの生命力の無慈悲な強靱さが、いっそ恨めしかった。

人間燭台として直立している間は、眼を閉じてあらゆる感情を殺し、生なき器物になり切っていたが、燭を消され、ふしどと定められた土小屋の藁の上に横たわると、執拗な記憶が、遠い昔を、なつかしい故国を、まざまざと蘇えらす。

別れた夜の衣子の泣き濡れた瞳、柔かく胸をくすぐった息、そしてからだをすりよせる毎に漂ったかぐわしい匂。邸を出る間際まで衣裳のすそにまつわりついていた道麻呂のまるっこい手足の感触。妻は老いたであろう、児は成人したであろう——しかし、石根の夢の中の妻は、いつも別れた時のままに若くにおやかに、幼児は母に似て美しくあどけなかった。

揚州節度使陳大勉が、遣唐副使を招いた夜も、石根は常の夜の如く、全く無感覚に、両眼を閉じて堂の一隅に立っていた。

いつの頃からか眼もややかすみ、耳も少し遠くなっていたが、もともと、どんな人が集まるのか見ようとも思わないし、どんな話が交わされるか聞こうとも思わない。ただ一刻も早く燭の消されるのを待って、じりじりと頬を焦して流れる蠟の熱さと、こわばってくる四肢の疲れとを堪えているだけである。

その石根の耳に、突然、なつかしい音調が朗々と響いてきた。聞き違いではない。正しく故国の歌である。旅ゆく児に送る母の歌である。

ハッと眼を開いた。客席はかなり離れているので老の眼には定かには見えないが、確かに日本の客と見えた。思わず呻って、からだをのり出そうとして燭光を動かし、ぴしりぴしりと、尖端に鉛の入った鞭で叩かれたのである。

——遣唐使に違いない。

石根はそう感じた。今こそ救われる唯一つの機会なのだ。手足を鎖でつながれているし、言葉は発し得ないが、何としてでも己れの存在を知らせねばと、必死になってもがけばもがく程きびしく激しく鞭の先が背に喰い入る。その時、

「えい、鬼め、何とした。静まれ、鎮まらぬと、後で焼釘をつき刺すぞ！」

まがまがしい声が後から囁かれた。

鬼め！　そうだ、と石根は急にがっくりした。正に鬼の姿だ、この醜悪無惨な貌を、どうして故国の人々に己れだと悟らせ得よう。いや、もしその方法があるとしても知らせてはならない。救い難い廃残の腐肉に、更に汚辱の苦しみを加えるだけではないか。

石根の最後の自尊心が、辛うじて己れを抑えた。彼は再び眼を閉じた。——とは云うものの二十七年目の今日初めて訪れたこの機会を、決して二度と来ないに違いないこの機会を、諦めることは、さすがに胸の千切れる苦しさであった。

——衣子、やはり駄目だ、そなたに二度と会えぬ。

烈しく火花の飛び交う目蓋のうちに妻の顔を思い浮べ、その顔に最後の別れを告げるかのように、心の底でそう叫んだ時、遠成が道麻呂に話しかける声を聞いた。

石根は殆ど無意識にまぶたを開いた——そして、そこに、妻の顔を、はっきり認めたのである。

茫然と我眼を疑う一瞬が過ぎると、それが我子道麻呂だと直感した。道麻呂以外に、誰がそれ程衣子の面影をたたえていよう。もはや如何なる理性の力も彼を制御し得なかった。躊躇することなく、彼は、彼のからだの中で動かし得る凡て——歯と唇と足指とを以て、己れの名を報らせたのである。

道麻呂はこれらの事実を知るにつれ、涙の源も枯れるかと思う程泣いた。彼の齢頃にしては殆ど一生涯とも思われる歳月を、言語を奪われ、鉄鎖につながれ、蠟火に焼かれて立ちつくした父の身の上を思うと、気も狂う計り憤ろしかった。日中、父と離れて、上甲板に人々の間に交っている時も、絶えず燈火を頂いて立つ父の姿が眼前を離れず、対手の知れぬ運命に対する痛恨と呪詛の思いが胸にこみ上げてきて、彼の瞳をくらく燃やした。

今は、むしろ、石根の方が落着いてきた。

半生の云いようもない苦患の思い出も、それを我子に残りなく語り伝えてゆく毎に、一枚一枚と衣を脱ぎ棄てるように軽くなってゆくのである。すっかり話し終えてしまうと、改めてしみじみ我子の顔を眺め、

「よくぞ母に似たる」

と幾たびか紙に記し、奇怪な顔に、たしかに微笑と思われる表情さえもらすのであった。

道麻呂は、遠成と図って、日本へ着いた上は、とりあえず人里離れた出湯に父を伴い、そこでゆっくりからだの恢復を待つことにした。顔やからだの彩色も船内ではどうにも仕様がないが、日をかければ幾分は拭い去れるであろう。その上で、法体にでもして京へ連れ帰って母に会わせよう。——そう決めて、石根に話すと、石根は深く瞳をこらしてじっと聞いて

いたが、改めて、我子の労苦と、遠成の心尽しに、深い謝意を示すのだった。

五

支那海に出て七日目の夕刻頃から波が大きくうねり出した。白濁の波頭が舷を超えて、反対側にまでしぶきを飛ばした。

いつものように夜遅くまで父の許で色々と話し込んでいた道麻呂は、己れの船室に戻ってくると、連日の睡眠不足から我知らず深く眠りに沈んでしまったが、暁方近く、上甲板のただならぬざわめきに眼をさまされた。

傍にねていた遠成を起して、上に登ってゆくと、黎明の灰色の船上に、水夫たちが何か叫びながら、右往左往している。

「どうしたのだ」

と、その一人を摑えてただすと、水夫は肩をすぼめた。

「あいあい、持衰が、たった今、海へ身を投げたのでございます」

「えッ」

道麻呂は仰天して、ただうろうろと海面を指して騒いでいる水夫たちを大声で叱りつけ、直ちに船をとめさせたが、波が高くて、小舟を下ろすどころではない。投身者の姿は到底探しようもなかった。

それでも半狂乱の態になった彼は、船を旋回させ、何度となくその辺りを探し廻った。遂には、己れのからだに縄をつけて飛び込もうとまでするので、人々が慌てて抱きとめている処に下方に行っていた遠成が戻ってきて、血走った道麻呂の眼の前に一枚の紙を差し出したのである。

短い指で、断腸の思いを籠めて書かれた文字はたどたどしく、

経年流涙蓬蒿宿　逐日馳思蘭菊親
形破他州成燈鬼　争帰旧里寄斯身

（年を経て涙を流す蓬蒿の宿。日を逐うて思いを馳す蘭菊の親、形、他州に破れて燈鬼となる。いかで旧里に帰って斯の身を寄せん）

道麻呂は、胸許を鋭い刃物で突き刺されたように凝然として紙片を眺めていたが、やがて茫とした視線を、父を呑み込んだ怒濤の上に投げた。

「石根さまのお心になってみれば――やむを得なんだかも知れませぬ」

しばらくたって、遠成が、低い声でボツリと云った時、道麻呂の顔は思わずくしゃくしゃに歪み、血を絞ったような涙が、どっとあふれ出たが、その涙の中で彼に微かにうなずいたのである。

「持衰が身を投げた、海が荒れるぞ」

怖ろし気に云い交わす人々の声を、二人は遠く、あの世のことのように聞きながら、いつ迄も、いつ迄も、海面を眺めて立ちつくしていた。

元寇秘話

新田次郎

新田次郎（にった・じろう）
明治四十五（一九一二）年、長野県生れ。諏訪中を経て無線電信講習所本科を卒業後、中央気象台に就職し、昭和四十一年まで気象庁に勤務する。三十年に『強力伝』で直木賞を受賞、作家生活をスタートする。山岳を題材にした代表作に『孤高の人』『八甲田山死の彷徨』等があるが、歴史、時代小説も数多く手がけ『武田信玄』『新田義貞』等の長篇のほか、短篇も多い。四十九年吉川英治文学賞受賞。男性的な作風で幅広い読者を得ている。五十五年没。『新田次郎全集』（昭和四十九年、新潮社）、『完結版新田次郎全集』（昭和五十七年、新潮社）がある。

一

鎮西奉行の少弐資能が太宰府で高麗の使者潘阜と会見したのは、文永五年（一二六八年）の一月であった。その日は朝から雪が降ったり止んだりしていた。雪はそう多くは積らないが、冬になるとこのような憂鬱な天気が時々訪れるのは博多の特徴であった。

潘阜は蒙古の国書と高麗の信書を持っていた。五十人を越す使臣団の中に通弁が三人いた。少弐資能は潘阜が持って来た蒙古の国書と高麗の信書を受取ると、潘阜等の一行に宿舎を与えて、追って沙汰があるまで待つように言った。

蒙古の国書と高麗の信書は封がしてなかったから、内容を読み取ることができた。少弐資能は、祐筆に内容を写し取らせると、直ぐ早馬を仕立てて国書と信書を鎌倉の幕府に送った。

蒙古の国書には、

「大蒙古皇帝が日本国王に手紙をさし上げる。蒙古国は四海を平定して、高麗は蒙古国の東藩となった。日本は高麗や宋などと古くから交通しているが、蒙古国へはまだ一人の使者もよこしたことはない。貴国では、蒙古国のことをよく知らないようだから、こちらから使者を送って今後、親交を保ちたいことを願うのである。武器を持ち出すようなことになるのは、

お互いに面白くないことだと思う。貴王の熟考を願いたい」

という内容のもので、高麗からの信書は、

「高麗は蒙古国に臣下としての礼を取っている。その蒙古国の厳重な命令を受けて、蒙古国の国書を持った使者を貴国に送る。蒙古皇帝が日本との通好を望むのは、貢物が目的ではなく、名声を高くしたいがためと思われる。貴国も、蒙古国へ使者を送ったらよいと考えるが、いかがなものであろうか」

少弐資能は写しを取った手紙を何度か読みかえした。蒙古の国書は言葉は丁寧であったが、文中に武力を覗かせているあたり、ただの通好を求める文書ではなかった。

少弐資能は、使者の潘阜を呼んで、国書、信書には触れずに、高麗と蒙古との関係、現在における高麗の国情を聞いた。

「高麗は蒙古に隷属してから長い間苦しみましたが、いまやっと平和が参りました」

潘阜はそのような婉曲なことしか言わなかった。国使として来ているから止むを得ないことであった。資能は息子の少弐景資に相談した。なんとかして、その使者を寄こした、外国の舞台裏を覗いて見たかった。

「正使副使という役柄ならばなにも言えないでしょうが、随行員や通弁になると、比較的容易に話ができるかもしれません。まず、あの使者たちを別々の家に移して、大いにもてなした上で、情報を聞き出したらどうでしょうか」

景資の方が若くて頭の回転が早かった。少弐資能は、景資の意見を取り入れて、使者たちを分宿させて、大いに優遇した。一月、二月と経つうちに、使者たちの口から、情報が洩れた。

少弐資能はその情報をまとめて鎌倉に通報した。

「蒙古は、過去二回にわたって、使者を日本に送っております。第一回目は、文永三年（一二六六年）八月で、兵部侍郎黒的が正使、礼部侍郎の殷弘が副使となって、高麗の巨済島まで来て引き返しています。このときは、高麗の重臣、李蔵用が案内役に立っています。第二回目は文永四年（一二六七年）一月、黒的と殷弘が、高麗の宋君斐をつれて、海上に出たが、海が荒れたという理由で引き返しています」

この博多からの情報は鎌倉幕府を緊張させた。そして更に、

「蒙古の国使が、途中で引き返したのは、どうやら高麗の重臣、李蔵用の謀りごとのように見受けられます。蒙古の侵略の手が日本に及ぶことになれば、高麗は蒙古の先棒を担がされるにきまっておりますので、高麗はそれをひたすら警戒しているようであります」

という報告が届き、さらに、蒙古が高麗に対して取った政策が、どれだけ苛酷なものであったかの実情が早馬で次々と鎌倉に知らされた。鎌倉幕府では連日、蒙古の国書に対して、いかなる処置を取るかについての会議が続けられていたが、国使が来てから、五カ月かかって、やっと返答無用という結論が出た。

潘阜の一行は夏になって、博多を発って帰国した。

執権北条時宗は当時十八歳であった。国難という重圧をはねかえすには若過ぎた。時宗の

補佐役として、安達泰盛と平頼綱が権力を振るっていた。泰盛は北条家を支える御家人衆（外様衆）の総帥であり、平頼綱は北条一族の代弁者的立場にいた。安達泰盛と平頼綱との意見は、ことごとに対立した。これが国政に響いた。

文永六年（一二六九年）三月には、蒙古の黒的、高麗の申思佺、陳子厚、潘阜等、七十余人の使者団が対馬まで来て、二人の漁夫を伴って一旦帰国し、その年の八月に、二人をつれて、太宰府に国書を持ってやって来た。そして、文永八年（一二七一年）九月、更には文永十年（一二七三年）三月と、蒙古は、新しい国使、趙良弼を正使として日本に国書を持って来たが、今度もまた返事を得られずに、むなしく引き上げねばならない結果になった。

これらの使臣は、長くて数カ月、短くて、三カ月は博多に止まった。この間、少弐資能は、使臣たちをなるべく分散して、これを優遇して、彼等の口から新しい情報を得て、鎌倉に送っていた。しかし、使臣団という役目を持っている彼等から得られる情報には限りがあった。蒙古が、本当に日本を攻めるつもりかどうかは誰に聞いてもわからなかった。攻撃の準備が整えられているかどうかについても、皆目見当がつかなかった。

少弐景資は、肥前の守護代白石通泰と親しかった。景資が通泰に、肥前松浦党を使って、高麗の様子を調べるように頼んだのは、文永十年六月、趙良弼が帰国してすぐであった。少弐景資は、交易船として高麗と松浦の間を往復している松浦党の船が、場合によると海賊船に早がわりしていることも、高麗の反政府軍的海賊、三別抄一派とつながりがあることも知っていたのである。

「そのことについては、拙者も内々調べているところです。そのうち、きっと重要な情報を得ることができるでしょう」

白石通泰は、そう答えてから、

「それにしても鎌倉幕府のなされ方はあれでいいのでしょうか。蒙古の襲来があるやもしれぬから、防備を厳重にせよという一片の文書だけでは、防備のしようがないではありませんか。防備には、まず金が要ります。銭はいくらあっても足りませぬ」

白石通泰の言ったことは、そのまま少弐景資の言いたいことであった。

「そのとおり。どうやら鎌倉幕府は、蒙古が来襲したら、九州の武士だけでこれを防がせようと考えておられるようだが、人数はそれでいいとして、厖大な戦費まで、われわれに背負わされたら、どうにも動きが取れなくなる」

少弐景資はさらに、

「だが、文句を言っている間に蒙古が来襲して来たら、真先に被害を蒙るのはわれわれだから、幕府の陰口ばかりたたいているわけにはいかぬ。われわれは、返答無用という結論を出すのに、半年もかかるような幕府や、神社、仏閣に蒙古が来ないようにと祈念することしか策を持たない朝廷を当てにしてはおられない。われら自体で、蒙古を討つべき計画を建てねばなるまい」

「だが、そうするには幕府直轄の、御家人地頭以外の地元の領家、荘官の兵力をも繰り出さねばなるまい」

「だから、松浦一族を早いところ味方に引きつけて置かねばならない。彼等に恩賞を約束して置くのだ」

「約束する？」

「それが越権であってもなくても、約束して置くのだ。それしかしようがない」

少弐景資と白石通泰はしばらく顔を見合せていた。松浦党は数十家に分れており、それぞれが船と兵を持っていた。その総力を結集すれば三千余りの兵力になる。

二

その日、呼子の港に入って来た船は三隻だった。帆をおろしながら、静かに入って来た船はすぐには桟橋には寄らずに、港の入口に止って、一隻の艀をおろした。

港に入って来る船を眺めることが唯一の楽しみである老人や子供は、その三隻の船が一眼見て松浦党の船であるにもかかわらず、すぐ桟橋に着かないのを、いぶかしげな眼で見ていたが、艀に乗りこんで、こっちにやって来る、ざんばら髪をして、腰に刀をさした二人の男が間違いなく、この辺で見かける、松浦党の者であることがわかると、一斉に手を振り、声を掛けた。それがいつものやり方だった。

二人の男は、岸で迎える老人や子供たちの方に一度だけ手を上げて答えたが、岸に近づくと、艀のふなばたを蹴って、ぽんと桟橋に飛び移り、集まって来る子供たちには眼もくれず、さっさと呼子の町の方へ行ってしまった。

「さあさあ、もうすぐ日が暮れるから家へお帰り」

老人が子供たちに言った。

「いやだ。あの大きな船が此処に来るまで待っている」

そういう子供たちを老人たちは、なんだ、かだ、となだめていた。老人たちはこの土地の人であり、多かれ、少なかれ、松浦党に関係ある者であった。港に大きな船が止って、艀をおろして来るようなことは珍しいことで、そのようなことは、なにかわけがあってのことだと推測して、老人たちは、子供たちにはやく家へ帰るように言ったのである。

その夜遅くなって月が出た。

夕刻上陸した二人の男が、四、五人の男と共に現われて、桟橋で提灯を振った。三隻の船からも、応答があって、すぐ艀がおろされて、それに人が乗って桟橋に近づいて来る。桟橋の方からも、艀が迎えに出て行った。

上陸した人々は一見して日本人ではないとわかる異国の服装をした者が幾人か混っていた。中には負傷している者がいた。

人々は一言も言葉を発しなかった。三隻の船からは合計して五十人ほどの人が下船して闇の中に消えた。三隻の船は、帆を上げて港を出て行った。

その翌日、丁度太陽が弁天島の向うにかくれるころになると、またきのう見かけたような船が二隻と、この港ではごく稀にしか見ることのできない異国の船が弁天島の傍を通って港に入って来た。その三隻の船も、夜になるまで桟橋には近づかなかった。

「あれは高麗の船ではなかろうか」

老人たちは小声で囁き合ったが、子供たちには、異国の船だとしか教えなかった。その船も明け方にはもう居なくなっていた。呼子の港に、次の日もまた次の日にも、このような船が入って来た。五日目に、異国の船だけ揃って三隻やって来た。その船にも、松浦党の者が乗っていた。

「あれは、漁船でも、交易船でもない。軍船だ。高麗の軍船だ」

はっきりと口に出す者が出ると、それが子供の口に乗って、異国の船が入って来ると、高麗の軍船だ軍船だと口々に叫んだ。高麗の軍船は、呼子の港に二日居ただけで、夜のうちにどこかに去った。

「高麗の国の内乱の片棒担いだ松浦党が、戦に破れて帰って来た」

という噂が松浦半島一帯に伝わった。

「いや、松浦党は戦に負けた高麗の武士たちをかくまってやっているだけだ」

そういう者もいた。

この情報は肥前守護代の白石通泰の手先の者によって通泰に伝えられた。通泰はこの機会を待っていた。通泰は松浦党の主だった者を呼んで、形式的な訊問を試みた。

「確かに、われわれ、松浦党は、高麗人数名の面倒を見てやっておりますが、これはかくまってやっているのではなく、たまたま暴風雨で遭難した者を助けてやったまでのこと、高麗の国の内乱に、松浦党が加わったなどというのは取るにたらない噂でございます」

松浦党の代表松浦定が申立てた。

「それで、その高麗人は、どうするつもりだ」

「傷が癒えたら、送りかえすつもりです」

松浦定はきっぱり言った。

（なにをいい加減なことを……）

通泰は内心そう思っていた。彼は松浦党が、高麗の内乱に際して、三別抄に加勢していることを三年前から知っていた。

三別抄というのは、高麗の江華島守備軍内の反蒙古派が親蒙古派の軟弱政策に不満を抱いて結集した部隊であった。

高麗の国都開城が蒙古の大軍に占領されたのは貞永元年（一二三二年）であった。高麗の首脳部は開城から船で江華島に逃れ、ここに仮の都を建てて、三十年間にわたって、果敢な抵抗を試みた。だが、抗戦派の崔一族の勢力が弱まるにつれて、和平派が擡頭して、正嘉元年（一二五七年）には蒙古に降伏した。高麗の元宗は、江華島から、旧都開城に帰ったが、これに不満を持つ抗戦派の一派は、王族の一人、高玄齢を推戴して、反乱を起し、江華島から船を仕立てて、南鮮の珍島に移り、ここに居をかまえて、蒙古軍と政府軍に対抗した。高麗政府軍と蒙古軍の連合軍は、三別抄を珍島から済州島に追い込むまでに三年かかった。三別抄はもともと高麗の海軍を主力とする部隊であったから、海上戦が得意であった。高麗政府は三別抄を反乱軍または海賊と呼んだ。三別抄は朝鮮半島の西海岸から南海岸に散在する

大小無数の島の間で転戦しながら、ついに済州島に追いこまれてしまったのである。

松浦党が三別抄に加勢するようになったのは、もと、海を舞台に高麗と交易をしていた松浦定が、やはり海を舞台としている三別抄の大将格のひとりの崔希舜をよく知っていたということばかりではなく、蒙古という凶悪な国の支配に悩む、隣邦への同情と、やがて、三別抄の一党が勝利を得たときには、松浦党に、交易権のいっさいを与えるという約束があったからである。

だが、松浦党の援助を以てしても、三別抄は蒙古軍と高麗政府軍の連合軍には勝てなかった。松浦党は済州島の戦いから、辛くも脱出した三別抄の有力者二百名を松浦に連れて来てかくまった。

「三別抄は蒙古と高麗の連合軍に打ち負けたそうだな」

白石通泰は、松浦定の隣に坐っている波多太郎の左腕に眼をやりながら言った。さきほど、波多太郎が床に手をついて挨拶するとき、左腕を包帯しているのを見て取ったのである。

「さように聞いております」

「お前たちが、海上で助けたという高麗人たちが、もし、三別抄に関わりがある者だとしたら、将来、高麗との間に困ったことが持ち上るかもしれない。そういう者ではないだろうな」

白石通泰は、こんどは、波多太郎の隣にいる、石志兼と山代栄の二人に向って言った。石志兼は、右の頬に、山代栄は左の手の甲に、生新しい傷を持っていた。

「さような者ではありませぬ。われわれが連れて参った者はことごとく漁師で……」

「どこの漁師だ、済州島か」

白石通泰は大きな声で笑うと、急に、それまでにない厳粛な顔をして、四人の者に言った。

「実はな、お前たちも知っているように、文永五年の正月に、高麗王の国使の潘阜が、蒙古王忽必烈の書を携えて、太宰府に来て以来、忽必烈は度々使者をよこして、わが国をおびやかしている。今年の三月にも、趙良弼が国使としてやって来て、六月に帰ったばかりである」

通泰はそこでちょっと言葉を切って、四人の顔を見廻して、

「な、知っておろうそのことを」

四人は顔を見合せていたが、松浦定が、

「知っておりましたが、そう度々、使者が来ているとは存じませんでした。しかも、今年の三月に来たなどということは」

「そう今年だ。文永十年三月に来て、文永十年六月に帰ったのだ。蒙古に通好の使者をよこさないと、弓矢の沙汰に及ぶかもしれないとおどかして来たのだ。どうも、拙者の考えでは、蒙古は近いうちに攻めて来ると思うが、そちたちはどう思うかな」

四人はそう言われても、すぐに答えようがなかった。沈黙の間に互いに腹の探り合いをしていたが、そのうち、白石通泰は、

「折入って、そちたちに頼みがある。もし、蒙古が、日本に攻めて来るとするならば、必ず

や、その準備のために、軍船を集めるばかりでなく、その建造も始めるに違いない。それを探って来て貰いたいのだ。わが国は、それに応じて迎え討つ用意をしなければならないからな」

そして通泰は、

「そちたちは、高麗人に知人もあろうから、高麗に入って探ることは、さほどむずかしいことではあるまい。噂によると、松浦党は、三別抄の二百名ほどを、松浦党のうち二十六家に分散してかくまっているとか、その中には高麗の王族高玄齢とその一族も居るということだ。噂にしても、たいへんなことだが、ここのところは、松浦党を信用して、これ以上の詮索はしない。だから、高麗を探ることはしかとたのむ」

白石通泰の眼が光った。松浦党の四人はそこに平伏した。四人の額に汗が流れていた。

三

松浦党の者は五班に別れて高麗に潜入した。それぞれ、高麗との交易に経験あるもので、高麗の風習も言葉も知っている者ばかりだった。各班には案内役として、三別抄の者が従って行った。

高麗から軍船を日本に向ける港とすれば、常識的には鎮海湾の合浦（現在の馬山市）が考えられたが、此処に軍船を集める前には、どこかで船を建造しなければならない。

「おそらく、それは全羅道の辺山か天冠山であろう」

松浦党の波多太郎の館にかくまわれている三別抄の大将崔希舜は、造船所についての質問を受けると即座に答えた。辺山と天冠山は、海と山に恵まれていた。背後の山から豊富な材木が得られ、それを材料にして船を造るには好適地であった。既に造船港として知られているところだった。

「まず、辺山と天冠山を探ることですな。ここを探ればおおよその軍備の見当はつきます」

崔希舜はそう言った。

辺山と天冠山には、五班のうち三班が向った。彼等はまず、かつて三別抄の拠点だった珍島の近くの古群山群島の一小島岱島に上陸して、そこで高麗の船に乗りかえた。岱島には、三別抄を支援する者が多かったから、秘密が洩れることはなかった。

三班はそれぞれ上陸地点を別にして、目的地に向ったが、そのうちの値賀四郎の班は、旅舎で寝ているところを、高麗の官憲に襲われて捕えられた。言葉に不審を抱いた旅舎の主人の密告によるものだった。

値賀四郎等三名はいかなる拷問を受けても頑強に口をつぐんでいたが、案内役の三別抄の者の顔を見知っている者がいたので、日本人三名は三別抄を支援する松浦党の者であるとして処刑された。

値賀四郎が捕えられると、高麗の南西沿岸における見張りが厳重になった。高麗人の服装をしていても、日本人が道を歩くことは危険だった。御厨弥八郎は船で岱島に帰り、高麗人の諜者だけを使って、辺山と天冠山の造船所を探った。

小佐久重兵衛は、三班のうちでもっとも、高麗語が上手だった。彼は自ら温明泉と称して、三別抄の白至祥と共に高麗の辺山に潜入した。白至祥は平壌の出身だから、北方なまりがあった。温明泉こと、小佐久重兵衛も白至祥とつき合っている間に、北方なまりの言葉を覚えていた。二人は、北からやって来た船大工だと称した。事実、小佐久重兵衛はもともと、船大工の経験があった。船大工が嫌で松浦党に加わった男であったし、白至祥は、三別抄海軍の梢匠（船大工の親方）であったから、こういう経験者を欲しがっている辺山造船所では、ちょっとした技能試験をしただけで、二人を採用した。小佐久重兵衛が口が重いのは、北方なまりの高麗語を恥じているのだと高麗人は思っていた。

温明泉こと小佐久重兵衛と白至祥が、辺山に来て三月ほど経ったころ、白至祥は天冠山造船所の方に転勤を命ぜられた。期せずして、二人は高麗の二大造船所にもぐりこんだのである。二人からの情報は高麗人の諜者を使って、次々と岱島へ送られ、更に松浦党へ送られて行った。

平壌方面に向った、伊万里五郎等三名の目的は蒙古の屯田兵がいかなるものであるかを探るためであった。三名は南高麗からやって来た商人と見せかけた。

蒙古人は主として牧畜を営んでいた。農業より牧畜の方が得意な彼等は、耕地を牧草地に変えてまで馬や羊を飼っていた。蒙古人は、伊万里五郎等が商品を持って近づくと、いきなり奪い取って知らんふりをしているような者が多かった。粗暴で、すぐ刀を抜いて相手を威嚇した。屯田兵の多くは、現地で奪った高麗人の女を妻としていた。この掠奪結婚の実態を

見せつけられた伊万里五郎等は、背筋に寒いものを感じた。もし蒙古が日本に来襲すれば、同じことが起り得る可能性があった。

平壌から以北は蒙古領であって、代官も役人もすべて、蒙古人であった。蒙古族に対する高麗人の反感は熾烈で、時々蒙古人が高麗人に殺された。蒙古の代官は報復手段として蒙古人一人に対して十人の高麗人を捕えて殺した。

開城府に乗りこんだ志佐七郎と三別抄の金定信は、三日目に旅舎を出て町を歩いているところを、官憲にとがめられた。志佐七郎は捕吏に追われて、無我夢中で路地に逃げこんだものの、それが袋小路だったので、思い切って、土塀を乗り越えた。そこは広い庭で、連翹の黄色い花が咲き乱れていた。志佐七郎は、なにか別のところに来たような気がした。芳香が彼を包んだ。どこか身をかくすところがないかと探しているうちに、襟首を力強い手で摑まれた。もがけばもがくほど、首筋に指が食いこんで来た。気が遠くなりそうだった。志佐七郎は花園を横切って家の中に入れられた。

「静かにしているのだ。やがて捕吏は去るだろう」

落ちついた声がすると、首にかけられていた手がのけられた。志佐七郎は大きくひと息ついた。外で捕吏たちが怒鳴っている声がした。志佐七郎は敵ではない相手の顔を見た。年齢はもう五十を幾つか越しているようだった。眼光が鋭く、白い長髯をたくわえた男だった。

「松浦党の者だな」

と男は言った。その自然に出て来た言葉に、志佐七郎は思わず、頷いてしまった。助けら

れたという意識が相手を許したのだ。

「危険なことだ。それほどしないでも、やり方はいくらでもあったろう、とにかく、いま外へ出てはならないぞ」

男はそう言って、静かに部屋を出て行った。逃げようとすれば、何時でも庭に逃れることができるけれど、志佐七郎はその必要を認めなかった。間もなく、部屋の中に、白ずくめの服を着た、美しい女性が食事を運んで来て、黙って置いて行った。志佐は食べて眠った。緊張の連続で彼は疲労の極に達していた。

眼が覚めると、志佐七郎の前に、知らない男が坐っていた。さっきの男よりずっと若かった。

「高玄齢様は元気か」

男は静かな声で言った。どうやら松浦党が高玄齢一族をかくまっていることを知っているようだった。

「お元気で波多の館に暮しておられます」

志佐七郎は、別にかくすことはないだろうと思って言った。男は更に崔希舜が無事であることを聞くと、小さい声でよかったよかったと言った。眼に涙さえためていた。

「此処は危険だから長居は無用だ。今夜中に海に逃れずばなるまい。その用意はもうできている。手紙を書いてあるから、これを持って帰るがよい。あなたが調べたいと思うことはおおよそ、この手紙の中に書いてあるが、もしものことがあるといけないから話して置こう」

男は志佐七郎の前に膝を進めた。

四

文永十年の夏は例年になく暑かった。

「松浦党の者が命がけで調べて来た高麗蒙古の情報を箇条書にするとこのようになります」

白石通泰はそう言って、書付けを鎮西奉行の少弐資能の前に置いた。資能は、傍に坐っている息子の少弐景資に読んで見るように言った。景資は張りのある声でそれを読んだ。

一、高麗では、全羅道の辺山と天冠山の二つの造船所に三万人ほどの人を集めて船を建造中である。新造船は千石積みの大船、軽舟、汲水小舟、それぞれ三百隻、すべて高麗型の船である。この費用のいっさいは高麗が支出している。

一、これに乗込む、船頭はおよそ一万五千、すべて高麗人である。

一、乗船する兵の数は蒙古人二万、高麗人六千の予定。

一、蒙古軍のうち五千は屯田兵。

一、蒙古の忻都が元帥で、洪茶丘と劉復亨が副元帥、高麗の金方慶が督使として高麗軍を指揮して案内役に当る。

一、新造船は合浦に集め、これに、かり集めた船を加えて、日本に向って出港するのは十月ごろとなるだろう。

一、金方慶は、その一族が三別抄の軍に殺されているから、三別抄一派に恨みを抱いている。おそらく彼は軍船を松浦に向けて、三別抄一派をかくまっている松浦党を攻撃するであろう。

一、高麗軍は日本軍と戦うことを好まないから、案内役の金方慶は蒙古軍を松浦党にけしかけて、松浦党及び三別抄の一派を覆滅しようと考えている。

「ちょっと待て」

と少弐資能が読むのを止めさせて、

「金方慶についての情報は、どこから得たのだ」

と白石通泰に聞いた。

「開城府にもぐりこんだ志佐七郎が、三別抄に好意を寄せている者に助けられ、その者から得た情報です」

「その者というと？」

「それが志佐七郎にも名前を言わなかったし、崔希舜に出した手紙にも署名がありません。大事を取って、わざと名前をかくしているのでしょうか、高麗の高官とゆかりがある者に間違いないように思われます」

「そうか、よし、その先を読め」

「最後に一項だけあります。蒙古の屯田兵は農器具や種子まで用意して来るが、女は現地で掠奪する方針だと書いてあります」

景資は、読み終った書付を父資能の前に置いた。

「女を現地で掠奪ということになると、さしずめ被害を受けるのは、この九州ではないか」

資能はにがり切った顔をした。

「それで高麗に送った間者は全部引き上げたのか」

「いえ、小佐久重兵衛だけが、温明泉と名をかえて、まだ残っております。ほかに、三別抄の者三名ばかりが潜入しておりますから、なにか変事があればすぐ通報して参ることになっております」

「今年の十月に敵が攻めて来るとなると、あと二カ月しかない。鎌倉に知らせると同時に、こっちはこっちで独自な防衛策を建てねばならないな」

資能はそう言って考えこんだ。

少弐資能は、敵の来襲が十月ごろという情報を鎌倉に送ったが、鎌倉から、折返して、ぬかりなく防備せよという命令が来ただけで、東国や近畿の兵を応援によこすとは言って来ないし、防備費も送って来なかった。

（九州のことは九州で処理せよ）

という幕府の意向がはっきりすると、九州の守護、地頭、御家人の結束はかえって固まり、鎌倉幕府の支配に属さない、荘園や寺、神社を背景に勢力を持っている武士たちも、少弐資能に対して、いざという場合は応援することを約束した。

松浦党は、高麗における情勢がはっきりすると、松浦党だけの力で彼等の土地を守らなければならない立場に追いこまれた。金方慶が蒙古軍を案内して、まず松浦へやって来るだろうという情報を得ていたとしても、九州を守護する武士たちが、松浦へ応援にやって来るものとは考えられなかった。敵が松浦半島を眼ざしてやって来たとしても、敵の究極の目的は、九州一の都、博多を占領することにあるのだから、なんと言っても博多付近の防備を厳重にすることは当然考えられることであった。

松浦党には松浦、博多、石志、神田、佐志、相知、大河野、峰、山代、八並、値賀、紐差、鷹島、鶴田、鴨打、木嶋、黒川、清水、吉永、牛方、志佐、吉野、宇久、早岐、御厨、小佐久、伊万里、津吉等の諸族があった。

文永十一年（一二七四年）九月の半ばになると、松浦党は一堂に集まって、蒙古軍襲来に際しての防衛策を相談した。御厨弥八郎、伊万里五郎、志佐七郎などが、高麗に渡って見聞して来たことを述べると、みんなは耳を澄ませて聞いた。

「蒙古には海がないから、蒙古の兵は海を見ただけで慄え出す者が多いそうだ。そういう奴等だから、船に酔ってしまって、おそらく、この松浦へやって来ても、まともな戦はできないだろう。われわれは、船から上って来たところを狙って打ち平らげるのだ」

御厨弥八郎が言った。

「女、子供は安全なところへかくさねばならぬ。小さい島に住んでいる者は今のうちから引揚げさせた方がいい」

伊万里五郎が言った。

「金方慶の狙いは三別抄が推戴している高玄齢の一族を捕えることにあるから、高玄齢一族をもっと安全なところへ移さずばなるまい」

志佐七郎が言った。

これらの動議は次々と取り上げられた。防衛に関する意見が出揃ったあとで、松浦定が松浦党の族長らしい威厳を以て一同に向って言った。

「鎌倉幕府も朝廷も当てにならないことはみなの者がよく知ってのとおりだが、鎮西奉行の少弐資能殿も当てにはならぬ。蒙古襲来が近いというのに、対馬壱岐の両島に守備隊を派遣しないのを見てもわかる。太宰府は対馬、壱岐の両島を見殺しにするつもりである。この考え方は、わが松浦に対しても同様と見なければならない。われらは、われら自身で蒙古の大軍を防ぐつもりでなければならない。松浦党の女が敵に奪われて、なぐさみものにされ、子供が敵に捕われて奴にされるのがいやなら、生命をおしまず戦わねばならない。松浦党は最後の一人になっても退いてはならぬ」

居ならぶ松浦党の面々は悲壮な顔をして頷いていた。

「次に、敵との戦いの策だが、これについては敵が襲しよせて来るまでに、あらゆる可能性を考えて置いて、その対策を建てて置かねばならない。問題は、少ない兵力で大きな兵力に当るにはどうしたらいいかということだ。松浦党は数は少ないが、まとまれば偉大な力を出すであろう。この際、結束こそ第一、命令系統を一つにして敵に当らねば勝味はない。この

際、この松浦定に、総指揮を取らせて貰いたい」

異議のあろう筈はなかった。松浦定は、松浦党五十家の中から、数人の者を選んで、日を改めて作戦会議を開いた。そうしている間に、高麗に派遣してある諜者から、高麗の艦船が合浦に続々集結中であるという情報が届いた。

五

文永十一年十月三日（新暦十一月九日）合浦を出発した蒙古高麗の兵を乗せた、千数百隻の艦船は十月五日に対馬に現われ、直ちに上陸を開始した。蒙古軍来襲の第一報はこの日のうちに隣島の壱岐に伝えられ、七日には松浦党の者によって太宰府に報告された。

蒙古の兵は海が初めての者が多く、ほとんどの者は船酔いをしたので、対馬に七日間止まって休養した。守護代宗資国は八十騎を率いて蒙古軍と戦って全員討死した。蒙古軍は十四日には壱岐に現われた。守護代平景隆以下百騎はこれを迎え撃って玉砕した。蒙古軍は島民の掌に穴をあけて数珠繋ぎにするという残虐行為を行なった。この情報は十五日には、松浦党に届き、松浦定はその日のうちに松浦党全員を召集した。島や沿岸の老人、女、子供はすでに避難を完了していた。

十月十六日の朝になると、松浦党に所属する船はすべて加唐島付近に集められた。蒙古の艦船が壱岐から来襲して来るとすれば、必ず加唐島沖に現われる筈であった。博多に向うか、松浦にやって来るか、その針路は加唐島沖で決る筈であった。松浦定は、松浦党の船数百艘

を、加唐島の陰にかくして、見張りを、加唐島で一番高い山の上に出した。

日が高く昇ったころ、見張りは敵の艦隊を認めた。艦隊は針路を真直ぐに加唐島に向けていた。見張りからの伝令は次々と、伝えられたが、松浦定はなかなか出撃命令を出さなかった。加唐島の北端、えぬをの鼻に向けられていた蒙古の艦隊の針路がやや西にふられて、鷹島、平戸方面に向けられたとき、松浦定は、船の楼上に青竜の長旗を掲げた。松浦党数百隻の船はいっせいに八幡大菩薩の旗を立て、帆を上げた。船は島を廻って吹く風を利用して、加唐島の西の洋上に現われた。

松浦定の乗っている船は高麗型の軍船だった。彼の乗船の前後左右にも数隻の高麗型の船がいた。いずれも三別抄の者が乗り組んで逃れて来た船だった。松浦定は、一度船内に入ったが、再び船の上に現われたときには、高麗人の服装をしていた。頭には錦糸で飾った高麗の王族の帽子を戴いていた。船の上に、次々と高麗人の服装をした者が現われた。隣の船の楼上には崔希舜が軍装を整えて立っていた。三別抄の二百人は、この日の戦いが来るのを待っていた。彼等は、高麗型船に高玄齢の姿をして乗りこんだ松浦党の首領の顔を、たのもしそうな顔で眺め、そして、船の楼上高くひるがえっている三別抄の青竜の長旗に眼を止めた。風にはためく青竜の長旗は、竜が海上を走るように見えた。

蒙古高麗連合軍の督使金方慶は、三別抄の青竜の長旗を見たとき、怒りで顔が青くなり、そして、すぐ赤くなった。彼は三別抄の軍船を守るような隊形を取っている松浦党の数百隻に眼をやると、

「日本の海賊松浦党はあんな艀のような船しか持っていないのか」

と側近に言った。金方慶は、開戦の旗を掲げさせ、鼓を打ち鳴らして、松浦党に向った。

蒙古の艦船がいっせいに松浦党の船に向うと見るや、松浦定は、迎え撃つ隊形から逃げる隊形を取った。松浦党の船は松浦定の乗っている高麗型船を守るような隊形で、徐々と退いて行った。

「追え、三別抄を逃がすな、崔希舜と高玄齢を捕えた者には、思いのままの恩賞を与えるぞ」

彼は、そのことを、船から船と伝えさせた。帆をいっぱいに張った高麗の船が松浦党の船を追った。だが、松浦党はたくみに帆を操って、一定の間隔以内には蒙古の船を近づけずに南下して、加部島の付近まで来ると、それぞれ勝手な方向に散った。

高麗型船とそれを守る二十隻の松浦党の船は加部島の南に出て名護屋浦に入り、更にその奥深く逃げこんで行った。

蒙古兵を乗せた軍船はこれを追ってつぎつぎと名護屋浦に入って行った。名護屋浦は奥が二つに分れていて、東の方の港は潟川に続いていた。分岐点のくびれまでは海から風が吹きこんで来るが、ひとたびくびれた方に入りこむと、風ははたと止んだ。地形の関係であった。松浦定の乗った高麗型船を追って入って来た蒙古の軍船は、風が止み、船が動かなくなって、初めて意外に深く入りこんだことに気がついた。海からの風に乗って入っては来たが、この港を出るにはどうしたらいいかと不安になった。いままで逃げていた松浦党の船がいっせい

に反撃に出た。浦の中は狭いから大きな船は自由が効かなかった。それに引きかえ、松浦党の手漕ぎの船は自由が効いた。四方から蒙古の軍船を取りかこんで、船べりに縄梯子を掛けて、斬りこんだ。名護屋浦に蒙古船が封じこめられたとなると、名護屋浦の入口のあたりにかくしてあった小舟や、さきほど一度は逃げると見せかけていた船が続々集まって来て、入口にまごまごしていた、二隻の蒙古の船に襲いかかってこれを分捕った。このために、名護屋浦に入った蒙古船は完全に封じこめられた格好になった。

金方慶は、松浦党の罠に陥った船を救助するために強硬策を取ると、味方に更に大きな損害が出ることをおそれた。海は凪の時刻になっていて、帆船を動かすのは不利であった。

金方慶は蒙古軍元帥忻都に、

「もう夕方に間近いから、今日はひとまずこのあたりに軍船を集めて置いて、戦いは明日のことにいたしましょう」

と進言した。忻都は、海軍のことも、日本のことも知らなかった。すべて、案内は金方慶に任せてあるから、彼のいうことに従うより仕方がなかった。しかし対馬、壱岐とうまく行っていたのがいよいよ上陸という段になって、味方の船数十隻が名護屋浦に封じこめられてしまったのは残念でしようがなかった。

「封じこめられた船はどうするのだ」

「しばらく待てば、風が変り、陸から海に向って風が吹き出しますから、それに乗って出て来ることができるでしょう、今夜出られなくとも、明朝はやく、二手に分れて陸地に上陸し

て、敵を攻めれば、名護屋浦はこちらの手に落ちること間違いございません」

その説明で、どうやら忻都は納得した。そして副元帥の洪茶丘が船に酔ったのを理由に上陸を切望するので、忻都は、名護屋浦の鼻先の加部島に船酔いの激しい者だけを一時的に上陸することを許した。蒙古軍は片島から上陸した。

加部島には人はいなかった。逃げ出したばかりのような取り乱し方であった。家財はそのままにしてある家が多かった。島は東西半里（二キロ）南北一里（四キロ）の小島であった。船酔いをした兵を休めるには適当なところであった。上陸した蒙古軍は約三千で一応、島の隅々まで探して人がいないのを見て、人家に分宿したり野宿したりした。いくら船酔いが激しくても、陸に上って大地を踏みしめれば、ものの一刻（二時間）もたたないうちに元気が出る。上陸した兵たちは、人家の中にあった、酒の瓶を発見した。匂いで酒であることがわかったが、毒でも入ってはいないかと、警戒して誰も飲まなかったが、酒好きな男が飲んでなんでもないとわかると、われもわれもと飲んだ。酒の瓶は各戸にあった。

「日本人は酒好きなんだな」

彼等はこれが松浦党の計画とも知らずに水でも飲むように飲んだ。船酔いで食事ができないでいた腹に酒は効いた。日が暮れると、島の諸方に穴を掘って潜んでいた松浦党の者が、この島で一番高い天童岳に登って火を焚いた。襲えという合図であった。夜襲の用意をしていた松浦党は島の東岸の宮崎を廻って上陸すると、家々に火を放った。寝こみを襲われた蒙古軍は為す術がなかった。松浦党の斬り込みと同時に、呼子から名護屋、波戸にかけての海上におびただしい灯が浮いた。

蒙古軍は日本軍の本隊が現われたと思って、いそいで錨を上げた。加部島に上陸した三千の兵を救うよりも、まず正面の敵に対して戦闘準備を整えなければならなかった。海上に浮んだ灯は、自由自在に動きはするが、近づいて来る様子はなかった。計られたと気がついて、加部島に援軍を送ったときには、松浦党は引き揚げた後であった。蒙古軍三千人のうち二千は討たれ、残りの半数は傷ついていた。夜襲して来た松浦党の兵力については、一万だという者があるかと思うと、せいぜい、五、六百人という者があった。夜が明けてから、事情はやや明らかになった。松浦党の襲撃にあって、混乱して同士討ちをして死んだ者が圧倒的に多かった。特に、蒙古兵と高麗兵とは言葉が違うから、ひとたび、刃を交え出すと死ぬまで戦った。松浦党の死者も二百人ほど発見された。身に数創、中には数十創の傷を受けて死んでいる者ばかりだった。

蒙古の元帥忻都は、

「日本を攻め取ることは、たやすくはないぞ、いままでかつてこんな手ごわい相手に会ったことはない」

と洩らした。死を賭けて夜襲して来た松浦党の決死隊に、忻都は、この遠征の容易でないことを悟った。忻都が驚いたのは、それだけではなかった。夜になってから陸から海に向って吹き出す風を利用して、名護屋浦から脱出して来る筈の艦船が一隻も現われないのである。風は吹いたが、松浦党の海軍力の封鎖が完全で逃れ出ることができなかったのである。日が

昇ると、風はまた変った。閉じこめられた船はもう逃れ出ることができなかった。

忻都は名護屋浦に閉じこめられた蒙古兵を救うことを命令した。兵だけ助け出さないと、元帥の面子にかかわることであった。彼は、金方慶に命じて、軽船を総出動させて、名護屋浦に向わせた。

「抜都魯軽船の梢長（船長）等によく言って置け、今日の戦いは港の中に閉じこめられたわが軍兵を助けるためだと……」

忻都は、そのことを何度となく言った。抜都魯とは蒙古語で勇ましいということであったが、その勇ましい軽船は、初めっから逃げ腰であった。数の力で松浦党の封鎖を破って、名護屋浦に入ったものの、狭い浦の中でひしめき合って、味方を助けるどころか、かえって、苦戦に陥る始末になった。この日の戦いで、蒙古軍は、不思議な兵器を使用した。火と煙を発しながら飛んで来て物に当ると大きな爆発音とともに煙と炎を出し、鉄片を四散するという武器であった。蒙古軍は、抜都魯軽船からこの異様なものを松浦党の軍船目がけて打ちこんで来た。鉄の玉が破裂するとすさまじい音を上げた。蒙古兵の一部はこの新兵器によって名護屋浦から逃げ出すことができたが、この日の戦いで、大型船五十隻軽船百艘あまりと、兵千数百人を失った。

蒙古軍は、軍船をまとめて、その日のうちに松浦を去った。大部隊を上陸させるには不便なところに止まって、戦力を消耗させるよりも、博多付近の日本軍の主力と決戦しようという、忻都の意志によるものだった。

松浦定は、太宰府に早馬を送って、二日に亘る戦いの経過を報告した。

「敵は新兵器を持っています。火薬の力で鉄の玉を割り煙を出すもので、雷が落ちたときのような音を発します。火薬を鉄で包んでおりますので、わが党の者は鉄包と呼んでおります」

この伝令の言葉は、博多に集まっている諸将の耳に入った。諸将は、敵は鉄包という新兵器を持っているが、音が大きく煙を出すだけで、さほど恐ろしいものではないということを兵たちに告げた。

蒙古軍が博多湾に入ったのは十月十九日であったが、蒙古軍が上陸を開始したのは二十日の早朝からであった。蒙古軍は、今津、麁原の百道原、博多の三地点から上陸して、蒙古軍主力は博多方面を襲い、高麗軍は麁原から赤坂方面を攻めた。

この日の総大将の少弐景資は本拠を筥崎に置いて、豊後の大友頼泰、大友重秀、肥後の菊池武房、竹崎季長、肥前の白石通泰等の部隊と共に戦った。

この日の戦いは終日続けられた。筥崎方面軍は圧倒的優勢な敵に攻められて、退却せざるを得なくなった。筥崎八幡宮は焼かれ、町民が戦禍にかかり、婦女子が残虐行為を受けた。日暮れまでは日本軍が押され気味だったが、夕刻に近づくと、蒙古軍の攻撃はにぶり、集結を始めた。そして、夕闇が訪れるまでには、全員が、湾内の艦船に引き揚げて行った。

蒙古軍は加部島で受けた夜襲の怖さを知っていた。陸上で夜を迎えたならば、日本軍は大挙して夜襲に出るだろうと考えて、船に引き揚げたのである。

蒙古の元帥忻都はこの日の戦いにおけるすさまじい日本軍の反撃ぶりを見て、このまま戦いを続けていたら、日が経つに従って、日本軍の兵力は増大し、蒙古軍は減少して行き、結果的には全滅せざるを得ないことを予測した。海上補給が困難である状況においては、そう考えざるを得なかった。しかも、松浦党との二日間の戦いでの被害と、火薬と矢の消失は予定以上であり、博多における一日の戦いでの武器の消費量を加えると、保有量の三分の二を越えていた。

元帥忻都の心は退却に決った。

夜になって雨になり夜半から明け方にかけてかなり強い南風が吹いた。十月二十一日（新暦十一月二十七日）は既に冬の季節風が吹き出すころであった。冬の季節風が吹き出すと、帰ることはむずかしかった。金方慶は忻都にこれを説き、この南寄りの風を利用して全艦隊が帰国することをすすめた。

蒙古軍が引き揚げた後には、こわれた船や故障した船が、数十隻、棄ててあった。主なき船は岸に打ち上げられてこわれているものもあった。戦死した兵も浜にそのまま置き去りにされていた。

六

蒙古の来襲は日本全国に衝撃を与えた。蒙古軍があっさり引き揚げたことは、この来襲が偵察的意味のものであり、再度の来襲があることをほのめかすものであった。少弐景資は、

松浦党に高麗の情勢を探るように命じた。いまや、幕府は高麗の情勢については松浦党に頼む以外になかった。高麗からの情報は諜者によって断片的に入って来た。それによると、蒙古、高麗の連合軍は、日本軍に大敗して逃げ帰ったという噂が高麗国内に広がっていた。三別抄が推戴する、王族、高玄齢が、松浦党の軍船を率いて、高麗軍の金方慶の率いる艦隊を打ち破ったという噂も、まことしやかに流布されていた。三別抄の海軍が松浦党の海軍を率いて高麗におしよせて、現在の高麗政府を倒し、蒙古軍を朝鮮半島から追い出す日も近いだろうという噂さえ流れていた。政府が、いくら、遠征軍は日本に勝ったのだと宣伝しても、遠征軍に加わった者で帰国しない者があまりにも多かったから、勝ったとは誰も信じなかったのである。

蒙古政府と高麗政府はこの高麗国内の不安や期待を抑えるために、再度の遠征を試みねばならない立場に追いこまれているようであった。

文永の役の翌年の文永十二年（一二七五年）四月、忽必烈は使者団を日本に送って通好を求めた。忻都が元の都に帰って、忽必烈に、日本軍を痛い目に合わせて来たと、自分勝手な報告をしたから、忽必烈は、今度こそ日本は通好に応ずるだろうと思ったのである。幕府は、使者の処置について、五カ月間も議論した末、その年の九月に、鎌倉の龍の口で、杜世忠等五名を斬った。幕府は蒙古の使者を斬ったことによって、蒙古再来襲を迎え討つ覚悟を決めて、その準備を急いだ。戦費を調達するために、日本全国の土地の再調査が命ぜられた。鎌倉幕府の下部組織である、守護、地頭、御家人だけではなく、荘園、国衙領にも、国防費を

分担させる計画が建てられた。京都の公家たちは、蒙古が侵入しない前に公家が亡び、京都が亡びるだろうと言って反対した。

北条氏は蒙古来襲を機会に、完全に天下を掌握しようとした。そして、その手始めとして、北条氏の一族を次々と要地の守護職に任じた。筑後の守護職は北条宗政、肥後の守護職には安達泰盛が任ぜられた。九州の御家人に対する防備の割当は、その所領の持ち高に応じて命ぜられた。博多湾西端の今津後浜から、香椎浜におよぶ、博多湾一帯の上陸予想地帯には、石築地がつぎつぎとでき上って行った。御家人だけでなく、荘官、名主、神官、僧などにもこの作業は割当てられた。

弘安三年（一二八〇年）、松浦定は、志佐七郎と金定信を高麗の開城府に再び潜入させた。前に志佐七郎をかくまった男が、その後、帰って来た金定信の話によって、もと高麗政府の高官であり、反蒙派の李奏植であることを知って、李奏植を通じて確実な情報を得ようとしたのである。金定信がまず連絡をつけてから、夜の闇にまぎれて志佐七郎が、李奏植の邸内に入った。志佐七郎と李奏植とは灯火のない部屋で会った。灯火をつけていると近所にあやしまれるからであった。

「どうやら蒙古王忽必烈も、前の遠征が蒙古側の敗北であったことに気がつき、日本を攻略するには大軍を以てしなければならないという方針を建てたようです。今度は、蒙古高麗の連合軍の他に、南宋の艦隊をそっくり日本に向けるでしょう。蒙古は南宋を降参させたが、その海軍力には今も尚恐怖を抱いている。その海軍力で日本が攻略できれば、それでよし、

南宋の大海軍が日本に敗れれば敗れたで、後顧の憂いがなくなる。忽必烈はそう考えているのです」

「その大艦隊は、何時ごろどこから出て何処に向うのでしょうか」

「高麗からの艦隊は約千数百隻、これに四万の蒙古、漢（華北）、高麗の兵を乗せ、合浦を出るでしょう。南宋の艦隊は三千五百隻で、これに蛮子（南宋人）の兵十万を乗せて、慶元（寧波）を出て、両軍が対馬か壱岐あたりで合流して日本へ向うのは来年の春ころとなるでしょう」

合計して五千の艦隊に兵十四万と聞いて、志佐七郎は息を飲んだ。

「それで攻撃目標はやはり博多方面でしょうか」

「いやそれは分らない。金方慶は、今度も督使として出征するから、或いは蛮子の軍をそっくり、松浦に向けるかもしれません。とにかく金方慶は三別抄と三別抄を支援している松浦党を当面の敵と考えているようですから」

李奏植は最後に、十四万の軍隊は、屯田兵として、日本に残留する準備をして、出港するだろうと言った。

「十四万の屯田兵……」

志佐七郎は眼を見張った。

志佐七郎は金定信を高麗国に置いて、単身帰国した。松浦定はこの情報を少弐景資に持っていった。景資は、このとおりのことを鎌倉に報告したが、幕府は艦隊合計五千隻、兵十四

万は想像を絶した数であり、ましてや蛮子十万をのせた三千五百の船が、はるばる南宋の海から日本に攻め上って来るなどということは、考えられないことだと言って取り上げなかった。少弐景資は松浦定を呼んで、

「これが噂ではなく、真実だとすれば大変なことだ。もっとくわしく探るようにとの鎌倉からの御言葉である」

と、松浦定を怒らせないように言った。

「引続いて、探ってはおりますが、なにぶんにも諸経費がかさなりますから、そのほうのことも考えていただきたい」

それに対して少弐景資は、

「もうしばらく我慢してくれ、どこもかしこも今は苦しいのだ。いずれ片がついたら、元寇に際して松浦党は第一の勲功者として報告されることは間違いないことだからのう」

少弐景資はとぼけた。

「恩賞は後のことです。拙者は現在のことを言っているのです。松浦の防備は吾等の手だけでやるとして、海外の方まではなかなか手が届きません、御一考を……」

少弐は安達盛宗に相談して見ると言ってそこを逃げたが、結局、松浦党へは一貫文目の軍費も廻っては来なかったし、実物給与もなかった。

七

弘安三年の夏、南宋の杭州に交易に行っていた、松浦党の船が帰って来て、重大な情報を太宰府に伝えた。

元の忽必烈は南宋に日本遠征を命じ、元帥は阿剌罕、副元帥は、南宋の降将、范文虎が任命され、杭州の近くの泉州、慶元では軍船の建造中であるという報告であった。これが鎌倉に伝えられて、また長ったらしい会議が開かれているころ、松浦党は独自の行動に出ていた。この年の秋、松浦定は、山代栄、平戸源五郎等と共に三隻の船に、真珠、蒔絵、螺鈿、日本刀、などを積んで、南宋の杭州に渡った。その年は南宋で年を越す予定であった。松浦党は、ずっと前から、硫黄や木材などを、杭州に運んで宋銭と交換していたから、南宋人には知人が多かった。もともと、南宋と日本とは友好関係にあったから、たとえ、元が南宋をその権力下に置いたとしても、にわかに、南宋と日本との交易が停止するようなことはなかった。

「たいへんなことになりそうですな。その前にひと儲けというわけですか」

杭州の交易商人の陳陽徳は松浦定の顔を見ると笑いながら言った。

「いや、今度は金儲けに来たのではない」

松浦定は陳陽徳におり入って話したいことがあるから聞いてくれと言った。長い間の交易で陳陽徳は裏切るような人間ではないことを知って頼んだのである。席を改めたところで、松浦定は、まず結論から先に言った。

「私はなんとかして南宋の艦隊が日本に来ないようにしたいのです」

「それは南宋の者に取っても同じ気持です。十万という大軍が、日本へ無事行けるかどうか

も、分らないし、たとえ、行き着いたとしても、なんの恨みもない日本軍と戦わねばなりません。しかも勝つ可能性は少ないのです。一時的には勝ったとしても補給が続かないかぎり、必ず負けます。だから、われわれ南宋人はなんとかして、日本遠征をやめさせたいと思っているのです。……わかりました。あなた方と力を合わせて、南宋の艦隊が日本遠征に加わらないように努力しましょう」

松浦定は、そのための運動資金として船に積んで来た品物を陳陽徳に渡した。

日本遠征が如何に不利であるかを誇張した噂が流れ始めた。六年前に蒙古と高麗の連合軍が日本へ遠征して壊滅的な打撃を受けて逃げ帰った事実に加えて、日本軍の勇猛さが伝えられた。厭戦思想が南宋の兵の間に流れ始めると同時に、造船所の工員たちの間に、

「船を早く造ることは、兄弟を早くあの世に送ることだ」

という言葉が囁かれるようになった。表面上は仕事をしている風を装っていても、実際の仕事はなかなか進まなかった。

弘安四年（一二八一年）正月、忽必烈の命令が下った。江南軍（南宋軍）は春までに艦隊を用意して、東路軍（蒙古、華北、高麗の連合軍）の艦隊と壱岐島で落ち合って、日本を攻撃せよという内容のものであった。命令が出ても、江南軍の船の建造はさっぱり進まなかった。蒙古の元帥、阿剌罕が、仕事をサボっていると見られる、船大工十名ほどを斬ったが、それでも、無言の抵抗は続けられた。

「蒙古は、南宋がもっとも誇りとする海軍勢力が怖いのだ。南宋の海軍を滅亡させるのが今

回の真の目的である」

南宋の兵たちは口々に言った。

阿剌罕は、船大工と兵等百人を斬った。もし、不平を言い、仕事をサボる者があれば、今度は、その家族も斬るであろうと公言した。その阿剌罕が、一夜十数名の暗殺団に襲われて重傷を負った。暗殺団は手に手に日本刀を持った松浦党の者であった。阿剌罕の後任として、阿塔海が代った。阿塔海は厭戦思想を流布する背後関係を洗いはじめた。阿剌罕を襲った者が日本人であるということを知って、日本人の追及が厳重になった。東路軍は春になっても、出て来そうもない江南軍に使者を送って出港をうながしていたが、いっこうにらちがあかないので、忽必烈をつついて、江南軍を動かそうとした。七月になって、忽必烈の使者が杭州に下った。

「だいぶ遅れて、台風の季節に入ってしまったので、小さな港しかない壱岐に大艦隊を集結させるのは危険である。集合地を、入江や岬や小島が多い、松浦の鷹島に変更する。用意ができ次第出港せよ」

忽必烈の命令であったが、こうするように進言したのは高麗の金方慶であった。

江南軍の出港が七月中旬と決ったことを、陳陽徳は真先に松浦定に伝えると、南宋の将軍范文虎が元帥の阿塔海に言った言葉を次のように伝えた。

（今は一年のうちで一番に危険な台風の季節です。途中台風にでも会ったら、わが艦隊は全滅するでしょうし、日本に着いたとしても、総ての船を安全なところにかくすには相当な日

数が要ります。その間に台風が来たら、わが軍艦は散り散りになってしまうでしょう。今年はもう進撃の機会を失いました。来年の春まで待ちましょう。この季節に大艦隊を動かすことは、求めて死に向うようなものです）

だが、海のことを知らない阿塔海は忽必烈の命令どおり出港を命じたのである。

「范文虎将軍が認めておられるとおり、南宋の艦隊はひどい目に会うかもしれません。そのときは、あなた方の力で南宋人もなんとか助けてやってくださらぬか」

陳陽徳が別れに際して松浦定に言った言葉であった。松浦定は、平戸源五郎、山代栄を一足先に日本にかえし、彼は江南軍の出発より一日先に慶元を出発した。

杭州湾を西に見ながら、舟山列島を過ぎ、東支那海に船が出たとき、松浦定は、異常な波のうねりと、東寄りのしめり気の多い風と、空を覆う鉤型の巻雲を見て、南方洋上に台風が発生しつつあることを知った。

「大風（台風）に追いつかれて海の藻屑と消えるか、大風より先に日本へ帰りつくかは帆と風に相談して見るより仕方がないことだ」

彼はそうつぶやきながら、江南軍の范文虎も同じ気持で空を見ているだろうと思った。松浦定は、風に追われるようにして、帰路を急いだ。遠く日本の島影を見た日の夕焼が、濁った血の色に見えた。彼は台風がいよいよ近づいたことを知った。松浦に帰ると、人々はあわただしく立ち働いていた。敵軍に備えての準備かと、迎えに出た者に聞くと、

「敵軍来襲の準備は既に終っています。いまあわただしく人が動いているのは大風に対する用意です」

と答えた。驟雨が時々降り、生暖かい南風が吹いていた。

松浦定が松浦に帰った翌日になると、東路軍の艦隊が平戸、鷹島あたりの島陰に続々と集まって来て、艦隊を綱で互いに結び合う作業を始めた。台風襲来に対する準備だった。昼ごろになると、江南軍の大艦隊が現われ、鷹島付近に集合を始めた。風雨はかなり強くなった。断続的に強い雨が降った。江南軍の艦隊は分散して、岬や島陰に風をさけた。

「松浦の御大は大風を土産に持って来なさったな」

松浦党の者は天を仰ぎながら、間もなく起るであろうことに胸を躍らせていた。

平戸、鷹島あたりに入って来た敵の大艦隊は戦争どころではなかった。味方へ使者の乗った船も出せない荒れようだった。この年の六月のはじめに、合浦を出て、博多湾の志賀島に一部の兵を上陸させたり、長門方面を窺ったりしていた東路軍は、日本軍の猛反撃に会って、壱岐付近まで退いて、江南軍の到着を待っていた。そこに台風がやって来たので、急遽、平戸、鷹島付近に逃げこんだのである。江南軍の范文虎将軍も台風に追われる思いで、ようやく鷹島付近に逃げこんだのである。東路軍と江南軍が合一したのは台風の仲立ちであった。

夜になって風雨は強まった。陸上では、大樹を倒し、小石を飛ばせるほどの風が吹いた。海は荒れに荒れて、そこでなにが起っているか分らなかった。夜半になると風は乾（北西）に変って、雨の量はいくらか減ったが、風速はいよいよ増大した。

閏七月一日（新暦八月二十三日）の朝が来てもまだ強風は吹いていたが、昼ごろには風はお

さまり青空が出た。

松浦党の者は、一夜の間になにが起ったかをそこに見た。敵の艦船の大半は覆没したり、損傷を受けていた。海岸には吹き寄せられた敵兵の死体が折り重なっていた。被害を受けた船は宋船の方が多く、この台風で船と人員の三分の二を失った。どちらかと言えば、損害が少なかった東路軍もこの台風で艦隊の三分の一を失った。范文虎将軍は残存艦隊をまとめて、高麗に引き揚げて行った。もともと日本軍と戦う意志がなかった南宋軍だから、引き揚げとなると、比較的に迅速であった。東路軍がその後を追った。

七月晦日夜半より乾風おびただしく吹出でて、閏七月朔日、賊船ことごとく漂蕩して海に沈みぬ。

（「八幡愚童記」）

元寇の際の戦闘経過に関する文献は少なく、松浦党の活躍についての記述もごく僅かしかない。弘安十年（一二八七年）に松浦党の代表者が鎌倉に出府して戦功検知と恩賞の訴えを起そうとしたという記録はあるが、恩賞に授かった記録はない。戦後処理で手元不如意な幕府には恩賞を与えたくとも、与えるものがなかったのであろう。松浦党はこの不満を海外に向けた。松浦党が八幡大菩薩の軍旗をおし立てて、海外を荒し廻り、倭寇として恐れられるようになったのは、この後のことである。

意地ぬ出んじら

新田次郎

薩摩藩が琉球を支配していたころ、沖縄本島の島尻の糸満に美殿という類いまれなる美女がいた。美しいばかりでなく教養高い女性であった。

美殿の父の玉久佐は糸満では名の知れた地主だったが、一人娘の美殿が年頃になったときには、地主とは名ばかりの身代に落ちぶれていた。

薩摩藩が琉球を支配し、苛斂誅求の政策を強化すると、玉久佐の小作人たちは、苦しさに耐えかねて玉久佐に哀訴した。玉久佐は地頭と小作人との間に立って苦慮した末に、私財を投げ出して、納税に当てることによって小作人たちを救った。だが、こういうことはそう長くは続かなかった。彼の土地はいつしか他人の手に渡り、彼は没落地主の一人になった。

土地を失い、家屋敷と、親子がやっと食べていけるだけの身分になっても、玉久佐の見栄だけは消えないで残っていた。彼は一族の長として、年に一度の先祖の祭りだけは彼の手でやりたいと思っていた。その祭りは清明祭と言ってツツジが咲くころ行われる習慣になっていた。

糸満の地頭の目付役人に薩摩人の谷総左衛門という男がいた。地頭は、元この地を治めていた按司の子孫がその任に当てられていたが、その地頭を動かして税を取り立てるのは、首里にいる薩摩の代官の配下である代官手代や目付などのひと握りの薩摩人であった。糸満に

おいても、実権は谷総左衛門が握っていた。

谷総左衛門は美殿に眼をつけていた。彼はことあるごとに玉久佐に接近して機嫌を取った。玉久佐が清明祭を催すための金策に悩んでいると聞くと、言葉たくみに金を貸してやろうと言った。人のいい玉久佐は総左衛門から銀十両を借りて清明祭を取り行なった。

総左衛門が玉久佐を責め出したのは、その翌月からであった。初めはおだやかな口調で玉久佐に金の返済を迫り、そのあとに必ず、

「実は、女人が一人欲しいのだ。お宅の美殿は読み書きができるそうだ、手伝いに来て貰えないか」

と持ちかけた。借金のかわりに娘を寄こせという常套手段であった。総左衛門は、それまでに同じような方法で幾人かの女を弄んでいた。一月か二月で追出される者もいたし、半年もいた女もいたが、はっきり妾と決った女はいなかった。

玉久佐は総左衛門の借金の催促が、美殿をさし出せという脅迫に変って来たところでいまさらのように自分の愚かさに気がついたが、いまさらどうにもしようがなかった。

玉久佐は考えに考えた末、美殿を、若茶良、勇茶良の兄弟のところに逃がした。若茶良、勇茶良の兄弟はかねてから美殿に求婚中であった。玉久佐は兄弟が力を合わせたら、銀十両はなんとかできるかもしれないと思った。金が調達できなくとも、どちらかが、美殿と結婚してくれればそれで済むと思った。いかに薩摩人でも、人妻を妾に出せとはいうまいと思った。美殿のことをあきらめさせておいて、玉久佐は、家屋敷を借金のかわりに、総左衛門に差出そうと考えていた。

だが、美殿が若茶良、勇茶良の兄弟の家に逃げこんだと聞いた総左衛門は押っ取り刀で若茶良、勇茶良のところへ乗込んで、

「美殿をよこすか、首をよこすか」

と兄弟に詰問した。

弟の勇茶良は美殿を奥の間に隠し、兄の若茶良に言った。

「たとえ、相手が薩摩人だからと言って、われわれ兄弟のところへ救いを求めて来た美殿を黙って渡すわけにはゆきません、相手が刀で来るなら、われわれ兄弟は棒で戦いましょう」

しかし、兄の若茶良は総左衛門が抜き放っている刀を見ると、すっかり怯えてしまって、

「弟よ、わが琉球に古くから伝えられている、意地ぬ出んじらあ手引き、手ぬ出んじらあ意地引き——という諺を知っておろう。意地とは心だ。心がはやったら、手をひかえよ。手が出ようとしたら心をひかえよ、といういましめの諺だ。はよう手を引かぬか」

と弟を制し、若茶良は、その場に平伏して絶対服従を誓った。

だが勇茶良はその兄を笑って言った。

「心がはやったら、手を引き、手がはやったら心を引いていたのでは、いつまで経っても、引きっぱなしではないか。わが琉球が薩摩人の侵略を受けても、なにひとつとして反抗らしいこともせず、現在このように薩摩の役人に苦しめられていても、なにもしないでいるのは、今兄者が口にしたような腰抜け者に都合がいい諺がまかり通っているからだ。おれは心がは

やるときは手を出し、手がはやるときはいよいよ心を燃やして理不尽なことをする薩摩人と戦うのだ」

勇茶良はそう言うと、棒を取って総左衛門に打ちかかった。

「意地ぬ出んじらあ、手出し、手ぬ出んじらあ、意地出し」

と呪文のように唱えながら打ち掛って来る勇茶良を総左衛門は一時は持て余したかに見えたが、もともと勇茶良は武術の心得があるわけではないから、たちまち左手を斬って落された。その勇茶良に止めを刺そうとする総左衛門の前に美殿が立ちはだかって叫んだ。

「私の身に替えて、この勇茶良の命をお助け下さい」

「お前の身に替えて」

「そうです。私はあなたのところへ参ります」

美殿は涙一つこぼさずに言った。

美殿は総左衛門の妾になった。絶世の美女であり、良家の女を妾にしたので、総左衛門の悪い癖は一時止ったかに見えた。以前のように住民に非道を強いるようなことはなくなった。糸満の人達はすべて美殿のお蔭だと喜んでいた。

総左衛門にお国帰りの許可がおりた。以前から代官に願い出ていた公式休暇が出たのであった。

総左衛門は春の交易船に乗って帰国の途に着いた。

船が鹿児島の港に着いたのと日が暮れるのと殆ど同時であった。総左衛門は荷物を船に置

いて、手土産だけを持って上役の家を訪問した。そこに土産だけを置いて自宅へ帰るつもりだったが、引き止められて酒肴の馳走になった。ほろ酔い機嫌で自宅に帰ると既に灯は消えていた。彼は門を叩いた。灯がつき、家の中で人声がした。直ぐには家人が出て来ず、なにか戸を開けるのを躊躇しているようであった。

「なにをしているのだ。ただいま琉球から谷総左衛門が帰ったのだ」

と大声を上げるとやっと戸が開いた。妻のたつが顔を出した。家へ上ると義母が立っていた。妻の顔も義母の顔も三年ぶりでその家の主人を迎える喜びの表情ではなく、なにか困ったような顔つきをしていた。しかし、考えてみると、三年ぶりで帰宅したのに酔っていたり、夜遅かったこともあるから無理はないのだなと思った。

彼は義母の前に手をつかえて唯今帰りましたと挨拶した。総左衛門は、谷家へ養子に来たのだから、義母には頭が上らなかった。義母に挨拶して、そのまま、居間に通ろうとすると、義母が、

「いまたつが片づけているからしばらくお待ちなされ」

と言った。妻のたつがなにかを急いで取り片づけているらしかった。いったいなにを取り片づけているのだろうかという疑問が総左衛門の心に湧いた。酔ってもいたからいささか気も大きくなっていた。彼は義母をおしのけるようにして居間の襖を開けた。妻が二つ並べて敷いてあった寝具の一つを押入れにしまい込むところだった。

「いったいこれはどうしたことか」

まさかと思った瞬間、総左衛門は一度に酔いが醒めた。

「たつがひとりでは怖いというのでわたしが一緒に寝てやっておるのじゃ」

と義母が言った。それならそうと前もって言えばよいのにと総左衛門は思った。眼を庭の方にやると、雨戸が三寸ほど開いていて、そこから月の光がさしこんでいた。

「表で男の声がしたので、いざというときにたつを逃がすために裏口を開けて外を窺って見たのじゃ。女だけの世帯は如何に気を配っているか、三年も家を明けている、お前様には分るまい」

と義母が言った。

そう言われればそのとおりだが、なにかおかしいなと彼は思っていた。その気持は翌日城へ出仕してからも続いていた。同僚が次々に声を掛けて来た。長いこと御苦労だった、というのはまず当り前であり、琉球では、いい女を手許に置いているそうだなという揶揄もたいして気にはならなかった。琉球に派遣されている薩摩藩士が現地妻を持つことは認められていたから、それぐらいのことを言われるのは覚悟の前だったが、

「どうだ、しばらくぶりの女房の味は甘かったか辛かったか」

という言葉はいささか気になった。三年ぶりで女房に逢うのだから、その味は甘いにきまっている。辛かったかという意が通じないのである。

総左衛門は帰国後三日目に琉球の手土産品を持って、親戚を廻った。谷総左衛門の義理の従兄に当る、谷八左衛門のところへ行って、留守中はいろいろとお世話になりましたという

と、

「お世話どころか、貴殿の留守中に一度伺ったきりだ。すまぬ」

と八左衛門は頭を下げた。その顔がひどく青く見えた。八左衛門は妻のたつの従兄であり、義母から見ると甥であった。両家は非常に親密に交際していた。三年間に一度しか訪れなかったということに総左衛門は嘘を感じた。

「お内儀は？」

総左衛門は八左衛門に聞いた。

「妻は二年ほど前に亡くなって、今は独り身でござる」

と八左衛門は答えた。

「そうですか、そうとは知らず失礼した」

総左衛門は、なぜそのことを、妻のたつなり、義母なりが言ってくれなかったのかへんに思った。両家の間に、なにかいざこざがあったなら、尚更のこと話してくれてもよさそうだと思った。

家へ帰って、妻のたつに留守中に八左衛門が何度見舞いにこの家に来たかと聞くと、

「一度です、親類だというのにねえ」

といかにも恨めしげに答えた。三年間にたった一度という数を両方がはっきり言うのもまたへんであった。日が経つに従って総左衛門は、八左衛門と妻のたつの間になにかがあったのではないかと思うようになった。朋輩たちの間接的な言葉を総合しても、近所の言動から

も容易にそれが想像された。たつも八左衛門も共に空閨に悩んでいる身であり、二人は幼な馴染であった。二人の間に不倫な行為があったとして、義母がそれを黙って見ていたとすれば義母をも許すことができなかった。疑えば疑わしい点は幾つかあった。帰って来た夜の布団や雨戸のこともそうだった。その夜のたつとの夫婦の営みは三年間孤閨を守っていた女との再会とも思えぬほど自然に行われ自然に終った。三年間の空白を満たすための女の嘆きも、喜びも、肉体的な抵抗も反応も特にきわだった形としては現われなかった。琉球で女道楽を尽して来た総左衛門には全く意外なことであった。だがしかし、それらのすべてを並べ立ててみても、たつが不貞を働いていたという証拠になるものではなかった。いかにも、なにかがあったらしいことを口にしている人もいざとなると口を緘して語らなかった。

「今度は当分此の地に居ることができると思ったが、どうやらこの秋また琉球へ行かねばならぬことになるらしい」

と総左衛門は妻のたつと二人だけになったときに言った。いやだ、行ってはいやだ、行かないでくれ、と泣いて騒ぐかと思って言ったのだが、たつは、

「そう。お務めだからしようがないわね」

と冷やかに応えた。そのひとことで、総左衛門はたつと自分との間は既に切れてしまったのだと思った。彼は上役に、秋の便船で琉球の任地へ帰りたい旨を申出た。

秋の便船には新しい代官が乗っていた。大体、代官の任期は三年ないし四年であった。前の代官は着任してやっと二年経ったばかりであった。代官がそのように早く交替するということは、今までの代官になにか不始末があったか、琉球に対する藩の政策が変ったかどちらかであった。

「おれはきたないことをやる人間が大嫌いだ。薩摩の人間であろうがなかろうが、容赦はせぬつもりだ」

新しい代官が、代官と共に新しい任地へ向う十三人の侍に向って話しているのを聞くと、総左衛門は耳が痛かった。どうやら、今までの代官以下、代官手代、目付などが薩摩の権力を笠に着て、勝手放題なことをしていることが、藩の重役の耳に達して、藩が人事刷新に乗り出したように思われた。

総左衛門は半年ぶりで糸満に帰ると美殿に、船の中で聞いた話をした。

「今度の代官は手きびしいそうだ。前より仕事がやりにくくなるだろう。だからと言って、また鹿児島へ帰りたいとは言えないし、帰っても待っている者は居ない」

と総左衛門はそれまでになくしんみりした顔で言った。

「待っている人がいないってどういうことですの」

美殿は眼を見張るようにして訊いた。そういう眼で見られると答えぬわけにはゆかなかった。彼は自宅でのことを話した。

「あなたも決して幸福な人ではなかったのね」

美殿は総左衛門に同情したような顔をしたが、その眼の奥の方でなにか考えていた。

新しい代官が着任した数日後に首里から早馬があった。

代官が各地の地頭の行政を視察するから、何時来られてもいいように用意しておけという通知であった。日を決めずに、不意に行くかもしれないと言われることはまことに迷惑千万なことであったが、総左衛門は地頭の尻を叩いて、帳面を整理したり、農地を見廻ったり、作業場や倉庫を整頓して、何時代官が来てもいいようにして待った。

二カ月ほど経った。

美殿が国頭（沖縄本島北部）から来たという男の話を総左衛門に伝えた。

「代官様は国頭の地頭のところへ行って、そこの横目付をしている薩摩人が貧乏人に自分の食禄を分ち与えていた話を聞いて、たいそう讃められ、その場でその人を目付に取り立てたそうです」

「そんな薩摩人が国頭にいるとは驚いた。ほんとうだろうか」

総左衛門が首をひねると美殿は更に、

「半分がほんとうで、半分が作りごとだそうです。でも代官様を迎えるためには、なにかしら、そのような良いお話をこしらえてお迎えせねばならないでしょうね」

美殿はそう言って笑った。

「ばかな、こしらえごとにだまされるような代官ではないわい」

「でも全然ないより、あったほうがいいでしょう、それで万事がうまく行くならばそうしたほうがいいではございませんか」

「なにか、いい案があるのか」

「ございますとも、私の頭の中にはすばらしい話がちゃんとでき上っています」

美殿は総左衛門にそのすばらしい話をして、彼に充分飲み込ませると、銀十両を貰って実家へ帰った。

数日後、玉久佐が銀十両を持って、糸満の役所に谷総左衛門を尋ねて来た。

「長い間、お借りしていた銀十両、やっと調達できましたのでお返しいたします」

玉久佐は銀貨を総左衛門の前に並べて何度も頭を下げた。

「いや、その銀十両は返して貰わなくともいいのだ。おれはお前のお蔭で、あやうく親殺し、妻殺しの重罪を犯さずに済ますことができたのだ」

総左衛門が親殺し、妻殺しの重罪などと、とんでもないことを言い出したので、役所にいた者はいっせいにそっちを見た。たまたま役所に用があって来ていた者も、その話に耳をそば立てた。

「お上の許しを得て船に乗って鹿児島へ着いたのは夕刻だった。上役のところへ報告に行って、酒を御馳走になって、夜遅く帰ると、妻が男と同衾していた。おのれ姦夫姦婦と腰の刀を抜いて二人を殺そうと思ったとき、玉久佐が日頃口癖のように言っていた言葉を思い出したのだ。意地ぬ出んじらあ手引き、手ぬ出んじらあ意地引き、という諺だ。おれははやる心を押えて手を引いて、よくよく見ると、姦夫と思ったのは母であった。母が、おれの留守中に間違いがあってはならないと思って、男装して妻の傍で寝ていたのだ。あのときもしも玉

久佐のあのいましめの言葉を知っていなかったら、おそらくおれは親と妻を殺してしまったであろう。ほんとうに恐ろしいことであった。そのことを思うと、この十両は貰うわけにはゆかない、むしろ、おれの方から、お前にこれ以上の礼をしたいくらいだ」

総左衛門は銀十両を玉久佐におし返した。

「なるほど、そうでしたか。しかし、その話と、金の貸借とは別でしょう。とにかく借りたものは返さないと私は気が済みません」

と玉久佐は引き下らなかった。

「そうか、どうしてもお前は返すと言い、おれは受取らぬと言っていたら、きりがない。それなら、この金は糸満のはずれの島神の礼拝所の泉に捧げることにしようではないか」

と総左衛門が言った。玉久佐は納得した。

その話を聞いていた人たちは、その解決法がまことに綺麗だと言って讃めたたえた。その日のうちに、総左衛門と玉久佐は銀十両を持って島神の礼拝所の泉のところへ行った。二人は多くの人々が見ている前で、岩と岩の間から湧き出ている泉の底に銀貨を投げこんだ。泉に沈んだ銀貨を奪うには、その大きな岩を取除かねばならなかった。二、三人の人の力で簡単にできることではなかった。銀十両は神のものになった。

この話は、その日のうちに糸満にすんでいる人々の総てが知ることになった。一月後には首里に伝わり、三月後には国頭まで伝えられて行った。島神の礼拝所の泉に投げこまれた銀十両が、いつの間にか銀百両になっていた。

首里から新しい代官が糸満にやって来た。代官は糸満の役所に着くと、

「近ごろ噂に名高い、島神の礼拝所の泉に銀貨を投げこんだという話をくわしく聞かせてくれ」

と地頭に言った。地頭はたいへん恐縮して、その話をした。

「では、その玉久佐を此処に呼んでくれ」

代官は地頭に命じた。地頭は玉久佐のところへ直ぐ迎えを出した。総左衛門は、代官が糸満に着いたとたんに銀のことを口にしたのでやや不安を覚えた。玉久佐を呼ばずともなぜ自分に直接訊いてくれないのかと思った。総左衛門はしきりに代官の方を窺い見たが、代官は知らんふりをしていた。

玉久佐が出頭すると代官は、

「谷総左衛門はここに来て玉久佐と並んで坐れ」

と命じた。総左衛門が言われたとおりにすると、代官は改まって玉久佐に訊いた。

「そちは谷総左衛門から借用した銀十両を総左衛門に、この場で返したのだな」

「はい。お返ししようとすると……」

と玉久佐が言いかけると、代官は声を荒らげて言った。

「返したかどうかだけを答えろ。余計のことを言わずともよい。この場で銀十両は谷総左衛門に返済したのだな」

「はい。お返しいたしました」

代官は頷いて、今度は谷総左衛門に向って言った。
「そちは、玉久佐に貸した銀十両をこの場で受取ったのだな」
「確かに受取りましたが、その金は、玉久佐と相談して礼拝所の泉に投じました」
谷総左衛門は答えた。
「もう一度訊ねる。玉久佐に貸した十両はたしかに受取ったのだな」
「はい受取りました」
すると、代官は一段と声を高めて言った。
「藩の掟を破って、琉球の住民との間に金銭の貸借関係を持った科によって谷総左衛門に切腹を命ずる」
総左衛門は驚いた。薩摩藩士は琉球の住民との間に金銭の貸借をしてはならないという掟が設けられたのは、薩摩が琉球の支配を始めた当初であった。いまごろ代官が、既に空文化した掟を振り廻すなどとはいったいどういうことなのだ。もしその掟通りやろうというなら、現在琉球にいる薩摩人のすべてが切腹しなければならない。総左衛門は怒りに震えた。彼は抗議しようとした。
「庭に連れ出して、切腹させろ」
代官は立上って冷やかに言った。総左衛門の言いわけを聞こうとする様子はなかった。総左衛門は庭に用意された切腹の座に坐らせられた。介錯に立ったのは、総左衛門の朋輩だった。

「なぜこんなことになったのだ。ひとことでいいからそのわけを聞かせてくれ」
と総左衛門は腹に刀の先を当てたときに訊いた。
「女文字の文が首里の代官所に投げこまれたのだ。きさまが借金のかたに美殿という絶世の美女を妾にしたことも、美殿を奪うために勇茶良の左腕を斬り落したことも、銀を泉に投げこんだのは芝居であることもすべて代官の耳に入っていたのだ。代官はその事実の有無を調べておいてから乗りこんで来たのだ」
総左衛門の頭の中に美殿の顔が浮んだ。あの女が裏切ったのだなと怒りが全身にみなぎり、身体中が震えた。刀の先が腹の皮に触れた。その瞬間、太刀風が起り、血しぶきと共に、総左衛門の首はがくっと前に傾いた。
玉久佐にはなんのとがめもなかった。美殿は玉久佐のところへ帰った。
若茶良と勇茶良の兄弟が玉久佐の家へやって来て、まず兄の若茶良が美殿に言った。
「いろいろと苦労をかけてすまなかったが、なにもかも忘れて、おれと結婚してはくれぬか」
すると美殿はすかさず言った。
「若茶良さん、私を欲しいという意地が出たら、どうぞ、その手をお引きなさい、私が欲しくて、手が出そうになったら、どうぞその心をお引き下さい」
若茶良は、美殿のその言葉に自らを恥じて外へ出て行った。美殿はそこに立っている弟の勇茶良に言った。

「勇茶良さん、もしあなたに私を欲しいと思う心が出たら、その片腕で私を奪い取って下さい。その片腕で私を奪いたいと思ったらどうぞ、あなたの心の向くままになさいませ」

勇茶良は、片腕で美殿を抱きしめた。

バスが止ると観光客はぞろぞろと降り立って、物珍しそうに周囲を見廻した。奇巌が立並び、その周囲には榕樹が生い繁っていた。奇巌のあちこちに洞窟が見えた。

バスガールは観光客をその洞窟の前につれて行って一段と声を高めて話し出した。

「此処は糸満の白銀洞と申します。昔、薩摩の人が糸満の男に金を貸したが期間が来ても返さないので、怒って殺そうとしましたところ、糸満の男は、心がはやったら手を引け、手が出そうになったら心を静めよ——意地ぬ出んじらあ手引き、手ぬ出んじらあ意地引きと申しました。薩摩の人は男を殺すことをやめて、鹿児島の吾が家へ帰ると、妻が男と寝ていました。斬ろうと思ったが、糸満の男の言葉を思い出して、手を引いてよく見ると、母が男装をして妻の傍に寝ていたのでした。薩摩の人は糸満に帰って、おれはお前のお蔭で、妻殺し親殺しをしないで済んだ。そのお礼に借金は棒引きにしようと申しましたが、糸満の男は、どうしても返済しなければ気がすまぬというので、この地に返済金の白銀を埋めて、神々に捧げることにいたしました。それ以後この地は白銀洞と呼ばれるようになりました」

バスガールはそこで一息ついて更に次のようにつけ加えた。

「いま申し上げましたところの白銀洞の伝説の他に真相として伝えられているものがございます。良民を苦しめる薩摩人が、自ら設けた陥穽に落ちた話などでございますが、ここでは省略させていただきます。これらの真相と言われているものは、真相というよりも、白銀洞の伝説の新しい解釈だと言っている学者もいます。しかし、もっとも一般的に信じられていることは、白銀洞の伝説は薩摩藩が琉球の人々に忍従を強いるために創作したものだという説でございます。そしてこれは現在のところ定説のように考えられております。心がはやったら手を引け、手が出そうになったら心を静めよというのは、琉球の人々に忍従だけを一方的に押しつけようとしたものであり、その忍従は現在米軍支配下にある沖縄に課せられた宿命でもございます。意地ぬ出んじらあ手引き、手ぬ出んじらあ意地引き——これはなにもできない、なにもするなという悲しいあきらめの言葉としか思われません。みなさま、間もなく沖縄は日本に復帰いたします。復帰しても、尚沖縄だけに忍従が強いられることのないようにわたしたちは心から祈っております」

バスガールの説明が終って、観光バスが走り去ると白銀洞のあたりは小鳥の鳴き声で急に賑やかになった。神へ祈りをささげるための礼拝所の石段に捧げられた仏桑華の花束に、榕樹の繁みから洩れて来る夏の日射しが照り映えていた。

いれずみ国姓爺（こくせんや）

白石一郎

白石一郎（しらいし・いちろう）
昭和六（一九三一）年、韓国・釜山生れ。早稲田大学政経学部卒業。在学中から小説を書き始め、三十二年、『雑兵』で「講談倶楽部賞」を受賞。以後、在住する九州の地の利を生かした歴史小説・士道小説・伝奇小説・海洋小説を数多く執筆、六十二年、『海狼伝』で直木賞を受賞した。『天翔ける女』『鷹の羽の城』『秘剣』などがある。

一

「臭いな。この町は妙な匂いがする」
と柘植平八郎は並んで歩く喜多村右平にいった。
「そうでしょうか。私は馴れてしまったのか一向に……」と右平は苦笑する。
奇妙な町だった。西へひらけた海を除けば町ぜんたいが小高い山や丘にすっぽりつつまれ、ちょうど摺鉢の底のようなところに人家がごたごたと犇いている。
木の香も新しい瓦葺きの屋敷があるかと思えば、そのすぐ隣りに古ぼけた草葺きの屋根が並んでいる。あちこちに新築中の家が目立ち、それらの多くは土地を求めて周囲の山々の傾斜に這い登ろうとしていた。
道をゆく人々も多彩である。江戸でなら人々が瞠目するような唐人が、ここでは思いがけぬ路地からひょいと顔を出す。なかには天秤棒を肩に担ぎ、ざるに盛った品々を振り売りして歩く唐人もいる。かと思えばこの町では路傍に山羊や豚が悠然と寝そべっていたりするのである。
得体の知れぬ風態の者が多い。ことに二本差しの浪人者の姿が目立っていた。

慶安二年、長崎の町ではまだ唐人たちの散宿が自由である。鎖国令が津々浦々にゆき渡り、唯一つの例外として異国交易を許されたこの町は、甘い蜜を求めて集る人々のために急にふくれあがり、町づくりの目途も今はつきかねているような雑多な印象だった。

柘植平八郎は長崎奉行所の目安方与力として江戸からこの町へ赴任してきた。

まだ十日とはたっていない。今日は目安方同心の喜多村右平を案内役に、町々を見物しての帰り道だった。

五月はじめである。路上に飛びかう燕の姿が、南国のこの町に夏の訪れがちかいことを告げているようだ。

立山にある奉行所ちかくの橋の上へきたとき、平八郎と右平は足をとめた。

人だかりがしている。橋の中央に上半身裸体の男が、あぐらをかいて坐りこんでいるのだった。

通行の男女が足をとめてその男のまわりにむらがっている。

男はこちらへ背中を向けて坐っていた。

刺青が見える。朱と緑青で背中に彫った稚拙な刺青だが、その変った図柄と彫られた文字の異様さが、人々の肩ごしにのぞく平八郎の眼をとらえた。

背中の中央に緑青で墓石とおぼしい石塔が彫られてある。石塔の刺青とは珍しいが、その墓石の左右に朱で彫られた文字は、さらに奇妙なものだった。

右側に日本一、左側に不孝者と彫ってあるのだ。男はかなり酒を飲んでいると見え、色白の肌が桜色に上気して、その奇怪な刺青をなまなましく浮び上らせていた。

歩み寄ろうとする平八郎の気配を察して、連れの右平が袖を引いた。

「放っておきましょう。まわりを見てください」

いわれて視線を周囲へ向けると、橋上の人の群れの中にも、橋のたもとの建物の壁のあたりにも、浪人やならず者の男たちが、うっそりと佇んでいる。

「石塔の七左衛門です」

と右平が平八郎に耳打ちした。

「田川七左衛門といいましてね、国姓爺鄭成功の弟だそうですよ」

平八郎はいっしゅん眼を光らせて右平の顔を見た。

「ああして奉行所役人が声をかけるのを待っているんです。誰も相手にしませんのでね」

平八郎は引止める右平を無視して、人波を分けて進み出ると、橋の中央に坐る男の正面にまわってみた。

その男も自分の前に立ちはだかる平八郎を下から見上げる。

若々しい男だった。二十歳前後だろうか。両の眼尻がやや左右へ垂れているが鼻梁が高く、人の好さそうな大らかな顔立ちである。体格は逞しい。立てば五尺七、八寸はありそうに見える。

「おい、何のつもりだ」

と平八郎は男にいった。

「往来のじゃまになるぞ。どけ」
そのとき背後から声が飛んできて、
「御役人、刺青を見てやれ」
浪人者だった。ふと気づくと二、三人が平八郎の側へ寄ってきている。
「この七左衛門は鄭成功の弟だ。兄の鄭成功は遥か唐の地で清国を相手に苦戦している。兄弟の母は清国人のために殺された。だからこの男は自分も唐に渡って兄と共に母親の弔合戦をしたいと願っているのだ。いくら願い出ても奉行所はそれを許さぬ。背中の刺青はやむなく不孝者となった七左衛門が、心の苦しみを天下に訴えたものだ。とっくり見てやってくれ」
当の七左衛門は何も言わなかった。
黙って坐る位置を変え、背中を平八郎のほうへ向けて見せる。
日本一不孝者とある朱の刺青を平八郎はあらためて見た。今の話では母の仇討ちにゆけぬ自分を自嘲したつもりらしい。
平八郎がこの長崎に赴任したのも、じつは国姓爺鄭成功の件がからんでいる。しかし江戸ではこういう男の存在は聞いたことがなかった。
「七左衛門とかいったな」
と平八郎が男に話しかけた時だった。
背後の人の群れが揺れ、

「お前さん！」
高い女の声がした。息せき切って飛び出してきた小がらな女は、平八郎にちょっと会釈すると、
「こげんところで何をしよっと。人さまの御迷惑じゃなかね」
頭ごなしに男を叱りつけた。
「みっともなか。酒ば飲んではこんげんところに坐りこんで……」
女は男の腕を取って立たせようとした。男がのしりながら抵抗すると、平八郎がおどろいたことに、女は男の頬に平手打ちを喰わせたのである。小気味のよい大きな音がした。
とたんに男は大人しくなり、女に手を引かれてしぶしぶ立ち上った。
女は酔った男と並んでその背中へ片手を廻し、体で押しやるように前へ歩かせながら、
「すみまっせん」
と振返って平八郎へ頭をさげる。
平八郎は気をのまれて、去ってゆく二人を見送っていた。
「七左衛門の女房ですよ。お稲といいます。姉さん女房で、あの男も頭が上らぬようですな」
と、右平がいった。
笑いながら散りはじめた人々の群れを分けて、平八郎と右平は奉行所へ向かった。
「あの男も可哀そか。あんげん思いつめとるとじゃけん、御奉行さまも唐へ渡らせてやれば

よさそうなもん」

人々のささやきが耳に入る。

江戸では絶対の極秘事項とされ、将軍はじめ老中、若年寄の一部にしか知られぬ鄭成功の件が、この長崎では秘密でも何でもなく、巷に知れ渡っているらしいことに、平八郎はおどろいていた。

あんな男が住んでいるのも、この長崎の土地がらだろう。

そして女房だというあの女。思いきり亭主の頬を張った小がらな女のしゃっきりした姿が、あざやかに平八郎の瞼にのこっていた。

「お稲というのか。長崎には気のつよい女がいるものだな」

と平八郎は右平にいった。

二

お稲は乱れた下着をかき合わせて起き上ると、眠りこんだ七左衛門の顔を眺めて溜息をついた。

日ましに酒癖がわるくなってくる。酔って暴れるときは頬を思いきり叩いて叱りつけ、そのあとで添寝すれば、七左衛門はお稲の体にしがみついて甘え、あとはコトンと眠ってしまう。

しかしそれも今のうちだろう。いずれ自分の手に負えなくなることは、お稲にももう判っていた。背中の刺青もお稲には相談なしで、七左衛門が人にそそのかされて彫ったものである。あのときは十日以上も家に寄りつかなかった。

丸山あたりではとっくに馴染の遊女もできているらしい。

まだ童顔をのこした七左衛門の寝顔を見つめながら、

「お母しゃまに申しわけなか」

と、お稲はつぶやいた。

七左衛門の母が四年前ひとりで明国へ渡るとき、お稲にくり返し言いのこしたことが、ひとつある。

「この子には田川の家ば立てさせておくれ。兄の福松のように唐人にはしたくなか。日本人として温和しゅう日々を暮すように、それだけを嫁のあなたにお願いしますよ」

母のおまつはそう言ったのだ。そのとき祝言をすませたばかりの七左衛門は十七歳、お稲は二十三歳だった。

お稲が六歳も年下の七左衛門に嫁いだのは、母親のおまつに惚れこまれ、熱心な頼みにほだされたからだといってよい。

お稲にとってはほんとうに降って湧いたような縁談だった。

そのころお稲は東中町の小間物屋に働いていて、時々買物にやってくるおまつと知り合った。いつも身綺麗で上品な物腰のおまつは、高価なものを惜しげなく買うので店では上得意だった。おまつが唐人の大金持ちの日本妻だという噂はお稲もいつとなく耳にしており、と

ても唐人の妻とは見えぬ物静かなおまつに、好感をもっていた。

おまつは時折、若い男を連れて店にやってきた。やや眼尻のさがったおっとりした大きな男で、いつも母親のうしろに温和しく従っている。それが七左衛門だった。

お稲がおまつに誘われて、今町にあるその屋敷へ遊びにいったのは正月休みの冬の一日である。そのときお稲はおまつから七左衛門の嫁にきてくれと、とつぜん膝詰めで頼まれたのだった。

おまつと七左衛門の身の上についても、くわしい話はその折に聞かされた。

おまつは平戸生れで、若いころ平戸に住んでいた唐人と結ばれ、男の子を二人生んだ。唐人は今は明国にいて、長男は七歳のとき父親のもとへ引取られたが、おまつと次男の七左衛門は、日本にのこった。七、八年前に平戸から長崎へ移り住んだという。

しかし明国に住む夫と長男は、ずいぶん前からおまつを明国へ招いていて、おまつもいよいよ断りかね、この春には単身で向こうへ渡ることになったらしい。

「七左衛門には私の実家田川家をつがせて日本にのこしておきたか。それで明国へは私ひとりで渡るつもりですと」

とおまつは言い、ついてはここへ残す七左衛門のために自分の眼鏡にかなったしっかりした嫁を迎えたいというのだった。

お稲は思いがけぬ申し込みにただ動てんしておまつの話を聞いていたが、日本人の渡海が固く禁じられているこの御時世に、いかにも気易く異国へ渡るという話ぶりが納得できず、

そのことを訊ねてみた。

「私の夫は鄭芝龍といいますとよ。よくは知りませんが、今では明国の都督とかゆうて、この国でいえばお大名になっているらしかとです」

とおまつはいった。

「お大名？」

とお稲は眼を丸くした。

「ええ、長男の福松も今ではあの国でお城を一つ預っているとか聞いてます」

「お城を……」

お稲はただ呆然としていた。

夫と長男がそんな身分だから、とくに奉行所に願って、おまつの渡海は許されたのだという。

唐人の妻でもおまつは、どうやらたいへんな身分らしい。淡々とした話しぶりだけに却ってお稲はそのことを実感し、その日はただ夢を見ているような気持でおまつの家を出た。

それから縁談はとんとん拍子にすすみ、おまつは高価な贈り物をお稲の両親や親戚知人に惜しげもなくばら撒き、あっという間に話をまとめあげてしまった。

祝言は三月に挙げた。

「これで安心してあの国へ行けます。お稲さん、七左衛門を頼みますね」

と祝言の夜、涙ぐんで深々と頭を下げるおまつに、お稲はつい自分も涙ぐんでしまったも

のだ。

翌月の十五日、おまつは家事いっさいをお稲に引きつがせ、もう思いのこすこともないと安心したのか、さっぱりした表情で、明国へ向かって日本を去っていった。

お稲は自分がていのよい母親替りとして七左衛門に妻合わされたことを悟ったが、それを恨む気はなかった。おまつの人柄に惹かれていたし、この縁談をまとめたおまつの強引さも、その気持を汲めば憎めなかったのである。

お稲はおまつの身替りとして六歳も年下の夫の面倒を見ることに、むしろ生甲斐を感じたほどだった。

あれから四年、七左衛門とお稲の周囲ではさまざまなことが起った。二人だけの平和な日日は束の間にすぎず、おまつが旅立ったその年の暮れ頃から、嵐のような日々がはじまったのだ。

明国が滅んだことがその原因だが、遠い国の遠い出来ごとなので、お稲には詳しいことはわからない。

明国からたびたび使者が長崎を訪れ、渡海してくる唐船の数もふえ、それらの唐人たちが、次々と七左衛門を訪ねてきた。いつの間にか七左衛門の周辺には多くの人々がむらがるようになった。鄭芝龍、鄭成功という名が在留唐人の間ではもちろん、日本人の間でさえひんぱんに話題にのぼる。

芝龍は七左衛門の父、成功というのが兄の名前らしかった。滅んだ国のために七左衛門の

父と兄は身を投げ出して、敵と戦っているのだという。

お稲はあまりに遠い国の遠い話で、何を聞かされても実感がなかった。

ただいちど、お稲が強い衝撃を受けたのは、明国へ渡ったおまつがその翌年、いくさのため無惨な死をとげたと知らされたことである。

おまつの住む城が敵の清国の兵に襲われ、おまつは辱められた上、川へ身を投げて死んだという。しかもそれは夫の鄭芝龍が敵に寝返ったせいだというのだった。

信じられぬ話だが、そんな嘘を唐船がわざわざ長崎へ伝えにくるはずもなく、真実と思うよりほかはなかった。

七左衛門が、

――母の仇を討つ。明国へ渡海して兄と共に戦う。

と言いだしたのは、そのときからである。七左衛門の気持にうそはなく、何度も奉行所へ渡海を願い出ては、拒まれた。七左衛門の周囲には唐人だけではなく、いつの間にか事を好む浪人者やならず者たちがむらがりはじめた。若い七左衛門はそんな連中に担がれて遊び歩き、酒をのんでは母の仇討ちを叫ぶ殺伐とした男になってきた。

お稲はいま、そんな七左衛門を扱いかね、どうすることもできない。

おまつが七左衛門に望んだのは、こんな暮しではなかったはずだ。明国へなど渡らず、温和しく平凡に暮らすことをおまつは心から願っていた。

「嫁のあなたに頼みましたよ」

と、言い置かれたことをお稲は忘れていない。

背中に奇怪な刺青を彫り、橋の上に坐りこむ息子をあの世で見て、おまつはどんなに嘆いていることか。もし七左衛門がいよいよ明国へ渡るとなれば、お稲はどんなことをしても、引きとめる覚悟だった。

それが死んだおまつへの自分のつとめだとお稲は思っている。

「お母しゃまに申し訳なか」

お稲は童顔ののこった七左衛門の寝顔を眺めながら、思わず涙をこぼしていた。

三

——鄭成功

江戸では極秘とされるその名前が、長崎では知らぬ者もない実情を、滞在数カ月で柘植平八郎はつくづく知らされた。

「とにかくたった一人で清国と合戦しとる大忠臣ですけんな。しかも血の半分は日本人ですよ。将軍さまもちっとは加勢してやってよさそうなもん」

誰しもがそういう。むりもなかった。

毎年長崎へやってくる唐船の大部分が、その鄭成功の交易船だという。鄭氏船と呼ばれて、長崎商人の上得意なのである。

「交易の儲けが鄭さんの軍資金らしかです。私らも損得ぬきで加勢してやりたか」

たいへんな人気なのだった。

これでは大量の武器が唐船でひそかに積み出されたり、浪人たちが唐船にひそんで渡海しているらしいという風聞も、まんざら嘘ではあるまいと察しがつく。

平八郎は江戸で若年寄の密命を受けるまで、鄭成功などという唐人の名は聞いたこともなかった。

成功は平戸生れの混血児で日本名は田川福松、父は明国の高官鄭芝龍、母は平戸生れの日本人で田川まつというらしい。

福松は七歳のとき父に招かれて明国へ渡り、父子ともに明の国王に仕えた。

明に内乱が起り、その内乱に乗じて北方の清国が明を倒すと、芝龍父子は国王の遺族を擁して、清国に戦いを挑んだ。

福松は擁立した明の国王から愛されて、名を成功と改め、とくに国姓の朱を許されたので、国姓爺とも呼ばれているらしい。父の芝龍は間もなく清国に降り、そのため日本から渡唐した成功の母田川まつは、清兵に攻められて自害したとか……。

子の成功は父とたもとを分ち、今は南海の島々で兵を養い、あくまで清に抗し明を再興する戦いを挑んでいるという。

平八郎が長崎へ出役するにあたり、若年寄から聞かされた話は、あらましそんなものだった。

芝龍と成功はこれまでたびたび日本に援兵を乞う使者を送ってきた。幕閣では出兵の是非

をめぐって論議が白熱したが、結局は慎重論が大勢を占め、拒絶することに決ったそうだ。

使者は例年日本にやってくる。昨年十月にも鄭成功が使者をよこし、幕閣では再び出兵の是非が論議された。

浪人たちのひそかな渡唐、刀剣や甲冑の大量積み出しが話題になったのも、その折の閣議の席上だという。

「うわさだとは思うが、有り得ぬことではない。よく探察して、そのようなことがあれば、断固取り締ってくれ」

と若年寄が平八郎に密命をさずけ、御先手与力の平八郎は長崎奉行所の目安方に抜擢されて、ここへ赴任してきたのである。

浪人の渡海や武器の積み出しが、うわさだけでないことは、この土地の人情にふれてみると、察しがつく。

鄭成功の人気はここではたいへんなもので、町ぐるみ同情を寄せ、商人ですら加勢したいと公言して憚らない。

もともと鄭芝龍の時代から、長崎と鄭一族の縁は根深いようなのである。

渡海してくる唐船頭の大部分が、鄭氏の一族かその配下だという。

平八郎はいつぞや橋の上で見た刺青男の田川七左衛門についても調べてみた。

長崎では名物男らしい。鄭成功への人気が、この男の一身に集っているようだった。

「よか男です。母親の仇ば討ちたかというのじゃけん、御奉行さまも許してやればよさそう

なもん。今は刺青なんぞ背中に彫って自暴自棄の風ですばってん、むりもなか。なにせ英雄鄭成功の弟ですけんね。血の気も多かとでっしょう」

誰しもそんな風に言うのである。

平八郎が長崎奉行に直接聞いてみたところでは、七左衛門の願いは尋常ではない。私兵を募り浪人団を引連れて、大挙して明国へ渡りたいと申し出てくるのだそうで、

「単身で渡るとあれば考えようもあるが、浪人どもを募って渡海したいというのでは、相手にはできぬ」と、奉行は苦笑していた。

「ていよく唐人や浪人どもに担がれて、やつらの代弁をしているのだろう。長崎では妙に人気が高くて、困った男だ」

そんなことを聞くにつけ、平八郎はたしかお稲とかいった七左衛門の妻を思いだした。酔った亭主の頬を思いきり叩いて、子供をあやすように連れ去った姿が、印象づよく記憶にのこっている。

夏がきていた。

家ごとの軒先の庭に大きな紫陽花が咲き競っている。華麗なこの花は長崎の町々を彩る夏の名物のようだった。

平八郎がふと思い立って、同心の喜多村右平に案内させ、七左衛門の屋敷を訪れたのは、八月はじめである。

七左衛門は不在で、応対に出てきたのはお稲というあの女だった。

奉行所役人だと聞くと、お稲はさっと顔色を変え、
「うちの人が何か……」
警戒する表情になった。
「いや、大した用ではない。いちど会いたいと思って立ち寄って見たまでだ」
平八郎は近ごろ面識を得た唐通事の名前などを口にした。
「妻女でもよい。ちと話を聞かせてくれぬかな」
お稲はしばらく探るように平八郎を見つめたが、やがて座敷へ招じ入れた。
対面するとそれほど気の勝った女とも思えない。色はやや浅黒いが眼もとが涼しい。つめたい麦湯に菓子など添えて出す動作がきびきびしていて、いかにも働き者といった感じだった。
「静かだな。泊まり客は？」
と平八郎はきいた。かなり広い住居だが、庭に面した廊下の風鈴の音が淋しげに聞えている。
「唐人たちが泊まっていると思ったが……」
と、平八郎が重ねてきくと、
「いいえ、うちにはお泊めしまっせん」
お稲ははっきりと答えた。
「お母しゃまが嫌いでした。唐人さんは泊めてはならんと、言うておりましたけん」

その母というのは、四年前に明国へ渡り、いくさで死んだ田川まつのことらしい。
それを確かめて、平八郎は意外な気がした。
成功の母として自ら単身明国へ渡り、敵の手にかかった女である。そんな女が唐人を嫌っていたとは想像できない。
「田川家をついだ七左衛門は日本人ですけん、なるべく唐人づきあいはさせたくなかとです」
とお稲はいった。自分の意見でもあるらしい。
「しかし派手につきあっているようではないか。先日わしも橋の上で見た。そなたが連れ帰るようすもこの眼で見たぞ」
お稲ははっとしたように平八郎をみつめ、まじまじと見ているうちに思い出したのか、
「ああ、あのときの……」と言い、顔を赤く染めた。
「あの時は近所でしたけん、知らせてくれる人があって……」
とお稲はうつむいて口を濁した。
「ここにはあまり寄りつかぬようだな」
と、平八郎が静かすぎる家を見廻してきいてみると、
「はい」とお稲はうなずいた。
「この頃は遊び歩いて帰ってきまっせん」
「暮しはどうなのだ。七左衛門はべつに仕事もしていないらしいが」

「兄しゃまが毎年送ってくれます」
死んだ母の約束で、明国の鄭成功が唐船に託して、弟の七左衛門の生活費は毎年送ってくるのだという。
「どれほどかね」
「金五貫目ずつ……」
とお稲は答えた。
「金？」と平八郎は問い返した。
銀ではなく金五貫といえば、安く見積って五百両である。奉行所与力の平八郎などとても足もとに寄れる収入ではない。
「ほかにお母しゃまがのこしてくれたお金もありますけん」
不自由はないようだった。それどころか七左衛門の派手な遊興費にもこと欠かないだろう。
「無為徒食か……」
と平八郎はつぶやいた。
「まだ若いようだし、それでは遊び歩くのもむりはないな」
お稲は黙っていた。恥かしそうに項垂れていたが、ふと顔を上げ、思いつめたような眼になって、
「御役人さま、お願いします」
と、いった。

「あの人を助けてください」
「助ける？」
「はい」とお稲はうなずいた。
「鄭成功とかいう偉い兄しゃまと、あの人は違いますと。気の小さか子供みたいな人で、豪傑でも何でもなかとです。明国へ行きたかと言い張っても、みんなにおだてられているだけですとよ。お母しゃまも仇討ちなど喜びはしまっせん。兄しゃまのことにしても、あの人はまるで覚えてなかとです。なんせあの人が二つのときに、兄しゃまは明国へ渡ってしもうたとですけん」
お稲は一気にそういうと、
「ばかですけん、あの人は……」
袖で眼もとをぬぐった。取巻きの唐人や浪人たち、ならず者などから七左衛門を救い出してくれという。もう嫁の自分の手には負えないと悩んでいる風だった。
その真剣な口ぶりで、お稲が心から七左衛門を愛し、心配している風情が察しられた。
帰りぎわ平八郎は、見送りに立つお稲に、
「何か心配ごとがあれば、奉行所にわしを訪ねてくれ。決して悪いようにはせぬ」
と言い置いた。
「きっとだぞ」
お稲はつよくうなずいた。縋るような思いつめた表情が、いつまでも平八郎の胸にのこっ

た。

四

「お稲さん、旦那さんがまた橋の上に坐っとらすよ」
近所の女が駈けこんできた。お稲は玄関へ飛びだし、
「どこ？」
「酒屋町たい。今日は幟を立てて誰かが講釈しとったけん、みんな面白がって集っとるよ」
「そう」とお稲は唇をかみ、どうしたものかと迷う表情になった。このところしじゅうやっているらしく、あとで教えられて知ることが多い。酒屋町ならひとっ走りの近さだった。
下女に留守番を頼んで、お稲はふだん着のまま、草履をつっかけて外へ出た。
唐船の春船が到着したのは先月のことで、それいらい七左衛門は唐船頭たちと遊び歩いて、ろくに家に帰ってこない。こんどの唐船にはお稲も面識のある鄭一族の若者たちが乗り組んでいて、また日本に援兵を乞い、武器などの援助を求める鄭成功の書状を持参していた。書状は唐通事の手をへて奉行所へ届けられたと聞いている。
お稲が酒屋町の路地までくると、向こうの橋のふきんに人だかりがしていた。
白い旗幟が人々の頭上に見える。七左衛門はまだ寒い三月だというのに、上半身諸肌脱ぎになって橋上にあぐらをかき、背中の刺青を誇示していた。右手に竹竿を握って地面に押し立てている。その竹竿の上端が白い旗幟になっていて、その白布には、

——殺父報国
と、書かれてあった。
頭を厚がっそう（総髪）にした浪人風の中年男が、七左衛門の横に立って人の群れに話しかけている。
お稲はその人だかりの中にまぎれこんで、聞いてみた。
「……孤り国姓爺鄭成功は厦門、金門の両島に拠って、孤軍、数百万の韃靼兵と戦っておる。父の鄭芝龍はもともと海賊の首領にすぎず、ついに清国に屈服し、そのため成功の母田川氏は死んだ。七左衛門がいまここに掲げた旗幟を見てくれ。これこそは忠臣鄭成功の気概を示した旗印じゃ。わが父を殺して、国恩に報ずる。どうじゃ、その大信、大義の心には一点の曇りもない。この旗のもとに集う武者は十数万、一騎当千のつわ者ばかりじゃが、なにせ敵は多勢。そこで鄭成功はこの日本に援兵を乞うてきた。一度ではないぞ。二度、三度、いや毎年のように乞師の使者は長崎へやってくる。しかるに……」
軍談師のようだった。ちかごろは軍談ばやりで、浪人者には軍学者を気取る者たちが多い。
その男が七左衛門の背中の刺青を指差して、何か言いはじめると、お稲はもう耐えられず、人の群れをかき分けて、前に飛び出した。
「お前さん！」
振り向いた七左衛門の顔は赤黒くむくんでいる。酔い疲れて眼が濁っていた。情けなさにお稲は手をふりあげ、力いっぱい七左衛門の頬を叩いた。

七左衛門が立ち上り、わめきながら、ふいにお稲を突き飛ばした。
お稲はたたらを踏んで後ろへのけぞり、しゃべっている浪人者の体に突き当り、二人はもつれ合って橋上に転んだ。
お稲の裾が乱れ、赤い蹴出しの中からふくらはぎがあらわになった。
「かみさんたい」
という声が聞え、どっと笑い声が周囲にあがった。
お稲は起き上ると、袖で顔を蔽って人ごみの中を駈けぬけ、走り出した。
その背中に笑い声があびせられ、お稲は恥かしさに、死にたいと思った……。
その日の真夜中、七左衛門がのっそりと家に帰ってきた。
下女が戸を開け、七左衛門が寝所に姿を見せるまで、お稲は眠ったふりでいた。
七左衛門はお稲の側に坐って、寝顔をのぞきこむ風である。
今日のことが気になって、めずらしく帰ってきたのだろう。若い七左衛門にはそんなところがあった。いつも並べて敷いてある寝床に七左衛門がもぐりこみ、やがて寝息を立てはじめるまで、お稲は頑固に眼をあけなかった。
翌朝、ひさびさに朝餉の膳に向いあったとき、
「お稲、金はどれほどある」
と七左衛門が話しかけた。
「さあ」とお稲は黙って横を向いた。

「兄貴の金はことしは送ってはこんと思うがよか。手持ちの金ばだいじに使うことたい」
妙なことをいうとお稲は思い、はじめて七左衛門の顔をまっすぐに見た。
人の好さそうな大らかな顔が、きまじめにお稲を見ていた。まじまじとお稲にみつめられて、七左衛門は眼をしばたたき、
「お前がわしのすることば嫌うとるのは、よくわかっとる。わしも恥かしいし、好きではなか」
と、いった。
「ばってん兄貴は明国で一人で戦うとる。弟のわしが知らぬ顔はできん」
「人の見世物になって、それが何か、兄しゃまのお役に立つとですか」
お稲は、つい激しい口調でいった。
「立つ。あれでみんなが兄貴のことば思い出して、商売にも肩入れしてくれる。唐船商売では兄貴の船がいちばん人気があるそうな」
「だったらどうして今年はお金を送って貰えんとです」
とお稲はきいた。
七左衛門はそれには口を濁して答えず、
「人が足りんそうじゃ」
と、いった。
「兄貴は人をほしがっとる。とくに日本人は向こうで鉄人とか呼ばれて、一人が十人にもあ

たるほど役に立つらしか。わしは兄貴に人ば送ってやりたか」
「ばってん御禁制でっしょ」
「うん、しかし手はある。今までにも浪人たちが何百人も唐船で海を渡っとる。こんどの船は、そのためにきたとじゃ。按舎や奎舎が乗ってきとる」
二人とも七左衛門には血縁にあたる鄭氏の一族だった。鄭成功の腹心でもある。
「わしも刺青を見せるだけで、いつまでも威張ってはおれん」
そう言うと、七左衛門は箸を置いて立ち上った。
「また丸山ですと？」
皮肉な口調でいうお稲をじろりと見て、
「遊びはやめた。そんげん無駄金使いはもうしておれん」
いやに気負った声で珍しいことをいい、七左衛門はそそくさと出ていった。
七左衛門が出たすぐあとに、唐人が二人と、浪人風の男二、三人が連れ立って訪ねてきた。出かけたというと客たちは顔を見合わせ、うなずき合ってすぐ帰った。
お稲は妙に胸さわぎがした。七左衛門の態度も、ここへはめったに訪れぬ唐人たちのそぶりも、気になった。
その日から七左衛門は、たとえ夜中になってもきちんと帰ってきた。
お稲にもいやにやさしい。ひさびさに新婚の頃の暮らしが甦ったようだった。
しかしお稲は喜べなかった。七左衛門のそぶりから、何かがあると思えてならない。もしあるとすればそれを隠しおおせる七左衛門ではない。お稲は素知らぬふりで、打明けられるのを待っていた。
果して二十日ほどそんな日々がつづいたある夜、七左衛門はめずらしく、二度もお稲のからだを求めた。乳房を口に含んだりして子供のように振舞ったあと、妙に沈みこんで、
「お前には世話になったの」
と、いう。

「いろんなことがありすぎた。何もしてやれんで悪かったと思うとるよ」
お稲は起き上った。膝を揃えてふとんの上に坐り、寝ている七左衛門を見おろして、
「何をする気ですと。まさか明国へでも行くつもりではなかでっしょうね」
七左衛門はどきっとした顔になり、お稲を見上げて、
「わかるとか？」といった。
まさかと思って聞いたことが図に当りお稲のほうが動てんした。しかし顔には出さない。黙ってうなずいてみせると、七左衛門は自分も起き上り、坐り直して、密航の計画をしゃべり出した。
浪人やならず者など数十人を引連れて、鄭成功の麾下へ投ずるという。
「わしも抜き差しならんごとなった。鄭成功の弟じゃと人に指差されては、刺青だけで威張ってはおれん。明国で兄貴といっしょにお母しゃまの仇を討って、それから帰ってくるつもりたい」

本当に帰れると思っているのだろうか。

お稲は呑気な七左衛門の顔をまじまじと見て、言葉もなかった。

「あんたがその気なら、しょうがなか。ばってん、どげんして渡るとです」

お稲に許されたと思ったのか、七左衛門は嬉しげに計画を語りだし、お稲はひと言も聞き洩らすまいと、その話をしっかり胸におさめた。

船出するのは、なんと明後日だという。お稲にはぞっとするような話だった。

奉行所へ出仕して間もない昼前どき、柘植平八郎は思わぬ客の訪問をうけた。

「お願いです。うちの人を助けて下さい」

七左衛門の妻お稲だった。はじめて奉行所へ顔を出したのだろう。緊張して顔が青ざめて見える。

「どうした。落着いて話すがよい」

役室に招き入れ、茶など振舞って落着かせ、その上で話を聞いてみて、平八郎もおどろいた。これは落着いていられる場合ではない。

浪人たちに密航の企てがあることは、平八郎も唐通事の筋から探っていた。ただその場所、日時、唐船の番号など具体的なことがどうしてもつかめない。

焦っていたところだったのである。

お稲の話では、浪人たちの集合場所は西中町の銀吹き七官という帰化唐人の住居で、日時は明日の夜四ツ半（十時）、春船三、四、五、六番に分乗するという。

「よく知らせてくれた。すぐに手を打つ」

立ち上った平八郎に、

「お願いします。七左衛門にはお咎めがございませんように」

とお稲は同じことをくり返す。

平八郎は何度も受け合って、お稲を安心させた。

翌日の夜、奉行所目安方が采配をとり、町方役人が総出で、西中町の銀吹き七官の屋敷を急襲した。

時刻がやや早かったのか、昼間の見張りに気づいた者がいたのか、七官宅に揃った浪人、ならず者たちは予想の半数に及ばぬ十二人だった。

さして抵抗する者もなく難なく捕えられた。桜町の牢屋敷に連行されたその十二人の中に、田川七左衛門がいた。

こらしめのため一人だけ別の牢に抛りこんでおき、翌日の昼ごろ、平八郎が自身で牢へ出向いた。

大きな体の男が、猫のように背中を丸めて、しょんぼり牢の隅にうずくまっている。

「どうだ。ちっとはこりたか」

平八郎が格子ごしに声をかけたが、何も答えない。見ると肩を上下させ、しゃくりあげて泣いているのだった。昨夜、この男を捕えたときは、いやにのっそりと落着いていて、かな

り図太いのではないかと、平八郎は思ったものだ。

「どうした。そんな風では背中の刺青が泣くぞ」

と平八郎は苦笑して言い、下役に命じて牢をひらかせ、外へ連れだした。

牢屋敷の玄関先まで連れて出ると、

「お稲をだいじにせいよ。あれはお前にはすぎた女だ。さあ行け」

と平八郎は七左衛門の背中を、一つどやしつけてやった。

びっくりしてしばらく佇んでいた七左衛門がぺこりと頭を下げ、やがて脱兎のように走り出すのを、平八郎は笑って見送っていた。

お稲がさぞ気をもんで待っているだろう。心配しているその顔が眼に見えるような気がした。

五

柘植平八郎の長崎滞在は長くはなかった。慶安四年将軍家が薨去すると、すぐに江戸へ呼び戻されたのである。

閣老の交替が平八郎の御役替えを早めたらしい。

しかし長崎出役の功績を認められたのか、平八郎は江戸へ帰って間もなく、支配勘定に昇進した。勘定組頭の配下だが、働きしだいでさらに上席が約束されている御役である。

数カ年御役に精を出すうちに、やがて関東郡代手附出役を命じられ、郡代役所に赴任した。

長崎の思い出は、日々の仕事の中にいつとなく忘れた。遠い明国の出来事など、振り返ってみる気持のゆとりもなかったのである。

鄭成功などという名前が人々の話題にのぼることもいっさいない。ときに思いだすことはあっても、遥かな国の遠い出来ごととしか感じられない日々の暮しだった。

それを再び思いだすことになったのは、御勘定組頭として江戸へ帰ったとしの夏のことである。

このとしの六月、鄭成功の使者が長崎へ来て、その信書が幕府へ取次がれ、閣老たちの間でまた出兵の議論が再燃した。

鄭成功は今では延平郡王と王号を名乗るほど明国で勢威をふるい、十数万の兵と数百艘の軍船を擁し、ちかく北上して清国と決戦を交えるという話だった。もと長崎の目安方にいたことから、平八郎も若年寄に呼ばれて事情を聞き、その鄭成功の信書も見せられた。

――成功日出に生れ、長じて雲従す。一身、天下の安危をかけ、百戦師中の貞吉を占む。いま艱難のとき、貴国われを憐み、数万の兵を仮さば感義限りなけん……。

と、いった風な調子の高いものである。

それを見ながら、平八郎が思いだしたのは、田川七左衛門とお稲の顔だった。ことにお稲という女の顔は今もあざやかに瞼に浮んだ。あのとき密航寸前の浪人たちを一網打尽に捕えたことは、平八郎の大きな手柄になった。そのあとは長崎の町々から浪人たちの姿が消え、唐人の散宿も制限され、七左衛門が路上で刺青を誇示するようなこともなくなったものだ。

お稲と七左衛門の夫婦のその後は、とくに耳にすることもなく平八郎は長崎を去っている。

しかし鄭成功がこの勢いで、幕閣でまた派兵の議論がむし返されているようでは、長崎のさわぎが思いやられる。

七左衛門もおそらく温和しくお稲の言いなりになってはいまい。また苦労しているだろうな、と平八郎はそんなことをふと考えた。

「ところで田川七左衛門という男を知っているか」

昔を思い出していた平八郎は、若年寄にそう訊ねられて、いっしゅん耳を疑った。心をのぞかれていたような気がしたのである。

「鄭成功の弟だそうだ。兄の助勢に明国へ渡海したいと願い出ているらしい。長崎奉行もその心情を哀れんで、近く上訴のため江戸へ出てくることを許したそうだ」

平八郎はびっくりして、若年寄の顔をみつめていた。

――やっぱり……。

それが実感だった。またはじめたのだろう。七左衛門は相変らず明国渡海を言い張っているらしい。おそらく橋の上に坐りこんだりしているにちがいない。

「よく存じています。密航しようとしたのを捕えて、放してやったのはこの私でございます」

と、平八郎は七年前の事情を若年寄に話して聞かせた。

七左衛門が江戸へ到着したという噂を、ふた月ほどのちに平八郎は聞いた。

江戸にそろそろ秋風が立ちはじめたころである。七左衛門は閣老たちを歴訪して背中の刺青を披露し、それがたいへんな評判になっているそうだった。

それから間もなく、平八郎は若年寄の屋敷へ招かれ、ひさびさにあの刺青男と対面した。

別人としか見えない。でっぷりと太り、いやに貫禄ができていた。まだ三十歳前のはずだが、老けて見えるのは酒焼けした赤ら顔のせいだろう。

よくしゃべる。兄の鄭成功がことしの五月、十万の大軍を率いて福建から北上し、平陽、瑞安を攻略して清国の南都南京へ迫っている有様を、まるで軍談師のようにとうとうと語った。

平八郎のことなど見忘れたかのように、けろりとした態度で、昔の礼も言わない。

「兄は日本に生れ、心から日本を慕っております。将軍さまの御恵みを頂戴して、数万の軍勢をお貸し戴ければ、日本と明が手を携えて清国を倒すことに何の造作がございましょう。もしそれがかなわぬことなら、せめて私が義兵を募り、兄の助勢に赴くことをお許し戴きたいと存じます」

口上も堂々としていた。こんな話になると、馴れたのか、それとも誰やらの口真似なのか、言葉に長崎の訛りも出ない。

若年寄が面白げにその話を聞くようすを、やや離れた席から平八郎は黙って見ていた。話が雑談に移ったとき、

「ところで、お稲はどうしている」

と、平八郎はきいてみた。
七左衛門は平八郎をちらっと見て、ろこつにいやな顔をすると、
「別れましたけん」
と長崎訛りで小さくいった。
「別れた？」
「あんげん女ごには、男の気持がわかりまっせん。きっぱり暇をくれてやりました」
「いつのことだ」
と平八郎は、眼を怒らせた。
「もう三、四年になりまっしょうか」
「それで、お稲は達者なのか」
「さあ」と七左衛門は冷淡に首をかしげ、
「茂木の田舎で一人ぐらしをしとるとか聞いとります」
「そなたは後添えを迎えたのだろうな」
七左衛門は当然だというようにうなずき、
「今度は若か女ごです。近く子供もできますと。名前は兄の鄭成功がつけてくれることになっとります」
と、嬉しそうにいった。
ふーんと平八郎は腕を組んだきり、あとは七左衛門のしゃべるにまかせ、もう何もいわなかった。

若年寄が、長崎弁をまじえた七左衛門の剽軽な話しぶりを、面白そうに聞いていた。
えらく口が達者になったものだと、平八郎は呆れて、黙っていた。
別れたというお稲のことが思い出される。眼の前のいやに脂ぎって世間ずれした七左衛門が、うとましく見えてならなかった。
田川七左衛門の上訴は、閣老たちの好意で、その一半がかなえられた。
私兵を募ることは許さぬが、その孝心をめでて、単身の渡海は認めてよいというものである。
但しそのためには鄭成功の幕府への訴状が必要で、成功が弟の渡海を幕府へ願い出れば、それを確認した上で、七左衛門を明国へ渡らせようという条件づきだった。
七左衛門はすっかり閣老たちの人気者になり、意気揚々と長崎へ帰っていった。
平八郎は人の噂でそれを知ったが、もうあの男に興味はなかった。

六

ふしぎに長崎とは因縁があったのかもしれない。柘植平八郎がさいごの勤めとして長崎奉行所の目付役に赴任したのは、延宝三年の春のことである。
ざっと二十年ぶりに見る長崎だった。すっかり変っている。かつては雑然としていた町並みが、内町と外町に分けられて、どうやらかたちを整えている。

町にはたまに唐人の姿も見えるが、以前のように天秤棒を肩に振り売りして歩くような自由な姿はない。山羊や豚が路上に寝ているなどというのは、もう昔ばなしのようだった。散在していた長崎名物の遊里も今は丸山と寄合町の二カ所に集められ、その一帯は見違えるような華麗な巷に変っている。

赴任して間もないころ、平八郎は長崎奉行から一通の訴状を見せられて、相談を受けた。

「どうしたものかな」

と、奉行は苦笑している。

ざっと眼を通してみて、平八郎はおどろいた。これも何かの因縁であろう。

――乍恐謹而御訴訟

とあるその訴状の末尾には、訴人の名が田川七左衛門と記されてあったのだ。

「鄭成功が生前当地に預けた銀子が二千六百貫にのぼっている。成功の息子が使いをよこして引取りたいと言うのだが、七左衛門というこの男は、その銀のうち五百貫は自分のものだと言い張ってゆずらぬ。兄の遺言で、五百貫は自分が貰うことになっているというのだ。使いの唐船頭はそんなはずはないと言うし、双方が言い張って決着がつかぬ、なにせ異人のことで、こちらも困っておる」

そういう奉行の話を聞きながら、平八郎はもういちど訴状に眼を通してみた。鄭成功の遺産をめぐって、唐船頭たちと、七左衛門が争っているらしい。

訴状によると七左衛門はすっかり零落して、この銀を貰えなければ家屋敷も手放し、自分は飢え死にすることになり、それでは亡兄の名の汚れになるだろうなどと、書いている。

金が欲しさになりふりかまわぬ心情がろこつににじみ出ていた。

「七左衛門は明国へ渡ったのではないのですか」

長崎にいるということすら、平八郎には意外だった。幕府の許しを得て渡海したものと、思い込んでいたのである。

「いや、七左衛門が渡海するには兄の鄭成功が幕府へ願書を出さねばならぬ。その書状がついに来なかったのだ。おそらく弟一人を呼んだところで、大して役にも立たぬと思ったのだろう。もっとも唐船頭らが七左衛門の渡海を嫌って、兄に取次がなかったという噂もある」

「と、いいますと？」

「船頭らは長崎へきて多少は私腹をこやしているらしい。七左衛門が明国へ渡って、成功にそれを告げてはと案じたのかもしれぬ」

平八郎ははじめて聞く話にただ驚いて、くり返し訴状を見ていた。

鄭成功は南京攻略に失敗し、その後は台湾を占領したが、寛文二年三十九歳で病死している。その子鄭経が跡をついで鄭氏一族は健在だが、もう日本では、昔のようにその名が語られることもない。長崎が明国のうわさで騒ぎ立つという時世はとっくに去っていた。

訴状の件は奉行の頼みで平八郎に預けられることになり、数カ月後に平八郎は奉行所へ七左衛門を呼び出してみた。

数カ月も放って置いたのは、平八郎には七左衛門への好意が湧かなかったからである。

江戸で見たときの妙に世間馴れた態度が、頭にのこっている。
ことにお稲と別れた七左衛門には、なぜか何の興味も覚えなかったのだ。
やってきた七左衛門と奉行所の役室で対面して、平八郎はまたおどろかされた。
ひとりではない。七左衛門は女に付添われ、坐るのも自由でない体のようだった。それほどのとしでもないのに中気を患っているらしい。ぴったり脇に寄り添った女を見て、
「お稲ではないか」
思わず平八郎は懐しそうな声をあげていた。
七左衛門より年上のはずだが、こちらはまだ若々しく、充分に昔の面影をのこしていた。
「はい。お久しゅうございます」
お稲も平八郎をよく覚えているらしい。
平八郎は二人を見くらべて、
「たしか別れたと聞いていたが……」
「はい、十年ばかり……」
とお稲は口を濁した。
「でもこの人がこんげん体になって、嫁にも逃げられたと聞いたもんで、放っておけずにまた一緒になったとです」
そうだったのかとうなずく平八郎の視線をさけて、
「お母しゃまにこの人のことは、私、頼まれとりましたけん」

とお稲は弁解するようにいった。
そんなやりとりの間も七左衛門は、しじゅう小刻みに体をふるわせ、口をもぐもぐさせているだけである。
「ひどいものだな」
と平八郎は眉をひそめて七左衛門を見た。
「大酒でこんげん体になったとです。この人はもう長くはなかでっしょ」
お稲はけろりと口にした。
「息子が一人おりますけん。その息子のためにも、貰えるお金は貰っておきたかと思うとです」
訴訟の銀のことらしい。
「そなたの子か」
と平八郎はきいた。
「いいえ、この人の逃げた女房の子供ですと。ばってん私が育ててもう十五歳になっとります。素直で愛らしくて、それはよか息子ですとよ」
お稲は嬉しそうにそういった。
他の女の子供を夢中になって育てるお稲の日頃の姿が眼に見えるようだった。
平八郎はつい笑いだし、訴訟のことはぬきにして、もっぱらお稲と昔ばなしに興じ、
「訴訟のことはわかった。できるだけ力を貸そう」

と約束した。やがて帰って行く二人を平八郎は奉行所の門前まで見送った。
七左衛門はお稲の肩にすがり、よろめいてはそのたびにお稲に叱られながら、一歩一歩と老人のように石段をおりてゆく。
その背中にはいまもあの刺青があるにちがいない。
石塔の左右に日本一、不孝者と朱で彫られた刺青を、平八郎は思い出していた。
階段をおりきったところで、夫婦はふり返り、お稲がていねいにお辞儀をした。
平八郎は手をあげてこたえながら、
「何とかしてやりたいな」
と訴状のことを思った。その金がこれからのお稲夫婦の生涯に役立つのなら、力を貸してやりたいと平八郎はしみじみ考えていた。

安南の六連銭

新宮正春

新宮正春（しんぐう・まさはる）
昭和十（一九三五）年、和歌山県新宮生れ。神奈川大学中退。三十九年、報知新聞社に入社。巨人軍担当記者として活躍のかたわら小説を書き、四十五年、『安南の六連銭』で「小説現代新人賞」を受賞。時代小説に、『鷹たちの砦』『不知火殺法』『陰の剣譜』『忍法鍵屋の辻』『信玄狙撃』『ゼーランシャ城』などがあるが、『後楽園殺人事件』『殺しのマウンド』など野球をモチーフにしたミステリーもある。

一

はじめはなんの音か、六文銭にはわからなかった。
雨ならば、こんな優しい音をたてはしない。横なぐりにたたきつけてきて、原色の草や木を洗っていくのが、ものごころついてから六文銭の知っている雨だった。ぶちまけて、嘘のようにかき消え、あとに油照りの暑さを残していく。
「おい……」
塗りのはげた大刀の鞘で、六文銭は竹の皮を編んだ戸をこじあけた。人の気配を感じたからである。
返事はなかった。
そのかわり、ひっそりとおんながいた。
かっと燃えるような白昼である。おんなは、まばゆいほどつややかな下肢をひろげてしゃがんでいた。
音はその下肢から洩れている。
片手にもったばらんの葉で、おんなは半透明な液体を受けとめようとし、すでに大半は葉

のふちからこぼれおちつつあった。

おんなの不自然にひろげた両足の下で、赭っぽい土が濡れていた。蠅が一匹、せわしなく舞いあがって、おんなの顔のあたりにまとわりついた。

刀をぶらさげた六文銭がみている前で、おんなはやがてゆるゆると、右手を動かした。葉のなかにたまった液体をそそぎながら、指二本が見えなくなるほどふかく、からだのなかにはいっていく。

ひきだしてはまた沈め、そのたびにおんなは指をみつめ、新しい液体をそそぎかけた。

六文銭は黙っている。

いぶかしげなその視線を察したのか、おんなは立ちあがると、自分の下腹をさして、ほそい首を横に振った。

「ややや、できぬ。案ずる、ない」

この国の旧い習慣であった。男とまじわったあと、おのれの小水で体内に残る男の精を洗いおとす。熱いほどの小水であればあるほど、子種は死ぬ、と女たちは信じていた。

おんなはくおんといった。

その名を六文銭はいつまでたっても、正確に発音できなかった。くおんのほうも同じだった。

ろく様、というところが、いつも六文銭には、ろっさん、と聞こえた。「く」という音が、くおんにはよほどいいにくいらしかった。

「……そんな、尿などで洗わんでもよいのに……」

六文銭の情けなさそうな声の調子につられて、くおんはくすっと笑いだした。

「ろっさんのやや、もうない」

さっきくおんがしゃがんでいたあたりは、灼けつくような日射しにあぶられて、あとかたもない。甘えた仕草でからだをくねらせるくおんの腋毛が、逆光線のなかで金色に光った。

「こっちへ来う」

六文銭のたくましい肩が動いた。

三十に近いというのに、六文銭は若い。たったいま抱いたばかりなのに、すでにそのおとこはそそりたっている。

抱きあげられ、あおむけざまに倒れたくおんは、そのままからだを開いた。手足の骨は折れそうにかぼそいが、くおんの腰のあたりはおどろくほど豊かだった。

六文銭の動きにこたえながら、くおんのおんなは、また濡れはじめた。

二

安南日本人町は、斬りとられた指に似ていた。寛永十六年（一六三九年）の鎖国令で、町は遠い日本との血のつながりを断たれた。

それ以来、町は地面にころがった一本の指のように乾からびていく運命にあった。鎖国の前に帰りそびれた日本人は、この町でただ死んでいくほかなかった。海を越えていけば、間

違いのない死が待っていた。

町の名はふぇふぉ、といった。会安、または坡舗の字をあてる。町はそれほど広くはない。フェフォ川の河口にひらけた砂洲に沿って、六十戸ほどの家が東西に伸びていた。河口寄りにごみごみとした唐人町があり、ときには北風にのって豚の脂がまじった異臭がただよってきた。

西側のはずれには二千戸近い安南人の町があった。そこはいつも魚のはらわたを腐らせた魚醤の臭いがした。

鎖国のしらせが届く五年前、この町は一度消えている。

明け方、町の中ほどの家から出た火は、六十数戸の家をことごとくなめつくし、陽がのぼりきるまでに、町はずれのオランダ商館まで焼きつくした。

火元の日本人は太田晋八といい、かつて蔚山城の城攻めをしたという七十をこえる老人であった。晋八は皺腹をかき切ろうとしたが、途中で力つき、おびただしい臓物をひきずりながら、真昼の焼けあとに這いずり出た。だれも気づかないまま、晋八は半刻あまりもがき苦しんで死んだ。

その後、再建された町は、もう故国の匂いを残した町ではなくなっていた。オランダ人を父に、日本人を母にもつバ・マリア天主堂の司祭ピエトロ・マルケスの指図にしたがい、六十数戸の家をただ一戸だけのぞいて、すべて石造りにしたからである。和風のままのその一戸が、六文銭のねぐらになっているあばら家であった。

くおんは飽食した猫のように眠りほうけていた。両足をひらき、くの字に曲げた腕のつけ根から腋毛がはみだしている。

六文銭の指には、くおんの匂いがべっとりと滲みついている。習慣のように、指をかいだ六文銭は「やや、か」とひとりごとをいった。

外は燃えるような暑さだった。

三

町で六文銭とすれちがう男たちも、やはり大小を差していた。髷さえ結っていたが、しかし、彼らはいちように長いあいだ水に潜ったあとのような濁った目をもっていた。母系の血が、安南ではことさら濃く染めあげるのか、くちびるの色も紫色に近かった。油を塗ったように黒ずんだ瞼にかこまれた目の色だけは、姿を変えても隠しようがなかった。

「いつもの湯浴みか、ろく殿」

背後から追いかけてきた男の手が、六文銭の肩に触れた。「その前に、ちと耳に入れておきたいことが……」

六文銭は立ちどまって「ん？」といい、乾いた赭土がこびりついた足もとをみた。

男は鮫皮をこまかく編みあげた贅沢な草履をはいている。

「ぬらりの順官どのがこうも急くところをみると、大ごとだな」

「そちらにとっては、あるいは……」
「わかった。さてはシャムロ船からの知らせが凶と出たな」
呉順官はぬめっとした太い首をそらせた。
「ふぁい」といいかけて語尾をのみこんだために、ぐびり、と咽喉が鳴った。土音の「はい」という返事が反射的に出かかったものらしい。順官はしかし、すぐに六文銭の問いに答えず、振りむいて忙しく手をふった。
ふとった女が、ものかげから出てきた。竹籠のようなものに乳呑み児の小さい尻をのせ、たくみに片手で抱いている。
順官はおぼつかない手つきで、その子を抱きとり、「ろく殿……」といった。「……この子をみられい」
「ああ、角屋どのの孫だな。大きゅうなったの」
「血を分けたわが子は可愛いものでござる。ろく殿も考え直されてはどうか」
六文銭は皓い歯をみせた。
「逢う人は、近ごろみな同じことをいうてくれる」
「まあしかし……」順官はねちねちとしゃべりつづけた。
「そこもとの執着も分らぬことはないが、もはやいうても詮ないのではないか。故国へは未来永劫帰れぬし、また故国から新手のくるはずもない」
呉順官はこの会安でシャバンダールをつとめていた。日本流にいえば頭領である。

順官の父は角屋七郎兵衛といい、伊勢松坂生まれの有名な豪商であった。鎖国令の出る前から王族の阮氏にとりいり、その外戚の妙泰を女房にした。そのあいだに生まれたのが、ぬらりの順官である。
寛文十二年、七郎兵衛が死んだとき、順官はまだ十歳にもなっていなかった。角屋の屋号は七郎兵衛の死とともに次第に忘れられ、いまは町はずれの寺だけが、町の日本人たちの記憶をつなぎとめていた。
寺の名は松本寺という。七郎兵衛が私財を投じて建てたかわりに、おのれの家名をそのまま寺名にしたものであった。
「ここは暑うていかん。あそこへ行って続きを聞こう」
六文銭は汗のしたたりおちる顎をぐいとしゃくり、しゃくった顎で松本寺の方角を指した。
「おぬしの父御の前で……」また皓い歯をみせて云った。「掛け引きと、空ごと抜きで聞かせてもらうとするか」
境内に水牛がいた。なぜかこの町に烏が多かったが、本堂の廂の蔭をびっしり埋めつくしてとまっている烏たちは、二人がはいっていっても首さえ動かさない。
「この寺にいたあの坊主、映俊とかいうた坊主も気の毒にな」すこしも気の毒そうな気配もみせずに、順官はいきなり手鼻をかんだ。
前年の春のことである。いくらか和文の読み書きができる混血の少年を、順官は無理やりこの松本寺の住職に仕立てあげた。映俊とそれらしい名をつけ、賽銭の半分をとらせる約束

まで与えた。

映俊が寺で怪しげな経文をとなえていたのは、わずか二ヵ月たらずのあいだでしかなかった。会安を出帆したシャムロの船に水夫となって乗り組み、密入国をはかったのである。

映俊は人並みはずれた才槌頭の少年だったが、多加佐古、媽港と故国へ近づいていく航海中に、明人をよそおうため、月代を伸ばし、異風の髪型をととのえた。母さまに逢いとうて、天草というところへいく、そういっては懸命に働く映俊に、乗組みの荒くれ男たちの同情が集まった。密入国に成功する寸前、長崎で捕えられたのは、懐中に忍ばせていた平仮名の文を発見されたのが端緒だという。

たまたま第三回の厳しい鎖国令が出たばかりだったのが、映俊を不幸にした。切支丹でも、豊臣方の残党でもないのを知りながら、新任の長崎奉行今村伝四郎は、世人への見せしめのため刑を苛烈なものにした。シャムロの水夫がみた映俊の屍体には、手にも足にも指というものが一本も残っていなかった。映俊を運んだシャムロの船長ほか主だった水夫九人は、それぞれ三ヵ月の入牢を申しつけられ、積み荷はことごとく没収された、という。

「……つまり、そこもとの頼みも、映俊のおかげで水の泡というわけじゃの。故国からきれいな未通女を乗せてくるどころか、逆にシャムロのカピタンは、二百ドカードほどの銀子を弁済せい、というてきおった。ろく殿もついておりませぬな」

呉順官は、使い慣れない侍言葉に気をつけながら、好色そうにささやいた。

「くおんが急に色っぽくなってきた、という噂でござるが、ろく殿、日本の女よりはここの

女のほうが、あそこが格別に締まるとか……。悪いことは申さぬ。くおんに子を生ましなされ」

順官の父親七郎兵衛がまだ生きていたころ、ごく短期間だが故国との文通が大目にみられた時期があった。郷里松坂の本家へ、唐人十二官に托して送りつけた黄生糸、鮫皮、漆などの荷のなかに、小さな一揃いの雛道具がまじっていたという。七郎兵衛が安南へ渡ったとき、松坂に残した子供は二つであった。

異母兄弟の順官より年上の壮漢となっているはずなのに、七郎兵衛の記憶のなかでは、いつまでたっても二つのままでいたからだろう。しかし、順官はぬらりの異名をもつだけあって、父親からなにほどの感傷も受けついではいなかった。

「のう、ろく殿、くおんに生ましなされ」

「それ以上、くおんのことはいうな」

六文銭が低い声でそうさえぎると、順官の目に急に警戒の色がうかんだ。

「これは、これは……。ろく殿はなにかというと、すぐ怒る。こわいお人でござるよ」

「べつに怒りはせぬ」

「いや、もはやくどくは致しませぬ。お分りとは思うが、いまの話、あの具足屋次兵衛にだけは、伏せておかれたほうが……」

順官は試すように六文銭の顔をうかがい、

「さ、さ……」

と、てのひらを上に向けて急きたてた。
「さ、湯あみ、湯あみ……。ろく殿はまた人一倍の汗っかきでござるからのう」

四

「どうかされたか」
六文銭がはいっていくなり、具足屋次兵衛は目を光らせてきいた。
むつきのころから世話をやいてきた次兵衛は、おのれの掌の筋でもたどるように、六文銭の心のなかを読むらしい。
「暑いの、次兵衛」
六文銭は目をそらし、大小を框のうえにそっとおいた。
「暑いのはいつものことでござるよ」
にべもなく受け流した次兵衛は、
「映俊の長崎での始末、たったいま聞かれたお顔じゃ」
ずばり、とそう云った。

具足屋というだけあって、間口三間ほどの店先に雑多な武具のたぐいを積み上げてある。数丁の鳥銃と、長柄の槍が石の壁に架けられ、その下の床には、びっしりと緑青をふいた仏郎機銃までうずくまっていた。明軍で子母砲と呼んでいたもので、三つの子銃をたばねた母銃から三匁の鉛弾を同時に発射することができた。
日本刀も無造作にならべられていた。明製らしい竹の狼筅や矛に似た鎧鉞などに混っているため、いったい幾口あるか、見当もつかなかった。それらの武器は、すべてどこか錆びるか傷んでいるかしていた。店の奥に飾られたたった一領しかない甲冑は、片袖がとれたまま、うっすらと埃をかぶっていた。
次兵衛はすわっている。
古びたなめし革のような顔に皺がより、
「若……。ともあれ、先に湯でも浴びられるがよい」
皺のなかから、くぐもった声をだした。
としは見当もつかない。会安の古い日本人たちのあいだでも、知っているものはいなかった。

湯浴みはこの町ではすでに特別な儀式になっている。
くおんもそうだが、土地の安南人たちは生まれてから死ぬまで、熱い風呂など知らないまま過した。アオザイをまとって、フェフォ川の流れにからだをつけ、竹べらで垢を丹念にこそぎ落せば、それですんだ。彼らは、人前では決して裸身はみせなかった。
風呂はこの町に二つある。
次兵衛の家にあるのと、もう一つは呉順官が父親の七郎兵衛からうけついだものである。

広南一帯には鉄を鋳る技術も、職人もいない。二つともはるばる日本から船で送らせたものであった。川内ナベ、といわれた据え風呂である。

「ぬらり殿の釜は、ながく使わなんだので錆びて、穴があいてしもうたそうな。もったいないことをするお人でござるの」

太い流木を無造作にへし折りながら、次兵衛は湯気をすかして、六文銭の裸身をながめた。

「この釜が日本からとどいた日のことを、じいはいまだにありありと覚えとります。船のトモにしっかりと結えてありましてな。じいにはまるで祇園祭の山車のようにみえたものでござった」

「すると、おれもおめでたい湯にずっとはいってきたわけか」

「へえ……」

次兵衛はうなずくと、右手に握りしめていた木切れをぴしりとへし折った。親指の腹で軽くひと押ししただけで、太さ三分ほどの固い流木が苧殻のように折れた。

「……山車みたいに扱ったのも当たり前で、黄金の風呂と変わらぬほどの、えらい運び代じゃったそうな。角屋どのも、ちと酔狂がすぎたかもしれませんな」

「こうして暑いさなかに入っておるのも酔狂だな、じい」

「いや」と、次兵衛はかぶりを振った。

「これを据えたころは、それは騒動でござった。われもわれもと押しかけてきては、あの辺りまでずらりと順番を待って……。みんな、故国の匂いをわが肌でじかに確かめたい一心でござった」

「それがいまはこのざまか。次兵衛とおれだけが、あきもせず毎日風呂をたてている」

鎖国令のため、帰るに帰れず閉じ込められた日本人は、はじめのころこの会安だけで三百人をこえた。

やたらと気位が高く、めったなことでは異人種に同化しない彼らは、故国へ帰れなくなると同時に、不可解な工事をはじめた。町にぐるりと囲いをつくり、東西の出入り口に、高々と門まで設けたのである。

町囲いから一歩でも外へ出るときの大袈裟な仕度が、すぐ隣りの安南人や唐人たちを仰天させた。シャバンダールだった角屋七郎兵衛などは、へっぴり腰で馬にのり、鎧がら挟箱までもった供を十人近くもぞろぞろと連れて出た。

次兵衛の店は、そのおかげで繁盛した。長崎まで足をのばせなくなったポルトガルのカレウタ船も、かえってしげしげと会安の港へ出入りするようになり、次兵衛の店から日本刀や、鳥銃を仕入れていった。

が、鎖国後五十年もたつと事情は一変した。現地生まれの子どもたちは、かたちだけは親の代からのしきたりを守っていたが、しばらくするうちに町中が親戚だらけになってしまった。柬埔寨、呂宋、暹羅など、ほかの日本人町との通婚も、そういつまでも続くものではなかった。

「早いものでござるの。こうして若に風呂をたてているうち、いつの間にやら、このじいだ

けになり申した」
「故国から渡ってきた者が？」
「へえ」
次兵衛は、竈の奥で燃えさかる火の色を、遠い目でみた。
「……あとの楽しみは、若だけでござる。世が世であれば、若は……」
「詮ないことはいうな」
「いや、じいにいわせてくだされ。オランダ、ポルトガル、それに安南や明。若と同じ年ごろの衆は、みなどこぞの国の血と混じりおうてござる。日本人の赤い血がからだのなかを流れておるのは、ただ一人、若だけじゃ」
「そうらしいな」
「その上、若はこのじいがお連れせなんだら、お命はなかった……」
「じいはおれに恩をきせているのか」
竈の前でしゃがんでいる次兵衛の目尻に、無数の皺がよった。やさしい、ほとんど別人のような湿った声で、次兵衛はささやいた。
「相変らずじゃ。若の気短は……。赤子じゃった若を、鹿児島からここまでお連れしたころから、やはり若はどこかちごうておられた」
六文銭は風呂の縁に手をかけ、ひょいと湯の上に腰のあたりまで浮びあがった。
「昔のことは聞きあきたわ」

「またまた、ややのようなことをいわれる」
次兵衛の頭の上で短い沈黙があった。それがあまり不意だったので、次兵衛にも話の筋は変えようがなかった。
「やや、か」
ため息をついて、六文銭は云った。
「あのことも、次兵衛の差し金だな。くおんに、なにもああまでさせることはないのに……。可哀想に、じいに脅かされて、くおんはいちいち尿で洗うているぞ」
「……」
「が、おれにはじいの気持ちが分らぬでもない」

五

ものごころつくころから、次兵衛にくどいほど吹き込まれた話によれば、六文銭は大坂落城のさい、秀頼に殉じたとされる真田大助幸綱の遺児のはずであった。
元和元年五月八日の夕刻、無残に焼け落ちた大坂城内蘆田櫓で発見された屍体は、実は幸綱のものではなかった。十六歳だった幸綱は、左衛門佐幸村の密命をおびて薩摩にのがれ、ひそかに再起をはかったのだという。
のちに風土病で倒れた幸綱は「この子に六連銭の旗をたてさせてくれ」と高熱にあえぎながら、次兵衛に嬰児を託した、というのであった。

それから三十数年――。

旗はたしかにたっている。

幸綱の怨念を伝える旗は、安南の熱い汐風にあぶられながら、具足屋の屋根にひるがえっていた。

二つずつ三列に並ぶはずの一文銭のうち、右下の一つは欠けていた。銃丸で射抜かれた痕跡がすくなくとも三つは数えられた。三つともまるい穴のまわりが炭化していた。ぜんたいにすでに旗とはいえなかった。粗い繊維が無数に抜けおち、ふさのようになって垂れさがり、旗の意味を知らない者がみれば、それはただの穴だらけのボロ布にすぎなかった。

真田家の遺児であるはずの六文銭に対しても、この町はもうなんの関心も払わなくなっている。

真田幸広、といういかめしい名をもっていたが、だれもそうは呼ばなかった。うわべでは、ろく殿、とたてながら、蔭ではただの六文銭、であった。出自がいかに尊かろうが、いまとなってはビタ銭六枚の値打ちしかない、とそれはいっているようでもあった。

十数年前までは、そうではなかった。

六文銭主従の強力な庇護者だった角屋七郎兵衛が生きていたころは、たしかにちがっていた。

薩摩から自分の持ち船にのせて運んできた因縁もあったろう、七郎兵衛は貴人に接するようにして幼い六文銭の世話をした。傅役の次兵衛を、身辺から離させず、二人のために新しく邸まで建てた。大坂方の残党狩りは安南まで及びはしなかったが、それでも七郎兵衛はきびしく素姓を伏せさせた。

そのようにして秘密めかせば、めかすほど噂はかえって強い真実味をおびて拡がった。

――角屋どのは、左衛門佐さまのお孫をかくもうていなさるらしい。

いったん拡がりだすと、際限がなかった。ことに元和牢人が多い呂宋の日本人町では、噂をききつけて時節はずれの船団を組み、大挙して押しかけてきた。乳呑み児にすぎない六文銭を伏し拝み、感きわまって哭きだす侍もいた。

シャムロから戦国の匂いを残した侍の一団が来た。はるばるバンジャルマシンからも来た。そのたびに、彼らはその土地の特産物を運んできては、七郎兵衛と交易していった。順官が生まれて数年たつかたないうちに、角屋の身代は三、四倍にふくれあがった、という噂がささやかれた。

鎖国令がいよいよ厳しくなってしばらくの間、故国から見捨てられた侍たちにとって、六文銭は、旗じるしのような奇妙な立場をたもっていた。

それが崩れたのには、わけもなにもない。かつては護符の役さえ果たした真田幸村という名が、年とともに風化していき、だれにも判読できない記号のようになってしまったのである。何世代か前、故国で大名だったことなど、この町ではなんの意味ももたなかった。

六

具足屋次兵衛は、刺股を構えていた。

重さは十斤ある。次兵衛はこれを軽々と片手であやつった。

「……いっ！」

腹の底にこもる掛け声とともに、おそろしい疾さで右手が突きだされた。

水平に伸びた刺股は、がきっと生木の束を噛んだ。風呂をたくために、庭先においてあった薪だが、おとなでも抱えきれぬほどのかさがある。

次兵衛の右手が、ごくわずかにひねられると同時に、重い薪の束が宙を飛んだ。三間は飛んだろう。

「いっ！」

六つあった重そうな薪の束が、もとの順序のまま場所を代えた。六つとも生乾きの下半分を上に、みごとに半回転していた。

「やるのう」

六文銭が声をかけてくるのを、予期していたらしい。

「くおんを構われるのもよいが……」次兵衛は空咳をして、にじり寄った。「これしきの体ほぐし、なぜやろうともなさらぬ？」

六文銭の屈託のない顔が赧くなった。雑多にころがっている刀のなかから、とりわけ頑丈

そうな鉄拵えのを一本抜きだした。

「これを見ろ！」

ハバキのところに、うっすらとにび色の曇りが出ている。チンチン錆びといい、鉄を食うカビの仕業であった。塩気をふくんだ海風で殖えたものらしく、このままだと、玉鋼をきたえた刀身の奥深く拡がるのは目にみえていた。この錆びだけは、研いでも研いでもとれない。返事のかわりに、次兵衛の小さなからだが不意に躍りあがった。肩口よりさらに高く、右足のカカトがあがっている。

「いっ！」

庭先の太い竹が、かわいた音をたてた。ざざっと葉を鳴らして倒れかかる前に、次兵衛はけもののように爪先立ちで立っていた。径二寸ほどの竹の幹が、するどい刃でも打ちこんだように、切断されていた。

手法脚法あわせて五拳百七十三手あるといわれた少林寺拳法であった。吸引した息を、ふかぶかと肺尖をこえて下腹部に入れ、それをからだの裏、腎臓を通して吐く。一瞬吐く喝力を利して撃つか蹴るかすれば、優に体重の二十倍もの激発力を出した。

十年ほど前、次兵衛がこの拳法を習った明人は、名を陳元賓といった。杭州武林の出で、明朝の没落後、日本へ亡命するために会安へきた。船銭かせぎも兼ねていたのだろう、長崎への便船を幾度か見送って、元賓はしばらく少数の日本人に拳法を教えた。

フェフォ川の対岸にそびえる五行山という岩山を、河南の負黍山少林寺に見立てて道場に

した。

はじめの一ヵ月は、なにも教えない。いきなり次兵衛たちは二斗入りの水桶を担わせられた。裸足で岩山をよじのぼれ、というのである。水桶を背負ったまま、虫のように這いあがり、また背負ったまま後ずさりしておりてくる。その繰り返しであった。

元賓は岩山の下にゆったりと坐っては、ひとり降りてくるたびに仔細に桶のなかをのぞきこんだ。日に三十度のぼりおりして、水を一滴もこぼさなくなったのは、次兵衛ただひとりであった。

陳元賓は、そうなってからはじめて「よし」といい、次兵衛に少林寺拳法を教えた。コツは呼吸法であった。次兵衛の前歴を知らない元賓は、おそろしいほどの技の上達ぶりに、むしろ苦い顔をした、という。

一蹴りで倒された竹から、六文銭はすっと一枚の笹の葉を引き抜いて口にくわえた。

この地に自生している竹ではない。

筍をとるために、かつて角屋七郎兵衛が日本から運ばせた丹波産の真竹である。数年のうちに、会安の町のそこここに、和竹の藪ができていた。

六文銭は、その話を知っている。

女のような朱いくちびるで、葉のふちを湿すと、やがてりょうりょうと笹笛を吹きはじめた。沁みいるような音色だった。

「……」

なにごとか、いいかけた次兵衛を目で制し、不意に吹くのをやめた。

「じい、同じての竹にも、その土地々々で生えかた、育ちかたにちがいがあるのかの」

「土地の養分がちがえば、生えてくる竹も、てきめん、ちごうてくる。それは理でござるよ」

「ことわり、か」

「へえ」

「ならば、この笹の葉、故国のとどうちがうぞ」

次兵衛はだまった。

「故国から渡りついたこの笹に、こころがあれば、いったいなんというかのう」

六文銭は、口にくわえていた笹をべりっと引きちぎり、しばらくその葉先をみつめた。

次兵衛は、まだ黙っている。

その皺だらけの顔をみて、

「じいをいじめても仕方がないの」

六文銭はごしごしと首筋をかいた。

庭先からみえる空の色は、哀しいほど明るい。

「では、いじめついでに、じいにちと無心するか」

六文銭はいたずらっぽく笑うと、突然、女物の着物をくれ、といった。

「くおんに着せるのよ」
「しかし、若……」
「無料で呉れるにしても、じい、けちな品はいらぬぞ」
「へえ……」
「ついでに、この差し料ももらっとく」
「それだけは、おやめなされ。チンチン錆びが出ておる刀を差すと、ろくなことが起きぬ、と申します」
「どうせ抜きはせん」
鉄拵えの刀のどこが気にいったのか、六文銭は構わず帯のあいだに落しこんだ。
「若のねだり巧者には敵いませぬ」
次兵衛はうっそりと笑った。

この鉄拵えの刀に、次兵衛は見覚えがある。人をひとり斬ったのである。
マンエイラク（マニラ）から単身ジャンクに乗ってやってきた男だった。片頬に肉のはじけたすさまじい刀創があった。
男は四つになったばかりの六文銭の顔を、無遠慮にのぞきこみ、かたわらにいた次兵衛に目を移した。
「やはり、ここにいたか。捜したぞ」

醜悪な顔に似ず、男の声はからっと明るかった。懐しげに次兵衛のほうへすりよりつつ、
「おぬし、人をたばかる稼業もほどほどにせい、このややも実は……」
そこまで云ったとき、不意に男の声はとぎれた。膝をついて崩れおれる前に、マンエイラクの男はもう死んでいた。いつ抜いたのか、次兵衛の刀が、男の咽喉を下からななめに切り裂いていたのである。
なぜ突然、口を封じようとしたのか、このときの次兵衛の行動は、会安の男たちから、さすがに疑惑の目でみられた。
マンエイラクの男が、ジャンクをおりるさい妙なことを口走ったのを聞いた者がいたからである。おれこそほんものの真田の旧臣だ、これから化けの皮をひんむいてくれる、という意味のことを、刀痕のある侍はいったという。
庇護者であった角屋七郎兵衛は、しかし、いっさいを不問に付した。
刺客はたいていそういうて殺しにくるものよ——風評が耳にはいるたびに、七郎兵衛はにがい顔でいった。斬った次兵衛は、いっさい説明しなかった。なにを聞かれても、尖った肩をうっそりとそびやかすだけであった。
ただ、なにかに憑かれたように、次兵衛が拳法の修業に打ち込みだしたのは、この事件のすぐあとであった。

「……あの刀、あれからもはや二十年は経つか」

白い麻の小袖を小脇に、急ぎ足で遠ざかっていく六文銭の後姿を、次兵衛はじっとみつめた。

外は風が出てきたらしい。

大通りに敷きつめた砂が、表戸にぱらぱらと当たる音がする。窓から眺めていた次兵衛の目に、砂埃の舞う大通りの上を、激しく揺れるなにかの影がみえた。

屋根にはためく、六連銭の旗じるしである。次兵衛は、まるで嗤っているような奇妙な表情で、その影をみた。

七

ポルトガルの船がはいったのは、それから二日後の夕刻である。

町じゅうが祭のように湧きたつのをよそに、六文銭はねぐらでくおんを抱いていた。

「おれは荷調べもできぬしな」

日本語のわからないくおんは、意味なくほほえんだ。

「ありがとう（スウ・カム・オン）……」

ほっそりした指で、くおんは、かたわらに掛けてある小袖の裾をまさぐった。

なかば開いたくおんの太モモは、油を塗ったように光っている。六文銭のたくましい腕が、太モモのあいだに割ってはいった。くおんは柔かい下くちびるを噛みしめた。太モモのつけ根からは、汗とはちがう粘りをもったものが、光りの筋をひいてしたたった。

「くおんは、やや、が欲しいか」

「……」

「やや、だぜ」

「はい（ファイ）」

六文銭は、おんなの引き締まった下腹にくちびるを触れた。

「これが、おれのいのち……」

そのあと、妙なことをした。

自分のおとこを握りしめて、

「お前のいのち……」

愛しさの表現であったのだろう。

くおんも、汗で濡れたからだを起こして、六文銭がしたのと、同じことをした。

開きっぱなしの窓から、帆綱の軋る音や、積荷をおろす安南人の人夫たちの叫び声が、かすかに聞えてくる。すでに日は暮れかかっていた。

「どれ、港へ冷やかしに参るか」

口のなかにはいっていた一本の縮れ毛を、ぺっと吐きだすと、六文銭は紅い帯をくおんのほうへ投げた。

「その着物をきて、先に行ってろ。具足屋で待っているんだぜ、よいか、わかるな」

くおんは、こっくりと一つうなずき、はしゃぎながら帯を締めた。

そのポルトガル船は、はじめて安南へ回航してきたものらしかった。

水夫には選り抜きの乱暴者が多く、荷おろしの最中でも、女が通るとこれみよがしにおのれの下半身を露出したりした。みな例外なく、そのころリスボンなどで流行ったラピエールという両刃の長剣を腰にぶらさげている。

和風に仕立てたくおんが具足屋まで行きつかぬ前に、ちょうどポルトガル人が四人、そのあたりを通りかかった。六文銭のねぐらからほぼ一丁離れた町はずれである。

くおんは、目も合わさないようにして、息をつめて立ちすくんでいる。

なにごとか野卑な口調でまくしたてながら、そのうちの一人が、やにわにくおんのかぼそい乳房をぎゅっと握った。この男だけどういうわけか、金テコのような鉄の棒を一本担いでいた。その鉄棒をがらりとほうりだし、くおんに抱きついた。片手がくおんの口をふさいでいる。

「日本の女（ラ・ハポネス・リンダ）がいる、と彼らは思いこんだのであろう。そのころ船乗り仲間のあいだで、日本の女は、その部分が横に裂けているという評判があった。

彼らの好奇心の表現は、どぎついほどの動作をともなった。一人が細身の剣をすらりと抜いてくおんの首筋に突きつけ、一人はすでに羽交い締めになっているくおんの着物の前をはぎはじめた。喘ぎながら、その男はすばやく指をすべりこませた。

くおんはがくっと首をかしげ、うめき声をこらえた。くるはずの六文銭を必死に捜していた目が、薄い膜でもかかったようになる。

むきだしの膝から力がぬけ、くおんの腰は、つぎつぎにのしかかってくる男たちの動きに、こたえはじめた。

八

六文銭がのんびりと通りかかったとき、四人のポルトガル人たちは、まだくおんのからだを貪っていた。

「……ろっさん」

半分泣いているような、くおんの声に、男たちはいっせいにからだを起した。

相手がたった一人とみて、べっと唾を吐いたのは、なかでも図抜けて目つきの鋭い男だった。この男の剣だけは、鞘に宝玉のようなものを埋めこんである。

六文銭はまっすぐ歩いてくる。立ちどまりもしなければ、急ぎもしない。

目つきの鋭いポルトガル人が、また唾を吐いた。任しておけ、というふうに仲間に片目をつぶり、親指の腹で咽喉をかき切る真似をした。

道幅はせまい。

六文銭はまっすぐに歩いてくる。

せまい道いっぱいに両手を拡げていた先頭の男が、両刃のラピエールを抜いた。ゴアの賤

民でも追い払うような、気軽な調子でいたのであろう。その鋭利な刃がきらっと光ったのを見たのが、目の鋭いポルトガル人の見納めになった。

六文銭は歩度をゆるめもしないで、そのまま横薙ぎに先頭の男の首を刎ねた。刎ねると同時に、疾走を開始した。

二人目のポルトガル人は、多少は剣技の心得があったらしい。

無言で飛び込んでくる六文銭の胸をねらって、水平にラピエールを突きだした。斬撃では致命傷にならないが、鋼の薄さを生かしたこの細身の剣は、容易に相手のからだを串刺しにする。

ちっ、と鉄の灼ける音がした。

走りながら、六文銭は手首をひねってラピエールをはじき飛ばしたのである。背中をむけた男の後頭部を、重たい日本刀がしたたかに割った。

三人目の男は、けもののように膝で這いずっていた。恐ろしさのあまり失禁した酒臭い液体で、ズボンが黒々と濡れ、なまぐさい糞臭までした。

六文銭は容赦しない。

「……いっ！」

とおどりあがると、その背骨の真ん中を、生き胴でも試すように横合いから斬り下げた。

最後に残った男は、わめきながら突進してきた。太い鉄の棒をやたらと振り回し、振りながら幼児のように泣きじゃくっている。

六文銭は、脂でべとつく刀を握り直した。

その刹那、生き残ったポルトガル人の盲滅法な一撃が、肩のあたりを襲った。六文銭は無意識に刀のひらで受けとめ、そのまま柄頭を握り変えて斬撃に移ろうとした。

が、不意にびいん、と刀が折れた。

ポルトガル人の鉄棒は、刀を根元からたたき折った勢いのまま、六文銭の左肩の骨を砕いた。

九

そのとき、具足屋次兵衛は、港にいた。

港、といっても縦長の会安の町の横腹にこびりついた、ただの砂洲にすぎない。ただ千石船でもかなり近くで舫えるよう、川床を浚えてあった。

その一帯を、漁師浜、という。

砂洲のあちこちには、大きな唐傘がいくつも開いて立てられている。唐傘の下で、安南人の漁師たちが獲ってきた魚を売っていた。

彼らは例外なく両膝をたてたまま、小さな尻を地面につけてうずくまり、ほとんど動かなかった。

ぺらぺらの莚にならべられた魚は、一日おくと干物になってしまった。それでも彼らはただじっとうずくまったまま、まばらな客を待ちつづけていた。

次兵衛は、魚を買いにきたのではない。
頭領（シャバンダル）の呉順官がこの浜にいる、ときいて来た。
「……頼みがござる」
順官のふとった姿をみつけるなり、次兵衛はいきなり地べたに這（は）いつくばった。人目をかまわぬぎごちない平伏の仕ざまが、かえって異様だった。
かつて角屋の客分だった次兵衛は、二まわりも年下の順官の前で、これほど深々と額（ひたい）をすりつけたことはなかった。
順官はくびれた顎（あご）を傾け、たのしむように次兵衛の白髪（しらが）あたまを眺めた。
「ろく殿のことだな？」
「……へえ」
「でなければ、気位の高いおぬしが、なんで唐人みたいに急にペコペコするものか。そうではないか？」
「ご明察で……」
あまり大袈裟（おおげさ）にうなずくと、嫌味（いやみ）に受けとられる、とでもいうように、次兵衛の白髪あたまは、ごくかすかにしかうなずかない。
「……で、頼みとは？」
「……へえ」
こっちの立場が強い、とみると、たちまちものの云い方を変えるところが、ぬらりの順官だった。
「へえ、ではわからぬ！」
浜にいた魚売りたちが、いっせいに二人のほうを振り向くほどの大声で、不意にどなった。どなったあと、順官は次兵衛の耳に口を寄せた。こんどは聞きとれないほどの囁（ささや）き声である。
「……手短にいうてくれんか。まだ、わしには山ほどの仕事があるでな。ろく殿の嫁御のことなら、四百ドカード、つまり故国（くに）の銀にして四貫匁（もんめ）。これだけかかるのは承知だな？」
「……へえ」
「おとい、寺でろく殿と話したときにはの……」
順官はずるそうに目を光らせて、あたりを見渡した。
「……多加佐古（タカサゴ）へ回したうちの船に乗っておる、とひとまず気やすめをいうといたが、なかなか、そうは参らぬ。わしの調べたところ、もはや、マンエイラク（マニラ）に二人残っておるかどうかじゃ。一人は五十婆じゃが、あと一人は、ろく殿と同い年ときいた。名前は知らんが、四百ドカードでは安すぎる買いものじゃの」
「……」
「おまけに両親（ふたおや）とも生（き）の日本人での。この広い南洋一帯で、おぬしらの捜しておる女は、もはや、これ一人となったわけよ」
うつむいて聞いていた次兵衛が、うつむいたまま、じりっとにじり寄った。
「……で、順官どの」

「なんじゃい」
「ぜ、ぜひともお頼み申す。その女……」
順官は分厚い鼻翼をふくらませ、不思議なけものでも見るように、次兵衛をながめた。
「わからん。おぬしたちだけは、どうにもわからん」
「……」
「そろそろ、いい加減にしたら、と思うがの。ま、しかし、このわしには商いの一つじゃから……」
「では、手付けの銀は、明後日にでも……」
半年ほど前、六文銭が頼んだときは、長崎から船底に潜ませてくる女一人に、たしか銀二貫匁のはずであった。いつの間にか、運び料が倍になっていたが、具足屋次兵衛はそれをおくびにも出さない。
頭のなかで、ソロバンをはじいていたらしい順官は、「一つだけ訊くがの……」と思いだしたようにつけ加えた。
「……そんなことは万に一つもあり得ぬが、もしも、そのマンエイラクの女が、死んでおるか、どこぞの女房にでもなっておったら、おぬしら、どうするつもりじゃ」
「……へえ」
「また、へえ、か。わからんの」
次兵衛は、おそろしくゆっくりと顔をもちあげ、まともに順官の目のなかをのぞきこんだ。

二つの暗い穴のような、なんの感情もみせない次兵衛の目だった。順官はあわてて顔をそむけた。
「わからん、といわれても仕方はありませぬ。すべては若の胸三寸でござる。もし、そうなろうと、約定の銀はそっくり順官どのに差しあげるまでござるよ」
順官は咳払いをひとつした。
「その……。銀のことではない。おぬしらの先はどうなるのか、と心配しておるのじゃ」
「さよう。どうなりまするか。まずはポルトガル船にでも潜り込んで、なんとか媽港まで行き、そこから故国のどこかへ流れつくか、それとも、このままこの地で朽ち果てるか、二つに一つでござる」
「二つに一つ、か」
順官は、顔いちめんに浮いた脂を、ぬるっとてのひらで拭きとって、次兵衛に聞きとられないよう口のなかで悪態をついた。
「阿呆な奴らじゃ。聞けばきくほど、わしの頭までおかしくなってくるわ」
くおんが駈け込んできたのは、そのときである。
裸に近い姿だった。夕映えのなか、声も出さずに砂を蹴たてて走ってくるくおんは、狂女のようにもみえた。
帯をはぎとられたために、くおんの白い着物は、はだかの背中から吹き流しのようにうしろへなびいていた。袖は両方ともちぎれ、裂けた襟もとから、乳房がはみだしている。

薄い草むらの下にも、くらい花が咲いていた。充血してふくれあがった二枚の花びらは、無惨にひらいて、それはくおんが駈けるたびに、草むらのあいだでねじれたように、かたちを変えた。

その草むらから足首にかけて、鮮やかすぎるほどの血が、数本の筋をひいて流れおちていた。

「これは、いったい……」

とっさに事態が呑みこめなかったのだろう。呉順官はしばらく口をあけたまま、駈けてくるくおんを眺めていた。

次兵衛のほうはすばやい。

息をつめて、砂浜を一気に走り抜け、ふだんは船の出入りを指図する物見櫓まではしった。櫓は、急速に昏さを増しつつある空へ、突きだしている。

荒けずりの三間丸太を組みあげたその櫓を昇りつめるのに、次兵衛はほんの数呼吸しかかけない。

しかし、それでも遅かった。

櫓の上からなにを見たのか、次兵衛のシルエットは、危なく落ちそうにぐらっと揺れた。

十

黒い水面に、つぎつぎと灯火が揺れはじめた。

ポルトガル船の舷側に並んだ灯である。おびただしい数だった。そこだけが、対岸の日本人町よりもあかるく、甲板の上には、ときおり兜や鉞が銀色にきらめいた。

事態のものものしさを察したのか、土地の男たちは、たちまち店をたたんで遠くへ散っていった。

漁師浜に残ったのは、次兵衛たち三人である。

物見櫓からおりてきたばかりの次兵衛は、柔かい砂に足をとられてよろめいた。たった数呼吸のあいだに、次兵衛のからだから、目にみえない支えのようなものが抜きとられてしまったらしい。

「……血の匂いがする」

次兵衛がそう呟くのをききつけて、順官は鼻をひくひくさせた。

「なるほどのう。わしにはさっぱり分らぬがの……」

妙な相づちをうったあと、次兵衛の顔をのぞきこんだ。

「ろく殿は無事のようじゃったか？」

「……」

「手傷を負ったのは、すでにくおんより聞いたわ。この浜へ運ばれてくるのを、おぬし、あの櫓から見たであろうに……」

「……」

「おぬし、まさか仇を討つつもりではあるまいな？」

「……」

「もうこれ以上、阿呆な真似はしてくれるなよ。長いものには巻かれろ、じゃて……」

次兵衛は、ぬらりの順官をまったく黙殺したまま、ポルトガル船のほうへ歩きだした。

フェフォ川の岸辺で待っている艀に向って、武装したポルトガルの水夫が十数人、隊列をつくって近づいてきている。舟板に乗せられた死体は三つあり、隊列の中ほどにも、もう一つ、舟板の上で動かない男のからだがあった。肩の骨をしたたかに砕かれた六文銭である。舟板が傾くたびに、どす黒い血が砂の上に点々とおちた。

接近してくる次兵衛をみて、ポルトガル人の隊列は、歩度をゆるめ、やがてとまった。すでに先頭の数人は銃の銃口を向けている。

「撃つな！　わしは頭領の呉順官じゃ」

そのあと、順官はなにごとかポルトガル語で叫んだ。ポルトガル人のなかには、順官の顔を見知っているのもいた。近づいてくる次兵衛がかなりの老人で、刀も差していないのも、彼らの警戒心をゆるめたらしい。細長い剣を抜きかけたほかの男たちは、思い思いの派手なツバ鳴りの音を響かせながら、刀身をおさめた。

次兵衛は気を失っている六文銭のところまで、まっすぐに歩いていった。止めようとしたポルトガル人たちも、思わず道をあけたほど、すさまじい形相だった。

次兵衛はひざまずいた。

ひざまずいたまま、そろそろと右手を伸ばして、六文銭の傷口をまさぐった。肩の肉を破

った鎖骨が、異様な角度で外へ突きでている。

「じいのいうことがわかり申すか？」

六文銭は呻き、かすかに首を動かし、また「うっ」と呻いた。

「若のほうから仕かけなすったか？」

六文銭はうなずいた。瞼をひらこうとしているらしいが、その力はない。

「……じい、このまま帰れ」

ほとんどくちびるを動かさずに、六文銭はささやいた。

「……おれのことは、もうよい。これで……」

いいのだ、といおうとしたらしい。が、そこまで云って六文銭は、ふたたび気を失った。血の気のない左腕が、不意にぐにゃりと舟板からはずれた。反動で、その腕の先が二度、三度と振り子のように揺れ動いた。

頭だったポルトガル人が、なにか合図した。金属の触れあう重い音がして、やがて、四つの舟板を囲んだ隊列は、浜をくだりはじめた。

次兵衛は、ひざまずいた姿勢のまま動かない。動かずに、じっと砂に吸い込まれていく六文銭の血の痕をみつめている。

「いやあ、えらく気を揉んだわ。おぬしを見ていると、いまにも飛びかかっていきそうでな。が、いくらおぬしでも……」順官は揉み手をして、ことばを切った。

「……おぬしでも、あの人数ではの。やはり手出しは敵わぬとみえる。主従というても、な

に、しょせんは、そうしたものよ」

次兵衛のこめかみのあたりが、一瞬びくりと動いた。振り向いて順官をじっとにらみつけ、

「気の毒なお人だの」

といった。

裸足で次兵衛のあとを追いかけてきた順官は、鮫皮の草履を大事そうに抱きしめていた。

「それを……」

借りる、とも云わずに、やにわに取りあげた次兵衛は、片手を無造作に突きだした。

掛け声さえかけなかった。

まっすぐに揃えた右の指が二本、鮫皮の草履を、ずぶりと貫いている。

「……この草履と同じ目に合いとうないのならば、順官どの、言葉尻に気をつけることじゃ」

「……」

「そなたの両目を潰すくらいは、ほんの一呼吸あれば足りる」

「ま、まさか……」

「いや、このわしの手を見られい」

次兵衛は、岩のように固いタコでびっしり埋まった両手をみせた。それはすでに人間の皮膚ではなかった。

「あのポルトガル人どもも、そなたと同じく、みな命拾いしたのよ。やれば、わしも死ぬかもしれぬが、それはよい。だが順官どの、わしとちごうて、若には若にふさわしい死に場所があるのじゃ。いま、わしが若を奪ったら、その死に場所がなくなるのよ。わしは、それがやっと分った」

皮肉な目つきで、次兵衛はもう一度、自分の手をしげしげとみつめた。

「おかしなものよの。何十年も営々と鍛えてきた技を、ついにただの一度も使わずじまいとはのう……」

十一

それから三日のあいだ、六文銭は生きていた。

鉄棒で重傷を負わせた男が、その場でなぶり殺しにしなかったのは、なにがしかの報賞が目当てだったのであろう。

ポルトガル人の目からすれば、六文銭は狂人であった。なんの警告もなく、いきなり刀で斬りかかってくるようなことは、よほどのあぶれ者でもしはしない。おんなを辱しめられた復讐ならば、その後、船の牢屋へくおんが訪ねてきたとき、まるで石くれでもみるような目で無視したのが、彼らには不可解だった。

ぬらりの順官は、なんどもポルトガル船のカピタンに引き渡しをかけあった。会安の日本人町は、ながいあいだ阮氏の王室から、治外法権を認められていたからである。

船長はこの狂人の処刑を、頭領の順官に任せる代わり、一切の荷役料をただにしろ、

という虫のいい交換条件をもちだした。

さまざまな国籍の船に出資して、かぼそい貿易をつづけるか、荷役の代行で落ちる金でも拾うほか、会安の日本人が生きられないのを知っていての無理難題なのは明らかだった。

「それを呑みなされ」

と、順官にすすめたのは、意外にも具足屋次兵衛であった。あれ以来、次兵衛は急に老けこんだようにみえた。

「荷役のあがり分は、このわしが肩がわりする。すでにこうして、用意してまいったゆえ……」

どこに隠していたのか、古ぼけた木箱から六貫匁はある銀子をだし、

「これで、若の名分もたつ」

と、いった。

「……しかし、具足屋の……」

呉順官はそれでもねちねちと食いさがった。

「……これだけの銀があれば、ポルトガルの船長から、ろく殿を生きたまま引きとることもできように……。頭領のわしにこの銀を渡せば、ろく殿の命がなくなるのはご承知かな？」

次兵衛はあわれむように順官をみた。

「承知している」

「それなら話は別じゃ。で、ろく殿の首はだれが刎ねる？　日本人の死にざまのすさまじさを、この際ポルトガルどもに、土地の者どもにも見せつけてやらねばなるまいが……」

「……」

「したが、いまどきの衆は、刀こそ差しておっても、飾りものにすぎぬ。ここは一番……」

「……」

握りしめた次兵衛の両の指が、血の気を失うほど白っぽくなっているのに、順官は気がつかない。

「おぬしは、刀術ではこの広南一帯で一番の腕と、きいておる。具足屋の、いやさ、次兵衛どの。真田さまのお名をたてる、いいしおではござらんかの」

順官はどす黒いくちびるを、無遠慮になめまわした。

「ともあれ、ここは一番……」

延宝四年十一月——。

その日も風が強かった。ひと昔前、故国からくる船は、すべてこの時季の強い北風にのってきた。途中、多加佐古や媽港に寄っては積荷のいくばくかを、さらに利の高い品と換えてくるのであった。

浜には怪しげな竹矢来が張りめぐらされていた。

へばりつくようにむらがっている雑多な人垣のなかに、くおんの顔もあった。くおんはか

ぼそい肩をふるわせ、笛を鳴らすようにむせび泣いていた。

正装したポルトガル船の水夫たちに引ったてられて、六文銭が刑場の中央へよろめきでた。よろめきながら、彼はぬっ、と顎の先を突きだしている。

正面には検死役のつもりなのだろう、派手な陣羽織を着こんだ呉順官が腰かけていた。順官は左右に坐っているポルトガルの船長と、鳥のような目をした小柄な安南人の官人に、なにごとか得意気に説明している。

引き据えられた六文銭の前に、大きな穴がうがってあった。落した首を入れるためである。穴の底には一枚のぼろぼろになった旗が敷いてあった。六文銭はかすかに笑った。

「若……」

ふだん着のままの次兵衛が声をかけた。

「やっぱりじいが来てくれたな。真田幸広、またの名を六文銭、やっと死に場所をみつけたぞ」

芝居がかった口調でいう六文銭を、次兵衛は肩ごしにじっとみた。

「……このじいが見届けまする」

六文銭は、ぶらぶらになった左手をそのままに、もう一方の手で、ゆっくりと自分の下腹を揉みはじめた。

「じいに教わった通りだな」

やがて、尻をもちあげて、高らかに放屁した。正面の席にざわめきが起きるのを、六文銭はおもしろそうに見守った。

「真田、と名乗ったところで、そのことがなにか、あの連中に分らぬところがよいわ」

「若……」

「ところで、あの鉄拵えの刀、やはりハバキから折れたぞ。おれの不覚だな」

「……」

遠くからすぐにくおんとわかる絶叫がとどいたが、六文銭は顔の筋ひとつ動かさない。

「……では、やるか」

いきなり話の腰を折って、六文銭は目の前の短い刀をとりあげた。

同時に、次兵衛のからだが、だっ、と前方に折れた。目に沁みるように白い頸骨が、ほんの一瞬、前かがみに倒れかかる六文銭の肩のあいだにみえた。

十二

具足屋次兵衛は、それから半年とたたないうちにあっけなく死んだ。食あたりであった。

死ぬまぎわに、次兵衛は妙なことをいい残した。

「あれもこれも、実はわしの作りごとよ。作りごとで人をたぶらかさねば、食っていけぬ世の中じゃ。それにしても、きょうまで、わしら親子はなんのために生きてきたのかのう……」

親子、とはいったいなんのことか、と訊かれて、

「……絵解きするのも面倒くさいが……」

うっそりと嗤って、のろのろとからだを起した。

次兵衛の明かした話は、町の年寄たちをおどろかせた。

「このわしが真田どのの手の者だったのはまことじゃ。名をしわ猿、というて、忍びではいくらか知れた男でござった。が、そのことはどうでもよい」

大量の胃液をがっと吐いて、次兵衛はけもののように目だけを光らせた。

「……どうでもよくないのは、わしのひとり息子のことじゃ。六文銭、とお前さまがたが呼びなすった。あの子は、最後までおのれのほんとうの素姓を知らぬまま果てたが、左衛門佐さまにお孫などおられはせぬ。わしはおのれが仕立てあげた実のむすこを、この手で斬った」

骨ばかりになった手をひろげると、次兵衛は、ぜえぜえと喘いだ。

「あの子を斬って、おのれだけ生きのびる。そのことが皺腹かき切って果てるより、何十倍もつらいか、お前さまがたには分らぬ。ただな、左衛門佐さまのお孫として死ぬることが、あの子にとって幸せであったのか、それとも不幸せじゃったのか、そこのところがわしにも分らぬわ」

なおも喘ぎながら、次兵衛は無理に嗤おうとした。

「……人の一生とは、おかしげなものよ。素姓を明かさぬまま死なすことが、父親としての証しになると思うたが、しかし、それもちがうかもしれん。ま、なにもかも忘れてくだされ。ましてや、わしが死んだあと、墓など作るのは一切やめてくだされ」

ぬらりの順官は、あとで人伝てにこの奇妙な遺言をきいた。

「おおかた、年寄のたわごとであろう」

順官はただそういっただけで、とりあおうともしなかった。

縁者を残さずに死んだ具足屋の財物のほうに関心があるらしく、

「まずは封印じゃ」

と、和紙をひろげさせ、汗をかきながら頭領の印をべたべたと押してまわった。

真田の郎党に、さるとび、とか、しわ猿、とかいう忍びがいた、という昔話を父親の七郎兵衛からなんどか聞かされたはずだったが、順官はそれをまったく忘れてしまっていた。遠い故国の大坂という土地で起きた城攻めの話など、この安南日本人町の炒りつけるような陽の下では、ただの幻にすぎなかった。

具足屋に残されていたかなりの銀のほか、武具、屏風などをたたき売った金の一部で、順官は町から三丁ほど離れた新安に、立派すぎる墓を建てた。

墓にはかつて血塗れの首を包んだ、ぼろぼろの六連銭の旗もいっしょに葬られた。

呂宋（ルソン）の壺（つぼ）

久生十蘭

久生十蘭（ひさお・じゅうらん）
明治三十五（一九〇二）年、北海道生れ。聖学院中卒業後、函館毎日新聞社入社。演劇活動に傾倒し、岸田国士に師事。昭和四年、演劇研究のためパリ市立工芸学校に留学。帰国後、明大講師を勤めるかたわら、谷川早の筆名で多くの探偵小説を発表。二十六年、歴史小説『鈴木主水』で直木賞を受賞。『金狼』『だいこん』『十字街』『うすゆき抄』『肌色の月』等著書多数。三十二年没。『久生十蘭全集』全七巻（昭和四十四年、三一書房）がある。

一

慶長のころ、鹿児島揖宿郡、山川の津に、薩摩藩の御朱印船を預り、南蛮貿易の御用をつとめる大迫吉之丞という海商がいた。

慶長十六年の六月、隠居して惟新といっていた島津義弘の命令で、はるばる呂宋（フィリッピン）まで茶壺を探しに出かけた。そのとき惟新は、なにかと便宜があろうから、吉利支丹になれといった。吉之丞は長崎で洗礼を受けて心にもなき信者になり、呂宋から柬埔寨の町々を七年がかりで探し歩いたが、その結末は面白いというようなものではなく、そのうえ、帰国後、宗門の取調べで、あやうく火焙りになるところだった。寛永十一年に上書した申状には、吉之丞のやるせない憤懣の情があらわれている。

惟新様申され候には、呂宋へ罷越、如何様にしても清香か蓮華王の茶壺を手に入れるべし、呂宋とか申す国は吉利支丹の者どもにて候に付き、この節は吉利支丹に罷成り、あいさつといたし、御用等相達すべきよし仰せ聞けられ候故、拙者、申し候は、御意とは申しながら、好き申さざる宗旨に候え共、何事も奉公の儀に御座候故、上意に任せ、此の節は吉利支丹に罷り成るべきよしお受け仕り候。云々。

吉之丞の父の吉次は松永久秀の家臣で、主家断絶後、牢人していたのを島津貴久に見出され、貴久の言付けで、長崎に船屋敷をおいて海外貿易をはじめるようになったのである。堺の木屋弥三郎、西類子九郎兵衛などとおなじように、武士から町人になった、いわゆる引込町人で、七十歳で死ぬその年の秋まで、舵場の櫓に突っ立ち、船頭や荷才領を叱咤しながら南方の広大な海を庭のうちを歩くような顔で乗りまわしていた。

吉之丞は十五になるやならぬに船にひき乗せられ、二十の年まで岡使や帳付をやり、阿媽ではポルトガル語を、呂宋ではエスパニヤ語を聞きおぼえこみ、片言で言葉が通じるようになったところで副財にひきあげられた。副財というのは、船主の代理として、船の運用、貨物の売買取引、一切を取仕切る役である。

慶長二年に父の吉次が死んで吉之丞の代になると、二度目の朝鮮征伐に義弘について泗川に行き、粮米荷頭と小荷駄才領を兼帯でやり、矢丸の下を駆けまわった。五年秋の関ケ原には出なかったが、東軍と戦って大敗し、身をもって遁れてきた義弘を堺で待ち受け、際どいところで船に乗せて鹿児島へ落した。

これも島津の御用をつとめる堺の薩摩屋祐仁は、いよいよ島津も滅亡かと、なにも手につかずにおろおろしていたが、吉之丞は、

「大阪城の屋根は、そぜとるけん、雨の洩ったい」

といい、大阪の薩摩屋敷にあった弓矢鉄砲、玉薬のはてまで、軍道具を残らず船に積んで帰った。

吉之丞は、当然、大阪城に立籠り、東軍を迎えて花々しい一戦に及ぶのだろうと推量していたが、それらしいこともないので意外の感にうたれた。聞きあわせたところ、義弘公は秀頼公に、このうえは籠城のお覚悟を、と申しあげると、秀頼公は、籠城までして戦うことはない。島津も、早々に国表へ引きとるようにとつれないお返事だったということだった。

これで秀頼公という方の底が知れた。たった一度の手合せで腰が砕けるようでは、なんのために徳川に戦争をしかけたのかわからない。君公が飛ぶようにして帰国されたのは、秀頼公に愛想をつかし、薩摩の領国で一と合戦するつもりなのだろうと、咄嗟の才覚で武具運送の手配をしたわけだが、それはとんだ見込みちがいで、君公は剃髪して隠居し、家康に誓詞を送って、ひたすら恭順の意をあらわしていられる。戦争の沙汰どころか、国中、湿りにしめって露もしとどのありさまだった。

その後、恩赦の沙汰があって、三男、家久をもって本領安堵したが、家康公への遠慮から、諸事、控え目に、父の代からつづいた南蛮貿易の後援も、自然にとりやめになったので、吉之丞は郷里の山川の津に帰って、トカラ、琉球の物産回漕をやっていた。

慶長十六年五月、惟新公からだしぬけに御用召があった。吉之丞が玉里の隠居所へ罷り出ると、惟新公は、

「吉之丞、呂宋へ行って来い」

と、いきなりいった。

吉之丞は南蛮貿易のおゆるしが出るのだと思い、勇みたってたずねた。

「御交易の作事をいたすのでござりましょうか」
「いや、壺をとりに行くのじゃ。それについて、なにかと便宜もあろうから、吉利支丹になるがええ……くわしいことは拙斎の入道に言うておいた。大口へ行って聞いてくれい。退ってもええぞ」
入道して拙斎。鬼武蔵といわれた新納武蔵の城は、鹿児島の北十里、伊佐郡の大口村にある。
隠居所から退ると、吉之丞はその足で大口村へ行った。城に上り、取次を通して挨拶をすると、すぐ奥の居間に通された。
「なんでん、くわしいことは、ああたさまに聞けという仰せですけん、伺いに罷りでました」
勇武の士だが、すぐれた歌人でもある拙斎は、つるりと禿げあがった法師頭を撫でながら、
「ご隠居は、ときどき難題を出されるで」
というと、大きな声で笑った。
「よしよし、謎ときをしてつかわす。まあ、聞けえ、こういうわけじゃ」
口切りの茶の湯に葉茶壺はなくてはならないものだが、なかでも呂宋焼の壺が名品ということになっている。
秀吉は、千利休がこの壺一つ、一国二城に代わると極めをつけた清香という呂宋の葉茶壺を手に入れて自慢していたが、天正十九年の二月、利休は、道具の売買について曲事があったという叱責を受けて自裁した。

利休が死んだので、秀吉は呂宋の壺を求める道が絶えたと落胆していたが、文禄三年の七月、思いがけなく、堺の納屋助左衛門が呂宋の壺の名品を五十個ばかり持ち帰って上覧に供した。秀吉は、
「お手柄、お手柄。おのしは五十国、二百城を呂宋から奪って帰った」
と手を拍って喜んだという。
秀吉はまず自分が三つとり、残りを大阪城の西ノ丸の大広間に陳列し、壺の重さ一匁について銀子一貫目の割で諸大名に頒けた。
呂宋ではどういう向きに使っている壺なのか誰も知らない。千利休は茶器の新旧可否を鑑定して分限者になった男だが、親疎異同によって、贋物を真物、新を古と言い張って、よく人を欺いたということである。それはともかく、呂宋の壺にむやみな高値をつけてくれたおかげで、丈、八、九寸から一尺ほどの、あどけない陶物の壺が、一個、銀千貫目から二千貫目に売れたので、わずか四、五日のうちに、助左衛門は思わぬ大利を博した。
「それですめば、かような仕儀にならなんだろうが、あやつが呂宋へ欠落したので、むずかしい落着になった」
呂宋と姓をあらためた助左衛門が、邸の襖や天井に狩野永徳に絵を描かせ、七宝をちりばめ、金銀を貼るという豪奢に耽ったことが秀吉の怒りにふれ、家財を没収された。助左衛門はおどろいたような顔もせず、それならばといって、邸を大安寺に寄進し、一族をひきつれ

て飄然と堺の浦から発って行った。それは吉之丞も聞いて知っていた。

「あれは太閤さまがお亡なりになる前の年、慶長二年の夏のことでござりました。かれこれ十四、五年になりましょう」

「十四、五年にもなろうかな……南蛮のどの国のどこの涯にいるのか知れぬやつを、ぬしゃ、探しに行くのだが、思えば、可哀想なようでもある」

「私めが、助左衛門を……」

この年、惟新公が駿府の城へ年賀に上ると、家康が、葉茶壺が払底して、只今のところ一つもない。口切の茶の湯もできぬようでは、茶の湯の冥加も尽き果てた。お身どもは南蛮貿易をなさるゆえ、呂宋の壺など、水甕にするほど貯えてござるだろうが、と持ちかけるようなことをいった。

つまりは、呂宋の壺を二つ三つ寄進しろということなのである。島津はどういう無理でも聞かなければならぬ危うい境界にいるのだから、あるものなら喜んで差しだそうが、生憎と、そんなものは持合せない。松浦にも、牧野にも、出雲の松平にも、およそ呂宋の壺を所蔵する向きへ礼をつくして頼んでみたが、こればかりはと、誰も話に乗ってくれない。

助左衛門さえ堺にいたら、たやすく事が運ぶのだろうが、ならぬことをねがっても仕様がない。お前は、長年、南洋を渡り歩いて、国々の事情に通じているわけだから、ご苦労だが、呂宋まで壺をとりに行ってもらうことにした。

「それについて、ぬしに見せておくもんがある」

拙斎は床の間の木箱の蓋をはらって茶壺のようなものを出し、書院窓のそばの机の上に据えた。

丈は一尺ほどで、形はやや平目。茶釉に薄い鶉斑があり、アッサリとして軽い出来で、底がすこし凹んでいる。土師物と陶物の間を行ったような見馴れぬ壺であった。

「これは博多の神屋宗湛から借りた真壺だ。よく似せてあるが、呂宋ではない。真物の真壺は、もうすこし茶の色が深く、いちめんに鶉斑が出て、揚底になっている。呂宋壺の上物は蓮華王と清香真壺……蓮華王は、壺の肩の蓮華の花の中に王という字がある。清香真壺は、これも肩に清香という文字がある。真物の呂宋なら真壺でもよいが、ならば、蓮華王か清香を探しだしてくれい」

呂宋へ行って壺をとってくることはわかったが、助左衛門の所在をつきとめるというのは、どういうことなのかとたずねると、利休も助左衛門も呂宋の壺だといっているが、それについては、両人の間になにか黙会があったので、自分の見るところでは、迦知安（広東）か暹羅あたりの物産だとしか思えない。呂宋に真壺があれば文句はないが、さもないと、助左衛門に逢って、どこの国で、どうして手に入れたか聞きだすほかはないからだといった。

「対馬の灰吹銀を千貫目、ペセダの銀銭を二十貫、ほかに錠銀と康熙銭を用意しておいた。船のことじゃが、三浦安針のフレガタ船（フリゲート。砲備した商船）に朱印状を添えて売りに出たのを、アンドレア李旦という支那の頭人が買って作事をし、来月の初旬に大波止から出る。吉利支丹しか乗せぬそうじゃけん、いっちょう吉利支丹にならな、いかんばな」

「いや、それでござりますが」

吉之丞は、かたちだけの信徒になっても、吉利支丹の行儀も知らず、十の掟を保つことなどは思いもよらない。どんな苦労もいとわないが、吉利支丹になることだけはごめんねがいたいといったが、拙斎は呂宋へ行くのは李旦の船しかないからといって、なんとしてもきいてくれなかった。

二

アンドレア李旦の船は三桅二段帆のさよ船（和蘭造りの黒船）で、和船の前敷にあたるところに筒丈、八尺ばかりの真鍮の大筒を二挺据えつけてあった。

船名はサンチャゴ……サンチャゴとはイスパニヤ語の八幡大菩薩にあたり、合戦で鬨の声をあげるとき、サンチャゴと叫ぶのだということである。

船の長さ十二間、幅四間、荷頭、ルイス新九郎、船頭ゼリコ庄兵衛のほか、乗組は福建人、スマトラ人、マラッカ人で総数は百人ほど。船の大きさも乗組の数も御朱印船の三分の一にも及ばない。船の名は勇しいが、どう考えても、頼母しいような船ではない。長崎から高砂（台湾）の湊口まで六百五十里、高砂から呂宋のマニラまで八百里、合せて千四百里の海を、こんな小船でおし渡るのかと思うと、情けなくてならない。

吉之丞は舵場の櫓で、一波ごとに淡くなる琉球の島影を見送っているうちに、李旦がいっていた海賊船のことを思いだし、船室に置いてある灰吹銀の金箱が、急に重荷になってきた。

李旦は、この節、和蘭とイスパニヤ、ポルトガルの折合いがつかず、双方の船が行き合うと、かならず、どちらかが射ちかけ、積荷を奪ったあげく船を沈めるという風儀で、平穏無事な航海はいたって少い。あなたはたくさん銀を持っていられるようだから、心得までに申しあげるのだが、フレガタ船に追いかけられて船を押えられたら、逆らっても無駄である。観念して、奪るだけのものを奪らせれば、命だけは失わずにすむ。見受けるところ、剛気なご人体だが、力をたのむものは、とかく大怪我をするものだから、私の忠言をお忘れないように、というようなことをいった。

呂宋の涯へ壺を探しに行く苦労だけでもたくさんなのに、そんな目にあうのではたまったものではない。それにしても、見栄のしない陶物の壺を買うのに、どうして千貫もの銀が要るのか、納得できない。銀六十匁一両換えとして、千貫といえば一万七千両……三百九十人乗りの御朱印船を新造しても、十五貫とはかからない。長さ二十間、幅九間の大船一隻が二百五十両で、掌で支えられるような葉茶壺が一万七千両もするというのは、どこかにまちがいがあるのにちがいない。

「これでは、あまり空しいような気がする。大名方のなさることは、おいどもにはわからん」

吉之丞は呟き、考えてもわからないことは考えないほうがいいと、邪念を払うように強く頭を振った。

六月十日の夕方、吉利支丹の夕のお勤めをすませ、艫ノ間で夕食をしているところへ、荷

頭の新九郎が駆けこんできて、
「いましがた、黒船が一隻、艫を横切って風下のほうへ行きよりました」
と息巻くような調子で李旦に報告した。李旦は象牙の箸をとめて考えていたが、思いついたように、
「そいで、東沙島はもう過ぎたかい」
とたずねかえした。
「へえ、いましがた呂宋の頭へ針を立てたところでござす」
「悪い船道にかかった。フレガタ船かもしれん。用心せな、あかんばな」
「そんこつです。明日は、夜明け前に見張りを出すようにしましょうたい」
翌朝、まだ暗い海の上を、一隻の黒船が船首を横切って影のように風上のほうへ走って行った。
夜があけると、四里ほど向うに、二檣三段帆の黒船がサンチャゴと並んで走っているのが見えた。
船頭の庄兵衛は、
「やいやい、まごまごするな」
とマラッカ人の水主を怒鳴りつけ、筒眼鏡を持たせて大帆柱の物見台に追いあげた。
「どんなあんばいだ。早う、ぬかせ」
物見台のマラッカ人は、

「たいへんだ」
と叫び、それから、
「向うの物見台にも人が上って、筒眼鏡でこちらを見ている」
と報告した。
李旦という博多生れの福建人は、こんなことには馴れきっているふうで、急ぎもせずにゆっくりと舵場へ上って行った。
「庄兵衛どん、向うの船足はどうあるかい。逃げきれるとじゃろうか」
庄兵衛は、手庇をして向うの船足を計ってから、
「たいしたことはありますめえが、早駆けにしますか」
そういうと、一番かんぬきの帆係に、総帆あげろと命令をくだした。
サンチャゴが勢いよく走りだすと、向うの黒船もにわかに船足を早め、海の上を電光形に間切りながら、サンチャゴのほうへ突っかけてくる。帆を撓め、船足を隠していたとしか思えないような鮮かな追撃ぶりであった。
「えらく足が出だした。下手をすると追いつかるるたい」
と李旦がいった。
「弾箱を出しておきましたけん、いっちょ射とうじゃにゃあですか」
新九郎が気負ったような顔でいうと、李旦は大きくうなずいてみせた。
「ぬしゃ、大筒ば射ちきるか。射てるなら射って見さっし」

新九郎はスマトラ人の水主を呼びあつめると、前敷の大筒のところへ走って行って弾丸込めにかかったが、生憎と、弾丸が筒口より大きくて、この急場には間にあわなかった。

「あぎゃん弾丸、どやつが積みこんだものか。弾丸が大きゅうして、筒口におさまらんとです」

と頭を掻き李旦に報告した。

李旦は笑いながら、

「こりゃもう、追いつめられるにきまったけん、羅針盤と象限儀をはずして、わからんところへ隠しておいちくれ」

と言いつけた。

そんなことをしているうちに、黒船は半里ほどのところまで迫ってきた。小早船といっているポルトガルの飛脚船で、大筒を四挺すえているのが、ありありと見えた。

「小早船じゃ、かなわねえ」

庄兵衛は音をあげたが、どうでも逃げ切るつもりらしく、うるさく帆形を変えて間切りだした。

小早船の帆柱にポルトガルの国旗が揚ったと思うと、大筒が火を噴き、円弾が唸り声をあげてサンチャゴの舳をかすって行った。

李旦が庄兵衛の肩を叩いた。

「もう、いかんばな。停めなし、停めなし」

サンチャゴが帆をおろすと、待ちかねたように、帯に短筒と抜身の刀を挟んだ十人ばかりのポルトガル人が小舟でやってきた。サンチャゴの乗組を後敷のところへ呼び集めると、頭立ったのが、

「船主はどやつか。何を積んで、どこへ行く船か」

と訊問した。

吉之丞は怒りを発して、

「なんじらの問いに答える義務はない」

という意味のことを叫びたてると、ポルトガル人が飛んできて、刀で吉之丞の腹を刺した。吉之丞は錠銀を腹巻に入れて腹に巻いていたので、いくどか刺されたが、いっこうにこたえなかった。

争うことはなんの益もない。はじめから重荷にしていたが、千貫という銀は、隠そうとしても隠しきれるものではない。吉之丞は、これも天命とあきらめかけたが、あれだけの銀子をむざと持ち去られるのかと思うと、無念でならない。みなとはいわないが、隠せるだけ隠しこんでやろうと、さり気ないようすで胴ノ間へ降りて行った。

吉之丞は渡海船を扱っていたので、さよ船の構造を知っている。和船ならいきなり棚板になるところに船梁が通っているため、舷の外板と内張の間に隙間があって、それが船底につづいている。舷の内張を一枚はずせば、船底へあるたけの銀子を落しこむことができる。咄嗟の仕事にしては骨が折れるが、やってやれないことはない。

内張の腰板は欅の大割で、脇差でこじりつけるくらいではビクともしない。それでも根気よくやっているうちに、板の合せ目が持ちあがってきて、手が入るだけの口があいた。

頭の上でいそがしく歩きまわる足音が聞える。どうやら賊どもが働きだしたらしい。グズグズしてはいられない。金箱から銀子をつかみだし、息づく暇を惜しんで、つぎつぎに船底へ落しこんだ。

頭上の騒動はいよいよ爛熟し、ポルトガル人の叱咤する声にまじって、帆柱の倒れる音や重いものを曳きまわす音、大鋸で木を挽く音、手斧で打ち割る音、大破壊によってひき起されるすさまじい騒音が、ものの半刻ばかり休みもなくつづいていたが、そのうちに木の枝でも撥ぜるような乾いた音とともに、えがらっぽい煙が胴ノ間に流れこんできた。

「こりゃ、いかんばい」

海賊どもは、船を壊して火を放けたらしい。これでポルトガル人の意図がはっきりした。海賊のくせに、金や積荷にかまけないのは、ふしぎだと思っていたが、サンチャゴに乗りこんできたのは、貨財が目あてなのでなくて、最初から船を焼くのが目的だったのだということがわかった。

吉之丞は汗を流して働いていたが、船を焼かれるのでは、こんなところへ銀子を隠しても無駄なことだと思い、つまらなくなってやめてしまった。

昨日の朝、東沙島の近くを通りすぎた。いまは、どちらへ向いても、島影も見えない大海のまっ只中にいるわけだが、こんなところで投げだされたら、助かる見込みはない。ポルトガル人に談判して、船を焼くことだけはやめさせなくてはならないと、艙口の梯子をあがって行ったが、上り口の戸が釘付けになって、出ようにも出られない。

艫ノ間の上り口はどうだろうと、艫ノ間へ駆けて行くと、乗組の百人、一人残らず後手に括られてころがっている。李旦はと見ると、十字架の前に跪いて一心に祈禱をしていた。

「あいつども、火ば放けよったけん、こぎゃんこつばしとると、焼け死んでしまうたい」

李旦は、それはよく知っているが、いま、お勤めをしているところだから、そっとしておいてもらいたいといった。

吉之丞も憮れて、なんということもなく庄兵衛のそばに坐りこむと、庄兵衛は慰め顔で、

「……むかしより、今に渡り来る黒船、縁が尽きれば、鱶の餌となる、サンタマリヤ」

と鼻唄をうたって聞かせた。

半刻ほどすると、風が落ちて海が凪いだように、急に上の騒ぎがおさまり、舷をうつ波の音が聞えてきた。

吉之丞が立ちあがると、みなも立ちあがって一斉に上り口に殺到した。

上に出てみると、小矢柱が突き転がされて舵場の上に倒れ、帆はズタズタに切られ、舵柄はもぎとられ、船を動かす道具という道具は残りなく壊してあるという目もあてられない狼藉ぶりであった。火を放けられたのは前敷の水主どもの炊場で、油でも撒いたのだとみえてどす黒い煙をたちあげながら、さかんに燃えている。

小早船は、はるかむこうへ離れて行ったが、まだ帆影が見える。あまり早く消すと、また

焼きにくるかもしれない。小早船の帆影が波の下に沈んだところで消し方にかかった。

三

六月十八日、サンチャゴはマニラの湊に入って、河口の南に船繋りした。

吉之丞は陸使に金箱を担がせ、みなに送られて船から降りると、道路をひとつへだてた船着場の正面の客舎に宿をとった。マニラは親子二代にわたる旧縁の地で、旅亭のあるじとは知友の仲である。

一夜寝て、翌日、朝早くから壺さがしにかかった。古陶器を扱う道具屋も土師物をひさぐ市の店も、どの辺にあるかだいたい見当がついている。永藤朝春が写した真壺の図を持っている。口数をきかなくとも、だまってそれを見せれば埒があくはずである。

そうして、三日がかりでマニラ中の店を見てまわったが、鶉の斑文をつけた、あどけない葉茶壺にめぐりあうことができなかった。

呂宋人は口細の壺を好んで使うが、トンドという村にその窯がある。翌日、そこへ行ってみた。真壺の絵を見せて、こんな壺を扱ったことはなかったかとたずねると、窯元のおやじは、古今を含めて、呂宋にあるかぎりの壺はみな知っているつもりだが、こんな壺は見たことも手にとったこともないと、立ち切ったようなことをいった。

尤もらしい口上だが、そのまま鵜呑みにするわけにはいかない。陶物を出す窯はほかにもあるのだ。市外のパリアンに明人の窯があるというので、翌日、行ってみたが、安南あたり

のものらしいというだけで、かくべつな意見もなかった。

詮じつめたところ、助左衛門が持ち帰ったのは、呂宋のものではなかったらしいことはわかったが、これは、どこの国の、なんという陶物と言ってくれる人間がいないのが、もどかしい。それに、呂宋焼でもないものを、なぜ呂宋だなどと言いたてたのか、その辺のところが理解できない。なぜという疑問を解くには、拙斎入道がいったように、助左衛門を探しあてて、話を聞くよりほかに方法がない。

マニラの日本人町はカンデラリア天主堂の裏の一郭と、マニラの湊口、ディラオの郊外にある。

助左衛門ほどの男が、日本人町などに逼塞していようとは思えない。いるならいるで、着いた日のうちに消息が知れるはずだ。噂らしいものも聞かないのは、いないからなのだろうが、万一ということもあるものだと思い、ディラオへ行って町年寄に聞いてみた。

町年寄の浅井九郎右衛門は苦りきった顔で、

「あいつは慶長八年に、ミンダナオ島のカガヤンで海賊を働いたうえ、イスパニヤの兵隊の後押しをして、二万人からの明人を殺したことのあるやつだ。そういう始末だから、呂宋へなどやってくるわけはない。あいつのおかげで、われわれは迷惑をこうむっている。やってきたら、ただではおかぬ」

と口をきわめて罵った。

助左衛門が海賊を働いたとは意外だった。もし、それが事実なら、人別のはっきりしてい

る日本人町に住みつくわけはない。呂宋にいるとしても、名を変えて、人知れぬ里で暮しているにちがいない。理窟はそうだが、それでは探しだすあてがない。

九月の末ごろ、南呂宋のサンミゲルという町に、日本人らしい男が住んでいるという噂を聞いた。

サンミゲルは、呂宋島が東南に伸びだした半島の一角にあるささやかな漁村で、陸つづきになっているが、途中にモロという蛮族が住んでいるので、陸路の旅行はできない。マウバンというところまで行って、そこから土人の舟を雇う。夜は岸で野営をするので、半月がかりの辛い旅になる。

吉之丞はマウバンを発ったのが、十月十二日で、十一月の二日にサンミゲルに着いた。なるほど日本人は住んでいたが、摂津の沖から吹き流されて漂着した漁師輩で、助左衛門とは縁もゆかりもない男たちであった。

サンミゲルまで来たついでに、そこからまた南へ下ってミンダナオ島に行き、カガヤンの町で助左衛門の消息をたずねたが、なんの得るところもなかった。そんなことをしているうちに、その年も暮れた。

翌年の五月ごろまで、なすこともなくマニラの宿で日を消していたが、助左衛門の捜索をあきらめたのでも、やめたのでもなかった。この旅亭は日本人の定宿のようになっているので、ここに居据っていれば、新入の日本人から、助左衛門の踪跡を聞きだす便宜があると思ったからである。

六月の末、角倉の御朱印船が着いたが、沖繋りしたまま、人も貨物もあげない。宿のあるじに聞くと、日本人の吉利支丹の癩者が百三十人も乗っているので、入港を許可するかしないかで、むずかしい掛合になっているということであった。

角倉の船は入港を許可しないことになって、翌日の夕方、乗客が二人だけサンパンで送られてきた。

いかにもよく似た姉弟で、姉のほうは十七、八、弟のほうは十三ぐらいでもあろうか。どちらも気品のある凛々しいほどの面差で、たやすくは近づきかねるような、いかめしさがあった。姉のほうは紋綸子の大口の袴をつけ、弟のほうは固苦しい野袴をはいているが、弟のほうは、どこかなよなよとしているので、姉弟というより、兄妹というほうが似つかわしいような感じだった。

宿の主人の調べが行届くので、間もなく二人の素姓がわかった。癩で眼がつぶれ、関ケ原の戦では輿に乗って指揮をしたという大谷刑部少輔吉継の子で、姉はモニカ真弓、弟はジェリコ菊丸。モニカは誇りの高い気質らしく、サンパンで送られてくる途中で、われわれ姉弟も癩者の血統だが、どうして二人だけを特別に扱うのかと、お舟手役人に抗議したということだった。

呂宋助左衛門の内儀は敦賀の大谷からきたひとだと聞いている。あの姉弟にたずねたら、助左衛門の所在がわかるのではなかろうかと、希望のようなものを感じだしたが、大谷の姉弟は、暑い盛りのマニラで、部屋からも出ずにひっそりと暮している。顔を見る機会もなか

ったが、ある日、宿の涼廊で行きあったのをひきとめて、助左衛門を探しまわっている苦心の段を披瀝すると、モニカは濡れ濡れした大きな眼で吉之丞の顔を見かえしながら、

「助左衛門は安南にいるはずです。さる方から書状を預っていますので、私も逢わなければならないひとですが、そうまでして、助左衛門を探しだそうとなさるあなたは、どういう方なのでしょう」

吉之丞は呂宋へ壺を探しにきた由来から、今日までのことを残らず話した。

モニカは、どうしたのか、急にうちとけたようすになって、

「ありがたい話を伺いました」

と笑いながらいった。

「私にも仕遂げなければならない仕事があります。私のは壺でなくて天主堂……私も弟も癩者の血統です。この病の不幸の素因をよく知っていますので、癩で滅びた人々の追福のために、安南フェイフォの日本人町へ、死ぬまでかかっても、天主堂を建てるつもりでいます」

助左衛門が安南にいるとわかった以上、一日も早くそちらへ行きたい。モニカの都合をたずねると、角倉船で癩者といっしょに安南へ行きたかったのだが、こんなところで降ろされて当惑している。宿のあるじにも頼んでおいたが、早く交趾へ行けるように力をかしていただきたいといった。

宿のあるじの奔走で交趾へ行く船が見つかった。古ぼけた漳州（シンガポール）の二檣船で、故郷へ帰る安南人が百人ほど、広くもない胴ノ間に押せ押せに詰めあっている。海の荒れる悪い時季だったが、それを承知で、七月二日の朝、マニラを発った。

思いのほか穏やかな航海だったが、十日の夜になると、東北の強風が吹きだし、船を揺りに揺すった。

十一日の朝、まだ夜が明けないのに、マレー人の水主どもがあわただしく駆けまわっている。

吉之丞が水主をつかまえて、なにがはじまったのかとたずねると、ひどく揺れたので舷の外板がゆるみ、そこからドンドン水が入りこんでいるのだといった。

船を停めて修理をすべきだと思うのだが、暴風に逆ってむやみに船を走らせている。吉之丞が上にあがってみると、大帆も矢帆もいっぱいに張り、小矢帆まで出してある。漏水で船が水びたしになるのが早いか、安南のフェイフォに逃げこむのが早いか、競争するつもりらしい。

走らせればそれだけ傷が大きくなる道理だから、これは大事になると、吉之丞は思わず吐息をついた。

十三日の午前になると、案の定、帆は残らず吹き千切られてしまい、否応なく船を停め、波と風に運命を任せるほか、しようがなくなった。

漳州船は暴風の後の長いうねりに押され、押し戻され、あてどもなく漂流していたが、そのうちに浸水の速度が早くなって、胴ノ間の天井まで水がつくようになった。

吉之丞と大谷の姉弟は、昨夜のうちに胴ノ間を出、甲板の隅に寝所を移していたので騒が

ずにすんだが、なにも知らずに胴ノ間に寝ていたマレー人どもは浸水におどろき、あわてふためいて甲板へ駆けあがってきた。

午後になると、水は甲板の上まであがってきて、誰の眼にも、遅かれ早かれ、船は沈没する運命にあるのだということがわかった。

夜の八時ごろ、船体が微妙に震動し、ひとの心をしめつけるような無気味な唸りが、どこからともなくひびいてきた。

水と甲板の間に圧し縮められた空気が、甲板を破って外に出ようとしている。

「こりゃ、ふっ飛ばされてしまうたい。さ、立たっし」

吉之丞は大谷姉弟の手をとって、後帆柱の縄梯子に縋りつかせたその瞬間、落雷のような音をたてて、甲板のまんなかほどのところに大きな穴があいた。

「こんなところにいるわけにゃいかん。上の見張台へあがりましょう」

三人が後帆柱の見張台にあがったのを見ると、甲板にいるだけの人間が一斉に縄梯子のほうへ突進してきた。われ先にとひとをおし退けて上ってくるので、一間四方ぐらいの見張台はたちまち満員になり、遅れた組は鈴生りに縄梯子にぶらさがった。二十歳ばかりの一人の安南人はすごい形相で見張台を見あげていたが、あきらめて、はるか向うの前帆柱の見張台に上って行った。

船はいぜんとしてすこしずつ沈下していたが、帆柱下、十尺ほどのところまで沈むと、どうしたのか、それでもう沈まなくなった。

白波をたてて荒れ狂う海の上、蠅取紙にとられた蠅のように、びっしりと人間が貼りついた帆柱が二本、あわれなようすで突き出ている。汐の流れでもあるのか、水の中に沈んだ船体の偏揺につれて、帆柱が大きく傾く。そのたびに何人かが海にこぼれ落ち、二、三度、藻掻いただけで、あっけなく波に嚥まれてしまう。

月影がさしかけたが、それも束の間のなぐさめで、最夜中近くになると、風が吹きつのり、十尺もあるような大波が寄せてきては、ものすごい勢いで帆柱にうちあたった。

十五日の朝がきた。

すくなくとも六十人以上の人間が縄梯子に縋りついていたはずだが、朝になってみると、何人というほども残っていなかった。

船体は波の下に沈んだまま、汐に引かれるように西のほうへ流れている。波と風の中でその日も終った。

十六日の午後、だしぬけに風がやんで、雲切れした雲の間から、灼くように太陽が照りつけ、誰も彼れも咽喉の乾きに悩まされた。

四

モニカは見張台にあがるとすぐ、弟の菊丸を抱いてやり、ずっとその恰好を保っていた。

吉之丞は、もうすこし楽にしているようにいったが、微笑するだけで、姿勢を崩そうとはしなかった。

菊丸は荒々しい環境に脅えて、ぐったりと弱りこんでしまったが、七日目ぐらいから、果敢ないようすになり、手足をひきつらせたり、うわごとを言ったりするようになった。吉之丞は大谷姉弟のそばに坐って、一日ごと菊丸が弱って行くのを見ているのだが、見ているだけで、どうすることもできなかった。

十九日の朝、吉之丞が菊丸の顔をのぞいてみると、菊丸は死んでいた。いつ息をひきとったのか、抱かれたままの恰好で固くなっている。モニカは菊丸が死んだことも知らずに、腕の中に抱きしめているのである。

そういう吉之丞自身、ただもう物憂いばかりで、眼玉をうごかす元気もない。窮屈なところにあおのけに寝て、うつらうつらしていると、頭の中に霞がかかったようになって、生きているのか死んでいるのか、わからなくなる時がある。すぐそばにいながら、モニカも吉之丞も、よほど前から口をきかなくなっていた。朝々、まだ生きていることを知らせるために、眼でうなずきあうのが精一杯のところである。

二十日の午後、俄雨があった。

難船してから、はじめての雨だった。吉之丞はあおのけに寝て、掌で受けをこしらえ、鼻のわきを流れるのも、顎から飛沫くのもいっしょくたに飲みこんだ。死んだとばかり思っていた、まわりのマレー人や安南人が、狂人のようにはね起き、空を仰いで飽くほど雨を飲んでいる。

モニカは雨水を帛に浸ませて菊丸の口の中へ絞りこみ、どこかに生きているしるしがないかと、じっと顔をながめていたが、もう生きかえる宛がないことがわかると、急にキッパリとした顔つきになり、菊丸の死体をひきずって行って、なんの未練もなく海へ捨てた。

雨は一時間ほどで降りやみ、眼眩くような天気になった。ふと見ると、帆柱の蔭になるところで、マレー人が片肱を立てて壺から水を飲んでいる。

「ほう」

雨があがれば、つぎの雨を待つしかないが、壺があれば、溢れるほど雨水をためて、好きなときに飲むことができる。それにしても、あの混雑のなかで、壺を抱えだすというのは抜目のないやつだと、マレー人のすることをながめているうちに、なんともつかぬ感動に身のうちを貫かれ、われともなくマレー人のそばへ這い寄った。

「その壺、ちょっと見せてくれ」

ひったくるようにして壺をとりあげた。

なんどりとした茶釉の下から、火花が散ったようにいちめんに浮きだしている鶉斑……。肩下のあたりに、蓮華の花びらが透しになって、その中に、あるかなしかというように「王」という字が見える。底を見ると、話に聞いたとおり高い揚底で、底に曲の凹みがある。まさしくこれだ。

「これが『蓮華王』だ」

吉之丞は腹巻から錠銀をつかみだしてマレー人の手におしつけると、壺を抱いておのれの座に這い戻った。

「夢のようだ」

蓮華王の葉茶壺を膝の前に据え、吉之丞は途方に暮れて呆然と空を見あげた。

長くてあと二、三日の命。それはもうまぎれもないことだ。こんな詰りきったときに、夢にまで見た蓮華王の葉茶壺にめぐりあうというのは、どういうことなのか。

本意をつらぬいたのだから、死んでも満足とすべきなのだろうが、そんな気持にはなれない。壺を抱いて死んだら、この世に思いが残るだろう。生も死もどうでもいいと、さらりと思いあきらめていたが、壺が手に入ったら、急に死ぬのがいやになった。……そうはいっても、助かるあてはないのだ。

吉之丞はぐったりとなり、あおのけに寝て胸の上で手を組んだ、いつもの楽な姿勢をとると、ひょっとすると、明日は眼がさめないのかも知れないと思いながら、うつらうつらしだした。

三十日の夕方、どこかで、

「陸だ」

と呟く声がした。

遭難してから二十日目のことで、見張台の上の人間どもは、かすかに息が通っているというだけの、死の一歩手前の状態にあったので、「陸」という言葉がなにを意味するのか、思いだすことができなかった。しばらくして、また誰かが、

「陸だ」

と叫んだが、これも、なんの反応もおこさず、完全に無視された。

三度目に誰かが呟いたとき、吉之丞は、

「うん？」

といって首をあげた。

吉之丞は、自分がいまどこにいるのかよくわからなかったが、さらしに包んだ枕元の葉茶壺を見ると、それで、いっぺんに記憶が甦った。

いま、たしかに陸といった。

助かるかも知れないと思うと、その期待で急に元気が出て来た。

吉之丞は起きあがって、陸のあるほうをながめた。

十町ほどむこうに、鉛色の泥湿地が、水面とおなじくらいの高さでひろがり、その涯は、ひょろりと伸びあがった生気のない樹林で区切られている。浅瀬の海にはところどころに泥堆が顔をだし、岸波がとどろくような音をたて巻きかえしている。

助かるどころの騒ぎではなかった。吉之丞は海岸のようすを見るなり、最悪の状態になっていることを一と眼で読みとった。水の中にある船体は、汐路に乗って岸へ曳かれているらしいが、泥堆にでも乗りあげたら、一挙にバラバラになり、誰も彼れもみな海に投げだされてしまう。二十日も飲み食いしない弱りきった身体では、高波にひとつ叩かれたらそれで最後だ。

普通の身体なら、こんな海は片手でも泳げる。せっかく壺を手に入れたのに、つい鼻の先

に陸を見ながら、果敢ない最期を遂げるのかと思うと、無念でならない。

モニカのそばへ行くと、モニカは助かったのだと思いこんでいるらしく、痩せ細って眼だけになったような顔で、ほんのりと笑ってみせた。

吉之丞は笑いかえして、

「おいが連なって泳いであげますけん、元気を出さんといきまっせんばい。今夜はしっかり休んでおきなさい」

モニカはうなずくと、眠るつもりになったふうで、うっすらと眼を閉じた。

翌日、朝の五時ごろ、突きあげられるような衝動を感じて眼をさました。吉之丞は、

「やった」

と叫びながら跳ね起きた。

つづいて二度、大きな震動があって、物見台がグラリと傾いだ。吉之丞はころげだそうとする壺を、やっとのことでおさえつけた。

船体はうまいぐあいに泥堆に乗ったらしくて、意外に堅固なようすをみせ、吉之丞が案じていたようなことにはならずにすんだ。

干潮の時間なのだとみえ、すこしずつ水位が下って、二十日ぶりに甲板があらわれだした。風も無く、岸波もおさまり、こういう凪が二日もつづいたら、なんとか助かるかもしれないという希望を感じさせた。

吉之丞は安南人やマレー人の水主のすることを見ていたが、むかし御朱印船で水主どもを

追いまわした経験から推して、グッタリと長くなっている連中も、案外、弱っていないことを看破した。

モニカを無事に岸まで送り届けるには、どのみち、できるだけ大勢助人があるほうがいい。使えそうなのが六人いる。六人が手を揃えて庇ってやったら、泳ぎつかせることができるだろう。

吉之丞はマレー人のいるところへ行って、あの娘を陸へ渡すのだが、力を貸してくれないか、骨折賃に錠銀を一つずつやるが、と相談を持ちかけると、マレー人たちは異議なく承知した。

五

四時すぎに満潮になった。

モニカは襦袢と踏込だけの軽装になって甲板へ降り、吉之丞が行くのを待っていた。吉之丞はモニカのそばへ行って、

「こやつどもがお世話しますけん、ご心配なく……おいもすぐあとから行きますたい」

縄の垂縄をつけた十尺ばかりの角材を海におろし、両端をマレー人に支えさせておいてモニカを水に入れた。垂縄につかまらせると、四人のマレー人が前衛後衛になって、岸をめがけて泳ぎだした。

吉之丞が物見台にあがって見ていると、泥堆にうちあたる返波に揉まれながら、それでも

すこしずつ陸岸のほうへ泳ぎ寄っている。船と岸のちょうど真中ぐらいのところに、白波が立騒いでいる潮路のようなものがある。どうなることかと思っていると、そこもどうやら無事に泳ぎ切った。

無理もないことだが、モニカは疲れてきたらしくて、ときどき頭が水の下に沈む。それでも垂縄から手を放さずにどうにかついて行く。とうとう六町たらずの海を泳ぎ渡って岸にあがった。

枯れた磯草を集めて焚火をしているのを見届けてから、吉之丞は仕度にかかった。錠銀がこぼれださないように腹巻をしめなおし、壺は風呂敷に包んで首に括りつけ、縄梯子をつたって甲板へ降りて行った。

死ぬ、ときめていた間は、なんとも思わなかったが、この船の中に千貫目の銀子が沈んでいるのかと思うと、妙な気がしないでもない。いささか思いが残るが、壺を千貫目で買ったと思えばあきらめがつく。

六尺ばかりの丸太を海へ落し、そうしておいて、太縄をつたって水に入った。

丸太に手を載せ、おしだすようにしながら泳ぎだしたが、手脚に力がなくて、思うようにやれない。しばらくやっているうちに関節が伸びて、いくらか調子がでてきた。

十間ぐらい泳いでは、ゆっくりと身体を休め、それからまた十間ぐらい泳ぐ。そんなことをくりかえしているうちに、泥堆の返波がさわいでいるとこへさしかかった。波に巻かれて、丸太が際限もなくまわりだしてとまらない。丸太をとめようとあせっていると、大波がおしよせてきて頭のうえを越して行った。首に括りつけてあった壺が胸のほうへグルリと下ってきて、その重みでグングン海の底へ引きこまれて行く。吉之丞は、もうだめだと思い、無我夢中で壺をかいぐりとり、水を蹴って浮きあがると、鞴のような音をたてて息を吸った。

すぐそばに丸太が浮いている。丸太につかまってひと休みしているうちに、口惜しさがこみあげてきて思わず涙を流した。天下の珍宝を手に入れながら、波に脅えて捨ててしまった。この馬鹿さ加減は、なにに譬えようもなかった。

それからまた微々と泳ぎだしたが、陸に向いて泳いでいるのか、船のほうへ帰っているのか方角もつかず、ただもう藻掻きにもがいているうちに、自然と岸辺に流れつき、疲労困憊の極、砂浜に倒れて気を失ってしまった。

しばらくして気がつくと、焚火のそばに運ばれて、土人どもに介抱されていた。

土人の言うところでは、そこは安南のタム・キイという村から三日の行程のところにある無人の海岸の一地点で、狩猟にでも来るほか、ほとんど用のないところだということであった。

そんなことをしているところへ、船からつぎつぎに泳ぎついて来、二十日の間、苦楽をともにした見張台の上の人間の顔が洩れなく揃った。土人どもは吉之丞の腹巻に触って、分限を見極めているため非常に親切で、一同を猟小屋へ連れて行って水を飲ませ、飯を炊いたり鹿の肉を焙ぶったりし、そのたびに錠銀を一つずつ請求した。

揺れも動きもしない大地の上で五日ほど休養し、元気を恢復したところで、うち連れてタ

ム・キイという村へ行った。吉之丞とモニカはそこで一同と別れ、日本人町のあるフェイフォに向った。フェイフォには二百五十人の日本人が住みつき、店舗が六十軒もあって、角屋七郎兵衛が差配していた。大谷刑部少輔の遺臣というのが何人か居て、モニカの無事な姿を見、菊丸の不遇な最期の話を聞いて、感動したふうであった。

町年寄の話では、呂宋助左衛門は慶長二年の秋、手持の船に一家眷族を乗せてツーランに入津し、フェイフォに落着きたい意嚮らしかったが、海賊の嫌疑があるので、大年寄がいい返事をしなかったら、腹を立てて暹羅のアユチャに行き、オロンという高位についているというようなことだった。

苦労してはるばるやってきたが、ここでも助左衛門にめぐりあうことができなかった。暹羅にいると聞いたうえは、暹羅まで行くしかないがそうだとすれば、破船の中にある千貫目の銀が必要になってくる。角屋七郎兵衛の北の方は安南王族阮氏の出で、安南では権勢を持っているということなので、破船の取得を願いあげた。さっそくに許可がおりたので、金箱引揚の事務を監督するため、翌、慶長十八年の春までフェイフォに滞在した。

五月七日、フェイフォを発ち、二十三日に暹羅のバンコックに着いた。アユチャの日本人町には二千人の日本人が住みついていて、城井久左衛門が差配していた。助左衛門の所在をたずねると、柬埔寨にいるはずだということで、アユチャにその年の冬まで滞在して、翌、慶長十九年の二月十八日、暹羅船でバンコックを発ち、同、二十七日、柬埔寨に行った。ピニャルーの日本人町には五百人の日本人が居付いていて森嘉兵衛が差配していた。

助左衛門のことをたずねると、つい先月、みまかったということであった。結局のところ、吉之丞はこの世では助左衛門にめぐりあうことができなかったのである。

墓参の帰り道、ピニャルーの市場をのぞくと、差掛の陶物屋で「蓮華王」と「清香真壺」を見つけた。手品の種明しを見るようなもので、今となっては、たいして興味はなかったが、錠銀二個を投じて壺を二つ買って帰った。

翌朝のことであった。

吉之丞が宿をとった旅亭の前の広場で、大勢の人声がするので、窓をあけてみると、何百人とも知れぬ男女が「蓮華王」か「清香真壺」を一つずつ抱え、列をつくって旅亭の木戸が開くのを待っている。ここに集った真壺の数はおびただしいもので、広場に入りきれぬ組が、つづきの横町に蜿蜒とつづいている。この騒ぎのもとはなにかというと鐚銭十文ですむところを、錠銀一個を投じたためであった。

元和元年、大阪、夏の陣をもって豊臣氏が滅亡したその五月一日、柬埔寨船でカンボジャを発ち、二十日、安南に着いた。元和三年五月までフェイフォに滞在し、同年七月、安南を発って、同、十月九日、七年ぶりで鹿児島に帰着した。

さっそく御隠居所に上り、真壺の上品二個、惟新公に差上げたが、真壺をおねだりになった家康公は、すでに元和二年におかくれになり、新納拙斎殿も慶長十七年に長逝し、せっかくの苦労も甲斐ないものになった。

碧蹄館の戦

菊池寛

菊池寛（きくち・かん）
明治二十一（一八八八）年、高松生れ。大正三年頃から「新思潮」の同人となり、戯曲や小説を発表し始める。その後『忠直卿行状記』『恩讐の彼方に』等を「中央公論」に発表し、作家としての地位を築いた。すぐれたジャーナリスト気質もそなえており、大正十二年に「文藝春秋」を創刊し、独創的なアイディアで文藝春秋社を発展させた。『父帰る』『藤十郎の恋』『真珠夫人』等著書多数。昭和二十三年没。『菊池寛文学全集』全十巻（昭和三十五年、文藝春秋）がある。

鶏林八道蹂躙之事

対馬の宗義智が、いやがる朝鮮の使者を無理に勧説して連れて来たのは、天正十八年七月である。折柄秀吉は関東奥羽へ東征中で、聚楽の第に会見したのは十一月七日である。この使が帰国しての報告の中に、秀吉の容貌矮陋面色黧黒、眼光人を射るとある。朝鮮人が見ても、猿らしく見えたのである。又曰く、「宴後秀吉小児を抱いて出で我国の奏楽を聴く。小児衣上に遺尿す。秀吉笑って一女倭を呼びて小児を託し、其場に衣を更う。傍に人無きが如くである」この小児と云うのは東征中に淀君が生んだ鶴松の事である。まだほんの赤坊であるが、可愛い息子に外国の音楽を聴かせてやろうとの親心であったであろう。傍若無人はこうした応待の席ばかりでない。朝鮮への国書の中には、「一超直ちに明国へ入り、吾朝の風俗を四百余州に易え、帝都の政化を億万斯年に施すは方寸の中に在り」と書いて居る。朝鮮は宜しく先導の役目を尽すべしと云うのであった。

朝鮮の王朝では驚いて為す所を知らず、兎も角と云うので、明の政府へ日本来寇の報知を為したのである。秀吉朝鮮よりの返答を待つが来ない。

天正十九年八月二十三日、ついに天下に唐入即ち明国出兵を発表した。

兵器船舶の整備を急がせると共に、黒田長政、小西行長、加藤清正をして、肥前松浦郡名護屋に築城せしめ、更に松浦鎮信をして壱岐風本（今勝本）に築かしめた。

松浦郡は嘗つての神功皇后征韓の遺跡であり、湾内も水深く艦隊を碇泊せしめるに便利であったのである。秀吉は、信長在世中、中国征伐の大将を命ぜられたとき、私は中国などはいらない。日本が一統されたら、朝鮮大明を征服して、そこを頂きましょうと云っていた。

それは、大言壮語してしかも信長の猜疑を避ける秀吉らしい物云いであったのであるが、そんな事を云っている内に、だんだん自分でもその気になったのか、それとも青年時代からそんな大志があったのか、どちらか分らない。

明けて文禄元年正月、太閤秀吉は海陸の諸隊に命じて出発の期日並びに順序を定めた。一番は小西摂津守行長、松浦法印鎮信以下一万三千、二番加藤主計頭清正以下二万二千、三番黒田甲斐守長政以下一万一千、更に四番から二十番まで総軍合せて二十八万である。尤も実際に朝鮮に上陸して戦闘に参加したのは十五万内外の人数であった。秀吉が本営名護屋に着いた四月の末頃には、既に行長清正相次いで釜山に敵前上陸し、進んで数城を占領して居る。行長と清正とが一番乗りを争って、清正が勝ったと云う話は伝説である。三番隊以下の後続部隊も日を隔てて次々に上陸した。先鋒の三軍各々路を三つに分ち、京城を目指して進んだが、処々に合戦あるものの、まるで無人の境を行く如しと云ってよい位の勢いであった。

これに対する朝鮮軍の行動であるが、日本軍出動の報が入ると、申砬、李鎰の二人をして

辺防の事を司らしめた。申砬は京畿、黄海の二道、李鎰は忠清全羅の二道を各々巡視したが、ただ武器を点検する位に止った。申砬の如きは眼中に日本軍なく、暴慢で到る処で徒らに人を斬って威を示す有様なので、地方官は大いに怖れてその待遇は大臣以上であったと云う。李鎰は尚州の附近に駐屯して居たが、小西行長の先鋒は既に尚州に迫りつつあった。朝鮮軍の斥候はこの事を大将李鎰に報告したが信用しない。反って人心を乱す者であるとして斬って仕舞った。その中に陣の前の林中に怪しい人影が動く。人々どうも日本軍の尖兵ではないかと疑ったが、うっかり云って斬られてもつまらないと誰も口にしない。その内、李鎰自身も怪しく思って騎馬武者を斥候に出すと、忽ちに銃声響き、その男は馬から落ちると、首を獲られてしまった。まさしく日本軍である。令して矢を放つが届かない。忽ちにして全軍敗走した。李鎰自身、馬を棄て、衣服を脱ぎ、髪を乱し、裸体で走り、開慶に至って筆紙を求め、使をして敗戦を報じた。朝鮮側の記録に書いてあるのだから嘘ではなかろう。これが四月の二十四日の事であるが、二十七日には忠州に於て申砬が敗れた。申砬は最初の大言に似ず、日本軍連勝の報に恐れをなして、忠州を出動して南下し、鳥嶺の嶮を踰える時に行方不明になった。大将が居なくては陣中騒擾するのは当然である。処が斥候の報ずる如くに翌日になっても日本軍が現れないので、安心して何処からか出て来た。そして先の斥候は偽りを報じたとして之を斬った。虫のいい話である。間もなく現れた日本勢と闘ったが忽ちにして敗れ、申砬は南漢江に投じて溺死して果てた。この戦場は弾琴台と云って、稲田多く、馬を馳らせるのに不便な処であった。この戦場より南一里の処に姑母山と称する古城がある。山

峡重なって中に川が流れ、一夫守って万夫を防ぐに足る要害である。日本軍は必ずや此処に朝鮮軍が拠って居るだろうと斥候を放ったのに、只一人も守って居ないのに驚いた程である。呆れながら越えて見ると、稲田の中に陣を布いて居た。後に明将李如松が日本軍を追撃して此処を過ぎた時、申砬の無策を嘆じたと云う。折角頼みに思った二将が手もなく敗れた報が京城に達したから、上を下への大混乱である。朝廷諸臣を集めて評議を行ったが、或者が建議するに、敵軍の恃む処は利剣長槍である。厚い鉄を以って満身の甲を造り、勇士を募って之に被らせ、敵中に突入させれば、敵は刺す隙を見出せずして勝を得る事必せりと云う。試みに造ってみたが重くて、誰も動く事が出来なかった。更に一人は漢江の辺に多くの高い棚を築き、上から伏射すれば敵は上る事が出来ないであろうと進言した。少し気のきいたのが、然らば鉄砲の丸も上る事は出来ないのであるかと、反問したのでそのままになった。結局王子臨海君をして咸鏡道に、順和君を江原道に遣して勤王の軍を募らしめ、王李昭、世子光海君以下王妃宮嬪数十人、李山海、柳成竜等百余人に護られて、遠く蒙塵する事になった。四月二十九日の午前二時、士民の哀号の声の中を西大門を出たのである。

行長、清正の二軍は、忠州に相会した後再び路を分って進み、五月二日の夕方に清正は南大門から、行長は東大門から京城に入城した。京城附近の漢江に清正行き着いた時、河幅三四町に及ぶが、橋が無いので渡れない。対岸を望むと船が多く繋いであるが、敵の伏勢が居ないとも限らない。清正暫く眺めて居たが、『鷗が浮んで居る処を見ると敵軍既に逃げたと覚える、誰か泳いで彼の船を漕ぎ来る者ぞ』と云った。従士曾根孫六進んで水に入り、一隻

を漕ぎ還ったので、次々に船を拉し来って全軍を渡す事が出来た。清正は更に開城を経た後大陸を横断して西海岸に出で、海汀倉に大勝し長駆豆満江辺の会寧に至った。此処で先の臨海君順和君の二王子を虜にした。まだそれで満足しなかったと見えて兀良哈征伐をやって居る。兀良哈は今の間島地方に住んで居る種族で、朝鮮人その勇猛を恐れて、野人或は北胡と称して居たものである。清正はかくして朝鮮国境まで突破したわけだが、北進中の海岸で、ある日東海はるかに富士山を認め、馬より降り甲を脱いで拝したと云うが、まさか富士山ではあるまい。この情景は昔の絵草紙などに書いてある。しかし懸軍数百里望郷の情は、武将の心を傷ましむるものがあったであろう。清正の話では虎狩りが有名であるが、十文字槍の片穂を喰い取られたなぞは伝説である。清正ばかりでなく島津義弘や黒田長政なども虎狩りをやって居る。中には槍や刀でついに仕止めた話もあるが、清正が十文字槍で虎と一騎討ちをやった記録はない。自ら鉄砲で射止めた事はあるらしい。

さて一方行長も七月半に大同江を渡って平壌を占領した。かくて、この年の暮頃の京城を中心とした日本軍の配置はほぼ次の如くである。即ち京城には、総大将宇喜多秀家を始め三奉行の増田長盛、石田三成、大谷吉継以下約二万の勢、平壌には、先鋒小西行長、宗義智、松浦鎮信以下一万八千の勢、牛鋒には、立花宗茂、高橋統増、筑紫広門等四千の勢。開城には、小早川隆景、吉川広家、毛利元康以下二万の勢。其他占領した各処には、部将それぞれ守備を厳重にして居たのである。

於二平壌一行長敗退之事

日本軍襲撃の報を、朝鮮の政府が明第十三代の皇帝神宗に逸早くも告げた事は前にも述べたが如くである。明では最初この急報を信じて居なかったが、追々と琉球や福建辺からも諜報が飛んで来る。ついに朝鮮王は義州にまで落ちて来た。救援を求める使は、踵を接して北京に至る有様である。あんまり朝鮮王の逃足が早いので、一明使は朝鮮王が、日本軍の先鋒を承って居るのではないかと疑ったが、王の顔色憔悴して居るのを見て疑を晴した程である。明朝茲に於て、遼陽の一部将祖承訓に兵三千を率いしめて義州に南下し、朝鮮の部将史儒以下の二千の兵と合して、七月十六日平壌を攻撃させた。平壌を守る小西行長、宗義智、松浦鎮信、黒田長政等之を迎えて撃破した。長政の部下後藤又兵衛基次が、金の二本菖蒲の指物を朝風に翻えし、大身の槍を馬上に揮ったのはこの時である。

さて朝鮮の武将史儒はこの役に死し、祖承訓は残兵を連れて遼陽に還ったが、明の朝廷へは、我軍大いに力戦して居た際に、朝鮮兵の一部隊が敵へ投降した為に戦利あらず退いた、とごまかして報告した。朝廷では、群臣をして評議せしめた。或者曰く、南方の水軍を集めて日本の虚を衝くべし。他は曰く、兵を朝鮮との国境に出して敵をして一歩も入らしむる勿れと。他は曰く講和するに如かじと。議論は色々であるが何れとも決定しない。しかし朝鮮は必争の地であり、自衛上放棄する事は出来ない。今能く朝鮮を回復する者があったら、銀

一万両を賞し伯爵を授けようと懸賞募集を行った。悪くない賞与ではあるが、誰も自信がないと見えて応ずる者が無い。そこで今度は意見書を広く募った。その中で予選に当ったのが、程鵬起が海軍をして日本を襲う策と、沈惟敬が遊説をもって退かしめる計とである。前者は行われなかったが、海軍をもって日本を衝く説は良策であったに相違ない。当時朝鮮海峡に於ても日本の水軍は屢々朝鮮の水師に敗れ、なかなかの苦戦をして居る。今若し優秀強大な艦隊が朝鮮海峡に制海権を握るならば、遠征の日本軍は後方との連絡を絶たれ、大敗したかも知れない。バルチック艦隊を日本海に撃滅して置かなかったなら、満洲に於ける日露の戦局はどうなったかわからないと同様である。朝鮮、明にとって惜しい事には、この海軍出動説はついに実現しなかった。一方の沈惟敬の説は直ちに採用されて、惟敬は遊撃将に任命された。この男はもと無頼漢であったが流れ流れて北京に来て居ったが、交友の中に嘗つて倭寇の為に擒にされ、久しく日本に住んで居た者があった。その友人から予々日本の事情を聴いて居た惟敬は、身を立つる好機至れりとして、遊説の役を買って出たのである。八月末、平壌の城北乾福山の麓に小西行長と会見した。何故行長が明の使と会見したかと云うと、行長は既に日本軍遠征をこれ以上に進める事も好まなかったからである。いい潮時さえあらば講和をなしたいと考えて居たからである。明使沈惟敬が来たのは、行長にとって歓迎する処であっただろう。そこで行長は明からの正式の講和使を遣わさんことを求め、五十日をもって期限とした。沈惟敬之を承諾して、標を城北の山に樹てて日朝両軍をして互に之を越える事を禁じて去った。休戦状態である。沈惟敬は北京に還って、行長等講和の意ある事を報じ

た。処が明政府は既に李如松を提督に任命して、朝鮮救援の軍を遼東に集中しつつあったので、今更惟敬の説を採り上げ様としない。聴かない許りでなく李如松は怒って之を斬ろうとさえしたが、参謀が惟敬をして行長を偽り油断させる策を説いたので命丈は助かった。期日の五十日を過ぎても明使が来ないので、行長等怪んで居る処へ、計略を含められた惟敬が来って、講和使の来る近きに在りと告げた。行長等は紿かれるとは知らないから大いに喜んで待って居たが、其時は李如松四万三千の人馬が、鴨緑江を圧して、義州に集中しつつあったのである。全軍を三つに分ち、左脇、中脇、右脇と呼んだ。左脇は大将楊元以下李如梅、査大受等。中脇は大将李如柏以下。右脇は大将張世爵、祖承訓以下。兵数各々一万一千を超え、ほとんど全軍騎兵である。

文禄二年（明暦で云えば万暦二十一年）の正月元日、この三脇の大軍は安州城南に布陣した。当時朝鮮の非常時内閣の大臣として、苦心惨憺の奔走をして居た柳成竜が来て、陣中に会見した。成竜平壌の地図を開き地形を指示したが、如松は倭奴恃む処はただ鳥銃である。我れ大砲を用うれば何程の事かあらんと云って、胸中自ら成算あるものの如くである。悠々として扇面に次の詩を書いて成竜に示した。

提兵星夜到二江干一
為説三韓国未安
明主日懸旌節報
微臣夜繹酒杯観
春来殺気心猶壮
此去二妖氛一骨已寒
談笑敢言非二勝算一
夢中常憶跨二征鞍一

如松、更に進み、先ず先鋒の将をして、行長陣に告げて曰く、「沈惟敬復来る。宜しく之を迎うべし」と。行長等喜んで其士武内吉兵衛、義智の士大浦孫六等二十余人をやった。明軍は迎えて酒宴を張ったが、半ばにして伏兵起り吉兵衛を擒にし従兵を斬った。孫六他二人は血路を開いて漸く平壌に逃げ帰った。茲に至って行長等明の為に欺かれた事を知ったが既におそかった。

正月五日には、平壌の城北牡丹台、七星門方面は右脇大将張世爵以下の一万三千が、城西普通門方面は左脇大将楊元以下一万一千が、城南含毬門方面は中脇大将李如柏、朝鮮の武将李鎰以下一万八千が、来襲した。東は大同江だから完全な包囲攻撃である。平壌に籠る日本軍は、一万一千、夜襲を屢々試みたが成功するに至らなかった。七日午前八時如松は総攻撃を命令した。明軍の大将軍砲、仏郎機砲、霹靂砲、子母砲、火箭等、城門を射撃する爆発の音は絶間もなく、焔烟は城内に満ちる有様であった。日本軍は壁に拠って突喊して来る明軍に鳥銃をあびせる。明軍死する者多いが、さすがに屈せず屍を踏んで城壁を攀じる。日本軍刀槍を揮って防戦に努めるけれども、衆寡敵せず内城に退いた。李如松楊元等は普通門より、李如柏は含毬門より、張世爵は七星門より外城に進入した。此時牡丹台を行長の士小西

末郷、鎮信の士松浦源次郎の同勢固めて居たが、源次郎は逃れ難くなったので、切腹して果てた。此夜、行長は諸将と会して進退を議したが、既に兵糧庫も焼れて居るし、鳳山からの援軍も来ない上は、一度京城へ退いて再挙するに如くはなしと決して、潜に城を出で大同江の氷を渡って京城へと落ち延びた。寒気厳しい最中の退却であるから惨憺たる有様であった。鳳山の大友吉統は、平壌囲まると聞くや仰天して、行長より一足お先に京城へ逃げ込んだ。太閤秀吉聞いて、日本の武威を汚すものとして、吉統の領国をとり上げた。

平壌に於ける敗戦までは、まだまだ積極的な態度であったが、これ以後の日本軍は処々の戦勝あるとは云え、大局に於て退軍の兆が現れるようになった。だが、その間に在って、碧蹄館の血戦は、退き口の一戦として、明軍をして顔色なからしめたのである。

碧蹄館血戦之事

平壌敗れたりとの報が、京城に達したので、宇喜多秀家は三奉行と相談して、安国寺恵瓊を開城へ遣して、小早川隆景に、京城へ退くよう勧説した。隆景曰く、「諸城を築いて連珠の如くに守って居るのは、今日の様な事があるが為である。此地は険要であるから、某快く一戦して明軍と雌雄を決する所存である。渡海以来の某は日夜戦陣に屍を暴すをもって本意として来た。生きて日本へ帰る事など曾て思った事もない。老骨一つ、よし此処に討死しても日本の恥にもなるまい」と頑張って退く事を肯じない。三奉行の一人大谷刑部少輔吉

継、京城より馳せつけて隆景に説いた。「貴殿の御武勇の程は皆々存じては居るが、今度は主力を京城に集結して決戦しようと考えて居るのである。且つはこの開城京城間の臨津江が春来と共に氷が融ける事でもあらば、貴殿の進退は困難となろう」と説得して、ついに開城を中心として四方の諸城の軍勢も、次々に退却して京城に集った。集った諸軍勢も悉く城内に入ったが、小早川隆景、及び立花宗茂等の諸軍だけは城内に入らず、西大門外に陣を布き、迎恩門を先陣として警戒怠りない。城中の諸将は隆景に、軍勢を城内に収めるがよかろうと忠告すると、隆景は嘲笑って答えた。明の大軍南下するからには必ずこの城を包囲せずには置かないのである。今若し我軍悉く城中に引籠って了ったならば、兵糧の道を如何にして守るつもりであるか。各々方平壌の二の舞を踏みたいわけではあるまいと。——こう云われると誰も答え様がなかった。隆景の武略、諸将を圧していたのである。さて隆景等が退いた開城には、既に李如松等代って入り、京城攻略の策戦を廻した。銭世禎は自重説を称え、奇兵を出して混乱に乗ずることを主張する。査大受は、勝に乗じて一挙に抜くべしと論ずる。先ず敵情如何と、査大受一軍をもって偵察に出かけた処が、坡州を過ぎた附近で、日本軍の斥候隊と遭遇した。僅かな人数なので忽ち日本の斥候隊は大受の騎兵団の馬蹄に散らされ六十数名の戦死者を出した。喜び勇んだ大受は勝報を李如松に告げた。時に、日本軍の精鋭は平壌で殆ど尽きて、京城に在るは弱兵恐るるに足りない者許りであるとの諜報も来て居るので、如松は直に若干兵を開城に置き、李寧、祖承訓を先鋒として、自ら二万を率いて出動した。大谷吉継が予見したように、臨津江の氷は半ば融けかかって居たので、柳成竜工夫して葛を

もって橋をかけたので、大軍間もなく坡州に入った。

京城の日本軍では、いよいよ明軍来が確になったので、誰を先手の将とするか詮議区々である。隆景進み出て云う様、この大役は立花左近将監宗茂こそ適役である。嘗つて某の父元就四万騎をもって大友修理大夫義鎮の三万騎を九州多々良浜に七度まで打破った時に、この宗茂の父伯耆守、僅か二三千騎をもって働き、ついに大友の勝利に導いた事がある。その武将の子である宗茂及びその一党、皆覚えあるものと思う、宗茂が三千は余人の一万に当るであろうと推挙するので、諸将尤もとして宗茂を先陣と定めた。若輩の宗茂は、歴々満座の中に面目をほどこして我陣屋へ帰ると、宗徒の面々を呼び集めて、十死一生の働きすべく覚悟を定めた。第一陣はこの宗茂、並びに弟高橋直正以下三千である。第二陣は、隆景旗下八千の兵、第三隊は小早川秀包、毛利元康、筑紫広門等五千、第四陣は吉川広家が四千の兵。総勢二万の大将は隆景である。秀家始め三奉行、黒田長政等も、各々順序を以って陣構えした。

先陣宗茂の部将小野和泉は、我に一将を副えて前軍と為せ、敵の斥候隊を打破ろう。斥候が逃げれば後続の大軍動揺するであろう。そこをつけ入るべしと勧めたから、宗茂は和泉に立花三左衛門を副えて前備とした。池辺竜右衛門進出で、我日本の戦闘は小人数の打合が多い。しかし明軍の戦の懸引は部隊部隊を以てして居る。これに対抗するには散兵戦では駄目である。と云うので、中備を十時伝右衛門、後備は宗茂と定った。準備は全く整った。その宵黒田長政例の水牛の角の甲を被って宗茂の陣に来り、一方を承ろうと云った。宗茂の軍、長政の勇姿を見て奮い立ったと云う。宗茂長政二人とも、二十五歳で、正に武将の花と云っ

てよかった。

正月二十六日の午前二時、宗茂の軍は、十時但馬、森下備中の二士に銃卒各数十人を率いさせて斥候に出した。この時坡州の李如松も亦出登して京城へ進軍しつつあった。明軍の方でも既に斥候を放つばかりでなく、遠近の山野に伏勢を布いたりした。十時森下の一隊は伏勢を察して、此処かしこ距離を置いて鉄砲を放ち、大勢であるが如くに見せかけた後、突入したから伏勢は追い出されて散々である。宗茂この報を受けるや直ちに進登を命じた。この朝寒風が強い。宗茂粥を作って衆と共に喫し、酒を大釜に温めて飲みもって士気を鼓舞したと云う。前備小野和泉が出登しようとして居る処へ馳け込んだのは中備の将十時伝右衛門である。伝右衛門和泉に向って前備を譲らんことを乞うた。和泉は驚き怒り、軍法をもって許さない。伝右衛門は和泉の鎧の袖にすがって、今日の戦は日本高麗分目の軍と思う。某は真先懸けて討死しよう。殊死して突入するならば敵陣乱れるに相違あるまい。其時に各々は攻め入って功を収められよ。先懸けを乞うのは八幡大菩薩私の軍功を樹てる為ではない。こう云って涙を流した。和泉感動して、ついに前軍と中軍と入れ代った。霧が深く展望がきかないままに、明の先鋒査大受は二千の騎兵を率いて恵陰嶺を過ぎて南下したが、十時が五百の部隊、果然夜の明けた七時頃に遭遇した。弥勒院の野には忽ち人馬の馳せかう音、豆を煎る銃声、剣戟の響が天地をゆるがした。天野源右衛門三十騎計りで馳せ向うが、明軍は密集部隊であるから馬を入れる隙が無い。引返さんかとして居ると十時伝右衛門内田忠兵衛と名乗って馬を駆け寄せ、槍をもって突崩し五六騎を切って落したとある。名乗った処で相手には

わからないであろうが、やっぱり習慣で名乗ったらしい。兎に角伝右衛門は必死だから、その風を見て勢いを得た部下は続いて突入った。明軍は四倍の大勢だから伝右衛門の部隊は忽ちに真中に取囲まれて仕舞った。伝右衛門は総勢を一所に集めて、「敵を間近に引寄せて置いて急に後方に血路を開き、中備の隊まで引取るべし。然る時は敵勢追って来るであろう。我部隊中備と合したならば直ちに取って返し一文字に突破すべし。かくすれば此敵安く追い払う事が出来るぞ」と下知して戦ったが、ついに手負数多で討死した。自分が声明した通りであった。部隊の死傷百余人である。中備小野和泉入替って戦うたが易く破れる気色もない。反ってまた危く見えた処に宗茂二千の兵一度に鬨を挙げて押し寄せた。さしもの明軍も少しく退いたので、宗茂八百を後に固め、あとの軍勢は追撃に移らせたが、此時には既に明軍の後続部隊も到着したから戦は簡単には行かない。池部竜右衛門以下手負死人二百余に及んで居る。折から隆景の先手の兵が来たので宗茂は、一先ず部隊を引まとめて小丸山に息をつぎ、隆景旗下粟屋四郎兵衛景雄、井上五郎兵衛景貞の六千の新手に正面の明軍を譲った。明軍の進撃の有様を書いたものに、

「敵の人数色黒み備閑かにして勢い殊之外見事也。間近になると拍子を揃え太鼓を鳴らし大筒を打立黒烟を立てて押寄す」

とある。相当なものである。また、

「馬の大きさはけしからず大きく候。男もけしからず怪じ入り候也」とある。だから、日本軍も勢い死戦する外はないのである。隆景の先鋒

粟屋井上の両人は、両軍を一つに合して当ろうかと相談した。隆景の士、佐世勘兵衛正勝はその儀然るべからずと諫めたから、四郎兵衛は左に、五郎兵衛は右に備を立てて対陣し、大筒小筒を打合ったが、四郎兵衛の手の内三吉太郎左衛門元高の旗持が弾に中って倒れた。其他の旗持之を見て騒いだから、明軍望み見て鬨を挙げて攻め押せた。三千の日本軍浮足立ったのを、四郎兵衛馬を左方の高みへ乗上げて下知を下す。粟屋掃部、益田七内、村上八郎左衛門、石原太郎左衛門、鳥越五郎兵衛、河内太郎左衛門等三十四人の勇士、各々槍を取って踏みこたえた。この苦戦の様を見た井上五郎兵衛は高地を下りて援軍しようとすると、佐世勘兵衛また馬の口を控えて云うには、「暫く待ち給え。粟屋勢崩れるであろう」と止める。案の定四郎兵衛の軍は崩れて退き、明軍は湧く如くに馳せ上って来る。勘兵衛見て、時分はよし蒐り給えと云う。即ち井上勢は明軍坂を上ろうとする処へ上からどっと駈け下ったから明軍は忽ちに追い散らされ、粟屋勢も取って返した。時に十時頃である。隆景本陣を望客峴の上に置き馬上戦陣の展開を眺めて居たが、機正に熟すとして、全軍に進撃の命令を下した。小早川秀包、毛利元康、筑紫広門等五千の軍を右廻して明軍の左側面を衝かしめ、小丸山に待機中の立花宗茂三千の軍を左廻りして右側面を襲わしめた。隆景自身、井上粟屋勢の後に続いた。追撃して高陽附近に至る頃明将楊元新手を率いて来り援った。李如松も之に力を得、部将李如柏、李如梅、李寧等も孰れも自身剣を執って戦った。しかしこの戦場は水田が多く且つ狭隘である為に、騎兵の多い明軍は自由に馬足をのばす事が出来ず、又密集隊形を展開するのにも苦しんだ。日本軍は三方から攻撃を続けるので明軍次第に敗色を現した。如松は

始め、恵陰嶺を越え来る時にも、落馬して額を傷つけたが、この乱軍の最中にまた馬から落ちた。井上五郎兵衛望み見て忽ち馬を馳せて将に槍を如松に付けようとした。明将李有昇馬を寄せて之を遮り、やっと他の馬に乗せて退かせる事を得たが、有昇自らは弾丸に中って戦死した。李如梅の如きは、金甲の倭を手ずから射殺すと云うから、日本軍の一隊長と渡合って之を倒しているわけである。この様に明軍も奮戦したけれどもやがて寒雨到り行動は益々敏活を欠くのに対して、日本軍は左右の高地から十字火を浴せたのでついに支うべくもなくなった。激戦の高潮に達したのは正午頃であるが、間もなく明軍の総退却となり、日本軍は之を恵陰嶺まで追撃した。だが長追は無用と云うので立花の先鋒小野和泉馬を横えて日本軍を制し、隆景亦休戦を命令した。京城に凱歌を挙げて帰ったのはその日の暮方で明国朝鮮連合軍の首を斬ること六千余級であると云う。碧蹄館の戦即ちこれである。

さて大敗を喫した李如松は開城に退いて明朝へ上奏文を送ったが、その中に曰く、

「賊兵の都に在る者二十余万衆寡敵せず、且臣病甚し、他人を以て其任に代えんことを請う」と。今でもそうだが、工合が悪くなったから、病気辞職をしようと云うわけだ。

朝鮮の忠臣柳成竜は之を見て、二十万なぞとは嘘だと云うと、「汝が国人がそう告げたのだから、事実は乃公の知った事じゃない」と云った。時に兵糧欠乏を告げる者があったが如松は成竜の責任であるとして、之を廷下に跪かしめ、軍法を以って処分しようと怒った。いやしくも一国の廟臣に対して侮辱もまた甚しいわけである。成竜は大事の前の小事と忍んで陳謝したが、国事のついに茲にまで至った事を思うと、覚えず流涕せざるを得なかったと云う。

愈々加藤清正咸鏡道より将に平壌を襲わんとして居るとの流言を聞くや、如松はこれをよい口実として、成竜の切願をも斥けて開城から平壌へと退いて再び南下しようとはしなかった。

碧蹄戦後に晋州城攻略の戦いがある。朝鮮役の前役即ち文禄の役中に於ては、この二つが最も大きい戦争であった。碧蹄の敗後は、明の意気全く衰えて、間もなく講和の事がもち上ったのである。日本軍も長い間の戦闘で可なり弱って居るので、秀吉は一先ず大部隊を帰国せしめた。講和の交渉は色々曲折があるが、明使、「爾を封じて日本国王と為す」の国書を齎した為、秀吉を怒らしむることになり、講和も全く破れて再度の朝鮮出兵が起る。これが慶長の役で、加藤清正の蔚山籠城なぞはこの時の事である。

碧蹄館の戦いの主動者は、小早川隆景と立花宗茂の二人であることはまえの通りであるが、此の時京城の日本軍は糧食尽き、三奉行を初め諸将退却の止むを得ざるを知りながら、口先では強がりを云っていたのである。軍議区々であったが、隆景は病と称して評議の席に出でず、いよいよ糧尽くる頃を見計いて、軍議の席に出て、「日本勢此都にて餓死しても後来日本のお為にはならず、退却こそ然るべし」と云ったので、諸将皆隆景説に一致した。その時隆景又曰く、「と云って、仔細なく此都を引き取るべしと思わるるは不覚なり。明人大勢にて押し寄するを知りて、徒に退く時は逃げたるに当るべし。是非茲は一ト合戦致し退かでは叶わぬ所なり。と云って全軍にて戦わば、大勢退き難からん。明日の合戦は拙者致すべく、

その間に人数を繰引せられよ、随分一ト合戦致すべし」と云って、殿り戦を引き受けて大勝したのが、碧蹄館の戦である。此の時の隆景の勇姿は摩利支天の如くであったと云われている。

隆景に賛成したのが宗茂で、相共に奮戦したのである。加藤清正、安辺に在り、日本軍京城の大勝を聞いて、先陣は必ず立花ならんと云ったが、果してそうであった。

この戦いの容子から考えて、日本軍の不統一が分るわけで、京城在城の諸軍隆景と宗茂だけよく日本のために万丈の気を吐いたわけである。

ある日、秀吉が諸大老と朝鮮の事を議しているとき、黒田如水壁越しに、秀吉の耳に入るように放言して曰く、「去年大軍を朝鮮に遣わされしとき、家康か利家か、でなくば軍の道を知りたる拙者を遣わさるれば、軍法定まりて滞りあるまじく、朝鮮人安堵して日本に帰順し、明を征伐せんこと安かるべし。然るを加藤小西若き大将なれば血気の勇のみにて、仕置一様ならず、朝鮮の人民日本の下知法度を信ぜずして、山林へ逃げかくれ、安堵の思なく、朝鮮の三道荒野となって五穀なし。兵糧を日本より運送するようにては如何で明に入ることを得ん」と。秀吉壁越しに聞き、尤もだと思ったと云うが、まことに朝鮮出兵失敗の根幹を指摘している。

桃李の剣

陳舜臣

陳舜臣（ちん・しゅんしん）
大正十三（一九二四）年、神戸生れ。大阪外語大インド語部卒。同大助手として日印辞典の編集に従事。昭和三十六年、『枯草の根』で江戸川乱歩賞、四十四年に『青玉獅子香炉』で直木賞を受賞。『孔雀の道』『実録アヘン戦争』『インド三国史』『小説十八史略』『中国の歴史』等、数多くの大作を生んでいる。

一

古代史ブームで、邪馬台国や卑弥呼のことが、さかんにとりあげられるようになった。それに関連して、天理市の石上神宮の「七支刀」も、学者のあいだだけではなく、一般の人たちの関心を集めはじめた。

七支刀というのは、左右両辺に三本ずつ枝のように支刀が出ていて、主刀とあわせて七つと勘定したのである。六十余字の金象嵌の銘があり、『日本書紀』神功皇后五十二年の項に、百済王が、

——則ち七枝刀一口、七子鏡一面、及び種々の重宝を献ず。

とあるのに相当するのかもしれないといわれている。

私はいつか芦屋の桜井家を訪ね、隠居の修蔵翁と雑談したとき、たまたま七支刀のことから、話が刀剣のことに及んだ。

修蔵翁はむろん美に酔う人で、だから書画骨董を集めているが、その収蔵品リストのなかに、刀剣は数本しかなかった。

「刀はすくないですね」

と、私が言うと、翁は笑って、

「なにもかもというわけにはいきませんよ。……かというて、私、なにも刀剣の美を軽くみてるわけやありません。たしかに、人のたましいをとらえるものがそこにあると思うんですけど、そこまで私は手がまわらないというだけでしてね」

と、答えた。

「でも、何本かありましたね？」

「ええ……そやけど、積極的に手に入れたんはありませんね。人から贈られたり、あるいはなんとなく買い入れたもんばっかりです。……なんとなくというのは、無責任な話ですけど。……くだいていうたら、仕方なしに買うたケースですよ」

「仕方なしにねえ。……」

私はそのようなケースが、想像できる気がした。人の好い桜井翁は、金に困っている友人に融通することも多かったであろう。相手の自尊心を傷つけないように、金を貸すというよりは、モノを買うという形式をとったこともあったにちがいない。

「そやから、なんとなく、というよりほかはないんですよ」

と、桜井翁は笑った。

「気に入ったのがありますか？」

と、私は訊いた。

欲しいと思って買ったのではない。押しつけられた品が、このきびしい美の探求者の心に、はたしてかなうものばかりであったろうか。私はいささかこのお人好しの老人に気の毒な気がした。

「ふしぎなことに、自然に手にはいったものは、たいてい気に入るもんですな」

と、老人は言った。

「それはよかったですね」

私は老人のために、ほんとうにそう思った。

「ところで、あんた、中国のことにおくわしいので、おたずねしますけど、桃李の剣ちゅうのをご存知ですか？……いや、これはあまり特殊すぎますので、おそらくご存知ないやろと思います。……中国の人にも、なんどか訊いたことがあるんですが、どなたもご存知なかったですから」

老人はこのような質問をしたことを、詫びでもするようであった。——相手に恥をかかせてはならないと、気をつかったのであろう。知らないのがあたりまえである、ということを強調した。

——桃李の剣。

私はそれを知っていた。

たしかに特殊すぎる事項である。私はちょっと変わったテーマを、すこし調べていて知っていたので、もしそうでなければなんのことかわからなかったであろう。

桜井翁が気をつかいすぎたので、私は知っているということを、言い出しにくいかんじに

なった。すくなくとも、得々と言ってはならないと、自分を制しながら、

「清初のレジスタンスに関係のあるあれですね？　お墓に植えた木から、剣がにょっきりあらわれるといった……」

「や、や、これは驚きました。いやはや、あんたの博覧強記には、まったく兜をぬぎますよ。桃李の剣をご存知とは！」

桜井翁はひかえめな人物である。大袈裟な表現は好まない。喜怒哀楽もほどほどにすることを心掛けているようだった。その彼にしては、この感心の仕方はめずらしかった。

私は頭を掻きながら、

「いえ、ちょうどそのあたりのことを調べていたのですよ。……ええ、桃李の剣というのも、ついこのあいだ読んだところで、それでおぼえているわけです」

と、白状した。

十七世紀の半ば、明朝は満洲族の清にほろぼされたが、しばらく抵抗運動がつづいたのはいうまでもない。清朝はこの種のレジスタンスを、徹底的に弾圧したので、運動は地下に潜らざるをえなかった。そこで、さまざまな秘密結社が生まれた。

「桃李の剣」は、その種の秘密結社のあいだに、語り伝えられた物語である。

じつは私は、ある出版社から、「中国の秘密結社」をテーマに、新書判一冊を書くように依頼されていた。頼まれてから、もう四、五年にもなるだろうか。ほかの仕事が忙しくて、私はまだそれを一枚も書いていない。まことに相済まないことだが、折にふれて、資料を読み、メモをとる段階を出ていない。問題の「桃李の剣」は、ひと月ほどまえに、メモにとった伝説である。

口から口へ伝えられた伝説だが、それを書き記したもののこされている。

――桃李剣叙

というタイトルの小文で、大英博物館に収蔵されたものだ。同博物館のOr. 2339がそれである。口碑のそれとは、すこし相違しているようだが、反清運動と関係のあることは共通している。公然と語ることのできない物語が、伝わって行くうちに、いくらか変形するのはやむをえない現象であろう。

二

桃李の剣の伝説は、貞女物語が反清運動と結びついたものといえるだろう。

場所は福建の厦門島である。

そこの鄭君達という人物は、水軍都督として、湖南に出征していた。留守宅には、彼の妻の郭秀英と、妹の鄭玉蘭がいたが、二人とも絶世の美人だったのである。

ところが、たまたまその島に、一人の僧侶がやって来た。もと少林寺の寺僧であったが、あやまって仏前の玻璃灯をこわし、罰をおそれて逃亡したのである。あまり心掛けのよくない坊主であった。二人の美女をみて、心を奪われ、ある夜、ひそかに忍び込んだ。しかし、二人とも貞節な女性だったので、操を奪われるよりは死をえらんだのである。二人は抱き合

って、水に身を投げた。

さて、近くの浜に、呉成貴父子が漁師をしていたが、ある日、砂浜に二人の女性の死体を発見した。父子はそれをあわれんで、埋葬したうえ墓をたてたのである。

その墓のかたわらに、とつぜん、桃と李の木が生え、なんとそれは周囲八尺という巨木に生長した。むろん、大きな果実が枝という枝に鈴なりにみのった。呉成貴父子は桃李の果実を売って、莫大な利益を得ることができたという。

これは二人の女性の霊が、埋葬してもらったお礼に、桃李の巨木を呉父子にプレゼントしたという、一種の報恩譚である。

ところが、ある日、この地方に狂風が吹いた。砂が飛び、石を走らせるという、手のつけようのない暴風であった。このため、さしもの桃李の巨木も折れて倒れてしまった。

だが、見よ、桃と李の木の折れたところから、宝剣がにょきとのぞいているではないか。

――二人の麗人の霊は、恩人に物質面で利益を与えてきたが、もうそれはやめにして、こんどは精神面でのメリットによって、恩返しをつづけようとするかのようであった。

折しも清朝政府は、反清運動の本拠であった少林寺を急襲して火をつけた。少林寺の志士のなかの、五人が福建に逃がれ、厦門の大普庵というところにひそんでいたが、呉成貴父子は彼らと結盟し、反清地下運動に参加することになった。

呉成貴父子は、このとき例の桃李の剣を献上した。五人の同志は、この桃剣と李剣を手にとってみたが、

――宝剣、光芒閃鑠として、真に是れ大宝なり。

というので、喜んでこれを洪花亭におさめて、「反清復明」のシンボルにした。この剣は、

――能く千変万化し、空中を飛騰すること千里、人の首級を取る。

とあるから、巷間にはさまざまな活躍譚が伝えられたにちがいない。

『中国秘密社会史』に紹介されている桃李剣の伝説は前記の大英博物館収蔵の記事といささかちがっている。

鄭君達は出征して戦死し、のこされた妻と妹と二人の息子が、反清地下運動をおこなったことになっている。そして、ある日、四人が鄭君達の墓参りをしたところ、清の軍兵に囲まれた。彼らは前からマークされていたのである。もはやこれまでか、と思われたが、このとき鄭君達の墓のなかから、さっと一ふりの桃剣がおどり出て、未亡人郭秀英の手にとびこんできた。彼女はそれを摑んでふりまわすと、べつに力もいれず、狙いもつけないのに、ばっさばっさと清兵の首が斬れて行くのである。こうして、やっと危難を免れることができた。

しかし、これを知った清軍は、大軍を投入して彼らを捜索しようとした。郭秀英はもはや逃がれることはできぬと観念し、二人の息子、鄭道徳と鄭道芳に宝剣を与え、自分は夫の妹の玉蘭とともに、三合河に身を投げて死んだ。のちになって謝邦恒なる者が二人の死体を丁重に埋葬し、河のほとりに石碑を立てた。……

以上は、私がこのあいだメモしたばかりのことだが、桜井翁はだいぶまえから知っていた。

「ほう、よくご存知ですね」

と言うと、老人は笑って、

「だって、その桃李の剣というのを、私は買ったんですからね。……買わされたといったほうがいいかもしれませんけど」

と答えた。

「へえ……桃李の剣を？」

私は驚いた。千里をとぶ剣など、あまりにも伝説めいて、それが実在するなど、ゆめにも考えられなかったのである。いったい剣が空をとぶというのは、中国的な発想であるらしい。中国の講談や人形芝居、あるいは初期の武侠映画などには、「吐剣光」というのがよく登場する。主人公が危ないときに、吐き出された剣が、飛んで行って、相手の胸にぐさりと刺さり、めでたし、めでたし、で終わる。子供たちばかりか、いい年をした大人でも、けっこう面白がって観ていたが、かといってその実在を信じる者がいたとは思われない。

「そう。正確にいえば、そう称されている剣です。……しかも、ほんとうは剣ではのうて、刀ですよ。ごらんにいれましょうか」

桜井翁は立ちあがって、収蔵庫のほうへ行った。

剣とは両刃で、おもに刺すのに用いられる。刀は片刃で、「斬伐」――すなわち、たたき切る武器である。むろん剣で斬ることはできるし、刀で刺すこともできる。両者は、しばしば混同されてきた。聖徳太子が佩用したといわれる「七星剣」も、片刃なので、本来なら刀というべきものなのだ。古くから刀と剣は混同され、中国でも日本ほどではないが、やはり言葉の用法に混乱がみられた。

三

「や、それは……」

やがてあらわれた桜井翁が手にしたものを見て、私は思わず声をもらした。

兵庫鎖の拵え太刀は、一見して、日本刀とわかる。わずかに反りがついている。

「日本刀やないかとおっしゃりたいのでしょう。……拵えは数年前に、こちらでやり直したもんやけど……でも、中身も日本刀にまちがいありません。たしかに日本刀そのものですわ」

桜井翁は絨毯のうえに正座し、その刀を抜き、ふくさをあてがった。

「いかがですか？」

と、老人は言った。

私は刀剣のことは、ほとんど知らないといってよい。しかし、気品というものは、しろうとにもわかるものであるらしい。武器を越えた美を、私はその刀身に認めた。刃はあっさりした湾れで、刀剣本身のもつきびしさを、あるていどやわらげていた。

「りっぱなものですね」

私は月並みな言葉で答えた。

「終戦まもないころ、私の友人が持ってきたもんです。拵えは、そりゃもうひどいもんでし

たわ。もとは金ピカの厚化粧で、それが崩れて、なんやら異様なかんじでしたわ。ええ、漆の鞘に、メッキのブリキ細工みたいなもん、ひらひらつけてましてな。……そやけど、中身を見たら、こりゃいける、と思いましたんや。その友人も、旧軍人で、生活にも困っとりましたよって、ちょっと張り込んで、買わしてもらいましたんや」

桜井翁は、そんなふうに、入手のいきさつをかんたんに述べた。

「古いものですか？」

恥ずかしいことに、私はそんな単純なことしか訊けなかった。

「銘がちゃんとありました。鑑定にも出しましたが、ま、たしかなもんです。三代信国のいいものですわ」

「三代信国というと、いつごろですか？」

刀剣界では常識のことであろうが、私はその高名らしい刀工の時代を知らなかった。

「応永です。十四世紀の末から、十五世紀のはじめにかけて、足利義満から義持にかけての時代の人ですわ」

桜井翁は、私の物知らずを、べつに軽蔑するふうもなく、そう教えてくれた。

「そうですか。……じゃ、これは、いったん中国へ渡った剣ですか？」

と、私は訊いた。

「そやから、桃李の剣になってしもうた。……もっとも、桃と李と二つの刀があったらしいけど、こっちは桃の剣ですわ。ほら、この彫物をごらんなさい。……例の大英博物館文書にはなんとありましたかいな？」

と、桜井翁は言った。

――二竜争珠

大英博物館文書には、桃李剣をたしかそう説明していた。中国のデザインには、ごくふつうのもので、日本でも「珠追い竜」といって、刀身によく彫られる図柄である。

桜井翁は内がわにしていた刃を、外がわにむけた。裏にも竜が彫られていた。

「なるほど、桃李の剣には、竜が彫ってあると書いていました」

と、私は答えた。

「信国の刀は、彫物が多いことで知られてます、はじめから、表と裏に竜を彫って、むこうへ持って行ったにちがいありません。そやけど、はじめは珠追い竜とちごうて、ただの上り竜と下り竜でしたんや。珠はあとから……中国で彫ったもんです。彫り方がちがうのでわかりますわ」

と、老人は言った。

珠追い竜は、竜の頭の前に、宝珠があるのだ。竜はそれをつかもうとしているのだが、上り竜の上に宝珠を彫りつけると、珠追い竜のデザインになるわけなのだ。

「ようごらんなはれ。……飾りのついた宝珠みたいにみえるけど、はたして、ほんまの宝珠やろか？」

老人にそう言われたので、私は目をこらして、竜の前にある、小さな球形のものをみつめ

た。

「あ、桃！」

私は小さな声をあげた。

それは宝珠ではなく、まぎれもない桃の実であった。

――それで桃の剣か。……

竜の部分は、ただの鋤下彫りであったが、桃のところだけは金象嵌してある。

「桃と竜が、ちょっとちぐはぐなかんじがしませんか？」

と、桜井翁は言った。

「そういえば。……ではこれは、輸出品で、こちらのオリジナルに、むこうで加工したのでしょうか？」

「そうとしか思えませんね。ただし、むこうで、日本から輸入した当初に、すぐに桃を彫ったんか、それとも、だいぶたってから彫ったんか、そこまではわかりませんな。私の推理では、すぐに彫ったんやのうて、だいぶたってから、という気がしますんや」

「それにしても、信国なんて、名の通った名工の刀を、よく輸出したものですね」

と、私は言った。

明代には、日本からさかんに日本刀が輸入された。しかし、日本でいう「数打ち」、すなわち大量生産の、あまりよくない刀ばかりであったという。明国の人に、日本刀鑑定の素地がなく、いかにもよく切れそうなかんじさえ出ておればよいので、逸品を送るなど、勿体ないと思われていたはずだ。

「もちろん、輸出日本刀の大部分は、粗製濫造品ですよ。そやけど、当時の貿易は、なんちゅうても、朝貢の形式をとっとりますよって、商品のほかに、明の王室に献上する特殊な品も持って行きましたんや。この信国の刀かて、おそらく献上品でっしゃろ」

桜井翁は、しばらくその刀身に見惚れるように目をそそいでいたが、やがてそれをもとの鞘におさめた。

四

日本刀が中国へ輸出されたのは、明代からはじまったことではない。そのまえの元代以前、宋代からのことであったらしい。

宋の欧陽修に、『日本刀歌』という詩がある。――

宝刀、近く日本国より出ず
越賈（浙江商人）之を滄海の東に得たり
魚皮もて装貼す香木の鞘
黄白、間雑す鏤と銅
百金伝えて好事の手に入る
佩服して以て妖凶を禳う可し

……

好事家が百金を惜しまず、日本刀を買い入れたことがわかる。

明代の刀剣は、日本から輸入したものか、あるいは明で日本刀に倣って造ったものか、そのいずれかであった。

足利幕府歴代の将軍が、明の王室に贈呈した刀剣の数は、記録にのこっているものだけで、総計すれば、

大刀　六百十九本
薙刀　五百本
槍　百本

ということになる。王室への献上品ともなれば、大量生産の粗悪品を充てるわけにはいかない。その拵えも、記録によれば、金漆鞘大刀とか黒漆鞘大刀などとある。明ではこれを御林軍（近衛師団）でも使っていたらしく、故宮に深く蔵されて、今日までのこっているものもある。

信国の刀なども献上品であったとしか考えられない。いつの時代かは不明だが、応永八年（一四〇一）、同九年、同十四年、十五年と、かなり頻繁に通商したころと推定してもよいだろう。

「大英博物館の文書は、桃李剣叙となっていますが、この刀を買ったときには、桃李剣記という書類がついてましたんや」

と、桜井翁は言った。

老人はその刀を買ったいきさつを述べたが、そのあらましはつぎのとおりである。

――昭和二十三年の秋、桜井修蔵氏は中学時代の同窓生橋詰稔の訪問を受けた。橋詰は陸軍士官学校に進んだが、少佐で退役し、その後、中国で軍関係の仕事をしていた人物である。出身は三重県で、戦時中は日本と大陸のあいだを往来して、かなり羽振りもよかったようであった。しかし、戦後、身ひとつで引き揚げたあと、旧職業軍人という経歴もあったせいか、なにをしてもうまく行かなかった。桜井翁を訪ねたのは、こんど新たに真珠養殖の仕事を友人と共同で始めることになったが、資金が不足なので、なんとか融通してもらえないか、という用件であった。

――売り食いの生活がつづいて、抵当らしいものはないが、金目のものはこれだけ。

橋詰稔はそう言って、例のブリキ細工のメッキに飾られた刀を出したのである。

橋詰が必要とした資金は五十万円で、当時としてはかなりの額であった。まだ千円紙幣が登場していないころのことなのだ。

――出所は悪くないんだ。戦時中、北京である有力中国人を、あることで助けたとき、お礼にもらったものだ。あの家にあったのだから、でたらめなものではないと思う。

と、橋詰は言った。

世渡りの下手そうな旧軍人は、思い詰めた表情をしていた。

桜井翁――いや、当時は働き盛りで、翁などと呼べば失礼にあたるだろう。修蔵氏と呼ぼう。修蔵氏はその刀を抜いてみた。さすがに旧軍人の手もとにあっただけに、刀身の手入れは行き届いていた。ちゃちなのは拵えだけであった。修蔵氏は刀剣は集めなかったが、じつはそのほうでもかなりのめききだったのである。刀剣を集めている友人に、よく名刀をみせてもらい、だいぶ講釈もきかされていた。

――目釘は抜いてある。

と、橋詰は言った。

目釘を抜いておくと、茎がすぐに柄から抜け出す。茎をみせるためだが、銘がはいっているのであろう。

修蔵氏は慎重に柄をはずし、茎をみた。舟底型の茎で、そこに、

――源左衛門尉信国

と銘が切られていた。

（これはほんものだ。……）

修蔵氏はとっさにそう思った。美術の愛好家として、彼は自分のカンを信じていたのである。

――いくら貧乏しても、これだけは売るわけにはいかんので……おかげで、手もとにのこったよ。

と、橋詰は言った。

戦後、マッカーサーの指令によって、刀剣の所持が禁止されていた。橋詰はこの由緒ありげな刀を、床の下にかくしておいたという。禁止時代でも、筋をたどれば、売る方法はあったであろうが、橋詰にはそんな才覚はなかった。――それまでしなくても、と思っていたのだが、ギリギリまで追い詰められて、やっと中学時代の同窓生の桜獅子酒造の社長桜井修蔵が、骨董のコレクターであることを思い出し、こうして訪ねてきたのである。

それでも、橋詰は売るとは言い出しかねていた。――借金の抵当に置きたい、と言ったのである。修蔵氏は相手の口ぶりや表情から、橋詰はこの刀にそれほど執念があるわけではないと察した。謝礼として贈られたので、持っているだけである。そして、マッカーサーの指令が気に入らなかったので、供出しなかったのにすぎない。

――気に入ったなあ。ええ刀や。抵当などと言わんで、売ってくれんか？

と、修蔵氏は言った。

しかし……

橋詰は口ごもった。

――手放したうないんかいな？

――いや、そうじゃない。……ま、ちょっとした思い出のある刀だが、いつまでも持ちたいとは考えていない。……やっぱり、生活のほうが大切だし……

つまり、できれば売りたい、ということなのだ。――ただそれを言い出すのが、ためらわ

れたのである。

——金借りるのは、借りてると思うただけでもしんどいことや。金利もみんならん。それより、これをあっさり手放したらどないやろ？　五十万で。

と、修蔵氏は言った。当時としては、三代信国の五十万は、だいぶ奮発した値段であったそうだ。

——そうか、買ってくれるか。……

橋詰はうなずいた。そして、内ポケットをごそごそさぐって、二つに折った白い封筒を取り出した。

——なんや、それは？

と、修蔵氏は訊いた。

——この刀の由来書や。漢文で書いてあるけど。……

橋詰はそう言って、その封筒の皺をのばしてから、テーブルのうえにのせた。

こうして、桃剣が桜井修蔵氏の手にはいったのである。

五

「これが、その由来書というもんやが……」

桜井翁がそう言って、私の前に置いたのは、おなじ白い大型の封筒でも、二十数年前のそれとは別のものであろう。どこにも皺はないし、その表面に、

——桃李剣記

と記されているのは、見おぼえのある桜井翁の筆跡であった。

私はそれを手にとった。

「読んでみなはれ。……なあに、ごく短い文章ですわ」

と、桜井翁は言った。

私は封筒から、紙をとりだしてひろげた。たしかにそこに記されている文章は、きわめて短いものであった。

——桃剣及び李剣は、明の崇禎帝護身の剣なり。

という書き出しである。

崇禎帝は明王朝最後の皇帝であった。一六二七年に即位し、在位すること十七年、一六四四年、李自成軍に包囲されて自殺した。彼の死後、南京や福建・広東・広西あたりに亡命王朝がたてられたが、明王朝は崇禎帝の死によって、実質的に滅びたといってよい。

さて、『桃李剣記』によれば、李自成軍が迫ると、崇禎帝は皇太子の慈烺に李剣を与え、ひそかに宮殿から逃がした。皇帝は自ら桃剣を佩いて、紫禁城にとどまったのである。

史書によれば、崇禎帝は大そうヒステリックな皇帝であったらしく、失政や敗戦をすべて家臣のせいにして、処刑を連発させ、名臣や名将を失い、ついに自滅したのだ。

落城必至とわかってから皇帝は男の子を逃がしたが、女の子は凌辱されるのをおそれ、父である自分の手で殺そうとした。

崇禎帝には二人の娘がいた。十五歳の長平公主と六歳の昭仁公主である。

皇帝は桃剣を抜き放って、寿寧宮の長平公主の部屋にはいった。長平公主は跪いて、

――父上、お待ちいたしておりました。なにとぞ死を賜りますように。

と言う。

皇帝は慟哭をこらえ、肺腑をしぼるような悲痛な声で、

――ああ、おまえはどうして我が家に生まれてきたのだ。

と言って、剣をふりあげた。自分の娘を斬るのである。彼は目をとじた。見るに忍びない場面なのだ。

彼がいま手に握っているのは、二百年も前、明王朝の威光が天下にあまねく輝やいていたころ、東海の日本から贈られた桃剣であった。そのころの日本のあるじであった足利義満は永楽帝（在位一四〇二―一四二四）の即位に賀表を送り、

――日本国王、臣源表す。……

と臣礼をとり、馬二十頭、硫黄一万金、瑪瑙三十二個、金屏風三双、槍一千、大刀一百、鎧一領、硯一面、扇百本などを贈った。百本の日本刀のなかでも、とくにすぐれたのをえらび、皇帝護身刀としたのが桃李の剣である。

いま崇禎帝の手には、刀の重みのほかに、歴史の重みも加わっているはずだった。ふりかぶった刀を、思いきってふりおろすまえに、彼はかすれた声で言った。――

――こんど生まれ変わるときは、皇室の家などに生まれるでないぞ！

うわーっ、と叫びとも泣き声ともつかぬ、吼えるような声が、彼の喉からしぼり出され、その勢いにのって、やっと彼は刀をふりおろすことができた。手ごたえがあり、彼は目をあけた。

娘の白衣が血に染まっていた。

皇帝はふりかえりもせずに、昭仁殿のほうへ走って行った。昭仁殿には昭仁公主が住んでいたのである。

昭仁殿まで来たとき、皇帝はもう疲労困憊していた。肉体の疲れよりも、精神が参ってしまっていた。それに、これから殺そうとする娘は、まだ六歳、いたいけな幼女ではないか。

皇帝はもはや、桃剣をふりあげる気力さえなくなっていた。彼は両手で刀の柄を握りしめ、またしても目をとじて、やっとのおもいで前へ突いた。

昭仁公主はほんの一瞬、短い泣き声をあげただけである。皇帝は無我夢中で、我が娘のからだに刺しいれた刃をひき抜き、よろめきながら外へ出た。

血のしたたる刀をひきずり、皇帝は自分の住居である乾清宮に戻った。

息子たちを城外へ逃がし、娘たちを殺したのである。もう後顧のうれいはない。二百八十余年の王朝の歴史の名誉にかけて、いさぎよく決戦して斬り死にしよう。――皇帝はそう考えた。

宮殿内には、非常用の警鐘があった。その鐘を鳴らせば、近衛兵をはじめ、文武百官が集まるはずである。皇帝はみずから、その警鐘を乱打した。

――鐘を鳴らして、百官を集めんとせしに、至る者なし。

『桃李剣記』には、そのときの情景を、非情の筆をもってそう記してある。

――もはやこれまで。……

皇帝はあきらめた。

早朝、彼は紫禁城の北にある万歳山にのぼった。一名を煤山（メイシャン）という。中国の煤は「石炭」を意味する。

元の忽必烈（クビライ）が、北京が包囲されたときの非常用の燃料として、城北におびただしい石炭を積みあげ、そのうえに土をかぶせ、樹木を植えたという。これが黄金という伝説なら、試掘する者もいたであろうが、石炭では誰も魅力をかんじない。はたして、石炭が埋められているかどうか、いまだにわからない。現在、この山はふつう景山（チンシャン）と呼ばれている。山といっても、一ばん高いところが三十七メートルあまりにすぎない。

皇帝は万歳山上にある「寿皇亭」というあずまやで自殺したのだった。皇帝の長寿を祈って名づけられた亭で、皇帝が自殺しなければならなかったのは、歴史の皮肉というほかはない。

崇禎帝は、桃の剣でもとどりを切った。明人は総髪（そうはつ）にして束ねるのがふつうであった。長い髪は皇帝の背にばらりと垂れたが、彼は白衣をぬぎ、その襟に遺書をしたため、再びそれを身につけた。

首を吊る前に、彼は背に垂れた髪を、両手で前へ押しあげた。髪は彼の顔に垂れたのである。

白衣の襟にしるされた皇帝の遺書は、つぎのような文面であった。

――朕（ちん）は基（もとい）に登って十七年、上に天の罪をむかえ、虜（あだ）に地を陥（おと）されること三次、逆賊直ちに京師にせまる。皆（みな）、諸臣の朕を誤まりしなり。朕死して先帝にまみえる顔無し。よって髪をもって面を覆（おお）う。賊をして朕の屍（しかばね）を分け裂くにまかせん。また文官を尽（ことごと）く殺死するもよし。ただし陵寝（みささぎ）は壊すなかれ。我が百姓を一人たりとも傷つくるなかれ。……

死にいたるまで、皇帝は王朝滅亡の責任を、臣下になすりつけようとしている。明王朝はこの崇禎帝のもとで、ほろびるべくしてほろびたといえよう。

彼が首を吊った寿皇亭の床のうえには、黄金造りの、あの桃の剣が横たえられていたのだった。――

六

皇帝に桃剣で刺された六歳の昭仁公主は死んだ。しかし、斬られた十五歳の長平公主は死ななかった。自分の娘に刀をふりおろすとき、力がこもるはずはない。長平公主は左腕を斬られただけで、それも大した傷ではなかったのである。彼女はのちに周という青年と結婚したが、病気のために夭折（ようせつ）した。

明朝をほろぼしたのは清朝といわれるが、ことのいきさつはそんなにかんたんなものではない。東北に満洲族の清朝が、しだいに勢力を得て、のちに中国全土を制圧するのだが、西のほうにも李自成の農民軍が明朝を悩ましていた。彼らは明朝の圧制に耐えかねて決起した、貧民軍団である。領袖の李自成は、もと宿場人足であった。

北京に雪崩れ込み、紫禁城を包囲して、崇禎帝を自殺に追いやったのは、この李自成の軍隊であった。清朝はこの李自成軍を攻めて天下を取ることになった。

ともあれ、皇帝の自殺したあと、紫禁城に乗り込んできたのは李自成軍であった。

皇太子は母親の実家に逃げたが、転々と居所をかえているうちに、かくまった人間に裏切られて、李自成のもとへ連れて行かれた。

李自成は大順帝国の皇帝と名乗っていた。皇帝は諸侯を封じることができる。

――明王朝の皇太子は、宋王に封じてやろう。わしは王朝をほろぼしても、その後嗣を絶やさぬように配慮するのじゃ。

李自成は寛大なところをみせた。

彼は明の皇太子の所持品をしらべ、その李剣が寿皇亭にのこされていた桃剣と対になっていることを知った。

宿場人足出身の李自成は、雲の上の人たちのしきたりを知らない。

（どうやら、皇帝が桃剣、皇太子が李剣を持つものであるらしい）

と、想像した。

――おまえを助けて、宋王に封じてやる。ただし、その李剣は所持してはならぬ。こちらに没収する。

李自成はそう言って、李剣を取り上げた。

こうして桃李の剣は双方とも李自成の手中にはいったのである。

明朝の文武官僚は続々と李自成に降った。

もはや天下の形勢はきまったかにみえた。

明の将軍として、山海関で満洲軍団と戦っていた呉三桂も、いったん李自成の大順国に帰順しようとした。だが、北京からあるしらせを受けると、彼は投降することをやめた。それどころか、目をギラギラさせ、

――うぬ、李自成のやつめ、いまにみておれ！

と、吐いてすてるように言った。

そのしらせとは、呉三桂将軍が北京にのこしてきた愛妾の陳円円を、李自成のある部将が奪って、自分のものにしているということだった。

呉三桂は自分がいままで戦ってきた相手――満洲軍団と停戦した。そのうえ、満洲軍団の力を借りて、北京の李自成を攻めようとしたのである。

満洲軍団は、英主ホンタイジが死んだばかりであったが、幼主（順治帝）を補佐する摂政王ドルゴンも兄ホンタイジに劣らぬ、すぐれた指導者であった。

これぞ絶好の機会！

ドルゴンは呉三桂の依頼を受けると、二つ返事で出兵に同意した。こうして、昨日まで相対峙していた両軍が、今日は肩をならべて西へむかったのである。

満洲軍団にしてみれば、祖父ヌルハチの時代から、どうしても破れなかった山海関を、無血で通り抜けることができる。まさに願ってもないことなのだ。

こちらは北京の李自成。――山海関を守る明将呉三桂が、軍を西へ返しつつありというしらせに接し、

――明の遺臣のなかにも、すこしは骨のある人物がいたわい。しかし、完膚なきまでに叩いて、我が大順の威光をみせてくれようぞ。……

と、大軍を率いて東へむかったのである。

この時点では、李自成は相手が満洲軍団と結んだということを知らない。

満洲軍のドルゴンは、呉三桂と李自成を戦わせ、両軍が疲れ切ったところを見はからって、満洲騎兵を投入するという作戦をたてた。

――やはり気骨のある将軍の率いる軍隊は、すこしは強いようじゃな。だが、あと一と息だ。もう一と押しすれば、呉三桂軍も崩れるだろう。我が方も苦しいが、敵はもっと苦しいのに相違ない。

李自成が呉三桂軍と戦って、部下をそう励ましていたとき、一人の幕僚が、

――新手の騎兵集団数万が、とつぜんあらわれましたぞ！

と急報してきた。

――なに数万と？

――はっ、まちがいございません。その騎兵集団の将兵は、ことごとく辮髪すがたでございます。

――なに、辮髪だと！　しまった！　呉三桂のやつ、なんということをやったのだ！

李自成は唇をかんだ。

辮髪は満洲族の風習であった。あの精強の満洲騎兵の大軍が、明軍のなかでは最も勇敢な呉三桂軍と結んだのである。おそるべき敵ではないか。

雲霞のごとく出現した満洲騎兵団の攻撃に、李自成軍は支え切れず、ついに敗走をはじめた。永平まで逃げた李自成は、呉三桂に軍使を送って、和を乞うた。

――我が軍中には、かつての明の太子、いまの宋王慈烺がおわすぞ。もし軍を山海関まで退いてくれたなら、この宋王を釈放してもよい。

という条件をもち出したのである。李自成は呉三桂を明の「忠臣」であると思い込んでいた。明の皇太子を釈放するといえば、引き取るであろうと考えた。

だが、呉三桂の西征は、明の王朝への忠義のためではなかった。愛妾陳円円を奪われた、遺恨のための進撃だったのである。

――問答無用！

という返事があり、攻撃がつづけられ、李自成軍はまたまた敗走しなければならなかった。もう勢いがついてしまった。李自成にすれば、なんとか北京で敗走に歯どめをかけたいと

ころである。だが、追撃ははなはだ急であった。

李自成軍は、四月二十九日に北京に逃げ込み、一日いただけで、翌三十日には再び敗走をつづけることになった。北京滞在の一日のあいだに、李自成は武英殿で即位の式をあげ、呉三桂の一家三十数人を、ことごとく斬殺したのである。

呉三桂軍と満洲軍団の北京入城は五月一日のことであった。こうして中国大陸の支配権は、漢族から満洲族の手に移ったのである。

七

敗走した李自成はどうなったか？

それよりも、彼が持っていたあの桃李の剣はどうなったか？――『桃李剣記』は、そのことを記しているのだ。

李自成は西へ逃げた。清朝は摂政王ドルゴンの同母弟のドドが、追討軍の総司令官となって、李自成のあとを追った。

李自成は自分の古巣の陝西に逃げ込み、天下の険といわれる潼関をかたく守った。塹壕を掘り、大砲を据えて、清軍とはげしく戦ったのである。

清軍は作戦を変えた。守りのかたい潼関にてこずって、攻撃をくり返すよりは、一部の軍隊を迂回させ、背後を衝いたほうが効果的であることに気づいたのだ。

なにしろ騎兵が主力なので、機動力があった。はるか陝西の北部の綏徳から南下し、のちに革命の聖地になった延安から、李自成の本拠である長安（西安）をめざした。

これで、李自成は東と北から敵の攻撃を受けたので、南のかた藍田から武関を出て、襄陽をめざして逃がれた。

清軍の入城五日前に、李自成は長安を脱出している。このころ、武昌の左良玉将軍は東へ移動していたので、李自成は無人の地域に逃げ込んだわけだ。しかも、彼の身辺にはまだ三十万の大軍がいた。

――南京を取ってやる！

と、李自成は広言した。

だが追撃した清軍に敗れて、さらに南下し、湖北省の東南隅、ほとんど湖南省との境界に近い通城というところまで出た。

清朝二百六十八年の「正史」はまだ編纂されていない。諸書にみえる記述では、李自成は通城で死んだことになっている。そのいきさつはつぎの通りである。――

李自成は親衛隊二十騎に護られて、通城の九宮山までやってきた。九宮山は一名を羅公山ともいって、その頂上に玄帝廟という道教の寺があった。

――わし一人で玄帝廟に参詣するから、おまえたちは待っておれ。

李自成は二十騎の部下にそう命じて、廟のなかにはいった。

日本でもお寺は近所の人たちの集会場所になるが、中国の寺廟もおなじである。ちょうどその玄帝廟には、土地の有力者が集まっていたのである。清の追討軍からは、その地方に布

告書がまわっていた。李自成の人相書もそれについていた。李自成は人相書なしでも、ひと目でわかる人物であった。すなわち、片目なのだ。

集会中の人たちが、ふと本殿のほうを見ると、金竜の服を着て、金印をさげた片目の人物が、廟にむかって祈っているではないか。

――えらいことになったぞ。そりゃ李自成にまちがいねえ。

――なんで、おらたちのところへやって来たんだい。迷惑なこった。

――このまま見逃がして、あとでわかれば、おらたちの首がとぶ。

――ようすをみよう。手下共はいるかね？

――いまのところ、一人だけのようじゃが。……

村人たちが、ひそかに調べてみると、二十人ばかりの兵士が、山の下にいて、廟内は片目の男しかいないことがわかった。

――思い切ってやるべえ。おらたちのためでもあるのだ。

そういう結論になり、十数人の若者をあつめ、祈願中の李自成の前後左右から、棒や鋤を持って襲いかかった。そして、証拠の首を取って、ひそかに消え去ったのである。なにしろ土地の人たちなので、抜け道などをよく知っている。

御大将の帰りがあまりにも遅いので、麓の二十騎が、廟にはいってみたところ、そこに首のない死体が、血の海のなかにころがっていた。――

武芸の心得のない村人たちが、恐怖も手伝って、盲滅法に鋤で殴りつけたのだから、せっかくの首も、みるもむざんに崩れていた。ほとんどその容貌も判別できなかったので、世間では李自成生存説が、かなり信じられたようである。

ある書には、村人たちに囲まれ、もはや逃がれることができぬと観念した李自成が、廟の梁に帯をかけ、首を吊って死んだということになっている。

一説には、そのときの李自成は替玉であったともいう。

生存説や替玉説があっても、李自成がそのあたりで消えたことはたしかである。すくなくとも、歴史の舞台には、もう二度と登場することはなかった。

ところで、わが『桃李剣記』にはどう記されているだろうか？

李自成が二十騎を山麓にとどめて、単身、九宮山の玄帝廟に参詣したところまでは、定説とおなじである。

だが、彼はそこで土地の人たちにみつからなかった。廟のまえで、一心不乱に祈念していたのだった。

玄帝とは玄天上帝のことである。一般に天帝といわれ、道教の諸神のなかで最もポピュラーであり、最高位とされていた。

李自成はそこにひれ伏し、全身全霊をこめて祈った。

――もはや大順帝国の帝位も、覇者の地位も要りませぬ。栄耀も富貴も望みはいたしませぬ。そのようなものは、進んで、喜んで棄てまする。なにとぞこの身ひとつ、安穏に余生を送ることを叶えさせてくださいませ。なにとぞ、なにとぞ。……

その熱烈な祈りは、天にまします玄帝に達したようである。李自成の心ぜんたいがうちふるえるほどの声で、玄帝の言葉が響き渡った。その声は、九宮山をも揺るがせたようにかんじられたが、じつは李自成だけにしかきこえなかったのである。

――汝の祈りはきき届けてつかわす。されど、条件がある。世俗の欲望を断ったあかしに、汝の佩びるところの桃李の剣を、この廟内に埋めて立ち去れば、無事にこの場を脱出できるであろう。わが廟の東南に、桃の木と李の木がある。両者の中間に、両剣を深く埋めよ！

玄帝の言葉が終わったので、李自成が面をあげると、前の香炉のそばに、鍬が一本横たわっていた。ひれ伏す前には、そのようなものはなかったはずである。

（ああ、これで桃李両樹のあいだを掘って、剣を埋めよ、と申されたのだな。……）

李自成はそう思って、その鍬をとり、玄帝に言われたとおり、両樹の中間のところを深く掘り、桃李の剣を埋め、そのうえに土をかぶせ、すこし踏みかためたあと、鍬をもとのところへ戻した。

廟のなかには、玄帝の木像があった。李自成がそれにむかって一礼して、立ち去ろうとすると、ぐらぐらと大地が震動した。

――はっ！

と叫んで、李自成が再びその場にひれ伏すと、玄帝の声がきこえた。――

――不精者め！　埋めたところを、もっともっと踏みかためよ。さもなければ、すぐにみつかってしまうわ！

――かしこまりました。

かつて百万の大軍の総帥として、三軍を叱咤し、帝位にまでのぼったことのある李自成も、いまは上官に叱りとばされた従卒のように、あわてて桃李両樹のあいだの土を、丹念に踏みかためるのだった。

――もうよろしゅうございますか？

李自成は廟前に跪いて訊くと、まえほどではないが、かすかな地震がかんじられた。

――なにごとでございましょうか？

――鍬の置き方がまちがっておる。鍬の頭をおまえのほうにむけてあったはずだ。もとのとおりにせよ。

――はっ。

――西のほうへ行け！

――ありがとうございました。

こうして李自成は、誰にも発見されずに、どこかで静かに余生を送った、ということになっている。

八

九宮山の麓で待っていた二十騎は、全山くまなくさがしたが李自成のすがたはどこにもみえない。

李自成は蒸発したのである。

——天に登ったか、地に潜ったか？

と、人びとは首をかしげた。

敗残の軍とはいえ、三十万の軍勢がのこされたのである。

李自成の甥の李錦が、有力部将の郝永忠、袁宗第、王進才、馬士秀、盧鼎たちとともに、この三十万を分割統率することになった。だが、清軍の攻撃を支えることができそうもないので、湖北・湖南の地で、明の遺臣として、清軍と戦う態勢をとっていた、明の湖広総督何騰蛟の軍門に降って、そこに所属した。

明を攻めて、その皇帝を自殺に追いやった李自成の残党が、明の忠臣の軍に参加するなど、いささか奇妙なことである。しかし、何騰蛟にしても、三十万の大軍は喉から手の出るほど欲しかった。もと賊軍などといっておれないのである。

とはいえ、三十万の全軍が何騰蛟に属したのではない。

——大半は帰農し、留まるのは三分の一。

といわれているように、せいぜい十万にすぎなかったようだ。

何騰蛟の精忠も、時の勢いにはかてず、清軍に攻められ、湖南で死んだ。絶食による自殺であったという。

李自成の甥の李錦は、湖南で敗けると、桂王（桂林の亡命明政権のあるじ。永暦帝と称した）のいる広西へ逃げた。

——地のはてまで逃げたとて、なににならろうか？　われらはもともと造反の軍兵であったのだ。そこまで明の王朝に尽すことはあるまい。そもそも、明の皇帝を死に追いやったのはわれらではないか。

李自成の部将の一人の袁宗第は、そんな考えをもっていたので、早くから戦線を離脱し、農夫に変装して北へむかった。

通城の九宮山まで来たとき、彼はため息をついて、

——われらの領袖李自成は、この地で行方知れずになったという。……いったい、あの人はどこへ行ったのだろうか？

と、ひとりごちた。

すでに夜になっていた。彼は九宮山上の玄帝廟に泊ることにした。うちつづく戦乱のために、その廟は無住になっている。ひろい廟内にはほかに人影はない。

——ゆっくり休ませてもらおう。

袁宗第は廟の本殿の床に、ごろりと横になって、大きないびきをかいて眠りはじめた。どれほど眠ったか、彼はおぼえていない。夜中、彼は大きな地震で目をさました。廟の本殿は上下に揺れている。そして、外には雨の音がはげしい。その雨の音を圧するような大音声が、どこからともなくきこえてきたのである。

——われは大明国の崇禎皇帝なるぞ。ここ玄帝の廟をかりて、忠誠の士をもとむ。今宵、汝来たる。われ、汝に告げん。廟の東南に桃李二樹あり。その間の地を掘れ。わが怨恨のこ

もりたる桃李両剣あり。汝持ち去りて、ひそかに奉斎し、盗国の賊を滅ぼせ！

声が終わると同時に、天地をどよもす雷声がきこえ、稲妻が走った。

袁宗第がぶるぶる顫えていると、

――汝の眼前に鍬あり。それをもて掘れ！　疾く行け。行かざれば、雷神、汝の頭上に鉄鎚をくだすべし！　行かぬか！

と、怒りを含んだ声がきこえた。

――参りまする、参りまする！

袁宗第は、鍬をつかむと、あわてて外へとび出した。

深夜であったが、夜空にときどき稲妻が走るので、廟の庭のもようはわかった。雨はもうあがっていたが、地面は濡れている。やわらかくて掘り起こしやすい状態であった。東南隅の桃の木と李の木をたしかめると、彼は目測で、その中間のところに鍬をいれた。

こうして袁宗第は桃李両剣を得たのである。

（これはたいへんなことになった。……）

袁宗第は両剣を抱いて、夜のあけるのを待つつもりであった。

どうやら万歳山で自殺した崇禎帝の亡霊は、この玄帝廟で、だいぶ前から網を張っていたようである。

李自成軍の幹部として、袁宗第はあるじ李自成が、桃李の剣の所有者であることを知っていた。その両剣が地中に埋められていたということは、持主の李自成も土のなかにいるとしか考えられない。それは崇禎帝の怨霊が、祟って殺したのにちがいない。――袁宗第はとうぜんそうであると考えた。

崇禎帝の怨みは二つあるはずだった。

第一に自分を死に追いやった者への怨み。

第二に、自分が祖先からうけついだ大明帝国を奪った者への怨み。

第一の怨みの対象である李自成は、たった一人でここへ来たので、かんたんにとり殺してしまった。

いま、かつての大明国の版図は、清朝に奪われている。だが、彼らは巨大な組織をもっている。さすがの崇禎帝の怨霊も、それには歯が立たないとみえる。――桃李の剣に怨みを吹きこみ、生きている人間にそれを託して、復讐をはたそうとしたのであろう。

亡霊はたまたまやって来た人間に、それを託したのである。それが李自成の部下であったとは、亡霊といえども察知することができなかったにちがいない。だが、ぐずぐずしておれば、亡霊も気づいてしまうおそれがある。

（早くここからずらかろう）

袁宗第はそう思い直して、そっと廟からぬけ出そうとした。

そのとき、床がぐらりと小さく揺れ、

――桃剣は汝が持つべし。李剣は蘇州寒山寺裏の呉心良なる若者に渡せ。わかったな？

という声が追いかけてきた。

——はい、かしこまりました。

と答えると、大地の揺れはおさまった。

袁宗第は一目散に駆けだした。

彼は亡霊の言葉にたがえば、たちどころに祟りがあるだろうとおそれた。そこで、わざわざ蘇州へ出かけ、寒山寺裏にいる呉心良という者をさがした。

亡霊の言葉はでたらめではなかった。呉心良という貧しい、薄ぎたない若者は、たしかにいたのである。

——亡霊に頼まれて……

とは、さすがに言えない。

——ある人に頼まれて、これをあんたに渡すんだ。

と、押しつけるようにして、また北へむかった。

このとき、袁宗第はあまり相手の顔を見ていなかった。また若者も慎重に変装し、わざと顔にほんとうの火傷までつくっていた。袁宗第が気づかなかったのは無理もないかもしれない。——それは、李自成が宋王に立てて、しばらく軍中にとどめていた、崇禎帝の長男であり、皇太子であった慈烺であったのである。

慈烺は乱軍のなかで、李自成のもとを脱出し、母の周皇后の故郷である蘇州に逃がれ、姓を呉と改めて、ひっそりと暮していたのだった。

（父の遺臣の誰かが、李自成から奪って、わしに届けてくれたのであろう）

もと皇太子で、いまは呉心良と改名している若者は、そう推測して、ひとりでなんどもうなずいた。彼も変わりはてた袁宗第の姿がわからなかったのである。

九

——それから二百年たった。

『桃李剣記』は豪快に時間の経過を処理した。

李自成の脱走部将の袁宗第は、河南省の項城というところに住みついた。安徽省との省境に近い県である。どうしてそんなところに腰をおち着けたのか、くわしいことはわからない。流れ流れて、そうなったとしか言いようがないであろう。

栄枯盛衰もあったであろうが、二百年のちには、袁家は大そう栄えた家族となった。

清の咸豊九年（一八五九）、この袁家の一族の袁保中に、一人の息子が生まれた。四人目の息子で、名は世凱、字は慰廷である。くりくりした目の利発な子で、どことなく常の子供とは変わったところがあった。

この子には特技があった。特技というよりは、気質といったほうがいいかもしれない。

——欲しいと思ったものは、どんなことをしてでも手に入れる。

という、きわめて執念ぶかい性向なのだ。

十二歳のとき、彼は我が家の蔵のなかに、なにやら由緒ありげな剣を見出した。かつては、燦然と光りかがやいていたのであろうが、長い歳月のあいだに、鞘のあちこちに錆が出て、

あまり見ばえのしないものだった。

それでも、その姿はよかった。

（いいなあ。……）

袁世凱はそう思った。

欲しいのである。だが、家伝の重宝は、四男坊主の彼の手に渡ることはありえない。そう思えば、ますます自分のものにしたい。どんな手段を講じてでも。

一寸さきは闇という世の中で、百年もつづけば、もう旧家といえる。袁家はもう二百年もつづいているので、りっぱな旧家である。旧家には家伝の名器が多い。

袁世凱は竹光をまずつくった。彼は家伝の名刀のなかみが欲しかった。そして、外側は自分でつくった。錆だらけの鞘はどうでもよかったのである。なかみだけ失敬して、自作の竹光をもとの鞘におさめ、ほんものの刀を自作の鞘におさめてかくしておいた。

こうして、「桃李の剣」の桃剣のほうは、袁世凱の手に入ったのである。

――袁世凱。

中国近代史に、もっともなじみの深い名前が、『桃李剣記』のなかに出現して、私は呆然としてしまった。

おとぎ話の世界から、とつぜん現実の世界に連れ戻されたようなかんじであった。なにしろまぶしくて仕方がない。

（ほんとうかな？）

十七世紀の明朝の滅亡の物語では、そんな気はしなかったのだが、近代の辛亥革命に、桃李の剣がはいり込んでは、いささか戸惑わざるをえなかった。

袁家は名門であったし、そのうえに、一族のなかに、ときの最高の実力者李鴻章の側近がいた。そんなコネをたどって、この腕白小僧の袁世凱も、正規の官吏登用試験を経ずに、エリート・コースをたどって、しだいに昇進したのである。

やがて、袁世凱は朝鮮に派遣され、日清戦争が勃発して、彼の親分の李鴻章が没落した。彼は着々と、独立の地歩を築きあげたのである。

義和団事件でも、ヒステリックな西太后の政策には、かならずしも同調せずに、動乱を通じて、自分の勢力をのばした。

彼の親分の李鴻章は、自分の手塩にかけた北洋陸海軍を、日本軍に叩きのめされてしまい、再起が危惧される状態であった。

親分の李鴻章から独立した袁世凱は、西洋の近代的訓練による、いわゆる「新建陸軍」を創建し、清朝の軍事力の中心となった。

そのあいだにも、二百数十年つづいた清朝は、衰微の道をたどりつつあった。しかも、当時、西太后という愚かな女性が、清国の政治をとりしきっていたため、清朝衰退は、ますますその傾斜が急になったのである。

ついには、袁世凱は清王朝になくてはならない存在となった。

そうなれば、とうぜん宮廷の嫉妬は、彼一身にあつまるであろう。だが、太平の世の中で

あればともかく、乱世にあっては、いくら憎まれ者でも、その実力だけがモノをいうのである。

西太后の死後、袁世凱はいちど失脚したことはあるが、清朝は彼がなければ、うごかない。彼の失脚は、その冷厳な事実を立証したのにすぎなかった。

――清王朝の運命は、袁世凱の手中にあるのだ！

人びとは事実によって、そう思い知らされていた。

たしかにそうであった。つき放そうと、彼が考えたなら、清朝はもう一巻の終わりである。可哀そうだから、もうすこし助けてやろうと、彼が手綱をゆるめると、それで御家ご安泰になるのだった。

――王朝の運命を左右しうる。――

これはえらいことである。

甘美なことである。

たしかに誰も真似ることのできない、大きな仕事を、彼はその気になりさえすればできたのである。

清朝は彼を罷免して、皇族内閣をつくったが、それがうまく行くはずはない。やはり大実力者袁世凱の出馬を促すほかはなかったのである。

（ほしいなあ、天下が。……なりたいなあ、皇帝に。……）

袁世凱はそう思った。

このとき、彼の脳裡に、少年時代、あの桃の剣を欲しがったころのことがよみがえった。欲しいと思ったものは、大人の目をごまかしてでも手に入れたではないか。

天下は騒然としていた。

「打倒清朝！」と「革命！」「共和！」の声は、全国にひろがった。

革命軍の武昌での決起は、清朝政権の臨終を宣告したようなものであった。

そのころ、袁世凱はちょっとした用事で、北京の我が家の蔵にはいって、久しぶりに桃剣と対面した。彼はそれを手にとってみた。――ずっしりと重かった。

翌日のことである。こんどはほかの用事のついでではなく、桃剣を見たさに蔵のなかにはいった。

一日の違いにすぎなかった。だが、彼の心のなかは昨日とおなじではない。清王朝を見限ったのである。――考え抜いた末、彼は南方の革命軍と手を握り、清王朝を解消して、共和制の国家をつくろうとしたのだ。

袁世凱は手をのばして、例の桃剣を再び手にとった。

「やや、これは……」

彼はあわてて手を放した。

なんという気味の悪さであろうか。

いま手にとった桃の剣は、重さなどはまるでなかったのである。昨日の今日であった。昨日はたしかに、ずっしりと手ごたえの重みをかんじたのに。

桃李の剣のいきさつを知る者なら、清王朝がほろびるというときに、剣にこめられた怨みが消え失せ、とたんに重みを失うことが、いくらか納得できたであろう。

だが、剣の歴史を知る者は、もはや誰一人としていなかった。——ただ一人の例外は、袁家で代々、収蔵庫の記録をとっている老人である。彼は祖先から、桃剣の由来をきいて、それを文書にのこしていた。

『桃李剣記』こそ、それにほかならない。

——まったく気味がわるいのう。……

と、収蔵庫の老人は首を振った。彼もその剣が、いつもの重量の三分の一ぐらいに減っていることに気づいていた。

——あの桃剣は売ってしまおうか。……

袁世凱がそう呟くと、ただちに、

——そうなさいませ。天下のためでございますれば。……

という返事が返ってきた。

——よし、きめた。そうしよう！

袁世凱はどうしたわけか、いまのうちに桃剣を手放さなければ、おそるべき禍いが訪れてくるような気がしてならなかった。

買手がみつかり、金銭と財宝の授受がおこなわれた。

橋詰少佐は、このときの買手から、直接に貰ったのである。——『桃李剣記』という文書は、もちろん品物に付属して、橋詰さんに渡ったのはいうまでもない。

十

例の『桃李剣記』は、ほとんど桃剣の叙述に重点が置かれていたのである。とくに、最後に近い場面の叙述などは、あざやかすぎたようにも思える。

二つに分かれた片一方の李剣については、『桃李剣記』には僅かしか記述がのこっていない。

袁宗第は亡霊の祟りをおそれて、言われたとおり、呉心良と改名したもと皇太子を訪ねて、李剣を渡した。

こうして、李剣は呉家に代々伝えられた。

——これは大事なものぞ。

歴代のあるじは、そう言い伝えられているだけで、くわしい由来は知らなかった。ひたすら守ってきた、というだけの話である。

呉心良からちょうど九代目に、呉棠という人物が出た。道光十五年（一八三五）に、挙人になったが、なんど受験しても、進士になれない。そこで、江蘇から安徽にかけての知県つとめをしていた。知県といえば県知事だが、中国の県は日本の郡ていどにすぎない。市の下に県があるから、区長といったほどの小役人である。

安徽の肝眙県にいたころ、呉家の隣りに満洲旗人が住んでいた。王朝創建からすでに二百

年もたっているので、満洲族の人たちも、漢化していて、ほとんど漢族と変わりのない生活をしていた。

隣家の満洲族のあるじは恵徴といって、役職にもつけず貧乏していた。呉棠は彼らのために、なにくれと面倒をみてやっていた。呉棠自身も、たかが知県なので、たいしたことはできない。恵徴が死んだとき、一家は貧窮のどん底におち、北京へ戻るにも旅費がないありさまだった。

折あしく、呉棠のところも、手許不如意の時期であった。

――そうだ、あれを処分すれば、すこしは金ができるだろう。

彼はそう思った。あれとは李剣のことである。家宝と言い伝えられたが、九代目ごろになると、「大切さ」も、やや薄れてきたかんじだった。

皇室に生まれた悲惨さを、身にしみてかんじた呉心良こと皇太子慈烺は、もう子供や孫たちに、わが家が明王室の嫡流であるとは教えなかった。呉棠も、そんなことを知るはずはない。それに、呉棠はあっさりした性格なので、家宝などにこだわらなかった。

李剣を処分して得た銀三百五十両を、呉棠は恵徴の未亡人に香典として送った。彼女はその金で北京へ帰ることができたのである。彼女には一男一女があった。女の子は蘭児という名で、思いがけなく、宮女にえらばれて、紫禁城につとめる身となった。

蘭児はその後、咸豊皇帝の寵愛をうけ、皇子を生み、帝亡きあとは、摂政として、同治帝の後見をした。――こういえば、もうこの蘭児が何者であるかがわかるであろう。

西太后である。清朝の女あるじとして、愚かな政治をおこない、清朝の没落を早めた女性であった。

李剣を売った金があればこそ、彼女の家は北京へ行けたのである。もしそうでなければ、彼女たちは貧窮のうちに、江南地方を流浪したであろう。むろん選抜されて宮女になることもなく、宮女にならねば、皇帝の目にとまることもなかったのだ。

蘭児が西太后となり、女独裁者となったので、恩人の呉棠は、進士にも合格していないのに、昇進めざましく、江寧布政使から漕運総督を経て、四川総督に出世したのである。……

「作り話やけど、よくできた話やと、私は感心してますのや」

と、桜井翁は言った。

私は『桃李剣記』を読み終えて、

「できすぎた話ですね。清朝滅亡の大立者は、袁世凱と西太后ですから、桃李両剣を、両人の先祖にからませたところなど、みごとな作り話といってよいでしょう」

「袁世凱や西太后さえ知らんことを、なんで『桃李剣記』の作者が知ってるんか、不自然といえば、こんな不自然なことはありませんわ。……そいでも、私はときどき、この話を信じたくなりますねん。……年寄りのロマンチシズムやと、笑うてください」

桜井翁は、その円満な顔に、おだやかな笑いをうかべて言った。

『桃李剣記』は、その刀に箔をつけるために、捏造された文書にちがいない。おそらくこの

文書の制作者は、福建厦門（アモイ）の民間に伝わる、あの「空飛ぶ剣」の伝説もきいているのだろう。そして、自分ならもっと、もっともらしい話をつくれると、自信をもってこねあげたのにちがいない。

だが、その刀はまぎれもなく、ほんものの三代信国である。箔などを必要としない。りっぱにひとり立ちできるのだ。

「いささかおせっかい、という気がしますね」

と、私は言った。

「ま、ええやないですか。あんた方、小説家かて、おんなじようなことしてるんやから。ちょっとした夢を、この夢のすくない世界にそっと送り込む。……けっこうなことやありませんか。夢はたのしいもんですわ。……ねえ、そない思いませんか？」

桜井翁は、『桃李剣記』を畳み、封筒のなかにいれながらそう言った。——

スピロヘータ氏来朝記

山田風太郎

山田風太郎（やまだ・ふうたろう）
大正十一（一九二二）年、兵庫県生れ。東京医大卒業。在学中に第一回「宝石」懸賞小説に入選して推理文壇に登場、以後推理小説から伝奇小説へと幅を拡げ、『甲賀忍法帖』をはじめとする『山田風太郎忍法全集』は大ベストセラーとなる。その後、『幻燈辻馬車』などの明治開化ものに独自の世界を築いた。『山田風太郎全集』全十六巻（昭和四十六年、講談社）がある。

一　忘るるなかれ八月十五日

聖ヨハネの祝日、マラッカを出帆してから五十一日目、例によって艫に安置した貨狄様の木像の前で骰子を投げていた老船長アヴァンが、突然恐怖のひとみを天にあげて、「ああ、牛の目だ！」と叫んでから間もなく、雲は葡萄いろに、海は泡だち、万象はたとえんもない悲愁のひかりに染まって、それから二日二晩というものそのシナ戎克は蒼い風と濤の炎のなかを木の葉みたいにもまれぬいた。

その二日二晩、嵐に白髪を吹きちらし、無理に出帆を命じたポルトガルの宣教師どもを呪って、悪鬼のように狂いののしっていた老船長は、制止しようとしたパウロという修道士をしたたか殴りつけ、ふり飛ばしたが、そのはずみに自分もなかば水に満ちた船底の水槽のなかに、まっさかさまに顚落してしまった。

嵐が去って、蒼々たる中天に半輪の月が見えはじめて来たけれど、水槽から救いあげたアヴァンの身体は冷たく、眼は梟のように虚ろにひらいたままであった。

「可哀そうな異教徒……」

と、神父コスメ・デ・トルレスが、横たわった老シナ人の骸にかなしげな視線を落していった。

「この男の霊魂は地獄へいっただろう」

アヴァンの礼拝している、あの艫の偶像こそ、宣教師達の心を最もいたましめたものであった。永遠、無限、全智全能にして唯一なる神をいかに熱心に教えても、「海賊」という綽名を持つこの海の老人の頭に頑として君臨する貨狄様のお告げが、毎朝、毎夕、潮と風との吉凶を決定し、さなきだに短く限られた航海季節を、どんなにムダに浪費させたことであろう。

すると、このとき、修道士パウロが進み出て、冷たいアヴァンの額に十字架を置いて、一心に祈りはじめた。彼の頬には、さっき打たれたときのまま血潮がながれていた。

二、三時間前まで吹きどよもしていた風とは、同じものとは思われないような穏やかな南西の季節風が、破れた帆をやさしくふくらませ、水泡は無数の宝石のように軽やかなひびきをたてて、戎克のうしろへすべっていった。

「――これは何だ？」

突然死人がいった。彼の蒼醒めた手は額にあてられていた。

「聖・十字架」

修道士パウロが微笑んで答えた。

不安げに覗きこんでいたシナ人の船員達の間に、溜息と低い唸り声がどよめいた。一人が

老船長の手をおそるおそる握って、「あっ、生きている」と叫んだ。

「おれは死んでいたのか？」

「そうなんで、お頭、それをこの坊さんが拝んで助けてくれたんでさ」

「アヴァン、お前を甦らせたのは罪人のわたしではない。あそこにいられる天帝です」

とパウロは、つつしみ深い眼を天に投げて十字を切った。

老船長「海賊」は、胸を大きく波うたせながら、暫くキョトンとして、光の薄れて漂う月を眺めていたが、やがていった。

「それなら、おれも天帝様とやらを信じてもいい」

「むろん」

とパウロは感激に満ちた力強い声でうなずいて、

「天帝さまは、お前を異教徒として死なせない御意からこの奇蹟をあらわしなされたのです」

「有難いことだ！」

老船長はむくりとはね起きると、十字架を三たび押し戴き、それからもぞもぞと服をさぐって骰子をとり出した。

「若い坊さん、お礼にわしは、お前さんの運命を占うて進ぜるよ」

修道士が啞然として口をあけたとき、背後からその肩を強く打つ人があった。

「パウロ、海を見なさい、海の向こうを――」

帆橋の下に立って、北東の水平線を指さしている人の姿をふり仰いで、修道士パウロは恭しくお辞儀した。

長身に帯も外衣もない着古した長衣をまとい、それは印度の貧僧の服装ながら、美しい髯のなかに微笑をたたえ、白皙の額の下で澄みきった眼は青い火のようにかがやいていた。

「陸地が見える――あれは、お前の国ではないか！」

「おお、開聞岳！」

黎明のひかりに浮く秀麗な円錐形の山のすがたを望んで、パウロは躍りあがった。その叫びは完全な日本語であった。

まことにその顔色、瞳の色、この修道士は印度の都ゴアの聖パウロ学院でパウロ弥次郎と呼ばれ、その聡明と信仰、学林随一と知られた日本人であった。

彼の鋼鉄のような頬に涙がつたい、わななきつつもきれいなポルトガル語で、

「遂に――ついにやって参りました！　あれはわたくしの故郷、サツマの南端、カイモン岳でございます。ザヴィエル様」

「ああ日本！　未開拓の豊饒なる葡萄園……」

フランシスコ・デ・ザヴィエルは叫んだ。青い眼にかがやきながら涙があふれて、

「パウロ、お前は泣いている。嬉しいであろう、お前は三年目に父母の国に還るのじゃからな……」

「神父さま、わたくしの唯一なる父母は天にいらせられます。わたくしの涙は、いまだ異端

の闇をさまようこの国の霊魂を救うべき聖なる任務を与えて下されましたその御意に対する感激の涙なのでございます」

その国の薄明のとばりは、山々の彼方から昇りつつある日輪のひかりの潮に、次第に押しながされようとしていた。

「時あたかもよし、きょうは聖母被昇天の日でございます」

と、神父のうしろにひざまずいていた少年のようなイスパニア人、修道士ジョアン・フェルナンデスが微笑んでいった。

「おお、聖母被昇天の日！」

フランシスコ・デ・ザヴィエルは眼を荘厳な朝暾にそそぎながら叫んだ。

「不思議な運命じゃ！　耶蘇会創立の日がきょうであろうとは――わたし達七人の同志が、巴里モンマルトルの殉教者の丘に集まって、清貧、童貞、エルサレムへの巡礼を、聖父イグナチオ・ロヨラ様に厳かに誓ったのは、ちょうど十五年前のきょう、聖母被昇天の祝日であったのじゃ！」

「そして貴方様はエルサレムへゆかれず、印度へ――それから、とうとうこうして日本へおいでになりました。宏大無辺の天帝の御意でございます」

とフェルナンデスが神父の裾に接吻していった。燦爛たるひかりに海鳥の群が乱舞しはじめた。パウロ弥次郎は十字架を額におしあてて叫んだ。

「天帝のお助けにより、必ずや日本のすべての人々はわが教えに帰依するでございましょう。

――なかでも、真っ先にただ一人、その前にひれ伏してわたくしが救わなければならぬいたましい女が待っているはずです。神よ！　彼女に恩寵を垂れたまえ――」

「有難いことだ！」

と、そのとき艫の方から老船長「海賊」の凄じい笑い声が、蒼い潮風に乗って来た。

「おれを助けてくれた若い坊さん！　貨狄様のお告げにはな、お前さんは近いうち、おれ達の仲間になってくれるとよ！　有難いことだ！」

聖フランシスコ・デ・ザヴィエル、神父トルレス、修道士フェルナンデスとパウロ弥次郎、パウロの従僕たる日本人ジョアンとアントニオ、シナ人マノエル、印度人アマドールの一行八人、霊魂救済の使徒たちをのせたシナ戎克は、今満帆に暁のひかりと風を孕んで、鹿児島湾の滄溟にすべりこもうとしていた。

時に、御出世以来一五四九年八月十五日。

二　聖なる信仰のパウロ

東より博士達をみちびいた星のごとく、西の方より基督の栄光につつまれた聖者ザヴィエルを導いた修道士パウロ弥次郎とは何者か。

その履歴は、彼自身に――その前年、彼が羅馬の耶蘇会創立者イグナチオ・ロヨラに送った書翰に語らしめた方がよいと思われる。

「日本のパウロより貴方様に、イエズス・基督の平和と恩寵と愛とをお送り致します。

母の胎内からわたくしを、この世へお離しになった御主様は、遠い異郷の迷える羊をお忘れなく、闇黒より光明へ、わたくし達の霊魂の救主なるイエズス・基督の信仰へみちびき入れて下されました。この大なる御恩寵を、わたくしは深く感じております。御主様がわたくしに与えて下されたこの御恩恵を語るのは、ただただ実に御主様をおたたえせんがためなのでございます。

わたくしは、異教徒の国、日本のカゴシマでシナとの貿易を営んでいた、放蕩無頼の一商人でございました。あらゆる悪徳をかさねたあげく、仲間のある貿易商の妹の美しい少女に恋慕し、酒乱のはてにこれを瀆し、その上憤激したその兄を斬り殺してしまったのでございます。裁きの手からまぬがれるため、当時ヤマガワという港に来ていたポルトガルの一船に逃げこみ、船長のジョルジ・アルヴァレス氏のはからいで、わたくしはそのまま海を越えてマラッカの町へ渡りました。一五四六年秋のことでございます。

過去から呼びかける地獄の声、それに耳をふさいでわたくしがマラッカで送った呪わしい罪の日々は、申し上げるのもはばかられます。その果てに、ソドム・ゴモラにも劣らぬシナ人街のある魔窟で、わたくしは恥ずべき恐ろしい病気に冒されてしまいました。けがれた局部はもとより顔にまで、赤銅色の環がふくれあがって、眩暈、はげしい頭痛や関節痛――そのため、狂乱したようなわたくしの上に、なおも神の鞭は下りました。瘧疾にかかったので

ございます。二日目毎に襲ってくる恐ろしい高熱。のた打ち回りながら、ある日巷に這い出して昏倒していたわたくしに、突如として天帝のおん憐れみがそそがれたのでございます。

それは昨年の十一月のこと、たまたま聖母教会の結婚式においそぎになるパードレ・メストレ・フランシスコが、路上に倒れていたわたくしの傍にお立ちになったのでございます。

主よ、御名をあがめさせたまえ――たちまち奇蹟があらわれました。パードレ・メストレ・フランシスコの愛に満ちた御祈によってわたくしは甦えりました。まったく、熱はもとより、あの恥ずべき恐ろしい身体の斑点も痛みも、みるみる消えていったのでございます。同時にわたくしの魂にも、神の矢が射通りました。

すべては天帝のかたじけない御意によるものでございました。パードレ・メストレ・フランシスコのおはからいで、本年三月、わたくしは当市ゴアの聖パウロの学院に入学し、五月十日聖霊降臨日、日本より従えた下僕とともに、大司教アルブケルケ様から洗礼の聖水をいただき、霊名をパウロとさずかりました。

わたくしの魂の安息は何に例えようもございません。わたくしは、このように容易に御主様のおんことを心中に印し、このような短期間にポルトガルの言葉に通じ、聖マテウスの福音書のごとき高尚なる御教えを受け入れて、これを記憶にとどめる才能と意志をわたくしに授けて下された天帝の御恩恵を決して忘却致すまいと、一しんに祈っております。

願わくば、われらの主の愛のため、尊師の御祈禱によって、主がわたくしに与えたまいしところを空しく受けず、その讃美と光栄となるに至らんことを。

パードレ・メストレ・フランシスコは、日本に赴く準備に着手なされました。

万物の御創造主であらせられる天帝と、われらを贖わんがため十字架におのぼりなされたイエズス・基督の御教えが、日本に弘布され、大いなる収穫を納めるよう、わたくしたちは心より切望致しておるのでございます。

何とぞ御主様が、パードレ・メストレ・フランシスコをお助けになり、またその愛のため、百たび生命をささげる必要があるならば、わたくしにこれをなす力を与えたまうよう、貴方様も絶えず天帝にお祈りなされて下されまし。

御出世以来一五四八年十一月廿九日

ゴアの聖パウロ学院より

下僕・日本人　サンタ・フエのパウロ」

サンタ・フエのパウロとは『聖なる信仰のパウロ』の意味である。

天使堕ちて昇らば、堕ちざりしよりさらに栄あり――聖フランシスコ・デ・ザヴィエルもまた彼を『徳高き誠実の人』と呼び、この尊敬すべく信頼すべき一日本人の背後に横たわる未知の島国に無限の希望を投げかけた。

鹿児島上陸以来、最初の数カ月の間、その希望は裏切られぬかに見えた。

島津貴久を国分城に訪ねたザヴィエルは、この薩摩王から予想以上の歓待と鷹揚な布教許可を受けて歓喜した。神父が、日本の最高にして正統の君と聞いている天皇に謁見するため

速かに都に上りたいという希望を述べたとき、島津はにこやかにうなずいていった。

「承った。左様ならば私が船を一艘仕立てて進ぜましょう。ただし、航海に都合のよい風の吹く季節まで、しばらくお待ちなさい」

ある夜のこと、公教要理の日本文編纂にいそしんでいたパウロ弥次郎の眼が深いかなしみに翳っているのを見て、ザヴィエルはそのわけをたずねた。

「神父様、あの娘がいないのでございます。店もつぶれて、その行方もわかりません。それも当然でございましょう。一家の柱ともいうべき人を、わたくしがこの手にかけたのでございますから――」

彼の身体はおののいた。

「わたくしに身をけがされ、兄を殺されたあの可哀そうな娘は、今、何処にどうしていることでしょう？――若し――若し、すでにこの世にないならば、罪ふかいこのわたくしは、現世においても、来世においても、御慈悲をおねがいすることができないように思うのです」

「祈りなさい。パウロ」

とフランシスコは優しくいった。

「祈れば、天帝はかならず救って下さる。そうして、きっとお前がその哀れな娘に罪を贖う日が来ようよ」

神父の顔を仰いで、パウロは涙をながした。その涙は彼の憂愁を洗い去るかのようであった。

あくる日から、彼は清い同僚のフェルナンデスとともに、熱烈に町の人々に福音の伝道をつづけはじめた。

フェルナンデスがいかに日本語の修得に一生懸命であったかは、後にこのイスパニア人が平戸で死んだとき、臨終の囈語すら日本語でつぶやいたという挿話によってもうかがわれる。

三　迷える羊

ザヴィエルは、伝道の最大の障壁が仏僧であることを看破した。そのため彼は、招かれも呼ばれもしないのに、みずから諸処の寺院を訪ねて仏僧達と問答した。彼がこのように出入するのは、あたかもその家の童児のごとく自由であった。

神父は毎日二度、鹿児島で最も著名な寺院である福昌寺の山門に立って、パウロが翻訳した公教要理を民衆に読みあげた。

この寺の住職は、忍室という高名の禅僧であった。あるときザヴィエルは、石像の群のごとく坐禅をくんでいる僧侶達を見て、不思議そうに忍室にきいた。

「この修道士たちは、何をしているのですか？」

「左様。ある者は檀家からのあがりを勘定し、ある者はどうしたらもっとよい待遇を受けられようかと思案し、またある者は女や悦楽のことを考えておる。いずれにせよ、鼠のクソほどのねうちのあることを考えている奴は一人もござらぬよ」

と、鶴みたいに痩せた老僧はからからと笑った。

また別のとき、神父は忍室に、青年期とあなたのような老年期といずれがよいと思われるかとたずねた。

「そりゃ、若いにこしたことはござらぬ」

言下に、澄ました顔で忍室は答えた。

「第一、若いときは病気にもかからぬし、それから、何を欲しようと、自由に遂げられますから喃」

「しかし、考えてごらんなさい。大海の真っ只中にある船と、静かな港に近づいた船と、その乗客の心は――」

「いや、あなたのおっしゃろうとすることは、よくわかっている、伴天連殿」

と老いたる禅僧は手を振った。巨人と巨人。〈わが畏るべきは天帝のみ〉という信念に燃え、のちにあらゆる異教の坊主どもを完膚なきまでに弾劾したフランシスコが、このサツマの老僧の澄んだ眼の底に漂っている笑いとかなしみの翳をのぞきこむとき、いつも不思議なせつなつかしさと畏れを感ぜずにはいられないのであった。

けれどもこの奇妙な問答は、ひとしく俗界を超えたふたりの高僧の住んでいる空気が、どんなに種類の異なったものであるかということを示す証左でもあった。いわんや、高い懐疑もなければ理性もなく、ただ過去一千年、日本の土に張りめぐらし、すでに硬化している権威の根に寄生し、むしゃぶりついているのみの一般仏僧どもが、この新宗教の弘布に胆を冷やし、次第に猛烈な妨害に出はじめたのは当然であった。

すでに渡来以前から、日本の僧侶は肉食せぬと聞いて、みずからもその習慣を断っているザヴィエルに向かって、「伴天連たちは、人肉を食べる」といいふらした。

ザヴィエルは敢然として魂の戦闘を開始した。

「彼らがわれわれをおまえ呼ばわりするならば、われわれも彼らをおまえと呼んでやろう」

と神父はパウロ達にいった。坊主ばかりではない、一般の民衆に対しても――貧しい印度僧の服装で説教することは、この傲慢な国民に関する限り、かえって効果を減ずるのではないか、と神父もようやく気づきはじめていた。

が、さすがに唖然としたのは、最初あれほど感謝した薩摩王の好意が、実に現世的な利害観念から来ていることを知ったときである。航海の季節を口実に、一行を城下にひきとめておいたのは、実はそれによって珍奇な商品を積んでくるポルトガル船をおびき寄せるため、島津の欲しいのはただ鉄砲だけであった。聖フランシスコは聖書を与えようとした。目算がはずれて、薩摩王の額に次第に皺がきざまれ、権威に臆病な民衆はその顔色をうかがいはじめた。

ようやく露骨になった迫害のなかに、ある夜、眠っていたパウロが、突然大声で「もっと！　もっと！」と叫んだ。その翌日、何の夢を見ていたのかと聞いたフェルナンデスに、「私はある男を肩にのせており、ひどく重く、圧しつぶされそうになったとき、御主様のことを考えたので、さらに困苦をさずけたまうように願ったのだ」とパウロは答えた。

「ある男とは――誰？」
「わからない。ただそれは日本人の顔にはちがいなかった……」
「それは日本人全部じゃ」
と神父は微笑んで、パウロの肩をたたいた。
「だが、主の御光栄のためのたたかいは、最初からわたしたちの覚悟していたことではなかったか？　嵐は一層強く吹いてくるだろう――が、この国が種を播くに良き地、神における希望の島であるというわたしの信頼は、深くこそなれ、決して揺ぎはしない、御覧、市来を。あの山の城には主の葡萄園が、すこやかに、かがやかしく実を結んでゆくではないか？」
市来の城は、島津の属将新納伊勢守の住むところで、山を十ばかりの砦にわかち、砦と砦はすべて鶴嘴でけずった深い掘割をめぐらし、それらに橋がかけわたされて、それを通り過ぎるとき、人はそれが人工をもってなされた業と思われず、あたかも地獄をのぞく心地がするのであった。
城主の伊勢守は、唇の厚い、動物的な容貌を持ち、魁偉な体格ながら、少しばかり愚鈍なのではないかと思われるような人物で、島津家にはばかって彼自身は洗礼を受けなかったが、奥方や家臣が説教を聞いたり洗礼を受けることは許すのみならず、よろこんでいる気配であった。
この家臣の一人が、あるとき、「もし島津の大殿が、余に従うか切支丹たるか、ふたつのいずれかを選べと厳命なされたら、貴殿は如何なさるか」という難問を出され、即座に、

「殿よ、殿が私にまことの忠節を欲したまうならば、切支丹たれと御命じ下さい。私はこう御返答つかまつります」といったのは有名な話である。
この家来より、城中の侍女達の帰依はさらに熱烈であった。この山の城の奥ふかく、きよらかな女達に囲まれてすごす信仰の夕は、神父達にとって何というよろこびと愉楽であったろう。
いったい、この一画のみに、かくも盛んに聖なる火の燃えあがったのは何ゆえであろうか。他には見られぬその原因のひとつに、ある覆面の保護者のあることを神父達が気づいたのは、よほどたってからのことであった。
鈍い、茫漠たる城主ではなかった。病身で気弱らしい奥方でもなかった。それが伊勢守の愛妾で、「お扇の方」と呼ばれる女性らしいことはつきとめたが、伊勢のただひとりの世子の母として彼女が城の上下にわたって非常な権威を持っているらしいにもかかわらず、いや、それゆえに、宗教的に許されぬ婚姻を最大罪悪の一つとして厳しく非難するザヴィエルの説教をはばかってでもいるのであろうか、ついぞ信仰のまどいに姿をあらわさないのであった。
このいじらしい影の女性のことを、心の曇りのひとつとして残しながら、薩摩王の不誠実なたくらみのため、思わぬ月日を鹿児島で送ったザヴィエル一行が、ついに上洛の決意をかためて、先ず平戸へ旅立ったのは一年後、一五五〇年九月のことである。
パウロ弥次郎のみが残ることになった。彼はその数日前から市来城にきて暮していた。
それは城内に、日本はじまって以来最初の小礼拝堂が建立されつつあったので、旅の途次

師の一行が立ち寄るまでに是非竣工して奉献の式をあげたいと思い、工事の督励に来ていたのである。

ある晴れた朝、それは完成した。

裏山の檜林で鳴きしきる、ふるようなひよどりの声のなかで、地にひざまずいたまま、恍惚と喜悦の眼をうるませていたパウロは、ふと背後に、しずかな跫音を聞いて振りかえった。きらびやかに着飾った侍女達に囲まれて、金と朱紫との裲襠をはおった女が一人たたずんで、凝っと彼を眺めていた。

パウロは雷に打たれたようであった。

「――あっ」

愕然として息がとまった。

「お前さまは！」

「扇、と申します。修道士さま」

と女は低い声でいった。燃えたぎるような瞳であった。パウロ弥次郎の顔色は土気色に変わっていた。呻くように、

「お扇――お扇の方とは、お鶴、あなたのことであったのか！」

一瞬の後に、彼は女の足もとにまろび伏していた。

「探していた……ああ、どんなにあなたを探したことか……詫びなければ、あなたのどんな報復の鞭、いや、それが火であろうと剣であろうとこの罪の身体に受けなければ、わたしは地獄に堕ちるよりほかはなかったのだ！　おお御主様、よくぞ、よくぞこのひとにめぐり逢わせて下さいました！」

「祈りなさい、修道士さま。あなたさまの神さまは、お祈りさえすれば、かならず救って下さるそうではございませんか？」

冷たい嘲けりをふくんだ声に、パウロは面をあげた。

お扇の方は笑った――艶然と、牡丹のように。

おお、これが四年前自分の乱酔した腕のなかに、身悶えして泣きさけんだ哀れな小娘と同一人であろうか。牝獅子のように傲然とかがやく雙眼は頽廃の隈にふちどられ、頬は深い苦悩にわななきながら、真紅の唇は地獄の虹を吸いとったように濡れて笑っていた。

「むろん、わたしは殺されても覚悟の前です」

パウロはふたたびひれ伏して、声をしぼった。

「けれど、あなたはどうぞ天帝さまを信じて下さい！」

「御説教は、そのうちこの御堂でお聞かせ下さいまし。これからはあたくしも参らせていただきます。あたくしのお建て申しあげた聖堂でございますから――まあ、ほんとに美しいこと」

彼女は笑いながら、礼拝堂を見回して、茫然たるパウロをあとに、侍女達を従えてしずかに立ち去っていった。

神父の一行はその日の午後市来城に立ち寄った。

その小さいながら見事な聖堂に、彼らは感動して涙をながした。ザヴィエルはみずから、マリア像や、十字架や、ロザリオ、聖水入の磁器の容器、絹製の祭壇用天蓋などを贈ってこれを祝福した。

「パウロ、あとをしかと頼みましたぞ。わたし達の播いて、はじめてこの国に芽生えたささやかな信仰の花、聖なる羊の群、天帝の御助によって、お前はこれを一心に護り育ててゆくのじゃ」

「神父さま。わたくしに出来ましょうか?——わたくしはあなたさまにお別れするのが、恐ろしくてなりませぬ」

パウロの顔は蒼醒めて、ひしと師の手にすがりつき、容易に離れようともしないのであった。けれども、それは如何なる心理であったか自分でもわからなかったが、彼はあの娘をこの城主の寵姫として発見したことを、師に告白しなかった。

フランシスコ・デ・ザヴィエルは、美しく縮れた黒い髯の一部をさくりとみずから剪りとって、パウロに与えた。

「わが子よ、これをわたしだと思うがよい。わたしはいつまでもお前と一緒にいると思って、勇ましくたたかいなさい。よいか——」

「わたくしは神父さまを信じます」

パウロは叫ぶようにいった。その頬に血がのぼった。

「では、神父さま、わたくしは、いつ、何処でまたあなたさまにお逢い出来ましょうか?」

「ヨセファットの谷で」

と、聖フランシスコは愛弟子の瞳を慈愛に満ちた深いまなざしで覗きこみながらいった。それは、「最後の審判の日に」という意味であった。何かこの世のものならぬ力に打たれて、このときパウロ弥次郎の身体が、魂の底からふるえあがったようであった。

四　アーメン！　アーメン！

それは流星の美であった。

その威厳は、城主の愛妾という地位からくるものではなく、彼女の美そのものから来た。お扇の方は、新納伊勢の心をしっかりとらえていたが、それでいて傾国のそしりをうけるどころか、武骨な家臣はもとより、病がちな奥方から、畏怖を超えた讃美にちかい眼を投げられているのは、ただ世子の生母という理由ばかりでなく、本来極めてすぐれた素質を持つひとりの女が、その肉体のみならず精神までも燃焼するその迫力が、人々を圧倒しているのであった。

清浄の身をけがされ、兄を殺されて絶望し、海へ入水しようとした憐れな少女をたまたま救いあげたのは、今は新納家でも最も熱烈な切支丹である好人物の老臣であったが、このどん底から市来城の侍女へ、さらに主君の寵姫へと昇った彼女の運命を、「転落」といっても信ずる人はあるまいが、聖なる信仰のパウロはそれを看破した。

彼女が愚鈍な城主にささげる妖艶な媚の眼の底には、まるで熊か犬でも見るような軽蔑のひかりがやどっていた。環境の上昇とは無関係に、肉体はいよいよ凄絶の光芒をひきつつ、精神はあの日から堕ちつづけていた。地獄へ——あらゆるものに対する不信へ。

（あの日から——おお、清らかな星をつき落としたのは誰だ？）

パウロ弥次郎はおののいた。

きよい洗礼に洗われた彼の眼は、誰も知らぬ彼女の「転落」を鋭敏に見抜いたが、またそれゆえに今や彼女の魂の底にうごめく怪物が何をたくらんでいるのか、はっきりわからないのであった。かつてあれだけの大罪悪を犯し、今は一国の迫害を貧しい僧衣に浴びている男を、寵姫お扇の方は、なんの危害も加えぬどころか、彼のために美しい礼拝堂をたて、アヴェ・マリアの鐘の音に耳を澄まし、謎のごとき微笑をたたえつつ、安息日ごとに説教を聴聞にくるのであった。

「神父さま——あの女は、ほんとうに天帝を求めているのでございましょうか？」

ある秋の夜、美しく蠟燭のともった礼拝堂のなかで、パウロ弥次郎は、白い小さな絹の袋を押しいただいてささやいた。

苦悶に満ちた彼の眼に、お扇の方のあでやかな恐ろしい笑顔が、毒の花の幻影のようにしみついて消えなかった。その夕、彼が侍女達に世界創造の話をし、ルシフェルがその傲慢のゆえに地獄に投げ入れられた次第を説いたとき、背後でうっすらと微笑んだお扇の方の面輪である。

ザヴィエルがこの地をはなれた日、はじめて覆面をぬいで姿をあらわしたこの愛妾は、それ以来安息日ごとに礼拝堂を訪れた。恭々しくひざまずくその姿は、最初、あまりに厳格にして偉大な神父の鞭をおそれて逃げていた小羊が、おずおずと近づいて来たようないじらしさを感じさせたが、説教の途中、ときどき浮かべているあの不信と蔑みの微笑は、今や神父去って呪縛をとかれた美しい悪魔が、悠然とその翼をひろげはじめたようにも思われるのであった。

「だが——なぜ、なぜ、なぜあの女はこの聖堂を——」

お扇の方の笑顔は、パウロの胸の底にえたいの知れぬ戦慄と動揺をおこすのであった。突然、彼は床に倒れて声をしぼって呻いた。

「ああ、憎んでいるなら、どうぞ石で打ってくれ！　復讐したいなら、遠慮なくわしを殺してくれ！　火あぶりでも、水責めでも——それが当然だ。わしは恨まぬ。そうしてくれたら、わしはお前に感謝するのだ！」

彼は灯にかがやく十字架をふり仰いだ。すると、急に、どういうわけか眼がくらむような恐怖に襲われて礼拝堂を走り出た。

石段を駈け下りようとして彼は転がった。無意識に持っていた白い絹の袋が、手から投げ出された。妖しい霧にけむったようなパウロの瞳に、それは星みたいにきらめいて、ぴしりと灼きつけられた。

「ああ、神父様！」

パウロは這い寄って、その袋を額に押しあてた。

その袋に入っているのは、フランシスコののこしていったあの髷であった。

「神父様、お護り下さいまし、この弱い弟子を……それからあの女も、どうぞ救って下さいまし！」

パウロは涙をながしながら、狂ったようにその袋に接吻しつづけた。耳の底には、あの優しい厳かな師の声音が鳴りひびいていた。

「――わが子よ、これをわたしだと思うがよい。わたしはいつまでもお前と一緒にいると思って、勇ましくたたかいなさい。よいか……」

この一握の髷に、パウロは毎日師から託された小羊たち、鹿児島の信徒達の動静、布教の状況を報告してきたのであった。これこそは神父そのひと、いや、今の彼にとっては天帝そのものにひとしい権威に満ちた聖物であった。

パウロは眼をあげて、静かにかがやく星くずに満ちた秋の穹窿を仰いだ。山は寂寞と眠っている。心の渇きを癒すような、完全な、力強い感動が彼の胸につきあげてきた。彼は指を胸の前にくみ合わせて、低く叫んだ。

「神父様……わたくしは救います。御主様の御力によって、かならずあの女を！」

数日とたたないうちに信徒達は、修道士パウロの顔つきと物腰が、それまでよりさらに清冷に、熱烈に、一種の凄味さえ帯びて来たことを感じた。

のみならず彼は、イエズスが持ち、フランシスコが持っていたという、あの奇蹟を行う神

秘な力すら獲たようであった。

中風の老女を、癲癇の小児を、臓躁の女を、鬱症の若者を、そのほか狐憑きや犬憑きの人人を見舞い、その額にあの神父の髷をおさめた袋を置いて祈るパウロの姿は、彼自身が何かに憑かれているようであったが、祈禱が終ったとき、哀れな病人が恐ろしい幻覚や悲惨な苦しみからケロリと醒めはてたように平静になる奇蹟を見ては、天帝を信ずる者はいうまでもなく、信じぬ者もわれしらずフランシスコの名を讃える叫びをあげずにはいられないのであった。

一五五〇年の秋は、いつしか冬に移っていた。

この年は日本で例年にない大雪がふった年で、ここ薩摩もめずらしく師走のなかば、霏々とした白雪に襲われた。聖なる信仰のパウロにとって、いや日本にとって永遠に忘れ得ぬ運命劇の幕が、一挙にひらかれたのは、実にその雪の夜のことであった。

二、三日前から熱っぽい頬の色をして、ウツラウツラしていた新納伊勢の世子笛丸が、その日の夜明頃、急に閨から起きあがって、「こわい、こわい――」と叫び出したのである。年があければ四つになる、病がちな神経質な子供だが、こんなことは今までになかった。

「あれ、そこに白い髪した婆が――」

パウロはすぐにやって来た。彼はこの城主の茫漠たる瞳と、病む児の母お扇の方の妖艶な瞳に、未だかつて見たことのない動乱と苦悩の色を認めて、時到れりとふるい起った。時到れり、父よ、子が汝の栄光をあらわさんため、汝の子の栄光をあらわしたまえ。……

信ずれば山もまた動くという信念の炎にパウロの両眼は燃えかがやき、ひきつけていた小児は魅入られたように手足をちぢめて修道士の清い恐ろしい眼を凝視した。

パウロは小児の額に、聖なる髯の袋を置いて十字を切った。——

彼の頭の奥を、フランシスコの神々しい声がながれていった——父われに在して御業をおこないたまうなり。わがいうことを信ぜよ、我は父におり、父は我にいたまうなり。もし信ぜずば、わが業によりて信ぜよ。誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん……

「おお、わしも洗礼を受けたい！」

突然、城主が、感動に躍りあがるような叫びをあげた。

パウロは眼をひらいて、笛丸がすやすやとおだやかに眠っている姿を見下ろした。赤みのさした小さい頬には、花のような微笑が浮かんでいた。

お扇の方は畳にひれ伏したまま、失神したように動かなかった。

パウロは声もなく微笑んで、一礼して、しずかに出ていった。

五　天とどろきて去る

繰返していう、聖なる信仰のパウロと日本にとって、永遠に忘れ得ぬ運命劇の幕の切り裂かれたのは、その霏々としてふりつづける雪の夜のことであった。

その夜、パウロが祈りをささげている礼拝堂の扉をほとほととたたく者があった。

パウロが扉をひらくと、彼の考えていたとおり、入ってきたのはお扇の方であった。が、侍女もつれず、ただひとりである。

「修道士さま」

と彼女は低い、ふるえる声でいった。

「あたくしは、懺悔とやらに参りました」

彼女は祭壇の前にひざまずいて、しばらく凝っとあの白い絹の袋に眼をそそいでいた。

「ああ！　あたくしは何という罪ふかい女でしょう……」

その悄然たる後姿には、傲慢な寵姫の誇りがかき消えて、いじらしい四年前の小娘のわななきが戻っているようであった。

微笑んで見つめていたパウロは、身をふるわせて首を垂れた。

「いえ、罪ふかいのは、このわたしです」

「あたくしは、修道士さま——今こそ申しあげましょう、あなたに恐ろしい復讐をしようと、そのことばかり考えてきたのです」

パウロは眼をあげた。見えたのは、うなだれたお扇の方の揺れる黒髪ばかりであった。

「やっぱり——そうでしたか！　そうです。それが、当然です。どうぞ、今からでも遅くはありません。わたしはあなたにどのような——たとえ殺されても仕方がないと思っていたのです。ただ、ただ……天帝を信じるよろこび、この例えようもないよろこびだけは、あなた

にも是非おわけしたい！」

「きょう、笛丸さまを助けていただいたあの御力は、天帝さまを信じさえすればあらわれるものでございますか？」

「あの御業は天帝さまのものです。それから、神父さまの御力です」

パウロは進み寄って、白絹の袋を恭々しく押しいただいた。感動と涙があふれるようであった。

「それが、フランシスコさまの御髯なのでございますね？」

お扇の方は、はじめて顔をしずかにあげた。

「どうぞ、あたくしにも押しいただかせて下さいまし」

彼女はおそるおそる絹の袋を受け取ると、落着いた動作で袋の口を釈いて、白い掌になかの美しく縮れた黒い毛をさらりとのせた。

「修道士さま、たしかにお覚えがございますか？」

「忘れは致しませぬ」

とパウロはやや怪訝の感に眼をみひらきながらいった。

「この秋、都へ旅立たれる神父様がこのお城にお立ち寄りになったとき――」

「あたくしは懺悔致します。そのとき、あなたに下されたお髯は、その夜のうちにあたくしが捨ててしまいました！」

お扇の方の顔にうっすらと浮かびあがった微笑を愕然と見つめて、パウロは白痴のように

なっていた。

「――今、何とおっしゃった？」

「これはザヴィエルさまのお髯ではないと申し上げました」

ささささ、と扉に雪が鳴った。灯がゆらいだ！

「けれど、あなたには、たしかにお覚えがございましょう――それと入れ替えたこの毛は、この毛は、この毛は――」

お扇の方はすっくと立ちあがっていた。突然凄じい笑いが、紅を塗った唇から溢れ、鐘のように礼拝堂一ぱいに鳴りわたった。

「おほほほ、おほほほほ！　おほほほほほ！」

「――あっ」

とパウロは急に炎に吹かれた蛙のように飛び退っていた。

「けっ、汚らわしい――お前さまは！」

「汚らわしい？　おほほ弥次郎さま、おお、ほんとに汚らわしい！　けれど、この汚らわしいものが、四年前、お前さまにあたくしの兄さまを斬り殺させるもととなり、また数々のあの奇蹟を生んだのではございませんか――」

「ひどい、ひどい！　何というむごい復讐だ！　天帝を、天帝を――」

発狂したようにパウロは頭をかきむしった。

「おお、いっそひとおもいにわしの眼をえぐり、この腹を裂いてくれた方が――」

「そう考えておいで遊ばす聖者さまに、火が、水が、剣がなんの用をなしましょうか！　地獄に堕ちた女が探すただひとつの復讐の道――御覧なされませ、弥次郎さま！」

五彩の紅が眼前に舞った。裲襠を脱いだのだ。面を覆ってよろめいたパウロ弥次郎の背に祭壇がぶつかり、聖像や燭台や聖器ががらがらと崩れ落ちた。同時にそれはパウロの頭のなかであらゆるものが轟然と砕け散る凄じい響でもあった。

「おほほほ！　わたくしは信じませぬ！　たとえ笛丸さまの御命は救われたとて、それはザヴィエルさまの御髯の御力ではございませぬもの！　おほほほほ！　わたくしは何も信じませぬ！」

四辺の壁がグルグル回り、灯は業火のごとく燃えあがり、鳴りわたる地獄の哄笑、そして、見よ、見よ、見よ、脱ぎ捨てた絢爛たる色彩を踏んまえて、くねり、挑みかかる雪白の美女の裸形！

星は地に堕ちて天の万象を灼き溶かした。四年前と寸分変わらず、獣のように弥次郎は十字架を足下にへし折って、その妖艶な肉塊に飛びかかっていた。

「悪魔、悪魔、悪魔……」

と兇暴な唸りをあげながら。……

*

廿日ばかりたったある日、蒼々と晴れあがった薩摩の空の下を、雪どけの泥にまみれ、こけつまろびつ、弥次郎は走っていた。野こえ、山こえ山川の港へ――

荒淫と恐怖に濁った彼の眼には、赤い花が毒々しく閃めいたり、消えたりした。彼は見たのだ。お扇の方に、かつてマラッカでおのれの局部にあらわれたものと同じ症状を。――

神父の奇蹟は、彼の黴毒をまったく癒してはいなかったのだ。――だが、弥次郎の頭には今や神父の影の片鱗だになかった。彼の頭のなかで暴風のように乱舞しているのは、マラッカで見たその病いのなれの果て、あの恐ろしい悲惨な狂人群であった。――

同じ頃、聖フランシスコ・デ・ザヴィエルはフェルナンデスらを伴って、山口から都へ、膝を没する雪を血で染めながら急いでいた。そのめざす都は戦乱に焼け、天子はすでに幻影的存在となり、将軍も今や逃げ去ったとも知らず、いわんや、後に日本の覇者となるべき織田信長が、いまだ一介の餓鬼大将として、馬上、不敵な面魂に柿をかぶりくいに喰いながら清洲の町をねり歩いているなどとは、もとより知らず。――

聖なる一行は、喘ぎながら讃美歌をうたいつつ一心に進んだが、雪と寒さと石を投げる悪童たちは、その歩みを遅々としてはかどらせなかった。

その牛歩の使徒達を追って、スピロヘータ・パルリダは、雷光のごとく、潮のごとく駈けひろがっていった。お扇の方から城主へ、その他の愛妾へ、市来の城へ、さらにこの南国から日本全土へ――ああ、げにや未開拓の豊饒なる葡萄園！

聖なる信仰のパウロは何処へいったか。――

「神秘にして測り知られぬ天帝の御摂理により」

とルイス・フロイスはその著『日本史』のなかで感動していう。

「彼は海賊船に乗ってシナに渡り、その地で殺されたということである。おそらく、彼は己の罪について後悔し、良き死をとげたであろう。しかし、それもなお確かなことではなく、これ以外にわれわれは彼の末路に就(つ)いては何も知らない……」

ポーハタン号の密航者

村上元三

村上元三（むらかみ・げんぞう）
明治四十三（一九一〇）年、東京生れ。青山学院中等部卒。昭和十五年、『上総風土記』で直木賞を受賞。戦後、朝日新聞連載の『佐々木小次郎』を始め、『加賀騒動』『源義経』『水戸黄門』『大久保彦左衛門』『田沼意次』などの作品があり、著書多数。『村上元三文庫』全九巻（昭和二十九年、講談社）、『村上元三選集』全六巻（昭和四十一年、徳間書店）がある。

――安政七年庚申（西暦一八六〇年、三月十八日改元、万延元年）一月十四日、陰晴定らず、東風。今暁寅刻、サントウイス島の内、オワフ島を遥かに船の左に見る。この辺、波濤至って静まり、およそ三里ばかり南に向い、走る。卯刻に至り、島の南面に沿うて、およそ一里ばかり東に向い、午刻、オワフ島に入る、未刻、正使はじめ一統上陸す。
（中略）
同月二十七日まで、この地に逗留せり――
（勘定組頭森田岡太郎清行家来、石川鑑吉克己著、写本『ポーハタン号航米日誌』より）

一

「お前もゆうべのことは、よく憶えているだろう。本来なら上陸禁止というところだが、小栗様から格別のお言葉があった。絵ごころのあるお蔭で、お前も上陸出来るんだ。有難く思え。その代り、なんでも見たものは眼の中に畳み込んでおいて、夜になってから絵を描くのだ。人の見ている前で、やたらに書帖や筆を取り出すんじゃあねえぞ」
上役の栗島彦八は、役目は小人目付、十五俵一人扶持のご家人で、将軍の行列の先駆を勤めるときは、無紋の羽織を着るところから、黒羽織とも呼ばれている。

下役の坂本伝之助と、こうやって二人きりで向い合っているときは、普段のべらんめえ口調になるが、これでも今度のポーハタン号乗組の八十一人の日本人の中で、監察使のお目付小栗豊後守忠順の従属第二長官、などという固苦しい肩書をつけられたのは、それだけの働きを認められたからであろう。

ことし四十九歳だが、おしゃれなので栗島彦八は、年よりも若く見えるのを自慢にしている。物事を大仰に言う癖があるし、この航海に自分の下役の中から坂本伝之助を連れてきたのを、ひどく恩に着せていた。

「全く以て、申訳のないことでございました。これで久し振りに陸へあがれる、と思うと、ゆうべはうっかり酒をのみすぎまして」

表面は殊勝らしく詫を言いながら、伝之助は、内心では舌を出しそうな気持であった。上陸できる、と思うと、どうにも落着かず、横眼で船室の窓越しに、ちらちらとホノルル港の景色をのぞいていた。

船室の寒暖計は、華氏七十五度を示している。思ったよりも暑くはないし、それに景色がよさそうなので坂本伝之助は、栗島彦八の小言など頭の上を素通りさせた。

「じゃあ、あとからついて来い。当分は旅籠泊りだから、まごまごして恥をかくなよ」

念を押しておいて栗島彦八は、塗笠を手に、羽織の紐を正しながら、船室から船上へあがって行った。

柳行李を担いでそのあとに続きながら坂本伝之助は、柱にかかった西洋鏡を、ちらりとのぞいて見た。ひどい宿酔なので、瞼が腫れあがり、顔から艶が失せている。しかし、ことし二十三歳、江戸にいたころは、どこの遊所でも女にもてたという自信があるし、色の黒い土人の住んでいるこのオワフ島でも、まんざら女たちから騒がれないこともなかろう、という自信があった。

急いで甲板へあがると、ホノルルというこの港の中が一目で見渡せた。風は涼しいが、やはり陽ざしは強く、くらくらと目眩がしそうになった。眼の前に大きな山脈が連なっていて、樹木の多い港町が、陽の光の中に白や赤の彩りを見せて、盆石のような感じであった。

上甲板で、オワフ島在留のアメリカ駐在官三人が、遣米使節を出迎え、上陸の打合せをしていた。正使の外国奉行新見豊前守正興、同じく副使の村垣淡路守範正、目付の小栗豊後守忠順、勘定組頭の森田岡太郎清行、外国組頭成瀬善四郎、同じく調役笠原重五郎、徒士目付刑部鉄太郎、日高圭三郎などが、それぞれ羽織袴に威儀を正し、通弁の立石得十郎を通じて、上陸後の次第などを決めているようであった。

伝之助の上役、栗島彦八は、旗本ではないし、外国奉行などとは身分も違うので、うしろのほうに立って、いささか心細そうな顔をしていた。

正月二十二日、横浜を出てから、はじめてポーハタン号は外国の港へ入り、乗員も上陸するわけであった。しかし、八十一人の日本人使節団がすべて上陸する、というわけには行かず、使節たちのほか、今日は左舷の部屋に入っている者たちだけが使節に随行して旅籠へ行く、と決っていた。

日米修交条約が結ばれてから、はじめてアメリカへ行く日本使節を乗せたこのポーハタン号は、一八五〇年にアメリカで造られた外車蒸気船で、長さ二百七十呎（フィート）、幅は四十五呎、深さ二十五呎、マストは三本、大砲は左右に八門ずつ、噸（トン）数は二千四百十五噸、一千二百馬力であった。

船の中央の煙突の後方から、船室へおりると、左舷には小栗豊後守の家来九人、それから日本人医師六人、小人目付の栗島彦八と塩沢彦次郎、それに普請方（ふしんかた）の辻芳五郎、そして通弁の部屋、と五室が並んで、船の後尾には大きな船室が二つあり、外国奉行、勘定組頭、目付などが入っている。

甲板の上にも船室が並んでいるが、それはこのポーハタン号の提督テットナル、船将ビールソン以下三十数人のアメリカ人たちの船室で、便所も日本人用、アメリカ人用と二つにわかれていた。もともと日本人の使節団が八十一人もの大人数になったについては、日本出発前にアメリカ公使ハリスと徳川幕府とのあいだに、何べんも交渉が重ねられた。使節三名のほか、役人、医師、通辞などが十五人、家来たちは五十三人、それに小者が四人、外国方小買物御用達伊勢屋平作の手代喜三郎のほか、五人の賄方（まかないかた）が乗り込むことになった。

使節の家来の中には、坂本伝之助のように、三両二人扶持の軽輩で、遠いアメリカへ行くのなど、有難く思っていない連中もいる。

しかし、この朝、はじめてオワフ島のホノルル港へ入った朝、外国というところも案外に毛嫌（けぎら）いをしたものでもないな、と伝之助は宿酔でふらふらする頭の中で、考え直していた。

船中で得た知識では、このサンドウイッチ諸島は、十一の島に分れて、オワフ島のホノルルという港にはアメリカ公使も駐在して、景色もいいし、色の黒い土人が未開の生活を送っている、という先入観念とは全く違った土地だという。

見ていると、港のほうから何艘（そう）もの短艇（バッテエラ）が漕ぎよせてきて、まず正使の新見豊前守たちから、ポーハタン号をおりて、それへ乗り移り、港へ向った。

坂本伝之助のような下役たちは、ずっと後廻（あとまわ）しになったが、短艇を漕いでいるのは、いずれも色の黒い土人たちで、物めずらしそうに日本の侍たちの姿を見あげ、見おろしている。

頭の上に、ほとんど木の生えていない大きな禿山（はげやま）が、のそっと聳（そび）えていた。海の水は透き通って、底の白い砂までよく見える。海岸一帯は砂浜で、濃い緑の中に、赤や紫のどぎつい色をした花が咲いていた。

「日本では、ちょうど春と同様の気候だな」

同じ短艇に乗った石川鑑吉が、伝之助へ話しかけた。この石川は、勘定組頭森田岡太郎の連れてきた五人の家来の中の一人で、ことし三十五歳、江戸の飯田町に住居があるという。書役を勤めているせいか、筆まめで、毎日、丹念に船中で日記をつけていた。

日記をつけるというのは、新見豊前守のほか、どの侍もやっていることだが、坂本伝之助に与えられた仕事は、文章の代りに画を描く、ということであった。こんど日本を出発する前、幕府とハリスとのあいだの申し合せでは、あくまで目的は両国の修交を深めることにあるのだから、国防に関する秘密には一切触れない、という条件があった。

しかし、ポーハタン号に乗ってみると、船将のビールソン以下、べつに船の構造や機関を隠したりせず、ロベルツなどという若い中尉は、自分から日本の侍たちへ、船の大砲の扱い方まで教えてくれた。

「このオワフ島には、王様が住んでいるそうだから、さだめしアメリカも厳重な備えを固めていることだろうな」

と伝之助は、石川鑑吉の気を惹いてみたつもりだが、石川は眼に入る景色にすっかり感心して、伝之助の言葉が気にはならないらしい。

短艇が船着場へ横着けになると、何台もの馬車が待っている。話には聞いていたが、誰もが馬車というのを見るのは初めてだし、馬は嫌いだという普請役の益頭駿次郎などは、いやな顔をしている。

馬車は四輪で、馬二頭、あるいは一頭で曳かすようになっている。新見豊前守、村垣淡路守、小栗豊後守の三使節は、二頭立の馬車一台に一人ずつ乗り、アメリカ士官が同乗した。そのほかは二人、三人、四人と同じ馬車で、伝之助は石川鑑吉、同じく森田岡太郎家来の広瀬角蔵、狩野庄蔵などと同じ馬車に乗った。

海岸には、おびただしい数の色の黒い男女子供が集って、日本人の使節を見物していた。

「どうだね、狩野さん」

馬車が走り出してから伝之助は、そっと、狩野庄蔵へささやいた。

「ここに十日以上も逗留するそうだから、何か面白い遊び場所が見つかりそうだ」

狩野は同輩の手前、べつに返辞もしなかったが、横目で伝之助を見ると、にやりと笑った。

二

旅籠は、フランスホテル・ハノラレイトと看板が出ていた。二階建で、部屋の壁には白粉紙、花紋紙などを張り、窓には玻璃障子をはめてある。寝台は四つ脚の台で、四方に柱があり、上から白い蚊帳のようなものがかけてある。

ポーハタン号の船室では、蚕床のようなところへもぐり込んで寝たが、それよりもはるかに寝心地がよい。旅宿の庭には、椰子、芭蕉、鶏頭、八つ手などの木や花が茂って、緑の色が日本と違って強烈であった。

板切と藁で出来た小屋のようなものばかり建っているのか、と思っていたが、そうではなく、市中には白い漆喰を塗った三階建の家が並び、ことに翌日、新見豊前守たちが挨拶に行った政庁は、周囲を樹木に囲まれ、いかめしい造りであった。門を入ると、中央に五十間ほどの長さの道路があって、その突き当りに高い塔を具えた政庁がある。前庭には、加農砲六門ほどを備えつけてあり、制服を着た兵士たちが出迎えた。

アメリカ公使ウイルリーの案内で、日本使節たちは政庁の中へ通され、国王カメハメハ四世、エンマ王妃に拝謁を許された。

坂本伝之助のような軽輩は、政庁の中へは通されず、玄関の横の控室で待たされた。

いろいろと面倒な儀式が続いたようだが、伝之助たちには、関係のないことなので、控室

の椅子に退屈をしながら腰をおろしていた。
「おい、坂本」
狩野庄蔵が、横からそっと言った。
「おれたちは、今夜は船へ帰るが、あさって、また上陸出来る。通弁の立石得十郎も弟の斧次郎も、ひどく堅物だから、女買いなど、とんでもないことだ、とぬかしゃあがる。どうだ、あさって、ホテル館の番頭に頼んで、どこか面白い場所を教えてもらおうじゃあねえか。女っ気なしで、アメリカくんだりまで行くのか、と思うと、それだけで眼の玉が赤くなりそうな気がする」
「おぬしとおれだけの約束にしておこう。うっかり森田様の耳へ入ったりしたら、それこそ大ごとだ。栗島様だとて、本当は遊び好きなのだが、異国へ参って恥をさらしてはならぬ、というお考えでな」
ほかにも女買いに行きたい連中がいるに違いないが、めいめい大事な役目を帯びている、という自負があるだけに、この二人のように、女の話など口に出す者はいない。
その日、フランスホテルに帰ると、小人目付の栗島彦八は、水で顔を洗いながら、伝之助を睨みつけた。
「いいか、くれぐれも喧嘩口論は罷りならぬ。ここにはアメリカのコンシェル、軍人など、大ぜい居るから、使節がたの恥になるようなことは、しちゃあならねえぞ」
「よくわかっております」

「この旅籠は、一人四弗ずつかかるそうだが、宿泊費はハワイの王室持ちで、いわば日本使節はただで泊めてもらうわけだ。なおのこと、行儀をよくしなくちゃあいけねえ」
そう言う栗島彦八自身、六尺褌一本で、身体を拭いながら、
「さっきは政庁で、何やら西洋音楽に囃し立てられながら馳走になったが、どうも豚の臓物のようなものが胃の腑に引っかかって、気色が悪くていけねえ」
「旅へ出たら、水と食当りには気をつけろ、とよく言われておりますが、こう向う任せでは、用心もしておられませぬな」
「郷に入っては、郷に従えだ」
そう言った栗島彦八も、このフランス旅籠へ入ってから、便所の勝手が違うので往生していた。ポーハタン号の厠は、しゃがんで用がたせるが、このフランスホテルの便器は、腰をかけるようになっていて、用が済むと、上の箱からさがっている紐を引っぱる。そうすると、音を立てて水が出てきて、便器の中のものを洗い流してしまう。
あらかじめそういう事を、長崎から来た通弁の立石得十郎兄弟が、使節一行によく教えこんでくれた。
ポーハタン号が日本を出発するとき、護衛として随行する咸臨丸は、その前に神奈川を出帆してしまっている。先発した咸臨丸は、オランダ製の木造スクーナー船で、二百五十噸、乗員は軍艦奉行木村摂津守、教授方頭取の勝麟太郎以下水夫五十人、釜焚十五人、大工と鍛冶職が一人ずつ、ほかにアメリカ測量船クーパー号の船将ブルーク海軍大尉以下十人の外国

人乗員で、ポーハタン号と一緒にアメリカへ到着する予定になっていた。

だがポーハタン号は正月二十七日に、海上で暴風雨に会って、船体を損じ、石炭も乏しくなってきた。サンフランシスコ直航を変更し、針路を南南西に向け、サンドウイッチ諸島のホノルルに入港し、船を修理してからアメリカへ向う、ということになった。

「どんな野蛮な国か、と思っておったが、このオワフ島というのは、なかなかに開けたところだ」

衣服を改めた栗島彦八は、アメリカ公使、ウイルリーの招宴に出かけるので、使節たちと一緒に馬車に乗って、フランスホテルを出て行った。

坂本伝之助は、八王子千人同心の倅で、こんどのアメリカ行が決ってから、急に栗島の下役に決められた。叔父が中間目付を勤めているところから、道楽者で、取得といっては絵ごころのあるぐらいしかない伝之助に、なにか出世の糸口を見つけてやろうとして、伝手を求めて徒士目付の刑部鉄十郎へ頼み込んでくれたらしい。伝之助自身は、べつに出世をしたいという気持もないし、本心は、両刀を捨てて気らくな町人暮しを望んでいたのだが、外国の軍艦に乗ってアメリカ見物に行くのも悪くはない、と思いつき、ふっとこんどの役目を承知する気になってしまった。

ポーハタン号の中でも、話対手になるのは、ときどき吉原や品川の廓で一緒にのんだことのある狩野庄蔵だけであった。

その狩野と、オワフ島到着後、三日目の十七日、伝之助はこっそりと遊びに行く約束が出

来た。

フランス旅館の中では、安心して酒ものめないし、丁髷に両刀を帯びた姿なので、色の黒い女へ気軽に笑いかけるわけにも行かない。言葉も通じないし、なにかいい方法は、と考えているうちに、このホテルの向い側に清国人の薬種屋があるのを、狩野が見つけてきた。言葉はわからなくても、漢字を書けば、お互いの気持は通じる筈であった。

潘済というその清国人は、伝之助と狩野が、薬を買いながら筆談をすると、笑いながらなんべんもうなずいた。

「今夜八時、ホテルの裏門のところに待っていてくれ、とある」

と伝之助は、対手の書いてくれた返事を読みながら、

「ただし、刀を外して、なにかで姿を隠して欲しいそうだ。このホノルルの町の中では、人眼につくから、馬車に乗って、ちょいと遠っ走りをする、ただし、自分がついて行くから安心してくれ、と書いてある」

「そいつは結構だ」

狩野庄蔵も、もう三十をいくつも越しているのに、はじめて吉原へ出かける若い者のように、そわそわしていた。

その晩、伝之助は上役の栗島彦八が寝台へ入ってから、自分たちに宛てられている階下の部屋を脱け出した。十人前ほどの寝台が並んで、めいめい主人持ちの侍たちは、ほかの部屋に集って酒をのんでいるらしい。

暗い夜の中に、強い花の匂いがしている。

裏門のところに、狩野と清国人の潘済が待っていた。黙って狩野は、日本の合羽のようなものを伝之助へ渡した。

フランスホテルの裏通りに、一頭立の馬車が待っていた。屋根をかけて、ずいぶん汚れた馬車だが、贅沢は言っていられない。

二人とも、明日の朝までには、フランスホテルへ帰らなくてはならないが、あらかじめポーハタン号の中で両替をしてもらったアメリカの一弗紙幣三枚ずつを、ちゃんと懐中に忍ばせ、大小は腰から外してあった。

潘済は、駁車台へ乗って、ハワイ人へなにか言いつけた。すぐに伝之助と狩野は合羽を頭からまとって、人に見られないようにした。

やがて、月が出てきた。両側を山にはさまれた道を走って、間もなく、左手に青く光る海が見えた。ところどころに、農家があるらしく、鈍い灯の色が瞬いている。

「どこへ行くんだろう、この乗物は」

しばらく経って、少し心細くなったのか、狩野が小さい声で言った。

「こうなれば、任せておくよりほかはない」

少しは心細いが、笑いにまぎらして伝之助は答えた。

ホノルルから一里近くは離れた、と思われるころ、馬車は漁村のようなところへ入った。月が明るくなって、椰子の葉で屋根を葺いた家が固まり、なにやら賑やかな楽の音が聞える。

ようやく馬車はとまって、潘済が二人をうながした。その潘済も、店にいたときの椀のような帽子をぬいで、頭を布で巻き、襦袢のようなものを着て、腰に日本の腰巻に似たものをまとっていた。年はよくわからないが、顔に皺の出ているところを見ると、もう潘済は五十過ぎているであろう。

馬車は、木造のあまり大きくもない家の前にとまった。中から賑やかな笑い声と、楽の音が流れ出ていた。

潘済は、酒をのむ手真似をして、二人の先に立って、その家の中へ入って行った。まるで家が燃えているような煙草の煙と、強い酒の匂いが渦を巻いて、十人ほどの色の黒い連中が、粗末な椅子に腰をおろし、騒いでいた。日本でいえば、居酒屋といった類であろう。

度胸を据えて伝之助も狩野も、潘済と同じ丸い卓に向って、腰をおろした。思い切って合羽を脱ぎ去ると、客も二人の丁髷頭や着物に袴を見て、びっくりしたのであろう、ぴたりと静かになった。おそるおそるこちらを眺めている。

潘済が立って、なにか大きな声で説明をした。アメリカ軍艦に乗ってきた日本人の客だ、という意味らしい。日本がどこか、この村の者たちにわかる筈はないが、誰かポーハタン号入港の話を聞いたとみえ、一ぺんに男たちがまわりへ集ってきた。

「この調子だと、酒にはありつけるらしいが、女の匂いもしやあしねえじゃあねえか」

うんざりしたように、狩野が言った。身体が大きいし、顔も脂ぎった狩野がそうやって腰をおろしていると、オワフ島の土人たちと少しも顔つきは変らない。ただ着ているものと、

頭の上に乗った丁髷が邪魔であった。

三

はじめのうちは、臭くてのめやあしねえ、などと文句を言っていた狩野が、色のついていないその酒を、がぶがぶのみはじめた。潘済が筆談で説明するのでは、果実から採った酒だから、身体には少しもさわらない、という。

伝之助も、木の椀につがれるその酒を二杯ほどのんだが、ひどく強いので、眼がまわりそうになった。店の客は、潘済を通じて、いろいろ話しかけてくるが、もちろん言葉のわかる筈はない。それを潘済が、また紙に漢字を書いて、伝之助たちへ教えてくれる、という廻りくどい話のやりとりであった。

ここは、ホノルルから少し離れたカエムという漁村で、この家は漁師たちの遊び場所になっているし、いまに女たちの踊りもはじまる、と聞いて伝之助たちは、辛抱する気になった。楽を奏しているのも、色の赤黒い連中で、日本の胡弓に似た楽器や、琴のようなものを弾いて、歌を唄っている。

しかし、女たちが店の奥から現われ、踊りはじめたのを見ると、伝之助も狩野も、にわかに酔いが醒めてしまった。身の丈六尺に近い、と思われる、赤銅色の肌をした女三人ほどが、手足をむき出しにして、胸を赤い花模様のある布で巻き、腰簑をつけ、派手に腰を大きく動かしながら、両手をさしのべて踊りはじめた。人を食べてきたのか、と思われるほど、大きな唇に濃く紅を塗りたくり、身体から異様な香料の匂いを撒き散らして、伝之助と狩野へ流し眼をくれながら踊っている。

色気もなにも消え失せ、伝之助は、身体中が寒くなってきた。

「おい、そろそろ帰ろうか」

同じ思いだと見えて、狩野がそうささやいたとき、伝之助のうしろへ誰かが近づいてきた。振返ると、ほかの土人と同じ、上半身は裸の、薄汚れた腰布をつけた、はだしの男であった。頭に黒い布を巻いているが、その下からはみ出ている毛は、ほとんど真白であった。

その男は、中腰になって伝之助の耳へ口を寄せると、何か低い声で言った。この土地の言葉だと思い、聞き流そうとしたが、ひょっと伝之助はひっかかった。日本語によく似ている、と気がついたからであった。

黙って伝之助は向き直り、対手を見直した。土人と同じ顔立ちだが、ひどく昂奮している様子で、眼にいっぱい泪がたまっていた。その男は、伝之助へ、口を寄せた。息が臭い。楽の音に消されそうになりながら、はっきりした日本語が、その男の口から洩れた。

「アメリカの船で、このオワフ島へおいでになった日本のお侍。そうに違いございますまいな」

「何だ、お前は」

びっくりして伝之助は、大きな声になった。それを対手の男は、手で制して、ささやくように言った。

「わたくしは、日本人でございます」
「本当か、おい」
急いで伝之助は、狩野庄蔵の腕を引っぱった。
「この男が、日本人だと言っている」
「嘘をつけ」
狩野は、頭から笑い飛ばして、
「こんな島に、日本人が住んでいる筈はねえ。土民のほか、アメリカ人、フランス人、それにいちいちおぼえちゃあいねえが、ヨーロッパ人たちも住んでいるそうな。しかし、日本人が居るとは初耳だ。こいつ、何を言っているか、知れやあしねえ。こっちが本気にするのを見て、からかおうという量見なんだろう」
そのまま狩野は、女たちの踊りのほうへ身体を向け、眼尻をさげていた。
「お願いでございます」
土人の姿をしたその男は、歌や楽の音に消されそうな低い声で、懸命に伝之助へ言った。
「わたくしの家は、このすぐ近くでございます。お手間は取らせませんから、どうかおいで下さいませんか」
狩野はすっかり酔っ払っているし、清国人の潘済は、ここのあるじらしい男のところへ行って話をしている。
「お前、本当に日本人なのか」

そう訊いた伝之助へ、対手の男は椅子にしがみつくようにして、しゃがみ込むと、
「ここではお話が出来ませぬ。ご面倒ですが、ちょっと家までおいで願いとう存じます」
上役の栗島彦八から内々で命じられているのは、これは日米修交を目的にした旅行だが、その途中、アメリカの軍事的な施設、あるいは機密に属することを眼にしたら、それを書きとめたり、あるいは絵に描いておくように、ということであった。栗島彦八が、なぜそういうことを自分に言いつけたのか、そこまでは伝之助も考えていない。近年になって諸外国の船が、さかんに日本へやってくるし、幕府でも諸藩でも、外国式の調練を始めている。大老井伊直弼の方針通り、横浜、長崎、兵庫、新潟の港を開いて、諸外国との通交を始めなくてはならない時代になっている。幕府とタウンゼント・ハリスとのあいだに十四カ条の日米条約が取り結ばれたが、向うもこちらの国内情勢を探ろうとしているのだし、アメリカが日本へ対して、どういう考え方を持っているか、それを知るのには、儀礼的な方法だけではなく、アメリカのいろいろな施設を、細かく見て来なくてはならない、と栗島は言った。
坂本伝之助としては、いわば自分だけが隠密の役目を勤めるのだ、という気持であった。こういう風に、土地の土人と同様の姿をした日本人が、オワフ島に住んでいる、ということは思いがけないことだが、この男の口から何か聞き出せるかも知れない、そう思うと、ちょっと興味が起きた。
「よしきた。土地不案内だから、あまり遠くはご免蒙るぜ」
酔っ払った振りをして伝之助は、その男に腕をとられ、よろよろと立ちあがると、店から

出かかった。

「おいおい、どこへ行くんだ」

うしろから声をかけた狩野へ、ちらりと振返って伝之助は、眼配せをすると、人ごみをわけて店を出た。

対手の男は、店の前に張り出している屋根の下をくぐって、伝之助を横丁へ連れ込んだ。夜の中に潮の匂いがして、月の明るい海が眼の前に見える。

「わたくしは」

背をかがめて歩きながらその男は、ぼそぼそした声で話した。

「生れは上総の姉ケ崎でございます。ここでは漁師をしておりますが、日本を離れてから、もう五年以上になります」

「よくあることで、船が難破して、こっちのほうへ流されてきたのか」

「そうじゃあございません。兵庫の港で働いておりますうちに、人買いの手に売り渡されまして、それから台湾、呂宋などを渡り歩いて、このオワフ島へ参ったのでございます」

「お前、ひとりか」

「ここへ来たときは、日本人が五人ほどでございましたが、オワフ島にはわたくし一人が残っております。サンドウイッチ諸島のほかの島には、何人かいるらしいんでございますが、お互いに便りがないもので、さっぱりわかりません。わたくしは次郎八と申します。ここではジロウという名で通っております」

久しぶりに日本人に会ったせいか、ジロウというその男は、能弁になった。

海岸へ出て、浜沿いに二丁ぐらい歩いたころ、ジロウの家があった。砂浜と椰子の林にはさまれて、ほかの小屋と同様、木の葉で屋根を葺いてあり、板壁の掘立小屋で、家の中は真暗であった。

ジロウひとりか、と思っていると、暗い中から人の動く気配がして、弱々しい女の声が聞えた。

戸口に立って、伝之助は息を詰めていた。なんの匂いかわからないが、ひどく臭い。板張りの床の上に、少しばかり調度が置いてある。窓から月明りがさし込んで、奥のほうに寝台が見えた。その上に、髪の毛をふり乱した女が臥ていた。

手探りでジロウは、蠟燭に灯をともして、テーブルの上に立てた。鳥の羽根や、豚の臓物のようなものが、床に散らばっている。匂いのするのはそれではなしに、寝台に臥ている女の体臭らしい。

「あれは、この島へ来てから一緒になった女でございます」

竹で編んだ汚い椅子を伝之助へ勧めて、ジロウは、汚い床の上にあぐらをかいた。

四

改めて対手の顔を見ると、ジロウはまだ三十をいくつか過ぎたぐらいらしい。しかし、皮膚は油を塗ったように赤黒くなり、髪の毛がほとんど白くなっているのは、苦労をしたせい

であろう。

伝之助の膝にすがるようにして、ジロウが頼んだのは、ポーハタン号に乗せてもらって、アメリカへ渡りたい、ということであった。

「まだ日本とアメリカのあいだに、そういう取り決めが出来ているかどうか、わたくしにはわかりません。でも、もう日本へは帰れない身の上でございますし、このオワフ島に住んでいるより、アメリカへ渡れば、なんとか生きる道を探して行けそうでございます。ポーハタン号には、ご公儀の偉いお役人様がたも乗っておいでだそうでございますが、なんとかお取計い願えませんでございましょうか。これでも船のことは、いくらか知っていますし、漁師で育ったんでございますから、海へ出れば、一人前に働けます」

酔いも醒めてしまって、黙って伝之助は、対手の言葉を聞いていた。

「お役人様がたさえご承知なら、お供の人数の中に一人ぐらいまぎれ込んでも、面倒なことにはなるまいと思いますが」

「そいつは、駄目だろうな」

と伝之助は、腰を浮かしかけて、

「こんどポーハタン号が日本を出るについても、アメリカ公使のハリスどのは、日本人の乗組が八十人にもなる、というので、はじめは承知をなさらなかったのだ。いくら船が大きくても、荷物や食糧を積まなくてはならないし、もっと人数を減らしてくれ、という話が出たほどだ。ここで日本人の乗組を一人でも殖やすというのは、とても新見豊前守様は、承知をなさるまい。第一、お前は人買の手で売られた、と言ったが、ご朱印船が諸外国へ出ていた昔ならいざ知らず、いまのこの世の中で、そんなことが行われているとは思えないな」

「嘘じゃあございません」

懸命に、ジロウは言った。

「国のご法度を犯してまで、外国へ行って働きたい、などという殊勝な心持からではございません。わたくしの存じておりますだけでも、長崎から清国人、オランダ人の手で、ずいぶん外国へ売られて行った男たちがございます。どうせ日本にいたところで、貧乏するのは同じことだ、と考えると、知らぬ外国へ行ったほうが、面白おかしい思いが出来る、と向う見ずな考えになる者だっているんでございます。わたくしもその一人ですが、なあに、こうなったのを少しも後悔しちゃあおりません」

「だが、女房もいるのだし、このオワフ島で働いているうちに、日本とアメリカの条約が実を結んで、大手を振って日本人が、アメリカへ働きに行けるようになるかも知れねえぞ」

「わたくしは、もうこの島には住んでいたくないのでございます」

「何か訳でもあるのか」

それへはすぐに答えず、ジロウは寝台に臥ている女のほうを、ちらりと見ると、低い声で答えた。

「あの女は、もう二度と治りっこねえ病気にかかっております」

「いくら土人の女だとはいえ病気になった女房を捨てて、アメリカへ逃げるつもりか」

「ただの病気じゃあございません、あれは。やがて顔も手足も、どろどろに崩れてくる病いなんでございます」

背筋が冷たくなって伝之助は、急いでその小屋から逃げ出した。ジロウが追ってきて、伝之助の足許にすがりつくようにして、泣きそうな声で言った。

「お名前は存じませんが、どうかお武家様、お願い、お願いを致します」

返辞をする元気も失せて、伝之助は走り出した。さっきのあの家は、すぐに見つかった。相変らず女たちが踊っていたし、楽の音も賑やかで、狩野庄蔵は正体なしに酔っ払っていた。

「おい、狩野、帰ろう。ここに長居は無用だ。女どころじゃあねえぞ」

狩野を抱きあげ、勘定を払ってから伝之助は、潘済と一緒に、待たせてあった馬車に乗り込んだ。

そのジロウという日本人のことは、伝之助は、上役の栗島彦八にも黙っていた。

もう上陸するのも嫌になって伝之助は、なるべくポーハタン号で寝泊りをした。

「あの晩、お前は土人を対手に、日本の言葉で話していたんじゃあねえか」

間もなくポーハタン号が出帆する、と決ったころ、忘れ物を思い出したような顔つきで狩野庄蔵が訊いた。

顔をそむけて伝之助は、答えた。

「お前は椰子酒に酔っ払って、正体をなくしていたからな、あの晩は。なにか勘違いをしているんだ」

二十五日、ポーハタン号乗組の日本人たちは、ホテルへ行って風呂へ入るため、午前と午後にわかれて上陸したが、伝之助は、腹が痛いというのを口実に、船に残っていた。

二十六日の朝、カメハメハ国王をはじめ、ホノルル在留のアメリカ人も大ぜいポーハタン号を訪ねて、日本人使節と挨拶を交した。海岸では、楽隊がいろいろの楽を奏したし、大砲が鳴ったり、賑やかな光景であった。

あくる二十七日の午後三時、ポーハタン号はホノルルを出発し、まず南東へ向って進んだ。

二十九日になって、船中に密航者のいるのが発見され、大騒ぎになった。アメリカ人のロベルス中尉の話では、ホノルルから土人がひとり船艙へしのび込んでいたのが、今朝になって見つかったのだ、という。訊問してみると、ラウイという名の土人で、アメリカへ渡りたい、と申し立てたらしい。

甲板へ引き出され、調べられているその土人の姿をのぞいた伝之助は、あのジロウという日本人だ、とすぐにわかった。腰に汚い布を巻いただけでジロウは、甲板の上にひれ伏し、泣きながらしきりに何か言っている。

その様子では、自分は日本人だ、ということは隠して、どこまでも土人になりすましているらしい。

伝之助も、ほっとしたが、もしもジロウの正体が明らかになったときは、こんどの使節の一行の目的に何か障害が起るのではないか、と考えると、落着かなくなってきた。

「日本の漂流民については、日米条約では、どういう風に決められておりますのでしょう

か」

何気ない調子で、上役の栗島彦八へ訊いてみると、栗島は妙な顔をして、

「それが、どうしたというのだ」

「いいえ、わたくしもいろいろと勉強を致したい、と思うておりますので、やはり知識を仕入れておきませぬと」

「新見様がアメリカへ着かれてから、ブキャナン大統領とのあいだで、そういうことについての取り決めがあるだろうな。いいほうの例は、土佐の万次郎という漁師だろう。漂流して、アメリカの捕鯨船に助けられ、あのサンドウイッチ諸島のオワフ島に住んでいた。それが、のちにアメリカ船で琉球を経て、鹿児島へ送られ、島津斉彬侯の知遇を得た。こんどは咸臨丸に乗って、名前も中浜万次郎と改め、教授方という扱いになっている。身分は旗本だし、漂流をしても、自分の心掛け次第、運次第で、中浜万次郎のようになれねえこともねえだろうな」

それを聞いて伝之助は、いくらか気持がらくになった。使節の一行がサンフランシスコへ着いてから、交渉次第では、あのジロウという日本人も、罪に問われないで済むかも知れない。

ポーハタン号は航海を続け、三月九日、サンフランシスコの見える海岸まで近づいた。短艇が一艘、連絡のためにポーハタン号へ漕ぎよせてきて、こう告げた。今から十五日前の二月十五日、日本軍艦咸臨丸も当地に着いたが、暴風雨に会って船体を損じ、メーア島にある海軍造船所で修復中だという。

こうなると伝之助は、その咸臨丸に乗っている中浜万次郎だけが、頼りであった。べつに哀れという気持も起きないが、あのジロウという日本人の身柄を、なんとか無事に日本使節へ渡してくれるよう、計ってもらおうという気持であった。ポーハタン号は、マストにアメリカ国旗と日の丸の旗をかかげ、サンフランシスコの港口へ近づいた。ちょうど午前十時を廻ったころで、左のほうに燈明台が見え、右の大きな岩の下に砲台が備えてあった。

そのときになって、急に前甲板のほうから、アメリカ人の乗組員たちの叫び声が起った。

「どうしたんです、あれは」

石川鑑吉や狩野庄蔵が、急いで甲板へ駈けあがるうしろから、伝之助も続いた。

「馬鹿なことをしたものだ」

通弁の立石得十郎が、甲板から海中をのぞき込みながら、

「密航したあのラウイというオワフ島の土人が、海へ飛び込んだのだ。調べられるのがこわいので、岸へ泳ぎ渡るつもりだろうが、ここらには鱶が多いというからな」

伝之助も、はっきり見た。

黒い頭がひとつ、燈台のほうへ向って、必死に泳ぎ続けている。晴れたり曇ったりの天気で、東北風が吹き、海は白波が立っている。

ポーハタン号でも、ボートをおろして、その土人を助けあげに行こう、とかかったが、それもすぐに無駄になった。

海面を、黒い大きな魚の背鰭が掠めたと思うと、ジロウは一ぺんもがいただけで、波の中に引き込まれた。それきりであった。

「つまらねえ真似をしやあがる」

船酔いを起したような顔つきで、狩野庄蔵が呟いた。

伝之助は、黙ったきり、そっと海のほうへ向って両手を合せていた。

それからポーハタン号は、サクラメント川をさかのぼり、午後三時、メーア島の海軍造船所の船着場に錨をおろした。咸臨丸も碇泊していて、向うから木村摂津守、勝麟太郎などがポーハタン号を訪ねて来た。

その中に、中浜万次郎がいて、アメリカ軍人とのあいだの通訳に当った。

話を聞いていると、このサンフランシスコに三人の日本人が住んでいて、咸臨丸を訪ねてきたという。べつに咎めも受けず、無事に話合いが済んで、そのままアメリカに住むことを許されることになったらしい。

「おい、なにをぼんやりしているんだ。すぐに上陸するから、用意しておけ」

栗島彦八から叱りつけられたが、伝之助は、気が抜けたように、ぼんやりと船室の小さな椅子に腰をおろしていた。自分がもう少し、あのジロウのために考えてやったら、何も鱶の餌食にならずとも済んだのだ、ジロウの望んでいたように、ジロウ自身もアメリカに住んで、せっかく結ばれた日米修交条約のために、身体を張って生きられたかも知れない、と思うと伝之助は、全身が凍りついたような心地であった。

五

明治十年、西南戦争のはじまったころ、東京の麹町で、ご多分に洩れず、ほかの徳川家直参と同様、細々ながら暮していた狩野庄蔵のところへ、栗島彦八が訪ねてきて、ふっと思い出したように、こんな話をした。

「おぬし、おぼえているだろう。ポーハタン号に、おれの下役として乗組んだ坂本伝之助のことな」

「はあ、ご一新になってから、外国船の火夫になってどこかへ行った、と聞きましたが」

「あの伝之助の野郎、いまオワフ島のホノルルで、雑貨商をして働いているそうな。先日、外務省出仕の友達が、知らせてくれた」

「そいつはまた、思い切ったことをしたものですな」

「かの地にいる日本人の話では、誰かの身代りにこうやって働かなくちゃあ、気が済まねえ、と言っているそうだ」

「変り者でしたからな、あの男は」

あの晩、オワフ島で伝之助と一緒に女買いに出かけたことは思い出したが、狩野は、サンフランシスコ沖で、ポーハタン号から海へ飛び込んだオワフ島の土人のことなど、きれいに忘れていた。

「本当に、物好きな野郎ですな、あいつは」

朔（さく）

綱淵謙錠

綱淵謙錠（つなぶち・けんじょう）
大正十三（一九二四）年、樺太生れ。東大英文科卒業。中央公論社の編集者を勤め、昭和四十六年退社後、「首斬り浅右衛門」を扱った長篇『斬（ざん）』で直木賞を受賞。以後、主に一文字題名の歴史小説を多数発表する。『狄（てき）』『鬼（き）』『怪（かい）』『越後太平記』『極――白瀬中尉南極探検記』などがある。

1

安政五年（一八五八）八月六日早朝、コレラの猖獗に燃え立っている江戸をあとに、品川沖を解纜して出てゆく一隻の洋式帆船があった。二本マストのスクーナー型木造帆船で、船名は大野丸。越前・大野藩、土井利忠の御用船である。

船長は吉田拙蔵。乗組員三十名。一緒に大野藩北蝦夷西浦元会所詰頭・早川弥五左衛門が乗船していた。〈北蝦夷西浦〉とは、のちの〈樺太西海岸〉の意である。

大野丸はこの七月十六日進水式をおこなったばかりの処女航海で、浦賀、遠州灘、熊野灘、兵庫、馬関と過ぎて日本海へ出、越前・敦賀の港まで回航しようというのである。

関東平野を吹き渡ってくる朝風を十分に孕んだメインマストの帆の頂きには、白地日の丸の総船印がひるがえり、船尾には瀟洒な三沢瀉の藩旗がはためいている。

出帆以来、船内に入るのを忘れたように後甲板に立ちつくしている弥五左衛門と、傍で舵輪を握っている吉田拙蔵とは、思い思いに何度それらの旗に視線を投げたことであろう。時には互いに顔を見合せて、莞爾とうなずきあうこともあった。

五年前、江川太郎左衛門の手で築かれた御台場も遠くうしろに去って、もはや視野にない。

紫色に霞む房総の山なみから顔を出した朝日が二人の赤銅色の顔を輝かした。

早川弥五左衛門、時に数え年四十歳。きょうは藩船大野丸の船出であると同時に、弥五左衛門が年来寝食を忘れて基礎固めに没頭してきた、生涯を賭けるべき一大事への船出でもある。その一大事とは〈北蝦夷経営〉という、当時としては破天荒な企てであった。

いま、舷側を叩く波音に耳をすまし、ゆるやかな船の起伏に身をまかせている弥五左衛門の胸中を去来するものが、いくつかある。

一つは去る七月十六日、既望の名月を賞でながら、盟友・内山隆佐および吉田拙蔵と三人で大野丸進水の歓びをわかちあった品川湾頭の祝宴の思い出である。大野丸竣工までの苦労をたがいにねぎらって、これから立ち向う難事業への決意を確めあい、快談縦横、献酬の盃を重ねて、つい夜の更けるのを忘れた。

静斎・吉田拙蔵は一詩を賦して、その歓びを吟じた。「我が大野丸成り、初めて品洋に放たる」という題であった。

四方海を環らす、船無かるべけんや。
新造初めて浮ぶ武の品川。
雨気は全く収りて雲は岫に入り。
晴烟一髪水天に連なる。
波は舷外に当りて柁声砕け。
雨は檣頭に触れて帆影円かなり。

好いかな、遠航遂に意の如し。
西英北魯いずれを先に向わん。

朗々たる声が静かな月夜の海面に押し広がり、やがて闇と浪に吸い込まれて行った。

弥五左衛門の胸裡に去来するいま一つの思いは、北蝦夷に残してきた部下たちの待つウショロ（鵡城）への帰心である。

今春三月十九日、幕府から、

北蝦夷地西海岸「ライチシカ」ヨリ北「ポロコタン」迄ノ内申立ノ通家来為立入「ウシショロ」へ元会所取建漁場物産等取開士農共引移御固筋ヲモ相心得候様可被致候猶委細ノ儀ハ箱館表ニ於テ可承合候事

という樺太屯田の許可が降り、北蝦夷地掛だった弥五左衛門が屯田司令ともいうべき元会所詰頭となって、福永鉞之助を筆頭に、服部、馬場、伊藤ら藩士十人と、領民の多助（折立村）由松（同上）忠兵衛（織田村）ら二十余人を伴って直ちに北蝦夷の鵡城へ渡航したのであるが、弥五左衛門は福永以下に越冬を命じ、単身江戸へ出てこの大野丸の竣工に立ち会ったのである。

その北蝦夷に残された福永たちが、どんなにこの大野丸の進水を待っていることであろうか。朔北の極地で越冬するということが、しかも全員初めての体験であるとすれば、どんなに辛いものであるかは、想像以上のものがあるであろう。それを司令としての弥五左衛門があえて出府してきたのは、北航専用船の建造を督励し、きょうのこの感激を一日も早く持ち

帰るためではなかったか。彼らを流人同様の境涯に打ち捨てておいてはならぬという責任感と、どうだこの大野丸を見てくれ、という誇らかな安堵感とが、いま弥五左衛門の胸中を充々たしている。

弥五左衛門は福永以下の顔を一人一人思い浮べてみる。鵜城湾を大きく囲んだ南岸の突端に建てた望楼に昇って、南の海上に現れるであろう洋式帆船の英姿を毎日のように一本の遠眼鏡から待ちこがれている彼らの動作までが眼に見えるようである。

彼らの待ち望んでいるのは、大野藩自身の所有する洋式帆船――長さ十八間・幅四間・深さ三間のこの大野丸である。その必要を力説したのは早川弥五左衛門であり、その実現の衝にあたったのは内山隆佐であった。

大野丸が浦賀の港に入ったのは、日がまさに沈もうとする暮六つ刻であった。遥か連山の奥に、落日を背に富士がくっきりと見えた。

「きょうは晴天と順風にめぐまれて、なによりのことでしたな」

と弥五左衛門が拙蔵をふりむいた。船上は最初の寄航地である浦賀入港をひかえて、全乗組員が甲板にあらわれ、なんとなくざわめいていた。

「そうですな。この調子で敦賀まで行ければ幸いですが……」

浦賀の港を遠くに凝視しながら、舵輪を操っている拙蔵が答えた。

弥五左衛門は「おや？」と思った。拙蔵の声にいつもの張りが感ぜられなかったのである。弥五左衛門は拙蔵の顔を、こんどは注意ぶかく眺めた。夕日の余映が薄紅くさしてはいるが、

拙蔵の顔は意外に蒼ざめていた。

「拙さん、どうしました。顔色が悪いじゃありませんか」

「いや、たいしたことはありません。潮風にあたって、ちょっと風邪でもひいたんですかな」

と、他人ごとのように答えたが、気分の悪いことだけは認めているようであった。

「熱は？」

「少し寒けはしますが、なあに、今晩浦賀で一休みすれば癒りますよ」

「船長に倒れられては足を失ったも同然ですから、無理をしないでくださいよ」

「いやいや、まだ倒れるわけにはいきませんからな」

そういって拙蔵が大きく笑った。

弥五左衛門にはその笑いもどことなくとってつけた感じがした。表面はいつもの豪気な拙蔵だが、どうも少し無理をしているようだ、という思いが頭をかすめた。が、まあ、たいしたことはないだろう、と考え直した。また、そう考えたかった。

拙蔵の肉体は鍛えぬかれたからだである。昨安政四年七月十九日、やがて建造されるはずの洋式帆船の船長たらしむるべく、弥五左衛門から内山隆佐に進言して、拙蔵を築地講武所内にある軍艦操練所に入学させたのであった。

軍艦操練所は江戸幕府が幕臣および諸藩の有志者に海軍教育を施す目的で、その年の三月に設置したばかりであり、永井玄蕃頭を所長、矢田堀景蔵を教頭に任じて、安政二年長崎に

設けた海軍伝習所の第一期生のうち十六名を江戸に呼びもどして、うち八名を教授方、のこる八名を教授方手伝として出発したものである。

吉田拙蔵はそこでまる一年間、寝食を忘れて軍艦操縦術の修得につとめ、いまこの大野丸の船長として舵輪を握っている。その鍛えぬかれたからだがそう簡単に病魔に侵されるとは思えなかったし、また、じじつ、いまこの浦賀入港にあたって、船全体の采配は慣れた船長にとってもらわなければならぬのである。

弥五左衛門はわずかに翳った不安を打ち消すと、迫りつつある陸地に視線をもどした。

その晩、拙蔵は発病した。コレラであった。同時に船員にも二、三人の患者が発生した。彼らは突然激しい嘔吐に襲われ、つづいて下痢に見舞われた。はじめは厠へ走る間隔が近いのを隠して堪えていたが、やがて厠で立ち上る余裕さえなくなり、ついにはしゃがんでいるのさえ我慢できない症状を呈した。

それが〈暴瀉病〉であることは、すぐに皆がさとった。江戸でその流行の状態をだれもがよく見知っていたからである。彼らも江戸で感染し、潜伏期をすぎて浦賀で発病したものらしかった。

弥五左衛門は即座に拙蔵を船長室に、他の患者たちを特定の船室に隔離し、拙蔵の看病にはみずからがあたり、他の患者たちにもそれぞれ看護当番をつけた。そして北蝦夷生活のために用意した下痢どめとか腹ぐすりのたぐいを飲ませたが、それらはすべて吐き出された。

むしろ吐き出す種を与えているようなものであった。嘔吐も下痢も、排泄されるものはすべて米のとぎ汁のような、真白な水となり、便の臭いも失われていた。

弥五左衛門は乗組員全員に、暴瀉病が治まるまでは船は出港しないこと、すでに同じ病気にかかっていて、これから発病する者もいるであろうが、ちょっとでも異状を感じたなら、隠さないで報告すること、またその予防策としては、全員からだを温く保つこと、などを命じた。

「腹巻をもう一度新しいのにとりかえて、うんと厚く巻くようにせよ。そしてどんなに寝苦しくてもはずしてはいけない」

「これから当分は暴瀉病との戦いに専念する。それにはまず自分のからだに注意することだ。暴飲暴食をつつしみ、こなれの悪いものは食べてはいけない。できれば当分なにも食べずに過せ。どうしても空腹に耐えられなかったら、必ず熱いお茶と煮炊きした軟いものを食べよ。生ま水、生ま物は厳禁する」

等々、いろいろな注意を与えて、病気への臨戦態勢を布いた。

「この病気は、からださえ丈夫なら、たとえ罹っても死ぬことはない。お前たちのからだは普通の人間の何層倍も丈夫に鍛えてあるのだから、たとえ罹っても絶対に心配することはない。心を落着けて治療すれば必ずなおる」

と、船内の不安を一掃することも忘れなかった。

そして拙蔵はじめ患者にたいしては、とにかく全身を温めよと指令し、腹巻寝巻は勿論の

こと、布団も厚く掛けたうえ、焼酎に樟脳をまぜて火で温め、木綿の裂れにひたして腹と手足に静かにすり込ませ、からし粉とうどん粉を捏ねた芥子泥を同じく木綿裂れに塗りのばして、これも同じく腹と手足に貼らせて、時間をはかって取り替えさせた。

次に、あらゆるものを嘔き出してしまうので声は枯れ、水分が脱けてゆくのを防ぐため、桂枝を主成分とした芳香散を煎じて飲ませた。はじめは全然受けつけなかったが、病状が徐徐に落着くと、少しずつ入ってゆくようになった。

さらに弥五左衛門は、夜ではあったが、大野丸に積んであるバッテイラで部下五、六人を海岸にやり、磯に打ち上げられている、子供の頭くらいの大きさの石を、しかも波にもまれて角が円くなった、できるだけ堅い石を二十個ほど拾って来させた。それを火中に投じて熱くし、適当な熱さになったのを取り出して水をかけ、ジュッと湯気のあがりぐあいをみてぼろ裂れでこれを包み、それを病人の足先とか腹部に入れてからだの冷えるのを防がせた。それは弥五左衛門が北蝦夷で得た防寒の知識であった。

心配していたように、発病する者が次々と増えてきた。ほとんど半数に近い者が病床に輾転するようになった。弥五左衛門は皆を元気づけ、考えられるあらゆる治療法を施してコレラと戦った。不眠不休の戦いであった。

この安政五年という歳をわが国の歴史の上で騒然と際立たしめた二本の柱がある。一つは大老井伊直弼の強行した〈安政の大獄〉事件であり、いま一つはわが国における最初の全国的流行をみたコレラ病の発生である。

七月六日、十三代将軍家定が死んだが、その喪が発表されたのは八月八日であった。将軍の死を一カ月以上も秘していたのは、一つには葬式の準備と御宝塔築造のための恒例ではあったが、半面、時勢の逼迫をも物語っていた。

当時、生来心身ともに薄弱であった家定（数え年三十五歳）の後嗣を決めておかねばならぬという問題があり、大奥を中心として保守派の推す紀伊慶福（のちの家茂）と、開明的な幕臣・諸侯の推す一橋慶喜が候補にあがっていた。いわゆる〈将軍継嗣問題〉である。これに強引な結論を与えたのは、この四月二十三日に大老職に就任したばかりの井伊直弼であった。直弼は慶福を世嗣と決め、六月二十五日、諸侯群臣の前でその〈お広め〉として将軍家定と紀伊慶福の〈御対顔〉を実現させた。そして家定が突然発病したのはこの〈御対顔〉の直後である。家定はその十一日後に死んだ。

一方、〈条約勅許問題〉というのがある。

すでに六月十九日、幕府は米国軍艦ポーハタン号上で日米修好通商条約を勅許なしで調印していた。これが朝野の猛烈な反対を誘発し、直弼の強行策にたいする批判となって結集した。しかし幕府としては、七月から九月にかけて次々と調印されることになっている日蘭・日露・日英・日仏の修好通商条約を目前に控えて、反対論を抑えてでも乗りかかった船を進めねばならなかった。そのため、七月五日、つまり家定の死の前日、幕府の外交政策に反対した廉で、尾張慶恕を隠居、水戸斉昭を謹慎、松平慶永（越前藩主・春嶽）を隠居急度慎に処

した。安政の大獄のはしりである。

おそらく将軍家定は、これらの問題がこれからどんな波瀾を呼び、徳川幕府の崩壊を招くにいたるかについては、夢想だもせずに死んで行ったであろう。

これからちょうど十年後の一八六八年は慶応四年（明治元年）であり、七月といえばすでに江戸城は開城され、彰義隊の戦さも終り、二十日には江戸が東京と改称されるといった、御一新の風が吹く時代となっている。つまり、幕末動乱の、蜂の巣をつついたような十年がここからはじまるといってよい。

家定の死因は脚気衝心であった。

しかし将軍の急死をめぐって、これもよくあることだが、毒殺のうわさが飛んだ。さらにもう一つのうわさは、コレラによる病死説であった。

この年五月、長崎の出島に流行したコレラは、六月下旬、東海道駿河の辺から江戸に入り（神奈川が発源地で、浦賀一帯から一方は江戸へ、一方は大坂へ広がったという説も残っている）、芝海岸、鉄砲洲、佃島、霊巌島などに始まって、八月初旬からは江戸およびその近在に蔓延した。

当時はこれを〈暴瀉病〉といったが、文字通りこれに罹ると即時に嘔気を催し、口からもどせるだけもどすと同時に物凄い下痢に襲われ、手足は萎えしびれて冷くなり、たちまち絶命する。そのため〈コロリ〉ともいった。「東都の俗ころりといふは、頓死をさしてころりと死したりといふ俗言に出て、文政二年痢病行はれしよりしかいへり。しかるに西洋にコレラといふよしを思へば、おのづから通音なるもをかし」と、『武江年表』の著者・斎藤月岑は、惨状描写の暗い記述のなかにわずかに諧謔的な註をほどこしている。

このような原因のわからない疫病がはやると、いろいろな迷信虚誕のはびこるのは自然の勢いであろう。コロリの跡を追うように狐憑きもはやり出した。

これらのまがつびをお祓いするために、各町内では鎮守の神輿や獅子頭をかつぎ出し、ちょうど将軍の喪が発表になって歌舞音曲は御停止となっていたので、寂として音のない大通りや横町を、粛々と渡し歩いた。

また町内に斎竹を立てて軒端には注連縄をはったり提灯をさげたりするものもあれば、節分のように豆をまくもの、門松を立てるもの。そのため「御厄払いましょう、厄おとし」と厄払いの合棟乞食まで出る始末。さらに疫神退散には天狗の羽団扇がよいというので、それに似た八ツ手の葉を軒に釣すものまで現れた。

江戸市民の必死の願いも空しく、家中コレラに感染して枕を並べて死んでいたり、道のまん中に這い出して手を伸ばしたまま絶息している者もある。今朝元気に話していた人が晩には斃れたとか、たったいま薪を割っていたのにもう焼場へ持っていかれた、という騒ぎはもはや珍しい話ではなくなっていた。

魚がいちばん危いというので、漁師や魚屋の商売はあがったりとなり、料理屋も火の消えたよう。とくに鰯には毒があるというので、とれたてでも求める者はいなくなった。そのため鶏卵と野菜の値段が高騰したのは当然の結果である。

しかしなんといっても棺桶屋の繁昌（？）ぶりは目覚しいものがあった。昼夜兼行、不眠不休で作っても間に合わず、普通の桶屋や大工まで雇って作らせたが需要に応じきれない。当然値段をつり上げてことわろうとするが、かえって「他人の不幸で大儲けをたくらんでいる」と庶民の恨みを買い、棺桶屋が感染して死ぬと「ざまあみろ」と快哉が叫ばれるてんやわんやぶりであった。棺桶では間に合わず、箱詰め、樽詰めといった簡便法まで現れた。

寺院の忙しさもこれに劣らない。小塚原、深川霊巌寺、桐ヶ谷、四谷、狼谷、落合村といったところの、三昧場のある寺院では、いくら焼いても焼ききれず、棺桶が境内に山と積まれた。そのため、十日も二十日も待たねば骨上げができず、特に急ぐ人には料金を割高にするといったことで、順次荼毘に付するしかなかった。そして夜も昼も死体を焼き続けるために臭気が四周に充満して、とても我慢のできるものではなかった。

また日本橋、永代橋、両国橋とか、あるいは浅草、下谷、谷中、三田、四谷といった寺院の多い地域では、埋葬のための野辺送りの群れがひきもきらず、両国橋では棺桶が百個通ると水を流して橋板を洗い清めることにしていたが、それが日に何度も掃除しなければならなかったという。日本橋、永代橋も事情は同じだったであろう。

このようにして死ぬ者、江戸だけで八月一日から九月末までで およそ二万八千余人、うち火葬九千九百余人であったという。山東京山（京伝の弟）・柳下亭種員・一立斎（安藤）広重・五代目柄井川柳・講談師貞山・三世清元延寿太夫・杵屋六左衛門その他、力士、俳優、花魁まで、当時の有名人が多数死んでいる。横井小楠も罹ったが、これは幸い助かった。

こうしてこのコレラ騒ぎは九月初旬から少しずつ遠ざかり、十月になってようやく静まったが、当時の庶民はコレラを〈黒船土産〉と呼び、浦賀へ来た黒船が置いて行った魔法で、異人が海岸で何か洗ったとき真白いあぶくがたくさん出たが、それが魚の腹に入ってさらに江戸の人間の口へ入ったのだ、その白いあぶくが魔法のたねだと、石鹸の泡から出た尤もらしいうわさも流れたりして、その頃のわが国の直面していた国際政治上の開港問題からくる不安と重なり、異人にたいする黒い印象となって日本庶民の意識を塗りつぶしたことは否めなかった。外国船に港を開いたりするからこんなコレラ騒ぎも起るのだという感情は、その後の攘夷熱のたかまる一因ともなったであろう。

そうとすれば、コレラも大獄もともに二世紀半にわたる鎖国日本にたいする西欧近代文明の挑戦がもたらしたものといえよう。日本人はこの安政五年という時点において、〈外国〉という存在を生命の不安という形でもろに意識させられたわけである。

そしてその縮図の一つが浦賀における大野丸という存在だった。大野藩という貧乏小藩が〈北蝦夷経営〉という北方対策の一環をかって出、大野丸という洋式帆船を造ったのも、いまこの浦賀で早川弥五左衛門以下がコレラの災厄を蒙っているのも、当時の日本が嘗めねばならなかった外圧の一余波であったといえよう。

浦賀におけるコレラとの死闘は六日つづいた。

第一日目の夜、拙蔵の苦しみぶりを見かねた弥五左衛門が、

「拙さん、このままでは医療も十分でない。いっそ駕籠をやとって江戸に帰り、ゆっくりと治療したほうがいいと思うが、どうだ」

と上陸をすすめると、拙蔵は激痛のなかで色をなし、

「とんでもない、死んで魚腹に葬られるのこそ本望だ」

と言って、弥五左衛門の申し出をしりぞけた。

三日目に入ると、発病する者はなくなった。あとは治療に専念するだけであった。

幸い、死者は出なかった。やはり鍛えられた肉体と心臓のおかげであったかもしれないし、また弥五左衛門の処置の適切さによるものかもしれなかった。なによりの幸運は、弥五左衛門自身がコレラにかからなかったことであった。

四日目がすぎると、病気は山を越したようであった。仮死状態にあった拙蔵以下の患者たちの顔に生色がもどってきた。

五日目の朝、目が覚めると拙蔵は、

「弥五さん、わしはもう大丈夫だ。すぐに船を出そう」

といって起き上ろうとした。弥五左衛門がこれを抑えてなだめたが、拙蔵は頑として聞かなかった。国で主君（土井利忠）が一日千秋の思いで大野丸の着到を待っておられるというのに、自分の不注意からつまらぬ病気にかかったばかりにこんな遅滞を招いてしまった、もう病気も癒ったのであるから、こんなところにぐずぐずしていないで、一日も早く敦賀に行かなければ申し訳が立たない、というのであった。

拙蔵からいわれるまでもない。弥五左衛門も同じ気持である。しかし、病気はまだ峠を越したというだけで、危険がすっかり去ったというわけではない。恢復には日がかかる。もう二、三日は碇泊していなければなるまい。そう言って弥五左衛門は拙蔵を説得しようとしたが、拙蔵は即刻出帆を主張してきかなかった。

結局、弥五左衛門は明朝出帆ということで拙蔵を納得させた。そして全乗組員にその旨を告げ、病人は出港後もそのまま養生に専念すること、健康な者は看護疲れを直すためにきょう一日はゆっくり睡眠と休養をとることを指令した。弥五左衛門もその日はすべてを忘れて眠った。

八月十二日、大野丸は浦賀を出帆した。

同月二十五日、兵庫港着。途中、遠州灘を通ったのは夜半であった。弥五左衛門が舵を部下に任せて船長室にもどると、拙蔵がやつれた顔に笑いを浮べて、

「どうもわしは船のこの揺れをからだで感じているときが一番幸せらしい」

といって、病中で書いた一篇の律詩を弥五左衛門に示した。

生きて事を補うなく、死して名もなし。
猶且幽明、剣を按じて行く。
精気天に帰らば疫鬼を攘い。
強魂海に入らば鮫鯨を逐わん。
読書已に遡る蘭和漢。

遊志忘れ難し亜仏英。
病魔に悩まされて眠り覚むる処。
月明舷外急瀬の声。

兵庫に着いたことは航路の半ばを終えたことを意味する。弥五左衛門はここで船の整備と病人の静養、乗組員の休養のため十日間の碇泊を指令した。この十日で拙蔵以下病人全員が持ち場に復帰できた。

九月五日兵庫発。十五日馬関を通過。

大野丸が馬関に碇泊したとき、高杉晋作以下数名の長州藩士が来訪して、製造の良好なるを激賞し、種々意見を交換し、且つ国事を談論したという説が遺っているが、その真偽は詳かでない。

目的地敦賀に錨を投じたのは九月二十四日の夜であった。四十八日に及ぶ多難な処女航海は終った。吉田拙蔵の伝記によれば、「当時洋形ノ舶多ク有ラズ人皆之ヲ見ザルヲ以テ諸方有志ノ士即チ長藩桂小五郎（後の木戸孝允）等来リテ大野丸ヲ見ル者日々踵ヲ接」したという。

2

〈北夷先生〉と呼ばれた本多利明が序文を付して松平定信に上呈した本に『蝦夷草紙』上下二巻がある。著者は第一級北方探検家の一人といわれる最上徳内である。徳内はこの書の中で、

「南陽の地より北陰の地には進ミ難シ。北陰の地より南陽の地には進ミ易き事、天理なり」という感懐を述べている。

これを日本の北方政策とロシアの南下政策とにあてはめて考えてみると、徳内の言わんとするところは明かである。ロシアの南下政策の積極的なのにくらべて、わが幕府の北方政策のあまりの姑息因循さを暗に憂えているのである。

嘉永六年（一八五三）六月、アメリカのペリーは軍艦四隻でわが国の二百五十年にわたる鎖国の惰眠を破ったわけであるが、これを一番口惜しがったのはロシアであったはずである。ロシアのプゥチャーチンが同じく軍艦四隻を率いて長崎へ現れたのは、それから一カ月半後であった。

プゥチャーチンはアメリカが日本へ艦隊を派遣するという情報を入手すると、ただちにクロンシュタットを出港したのであるが、途中イギリスのポーツマスで艦の修繕や長途の航海準備、同地で購入したスクーナー船「ウォストーク」号の艤装などに二カ月を費したため、ペリーに遅れをとったのである。プゥチャーチンの不覚といってよい。尤も、プゥチャーチンは、日米条約締結後に目的を達成せよと指令されていたともいわれるが、いずれにせよ、わが国との和親修好問題についてはロシアのほうが先輩だったのである。

わが国の泰平の夢を見事に覚醒させたのは確かにペリーであった。が、それは将軍のお膝元である江戸湾に直接侵入したからである。〈黒船〉をはじめて見た江戸百万の市民の驚きは、ペリーの採った手段の正しさを物語っていた。しかしそれまでに北辺各地における日露

間の交渉は、現地における両国民同士および地方官権のあいだで、しばしば行われていたのである。それはロシア人が太平洋岸にあらわれて以来、彼らの「北陰の地より南陽の地に」進もうという一貫した政策にささえられて、わが国の北方政策を刺戟しつづけてきた。

単に現地における交渉だけではなく、公式の使節としてもラクスマンとかレザノフがそれぞれ根室と長崎に来航して修好の希望を果せずに帰国しているし、露船ユーノ号船長フヴォストフの北蝦夷や択捉島さらに利尻島の焚掠事件、ゴロヴニンの捕縛幽閉問題などの重大事件が多々起っていた。

ただこれらにたいする幕府の政策は退嬰的な秘密主義と一切の対外接触を回避しようという偸安主義で貫かれていたのである。ロシア側からの刺戟があればそれに一応の反応は示すが、こちらからはなんらの積極策を施そうという姿勢はもたなかった。

たとえばロシアの太平洋進出熱の最も高かった寛政から文化にかけての約二十年間（一七九〇―一八一〇）をピークとしていた日露関係が、その後、嘉永六年のプゥチャーチンの来航まで約四十年間、ぱったりとその接触を失っている。

それはロシア自身がナポレオン戦争（モスクワ遠征は一八一二年）に捲き込まれ、戦後もその余波としてニコライ一世の即位後に起きたデカブリストの反乱（一八二五）とかポーランドの独立反乱（一八三〇）などに代表される、農奴制と専制政治という国家的基盤をゆるがす、いわば〈内憂〉に苦しめられて、シベリア方面にまではとても手の廻らぬ時代だったからである。

その間にわが幕府は北方政策としてなにをしたか。なにもしなかったのである。むしろ北辺の静穏をさいわいとして、かつてその無為無策を責めて松前藩に〈永久上地〉を命じて幕府直轄地としていた東西蝦夷地を、文政四年（一八二一）十二月、ふたたび松前藩に還付し、松前奉行を廃するといった後退ぶりを示したのみであった。

しかもそれがプゥチャーチン来日の翌年（安政元年・一八五四）には松前藩に箱館および付近五里四方の地を上地させ、翌安政二年には松前と江差地方を除いた蝦夷地全部を再度上地させるといった狼狽ぶりをさらす有様は、徳川幕府の北方問題にたいする基本的姿勢を遺憾なく暴露したものといえよう。

しかしこのような幕府の消極性をわずかに救っていた者がある。〈先覚者〉と呼ばれる存在である。そのなかには新井白石・本多利明・林子平・高橋景保といった、わが国の〈西洋発見〉に努めた学者ないし警世家がいるし、「南陽の地より北陰の地には進ミ難シ」という「天理」に逆らって北方領土の視察・調査に情熱を傾けた最上徳内・近藤重蔵・村上島之丞（秦檍丸）・木村謙次・間宮林蔵・松田伝十郎・松浦武四郎といった北方探検家がいる。水戸斉昭といった藩主も見落すべきではないかもしれない。幕府はそれらの〈先覚者〉によってつねに北方に関する知識を注入されていたが、それは〈知識〉の段階にとどまり、しかもごく限られた人間だけの〈知識〉であって、これを永続的な〈政策〉に転化させようとする情熱を持ったことは、わずかに松平定信を例外として、ほとんどないといってよかった。

そのために〈先覚者〉は永遠に〈先覚者〉にとどまり、点ないしせいぜい線としての足跡

を残しただけで、面としての可能性を持ちえなかった。

このように幕末の北方対策状況は、そのほとんどが〈先覚者〉という個人の寄せ集めであったなかで、ただ一つ奇妙な存在がある。幕府の北方対策を、〈藩〉という単位で、しかもいちばん「北陰の地」である北蝦夷（樺太）の開拓経営という、いわば〈面〉としての事業として背負いこもうという〈奇特な〉存在が現れたのである。

それが名の通った大藩ではない。越前（福井県）大野藩四万石という無名の小藩であるのがまず奇妙である。

明治四年、廃藩置県のさい報告された全国藩領総石高千九百万石の実収額は九百二十六万石で四割九分弱に当ったが、大野藩の四万石は実収額わずか一万二千六百三十石の三割二分弱にすぎなかった。しかもその城地備付けの戦具が大筒二挺、鉄砲百五十九挺、弓百二十八張、具足九十六領、長柄百六本と注記され、家臣は在藩七十二人、定府六十七人だったという。新政府への報告であるから、どの程度の正確さを保証できるかわからないが、それにしても貧乏藩というしかない。越前の山間に僻在し、江戸へは百五十一里、所領は大野・丹生・足羽三郡に点在する瘠地である。参覲交替や領内行政の出費にたいして収入の少かったことは十分に推測できよう。

このような貧乏小藩が、安政二年三月、幕府が南部・仙台・津軽・秋田・松前の五藩に蝦夷地の警備を命じたのち、同年十二月に出した「蝦夷地を開拓せんとする者は伺書を出して指令を待て」という諸藩への布達にたいして、自らすすんで蝦夷地開拓に関する伺書を呈上

したのがまた奇妙である。

そんな〈奇特な〉藩は一つもないのである。昔から蝦夷地警備に当てられている東北諸藩にしても、幕命なるがゆえに泣く泣く藩士を派遣しているのであり、北辺警備というものになんの積極的な意義も認めていないのである。だからこそ文化四年（一八〇七）四月、フヴォストフとダヴィドフが軍艦二隻で択捉島を攻撃したとき、三十人たらずのロシア水兵にたいして南部・津軽両藩の兵三百人がいたのに、防戦ともいえない恰好で敗走し、守備隊長をしていた箱館奉行支配調役下役元締・戸田又太夫が引責自殺をしなければならなかったのである。

このような大野藩の北辺警備にたいする奇妙な情熱はいったいどこから出て来たのであろうか。小なりとはいえ譜代の名藩として、幕府のいちばん苦手とする北方問題を肩替りすることで幕府への忠勤を抽んでようとしたのかもしれない。また大野藩自身、藩財政の救済策をつねに摸索しており、〈蝦夷地開拓〉にその活路を見出そうとしたのかもしれない。越前の瘠地で苦しむのに較べたら蝦夷地のほうがまだ可能性があるかもしれない、という憧れである。

そしてその憧れの背後には、越前という国が古来日本海交通の要衝をなし、阿倍比羅夫以来蝦夷地との因縁浅からずといった伝統意識や、内山隆佐以下の大野藩士が当時は越前国出身といわれていた本多利明の名著『経世秘策』や『蝦夷拾遺』などによって蝦夷地開拓に関して大きな影響を受けていた事実があることも確かである。

しかしこれらの条件はある一人の人物が出現し、その歴史の引鉄を引いてはじめて歴史的条件といいうるものに転化するのである。大野藩の蝦夷地開拓への奇妙な情熱の具現化は、一にかかって早川弥五左衛門という人間の出現によるといってよい。

弥五左衛門は文政二年（一八一九）越前・大野町新堀に生れた。この年、内山隆佐は七歳。藩主・土井利忠はこの前年、父と兄の死により八歳で襲封していた。

早川家の祖先は千葉氏を称して下総国にいたが、三代将軍家光の幕閣で大老を勤めた土井利勝が古河に封ぜられたとき、これに仕えた。利勝の四男利房は分家し、若年寄から老中にまで累進したが、五代綱吉の時、大野城主に転封。早川家もそれに従って大野へ移り、代々扶持取方として仕えた。中士といえよう。

幼名三之允、通称弥五左衛門、字は文雄、諱は武英、寛斎と号した。

出生の翌文政三年、妹の偉志子が生れた。のちの内山隆佐夫人である。

六歳で父武垣を喪う。そのため父の扶持はなくなり、わずか三人口の捨扶持を給された早川家は、九歳の姉を頭に、三之允、五歳と三歳の妹、さらに弟粂次郎がなお母の胎内にあるといった状況だったので、赤貧洗うがごとく、ために母は毎日眠ることわずかに二刻（四時間）、夜なべ仕事で機織に励みながら、子女の訓育につとめねばならなかった。

弥五左衛門の三之允は、昼は付近の川や池に魚を釣って家計をたすけ、夜は母の糸を紡ぐ手助けをして、腕白時代らしい遊びを知らずに育った。後年、釣叟と称したのもこの幼少時

代の思い出がからんでいたのかもしれないし、北蝦夷でみずから魚網を紡いで皆を驚かしたのもこの頃の苦労の賜物だったであろう。

文政八年、七歳のときから藩儒・岡田静山、ついで石川佗山に就いて学んだ。三之允の筆写したものといわれる「論語古訓余義」が遺っている。これは太宰春台の「論語古訓」に註した大野藩儒医・松村九山の著であり、三之允の〈大父〉と崇めて私淑していた人物であるが、この筆写をしたのは佗山に師事していた十一歳のときであるという。

石川佗山、名は清綱、通称孝之助。藩主利忠の藩政顧問をしてのちに藩校明倫館の初代校長となった老儒・石川官左衛門の従弟である。漢学の造詣深く、頭脳明晰、卓見精透をもって聞えた。彼はロシアの南下に対する幕府の対策の不徹底さをつねに慨嘆し、「天下救弊の三策」という意見書を朝廷に内奏しようとした。この三策というのは、

一、幕府を蝦夷地に遷す
一、参覲交替を廃す
一、各藩に学校を起す

というものであった。この急進論が幕府に聞えることを恐れた藩庁は、佗山を厳罰に処した。天保三年（一八三二）のことである。

熱情家の佗山はこれを不服として脱藩した。佗山の暴挙にびっくりした親戚故旧は、石川官左衛門とたった十四歳の三之允に、跡を追って佗山を連れもどしてくれと懇願した。

二人は方々を探し索め、ようやく足羽郡浅水で佗山を見出すことができた。自分を最も知

っている官左衛門と自分が最も将来を嘱目している弟子の懇望であるから、二人の説く帰藩の勧めに耳を傾け、その好意には万謝したが、佗山はついにその脱藩の意を枉げなかった。二人に別れを告げて、埃っぽい街道を足どりも確かに去ってゆく恩師の後姿に向かって、

「センセーイ！」

と、三之允は何度も呼びかけた。そのたびに佗山はふりかえって手をあげた。三之允は頬を伝わる涙を拭くのも忘れて、いつまでも見送っていた。

佗山はその後播州姫路藩酒井家の藩儒となって堤と改姓し、子弟の薫陶に努めた。

佗山と別れた翌天保四年正月、供小姓を仰せつけられ、はじめて藩主利忠に御目見えが許された。天保七年七月、藩主の大坂加番に扈従して大坂に至り、翌八年二月、大塩平八郎の乱に遭う。三之允は京橋内の藩邸を警衛し、その胆力と忠誠とを藩主に認められた。十九歳であった。

天保十四年、二十五歳のとき、抜擢されて面谷鉱山奉行となった。内山隆佐の兄・七郎右衛門良休の後任であった。面谷鉱山は大野郡上穴馬村にある銀と銅の鉱山で、当然大野藩財政に大きな役割を占めていた。三之允にたいする藩主の信頼ぶりが推量される。

弘化二年（一八四五）中野村代官を命ぜられ、中村氏の娘を妻に迎える。翌三年、茜川改修に力を尽す。

嘉永元年（一八四八）五月、藩主に従って江戸に出、剣を札金三郎に学ぶ。七月、妻の初産で母子ともに夭折。妻の妹を娶る。この年、家の通称である弥五左衛門を名乗る。翌嘉永

一年、長男が生れ、さらに翌三年、母を失う。この間、悲喜交々至るの観がある。

大野藩四万石の中に五千石ほどの飛領地があった。丹生郡織田の庄十二カ村、佐々生の庄三カ村がそれである。これらを一括して西潟と称した。このうちには農村あり、山村あり、漁村もあった。代官所は織田にあり、天保九年内山良休が初代代官となり、ついで弟の内山隆佐が二代目を襲って、ともに名代官と称された。嘉永四年八月、内山隆佐が目付に昇進するや、この西潟代官の重職が弥五左衛門に命ぜられた。ときに三十三歳である。同時に海防掛も兼務させられた。

織田の代官所に着任した弥五左衛門は、まず西潟の民情・風俗・経済を査察し、民意を汲み苛酷を戒め、民の心を心とした。当時の「織田官舎漫吟」という彼の漢詩のなかに、「吏務は最も苛を禁ず」という一節がある。吏務の余暇にはつとめて領民と接し、民と苦楽を共にしたので、領民の彼を慕うこと慈父のようであったという。

また兼職の海防掛という仕事は、彼の心中に大きな夢を抱かせるものがあった。恩師石川佗山が情熱を傾けて弥五左衛門の血のなかに遺して行った蝦夷地への夢であった。

元来が山間の小藩に過ぎない大野藩が日本海岸に飛領地を持っていたことは行政上不便この上ないことではあったが、反面、海という媒介物があったお蔭で世界への視野を拡げることができ、当時の貧乏小藩としては驚くべき開明性を持つ契機ともなったことは否定できない。弥五左衛門の胸裡に潜んでいた蝦夷地開拓の情熱は海防掛に任ぜられたことで大きくふくらみ、外からの点火を待っていたのであった。

以上のような早川弥五左衛門の前半生を顧みて思うことは、もしわが国の歴史にまだ泰平の眠りをむさぼっておれる余裕があったならば、彼の一生はあるいは名牧民官として平穏裡に幕を閉じたかもしれないし、あるいはさらに大野藩の政治の中枢にあって名宰相の名をほしいままにしていたかもしれない、ということである。とにかく彼の晩年は実際より遥かに地位と名誉に恵まれたものになっていたはずである。

しかし時勢はそれを許さなかった。嘉永六年、アメリカとロシアの開港要求によって、幕藩体制が一挙に急回転をはじめたからである。大野藩もその運命をまぬがれるわけにはいかなかった。とくに弥五左衛門の石川佗山によって植えつけられた北方への情熱は、ロシアの南下政策が現実となってわが国を震撼させるようになると、火を点じられた花火のように、いっぺんに燃え上ったのである。

安政二年（一八五五）五月、大野藩は大坂に商店を開き、蝦夷地の産物と領内物産の販売機関を設けて、蝦夷地開拓の準備に着手した。すでにこの三月には幕府の允許を得た『海上砲術全書』を上木し、十二月には蘭学者・緒方洪庵の高弟伊藤慎蔵を招聘して蘭学館を開き、航海術に関する蘭書（英人ヘンリー・ピッチングトン原著の蘭訳本）を翻訳させ、『颶風新話』と題して出版した。その他『英吉利文典』を翻刻したり、伊藤慎蔵と同じ洪庵門下で福沢諭吉と秀才の名を並び称された西川貫蔵に『三兵用訣精論』の重訳を行わしめるなど、当時の先進論ともいうべき海防および洋式戦術の吸収に遺漏なきを期していた。三兵とはナポレオン

戦争で陸戦の根幹をなした歩騎砲三兵のことである。

安政三年二月、昨年十二月の幕府の布達に応じた大野藩では内山隆佐が蝦夷地探検の幕命をもらって帰藩すると、ただちに内山良休を蝦夷地掛に、隆佐を蝦夷地総督に任じ、その地の探検を命じた。同三月、探検隊は海陸二行に分れて、隊長隆佐は陸路江戸を経て北上し、西潟代官兼海防掛の早川弥五左衛門は吉田拙蔵らと海路をとって、藩領大樟湾を出帆した。

四月一日、弥五左衛門たちは松前に着船し、陸路箱館に達したが、二十三日には内山総督も着箱。五月四日、山越内でふたたび両隊に分れ、内山総督は東海岸を、弥五左衛門は支隊長となって西海岸を探検した。

しかしこの探検の結果提出した開拓意見書は、幕府がこの地を直接経営する意向をもっていたため、結局許可が下りず、落胆と憤懣の情をいだいて帰藩せざるをえなかった。

本蝦夷地（北海道）の経営が許されなかった弥五左衛門は、決然として北蝦夷地（樺太）の経営を藩主利忠に建策した。当時の常識としては、これは現在の南極開発よりも遠い感覚だったであろうから、藩士のなかには「弥五左衛門は気が狂ったのではないか」と冷笑してこれに反対する者もあったが、藩主利忠の決断で許され、安政四年春、侍医・中村岱佐とともに小者二十人を連れて北蝦夷地へ向うべく出発した。時に弥五左衛門三十九歳。

箱館に渡った弥五左衛門は、四月一日、書を箱館奉行・堀利熙に呈して樺太探検の許可を乞うた。

（前略）此度北蝦夷地御手入ノ思召有之伊達須原（ともに箱館の御用商）両商ノ漁場切開

キ無之地ヨリ奥筋差配致シ漁場相開キ物産取入等之義越後国井栗村弁之助（松川重明。三条の豪農）と申者へ被仰付候由承リ及候ニ付何卒右ノ内「バヰカラサムシ」（のちの野田町梅香）以北クシユンナイ（久春内）領「ウス」（泊居町鵜巣）辺迄ノ拝借被仰付候ハヾ「ナヨロ」（名寄）辺へ元小屋取建切開キ　仕　又ハ以北「コタンウトル」（鵜城村古丹）ヨリ以北「フレオチ」（幌千）辺迄ノ処ニテモ御許容被仰付候ハヾ先「ウシヨロ」（鵜城）辺へ差配所取設漁場切開且「スメレンクル」（ギリヤーク）人住居ノ地ト境界相成候「ポロコタン」（露領ピレオ、「幌子谷」とも書く）辺迄私共時ニ見廻リ海岸筋御固メヲ第一ト心得在住致シ追テハ漁場相応ノ運上金相納国家洪恩ノ為メニ御収納ノ一端ニモ相成候様仕度　奉　存候（後略）

やがて箱館奉行から「北蝦夷地居住のことは幕府の意向をうかがったうえで申渡す。ただし実地の検分は差支えない」という指令が来たので、四月十七日、弥五左衛門は福永鉞之助と二人だけで箱館を出発、北蝦夷探検に向かった。

二人は北蝦夷の西海岸をポロコタンまで到り、漁場を調べ根拠地を査定し、閏五月真岡に帰り、同十五日白主に帰着して、見聞の状況を在任の幕吏・調役並磯村勝兵衛に報告した。この報告書で重大なことは、ポロコタンのアイヌのカチホンランケから聞いた、赤狄（赤蝦夷、ロシア人）三十六人がオッチシ（落石、のちの北樺太アレクサンドロフスク港付近）に来て乱暴を働き、越年したため、その付近のスメレンクル人六十七人がポロコタンへ避難しているという事実であった。ロシア人の南下政策はすでに着々と現実化していたのである。

この時の北蝦夷探検のさいの弥五左衛門の七言絶句がある。「薩哈連跋渉中雑詩」の一つである。

万里舟を汎ぶ北海の天。
嶮を侵し跋渉す幾山川。
山川渺茫として人煙絶え。
遂に到る魯夷境界の辺。

早川弥五左衛門を中心とした大野藩蝦夷地開拓関係者の着想の卓抜さは、風波の荒い北の海を乗り切るための北航専用船として洋式帆船を考えついたことである。

嘉永六年九月、幕府は大船建造禁止令を解かざるをえなかったが、それから五年後の安政五年段階においては、まだ日本人の手に成った実用的洋式船は全国でも数えるほどしかなかった。この時点で、当時最も実用的であったのは君沢型帆船であった。

この君沢型というのは、安政元年（一八五四）十一月、日露和親条約締結のために下田へ碇泊していたプヂャーチンの乗艦「ディアナ」号が、地震による津波に大破沈没し、これに代る船を二隻、伊豆の君沢郡（現田方郡）戸田で日本人の船匠たちを使って建造した、これが日本人が作った最初の実用的洋式船で、郡名をとって君沢型といったのである。この君沢型を波の荒い北海用に改良したのが幕府御用船箱館丸で、高田屋嘉兵衛が内地から蝦夷地へ連れて行った続豊治という船大工の手になるものであった。大野藩がこの箱館丸型を藩船に選んだところに、着眼の非凡なものを見るのである。

プゥチャーチンの来航によって大野藩の北蝦夷経営が始まり、プゥチャーチンの残した造船技術によって建造された大野丸を北進させてロシアの南下政策を防ぐというのも、興味ある歴史の因果関係であろう。

箱館の御用商人・栖原屋角兵衛の手代長七と交渉し、貧乏小藩の財政難を危ぶんでなかなか確答を与えぬ長七の態度に焦慮しながらも、よくその金繰りと折衝の苦労に耐えたのは内山隆佐の功績であった。長七はたまたま新船建造の予定があったのを延ばしていたのであり、それをそのまま大野藩に譲り受けることにしたのである。

安政四年十二月、幕府の允許を得て、川崎稲荷新田に長七が設置してあった造船所で、いよいよ工事に着手した。新造船は現在の排水量でいうとおそらく四百六、七十噸くらいのものであったろうという。当時、たまたま箱館丸が品川に入港していたので、内山隆佐は大工、水夫、鍛冶などを引き連れてそれを見学に行った。そして豊治に新船建造の見廻りをしてほしいと懇願し、幕府から許可を得ることができた。

翌五年三月、北蝦夷開拓の許可も下りた。七月、大野丸も進水した。九月、敦賀回航も終った。弥五左衛門の血は沸々とたぎって、北蝦夷で待っている部下たちのことを思い浮べぬ日は一日もなかった。しかし北蝦夷はこれから行っても海が凍って渡航できない。咽喉をしめつけられるような焦躁感と戦いながら、弥五左衛門は年の明けるのを待たねばならなかった。

総督・内山隆佐、元会所詰頭・早川弥五左衛門、船長・吉田拙蔵らを乗せた大野丸が敦賀

を開帆して北行したのは、安政六年三月、花の遅い越前にも桜が満開の頃であった。北海の風濤はさすがに激しく、箱館まで二十八日を要した。ここで内山隆佐は下船滞泊して諸務を総べ、弥五左衛門一行は直ちに北蝦夷・鵜城湾に向けて続航した。遠山の残雪が日々北進の度合を知らせてくれた。

3

「燕がいない！」

鵜城元会所の丸太と枯れドングイ（いたどり）の茎で作った名ばかりの柵のなかで、弥五左衛門はつぶやいた。「そうか、これだったのか……」

海辺のほうから、がおがおがお、と海驢の野太い、濁った咆哮が風に乗って聞えてくる。福永たち会所員全員が、磯にあがって昼寝をしていたとどを捕獲しようと、棍棒をもって戦っているのであろう。越冬の準備なのである。がおがお、という咆哮のあいまに、ワーッと喚声が伝わってくる。いちばん張切っているのは由松でもあろうか。ひょうげた顔を必死に張りつめてとどと睨みあっている光景が目に見えるようである。

とどの咆哮に驚いてか、それともとどの流す血の匂いにあこがれてか、海猫が狂ったように上空に群がって鳴きわめいているのだけは、元会所の庭からも眺めることができた。

空は曇っているわけではないが、上空で雲を吹きちぎっている風が日をかげらせて、白ちゃけた午後の陽射しがあたりを鈍く眠らせている。

けさ、明け方、夢をみた。佗山先生の後姿にむかって手をのべ、おいおいと泣いている弥五左衛門自身の姿であった。まだ前髪の少年であった。

「先生、待ってください」

と叫んでいるうちに、少年がいつのまにか現在の自分になっていた。

佗山先生はふりむきもせずに、ぐんぐん向うへ去って行った。それを追おうとする自分の足が、鉛のように重くて、一歩も進まないのであった。

「先生、弥五をお見捨てなさるのですか」

絶叫の苦痛で目が覚めた。部屋にはもちろん誰もいなかった。誰にも見せてはいけない弱気である。

重い布団を剝いで両脚に触ってみた。凍れ大根のような浮腫が一面にきて、指で押すとぽっかりとへこみ、いつまでももとに戻らない。趾がガラス玉のように青く透けてみえる。これも誰にも見せてはいけない両脚なのである。

明け方の夢のなごりであろうか、朝からなんとなく心が落ち着かなかった。夢のためだけではないようであった。なにかを失った感じ——いや、なにかに見捨てられたらしい不安がかすかに心を乱しているのであった。

ゆうべ、夕食のあとで、詰頭並の福永鉞之助が弥五左衛門の部屋へやってきて、

「遅い」

といった。

「今年は来ないのではないでしょうね」

と重ねた。大野丸が例年より遅れているというのである。

「大丈夫だ。拙さんは必ずやってくる」

弥五左衛門の答はいつでも力強くきこえる。福永もその力強さがききたくて来ただけかもしれなかった。みんなの不安を消してもらいたいのである。しかし弥五左衛門も待っていることに変りはない。大野丸は去年の四月、弥五左衛門を乗せて鵜城へ来たきりである。一年以上過ぎているのにまだ姿を見せていない。その不安が明け方の夢を誘ったのかもしれなかった。

「そうか、これだったのか……」

船具倉庫の軒を見上げながら、弥五左衛門はもう一度つぶやいた。庇の陰にずらりと一列に燕の巣が並んでいる。近くの川原から口ばしで運んできた粘土をかためて作った巣である。ところどころに藁の切れはしと羽毛が風に揺れていた。巣の下の板張りにすーっと垂れている糞のあとも、白く乾いている。

きのうまでその巣に群れていた燕の声がいつのまにかきれいに失われていたのである。一羽の残り燕もいなかった。それが不安にいらだちの翳りを与えていたのであった。

北蝦夷の燕は内地の燕よりは小柄で、咽喉に朱みがない。部下たちは〈岩つばめ〉と呼んでいた。その燕が南へ帰ったということは、二百十日がもう間近に迫っていることを意味した。

燕だけではない。人間もそうであった。春三月から七月一杯まで、それが北蝦夷の漁場とか見張番所で働く人間の居住期限であった。二百十日の時化を恐れて、それまでに漁具をしまい、番屋をたたんで、そそくさと本蝦夷の宗谷へ引揚げてしまうのである。

もう燕もいない。あとこの広い北蝦夷に残っている日本人は、弥五左衛門と三十名の部下たちだけというのだろうか。時化の季節に入ってからでは大野丸の来航もあきらめねばなるまい。それが皆を不安にしているのだ。

弥五左衛門は元会所のある小さな高台から砂浜へ下りて行った。足許の不確かさが自分でも腹立たしかった。それをいかにも悠然と歩いているようにみせる自分の〈役者ぶり〉が、変に滑稽感を誘った。

西洋馬ほどのとどをようやく仕止めて、部下たちが汗をぬぐっているところであった。裁着袴に袖無羽織すがたの弥五左衛門をみると、部下たちは喚声をあげて寄ってきた。皆で十五人ほどである。他の半数はウェンルエサンやホントケシの番屋にそれぞれ分遣されて、海上とロシア人の動静を見張っている。

「ご苦労。相当頑張ったようだな」

と、最近はなるべく皆と顔を合せる機会を避けていた弥五左衛門も、部下に囲まれるとやはり心のはずむのを覚えて、足の重さを忘れた。部下たちは弥五左衛門の顔のみられないことを淋しがり、心配もしていた。弥五左衛門にとっては脚気になった醜怪な両脚を皆に知られまいという配慮であったが、部下たちは、詰頭は幕府への報告書作成に忙しいのだ、と思

っている。

「お頭、見てください、あのとどを。すごく暴れるやつでした。あんまり吼え声がでかいので、海豹が魂消て沖へ逃げて行きましたよ。今晩の料理を楽しみにしててください」

台所を分担している忠兵衛が眼尻に皺をたくさん作りながら言った。

「塩漬にして冬にとっておくのではないのか」

「大丈夫です、とにかくでかいですから。それにこれから当分とど狩をつづけます」

と話を引きとったのは服部であった。

彼は賄方一切を取りしきっていた。弥五左衛門は服部の言葉に一つの決意を読みとって、胸の熱くなるのを覚えた。

――二、三日前の夕方であった。いつもは忠兵衛が持ってくる行燈を、その日は服部が弥五左衛門の部屋へもってきた。燈芯からのぼる魚油の匂いが微かに部屋のなかを流れた。

行燈を部屋の中央にすえると、服部は入口に近く坐って、

「甚だ申し上げにくいのですが、貯えが乏しくなりました」

と言った。すべて賄方としての自分に責任があるという悲愴感が溢れていた。

彼の説明によると、大野丸がどんなに遅くとも一カ月前には来航する予定で食糧の割当を考えていた。そのうえ今年は漁場が不振で、アイヌたちも食糧に困り、日本人側の手伝いだけでは生活もおぼつかないため、シルトッタンナイ（猿津）に居住しているロシア人の使役に手を貸す気配もみえたので、相当量の食糧を彼らに放出してやった。これは詰頭も御諒

承の上のことであった。そのため、一と月前から皆に気づかれないように食糧制限をしてきたが、どうも心許ない。このまま大野丸が来航しないとなれば、現在のところ、あと一と月で底をついてしまう。そうすれば、越冬はできない。

「問題は大野丸が来るか来ないかです」

服部は説明に熱心のあまり、大野丸の来ないのは弥五左衛門の責任だ、といわんばかりの口調になっていた。

「大野丸は必ず来る。しかしもし来なかったら、おぬしはどうするかな」

「それでございます。野菜もいろいろ植えてみましたが、どうも北蝦夷に向くものはまだつかめません。それにみんなが脚のだるさをうったえております」

「脚気か？」と一瞬思案顔で息を切り、「このくらいにはなっているのかな」

と、突然、弥五左衛門が胡坐のうえに掛けていた膝布団をとりのけ、どさり、どさりと両脚を服部の膝の前に投げ出した。

「押してみたまえ」

びっくりして唾をのみこんだ服部は、もちろん触ることなどできはしない。弥五左衛門が押した親指の関節がぶすと隠れた穴は、揺れる行燈の灯影に深い洞穴を思わせていつまでもへこんでいた。

「服部よ、これは誰にも言わんでくれよなあ。おぬしの苦労が身に沁みてわかるからこそ、こんなぶざまな脚まで見せたのだ。難破船のなかだと考えようよ。食べる物はおろか、水もなくなったら、帆布もかじろう、ねずみも煮よう、そうしてもなお、この北蝦夷にしがみついていよう、というのがわれわれの最初の誓いだった。飢え死する覚悟さえできておれば、ここは陸の上だ、木の根もあろう、草の芽も見つかろう。それにアイヌは脚気をしらん。われわれシャモ（和人）はよほど贅沢にできているというものさ」

外の枯れドングイの葉が風でカサカサと鳴っていた。服部が一礼して部屋を出て行った。外へ出た途端、嗚咽が口を洩れるのが聞えた。――

あのときの驚きがいまの服部の決意となっているのかもしれない。

「お頭、これでお頭の冬の毛皮ができました」と剽軽な声を上げたのは由松。皆がどっと笑った。「雪沓も作って差上げます」

今年の冬も弥五左衛門が一緒に越年してくれるらしいというので、それぞれがその喜びをこんな形で表現しているのだと思うと、部下たちの心づかいがやりきれないほど心に食い込んでくる。しかしそれは、大野丸が今年はもう来ないかもしれないという不安を弥五左衛門にはみせまいという心づかいかもしれなかった。そうとすれば、ますますやりきれない感動が身に迫る。

みんな領国で募集し、えりすぐってきた藩士と領民たちであった。金で掻き集めた者たちとはわけが違った。しかし、彼らにだって望郷の念はあるはずである。弥五左衛門としては帰藩の機会があるごとに、五、六人ずつ交替で国へ連れ戻ってはいたが、帰国してから二度と北蝦夷へは行かないと言い出す者は一人もいなかった。翌春になると、見ちがえるほど生

き生きと甦って、一日も早く鵜城へもどりましょうという者ばかりであった。

「おッ、それでは服部よ、一緒に行ってくれんか」

いつのまに来たのか、鵜城アイヌの役土人で土産取をしているシツヘチウが五、六間離れたところに立っているのを見つけた弥五左衛門は、服部をうながした。

シツヘチウは、この辺の酋長で惣小使という役名をもらっているオンバオトエの代理として、弥五左衛門を迎えにきたのであった。オンバオトエの家は元会所からすぐ近くのウシトマナイ（牛苫）部落にあった。きょうはオンバオトエの娘のタケの葬式だった。

タケは四歳だった。安政六年四月、弥五左衛門たちが初めて大野丸に乗組んで鵜城へ屯田の足跡を印したとき、たまたまオンバオトエに娘ができ、名付親になってほしいと頼まれた弥五左衛門は、大いに喜んで自分の諱・武英の一字をとってタケと命名したのであった。

そのタケが急に死んだという報らせがあったのはきのうである。死因は乾昆布を腹いっぱいに食べ、そのあとで水をこれも腹いっぱい飲んだために昆布が膨脹し、胃袋が破裂したということであった。

「そんな馬鹿な話があるか」

と弥五左衛門は怒ったが、タケが死んだことは事実であった。

タケの命名のあとで、大野藩士たちに娘の名をつけてもらうのがはやった。シマとかモト、マツ、ソノといった名前がアイヌの子供のあいだにふえていった。

だが弥五左衛門にとっては、タケという名前はなんといっても最初に自らつけたものなので、たんなるアイヌ人の懐柔のためという意味を超えた感情が籠められていた。そのタケが死んだということが、北蝦夷経営の前途になんらかの讖をなすもののような、嫌な予感がした。もちろん、それはこの頃の彼の気持が、誰にも知られているはずはないが、はなはだ弱気になっているための予感であろうとは考えた。心を強く持ちさえすれば、そんな前途の不安などはすぐに消えてしまうはずだ。そう思い直しはしたが、タケが死んだことはいずれにしても大きなショックだった。

ウシトマナイに通ずる道を登りながら鵜城湾をふりかえると、真西に向かって大きく口を開いている紺青の入江に、この頃の午後になるといつも吹く西風が、まともに波濤を送りつけていた。白い波頭が湾の入口一帯に立ち騒ぎはじめていた。

葬式は土葬であった。部落のはずれの彼らの墓地に穴を掘り、柳の木の皮を掻き垂れたイナウ（御幣）を三、四本穴の傍に立てて、女たちが泣きながら穴の周囲を匐い廻っていた。弥五左衛門は一塊りの土を穴の中の棺の上に落して合掌した。服部もそれに倣った。アイヌの酋長の正装をしたオンバオトエが、慣れない日本語で礼を言った。波形にうねる髪と、胸に垂れた長い髯のあいだに深く落ちくぼんだ眼窩の底から、眼が真っ赤にうるんでいた。

「タケ」「タケ」と呼びながら地面に腹ばって泣きつづけているアイヌの女たちの姿を眺めていて、弥五左衛門はふと「古事記」上巻の一挿話を思い浮べていた。伊邪那美命が火の神を生んで死んだとき、伊邪那岐命がそれを悲しんで「御枕方に匍匐ひ、御足方に匍匐ひて、泣きたもふ」という場面であった。

「タケ」「タケ」と叫ぶ慟哭の単調なコーラスに身をひたしているうちに、弥五左衛門はいつのまにか自分が自分の名を呼びながら女たちと一緒に墓穴の周囲を這いもとおっている錯覚に襲われた。穴の中にいま埋められようとしているのはタケでもあり佗山先生でもあるらしかった。いや、弥五左衛門自身であり、北蝦夷そのものであるかもしれなかった。

弥五左衛門には、かつて越前や大坂、江戸などで慷慨していた北方問題についての議論と、現実にそこに居住して無為に日常を過す生活とのあまりの違いが、この頃になって無性に身にこたえているのであった。空論でよい、北方問題について悲憤してみたい。佗山先生からうけついだあの情熱は、こんな起伏のない、平板な生活のなかに磨滅させるべきものにすぎなかったのか。磨滅しつくすまでに他人よりは時間が永くかかった、という自己弁護だけを救いとして。――「進んで北門の番犬と為らん」という悲愴感は、結局は消極的な対外政策の餌食となり、〈徒労〉という排泄物になってひり出されるしかないのか。

弥五左衛門は瞬間的に襲った幻覚のなかで、最近自分が胸のうちに抑えつけていた不安の実体をはっきりとみた。北蝦夷はこのままではやがて日本から離れてゆく、という実感であった。

「タケ」「タケ」という声にまじって「お頭――」「お頭――」という叫びが聞えるのに気づくには、少し時間がかかったようである。弥五左衛門と同時に服部も気がついたらしく、弥五左衛門の袖をひいて注意をうながした。

そのとき、海のほうからターン、ターンと二発、澄んだ銃声がきこえた。同時に、転がるように多助が走り寄ってきた。多助はきょうは鵜城湾突端のウェンルエサン番屋の望楼で海上を見張っていたはずである。

「多助、どうした、オロシヤか」

弥五左衛門の厳しい語調に、口から言葉が出ないもどかしさを息せききって駈けつけた呼吸の荒さといっしょに身体で現しながら、多助はようやくどもりながら言った。

「大――、大野――、大野丸です」

「フネ、船、藩の船です」

多助はへたへたとそこへ膝を折った。

「うん、来たか」

弥五左衛門が服部をふりかえったとき、また二発、銃声がきこえた。続いてぼわぼわという法螺貝の音も流れてきた。間違いはなかった。大野丸である。やはり吉田拙蔵は来てくれたのだ。

オンバオトエに会釈をして泣き女の声を背にした弥五左衛門は、できるだけゆっくりと足を運びながら、しかし気はせいていた。服部と多助が先に立って走っている。

「来たか。拙さん、来てくれたか」

と弥五左衛門は小走りに走りながら、何度もつぶやいた。涙が溢れた。

突然、心臓が濡れ手拭でつかまれたような冷たさを覚えた。「ウッ」と一と息呼吸が洩れてその場にくずおれ、そのまま気を失った。それでも右手だけは「わしにかまわず行け、行

け」と叫ぶように、二、三度服部と多助を追い払うしぐさをした。

その晩、弥五左衛門が意識を取り戻したのは、元会所の彼の部屋においてであった。傍に吉田拙蔵がいた。藩医の中村岱佐もいた。福永・服部・馬場たちから忠兵衛・多助・由松もいた。オンバオトエとシツヘチウまで憂わしげな顔をして控えていた。

弥五左衛門の眼尻を涙が流れた。他人に涙を見せるとは、めずらしいことであった。

中村岱佐の診断によれば、生来胃が丈夫でないうえに極度の栄養失調で、脚気が全身におよび、脚気衝心の一歩手前まできていたという。

この日の弥五左衛門と吉田拙蔵の会見の模様が、『大野八駿伝』という本の「吉田拙蔵」の項目に、次のような挿話として残されている。

「樺太に渡つた。樺太には早川弥五左衛門が小屋を建てて越年をして居た。食物の不良と運動の不足とに依つて手足に腫みが来て、足の指などは硝子の如に透徹つて居る。吉田は見るに見兼て『是では迚も生命が堪らんから、此船に乗て僕と一処に帰り給へ』と涙乍らに説勧めた。その時早川はキツと顔色を正して『君に似合はぬ事を言ふでは無いか。此島を俄羅斯に占領されると否とは、僕の此処に踏止まると否とに関するのぢや。此儘木乃伊になればとて、此地を一寸たりとも退卻されるかい』斯くて両人は袂を分つた」

おそらく拙蔵は弥五左衛門の頑固さに辟易するとともに感動したであろう。また弥五左衛門はかつて大野丸の処女航海のとき、コレラの発病にあたって吉田拙蔵を江戸へ帰そうとしたが頑として受付けなかった思い出話をして、しっぺがえしをしたかもしれない。

弥五左衛門は皆を退らせて、拙蔵と水いらずで夜の更けるのを忘れて話し込んだ。

はじめ皆は弥五左衛門の病状を心配したが、幸い、オンバオトエが服部から相談をうけて、アイヌが脚気の特効薬としているフレップを大量に持ってきてくれた。それに魚油をかけて毎日食べればよいという。即効薬ではないが、中村岱佐もそれを可とした。そのうえ、大野丸のもたらした野菜もある。福永たちも元気を回復した弥五左衛門に一応の愁眉をひらいて引き退った。

風が出てきたのか、どこかで蓆がバタリバタリと鳴っている。野外便所の入口に垂らした蓆かもしれない。磯に砕ける波の音も高くなってきた。

季節はすでに荒天期に入ろうとしている。大事な大野丸を北蝦夷の時化で難破させては相済まない。とすれば、明日にでも抜錨して帰国を急がねばならないし、二人の話も時間が制限されているというものである。

その時間を惜しむように、弥五左衛門と拙蔵の話は、遠い海鳴りの音が静まるしらしら明けまで続いた。

大野丸は翌々日の早朝、鵜城・伊皿・釜伏の三山から吹きおろす山風に帆を孕ませ、銃声と法螺貝の音を残して出て行った。弥五左衛門はじめ元会所の者全員は船が入江の岬を左に折れて見えなくなっても、しばらくはその場を離れずに沖を見守っていた。

この年（文久二年）、弥五左衛門が北蝦夷越冬中に作った「唐太在留中作」と題する数篇の漢詩がある。そのうち朔北の極寒を偲ばせるものをいくつか掲げてみよう。

今年九月立冬の前。
怕るべし寒風、剣の穿つに似たり。
請う見よ、水丁、何の所作ぞ。
堅氷、穴を鑿ちて澗泉を汲む。

火酒は樽に満ちて稍凍凝し。
寒来寒沍実に勝え難し。
南人誰か信ぜん釜中の水。
更に炉辺を背にして半面氷るを。

海を観る、今朝、海看えず。
漫々たる氷雪前灘を塞ぐ。
寒風怕るべし蝦夷の北。
万頃の太洋、玉盤を成す。

天晴れ寒さ烈しく肌を穿つに似たり。
笑うに堪えたり、今朝、一奇を見る。
烟管唇を凍らして振れども落ちず。
周章取り去れば口疵を為す。

最後の詩は、煙管をくわえたら唇にピタッとくっつき、あわてて取ったら口の皮が剝げて疵を負った、の意で、水気のある手で金物をつかむとピタピタひっついたり、舌で金具を舐めると舌の皮をとられるのは、樺太の冬の珍しくない光景である。

4

文久三年（一八六三）となった。

癸亥歳旦

文政年間己卯の人。
今にして四十五回の春。
辺疆、客と為りて何事をか成せし。
尺寸、功無く歳月新たなり。

来る日も来る日も雪である。それに風が加われば吹雪となって、翌朝は元会所全体が雪の下に埋もれている。

運動のためにも、全員雪掻きに汗を流す。人の通るはずもない道をつくってみる。道をつくり終って昼食をとり、白樺を薪とした炉端で春鰊の網の繕いにとりかかって一刻もすれば、もう手先が見えなくなって夜が訪れる。夜が明ければ、またゆうべの吹雪で家も道も埋まっている。

雪のやんだ日に浜へ出てみる。鵜城湾から外海へかけて、水平線まで白一色の氷海である。流氷がごぼごぼつぶやきながら移動しているときもあれば、キーンと音をたてそうに凍りついて静止していることもある。その上に鉛色の空が垂れ下る。

流氷が静止しているときは、耳たぶを鳴らす風だけが静寂を知らせてくれる。その風もやむ瞬間がある。すると、天も地も、空気まで凍った、無音の世界が現出する。静寂というものではない。静寂すら失われた絶対無音の空間である。

氷の体積の膨脹のために海面から溢れて、岸辺に重なり積った氷雪の山に立ってそんな瞬間を迎えると、弥五左衛門は自分の存在の微小さに顫える。人間の営みの無意味さに戦く。そこにはもはや俄羅斯もなければ日本もない。幕府もなければ大野藩もなくなる。ただ、なんのために自分はいま、この瞬間に、こんなところに立っているのだろうという不思議さで、気の遠くなりそうな徒労感に襲われるのが常であった。

この年、春とはいえまだ残雪の深い三月、久春内にある幕府勤番所は、たった一人のアイヌのために、日露間交渉という重大事件の勃発で、天地のひっくりかえるような大騒ぎとなる。いわゆる〈トコンベ事件〉で、この事件には最初から弥五左衛門の指揮する大野藩・鵜城元会所が関係し、最後の締括りも弥五左衛門が行うことになる。

しかしこの事件を知る前に、この時点における日露間の国交状態を概略述べておく必要があるであろう。それがこの〈たった一人のアイヌ〉によって惹き起された事件の重大な背景をなすからである。

大野藩に北蝦夷屯田の幕命が下りた安政五年（一八五八）の五月、ロシアは清国との間に愛琿条約を結び、黒竜江左岸を自国領とし、ウスリー江以東の沿海州を清国との共有地とすることに成功した。北蝦夷問題におけるこの条約の意味は大きい。

サガレン（北蝦夷）の語源はサガリャン・ウラ・アンガ・ハタ（黒竜江口峯）だという。したがってこの愛琿条約により、本来清国領であったサガレンは当然ロシア領となったという口実で、翌安政六年（大野藩北蝦夷入植の年）七月、ムラヴィヨフは品川湾に入って、次の三カ条を幕府につきつけた。

一、宗谷海峡を日露の国境とする。

一、日本人がサガレンで漁業を営むことは従来通りとする。

一、日本人のサガレン、黒竜江、満州国境までの往来居住は自由とする。

勿論、いくら弱腰の幕府当局でも飲める要求ではなかったし、またロシアの海軍士官モフェト他二名が横浜で攘夷派浪人に暗殺されるという事件も起きたりして、ムラヴィヨフは不

得要領のまま品川湾を抜錨した。

これ以後のロシアの南下政策は従来に倍して積極的になった。武力を背景にした積極性であった。これにたいする幕府の態度は〈軟弱外交〉の一語につきた。大野藩からの北蝦夷開拓助成金下付の願い出を拒否し、その結果大野藩の藩論が沸騰して開拓地引揚げの願いを出すと、万延元年（一八六〇）八月、「北は幌子谷（のちの露領ピレオ。北緯五〇度線をはさんで日本領の安別と対す）から南は来知志迄、領地同様と心得よ」と、越前にある大野藩領の何倍にもあたる土地を〈準領地〉として与え、助成金の代りに江戸城における土井家の御用を一切免じたのも、巧妙な〈肩替り〉政策であり、対外的〈軟弱外交〉の裏返しだったといえよう。

このような状況であるから、万延元年、ロシア人ヤチコフが大野藩の〈準領地〉内にあるンルトッタンナイ（猿津）に露人数十人を率いて来住し、石炭の採掘をはじめて居すわったのも当然であった。シルトッタンナイは鵜城の北二十里（約七十五キロ）足らずの、いわば目と鼻の先といってよい。それにこのヤチコフというロシア人はサガレンの全有を主張しつづけ、かつて安政元年、久春古丹（のちの大泊楠渓町）のロシア兵営引揚げのさいも、あくまでその引揚げに反対した男である。弥五左衛門はじめ当時の日本人は彼の名前の漢字表記に〈邪智骨布〉と書いて、その端倪すべからざる性格を揶揄した。

こういったロシア人の人もなげな振舞いにたいして、幕府は相変らず「露人の来住は貸地だと思って黙認せよ」という態度であった。

文久元年（一八六一）二月、艦長ビリレフの指揮するロシア軍艦ポサドニックが対馬に滞

泊し、乗組員が上陸して種々の暴掠を働くといった事件や、同年十二月、幕府が竹内保徳を正使、松平康直を副使とした遣欧使節団を派遣し、その任務の一つとしてロシアと北蝦夷国境協定問題を議するようにさせたことも、このような日露関係の脈絡による。

翌文久二年（一八六二）七月、露都ペテルブルグで境界協定会議が行われた。相手はこの二年前の万延元年に清国と北京条約を結び、愛琿条約をさらに発展させてウスリー州を完全にロシア領とし、「東を征服せよ」という名のウラジオストック港を建設した辣腕外交官イグナチーフであった。

ロシア側は北蝦夷全島露領説、日本は北緯五〇度国境説（幕府はすでにここまで折れていた）でやりあい、イグナチーフは北緯四八度の線まで譲歩したが、結局纏らなかった。〈トコンベ事件〉の直接的背景は、この不調に終った境界協定会議の副次的取決めによって形成されるのである。すなわち、翌文久三年に両国から委員を派遣し、北蝦夷の現地において実地検分のうえ国境を定めるという約束であった。そしてロシア側からは「其島近傍ノ総督、皇帝陛下ノすてつと（随臣ノ儀）ノこんしゆるあどみらーる、海岸諸州ノ軍務奉行、シベリー海軍隊及太平海諸港ノ指揮官、兼さがりんヲ支配セルへーるかざけうゐち」が全権として派遣されることになっていた。

文久三年といえば、日本国内においては、将軍家茂の上洛、石清水八幡宮への攘夷祈願問題、長州藩の外国船砲撃事件、薩英戦争、天誅組挙兵、七卿の都落ち、その他、清川八郎・姉小路公知などの暗殺事件頻発の絶頂期である。この北蝦夷現地における境界協定には、幕

府は内外諸事多端を理由に全権委員を派遣せず、その後の日露境界問題で大きな減点を負う原因をつくったが、これは〈トコンベ事件〉にとっては後日譚の領域に入る。

大野藩の見張番屋がある鵜城村のウェンルエサン（円度）にトコンベというアイヌがいた。去年（文久二年）の春、ロシアの南下にたいする防備として〈準領地〉内にいくつかの小屋を建てるため、ウッシュ（宇須）での材木伐出しにトコンベを雇った。

ある日、その材木小屋から鵜城の元会所へ米と酒その他を受取りにトコンベを寄越したところ、その帰途、トコンベは酒の芳香に心まよい、したたかに盗み飲みしてしまった。

米にしても酒にしても、北蝦夷では手に入らない貴重品である。藩船の次の回航まで持ちこたえねばならぬ品物である。材木小屋の番人の定吉が怒り心頭に発したのも無理はない。しかし弥五左衛門からつねにアイヌにたいしては手荒なことは絶対にするなと命ぜられていたので、定吉は怒りを抑えて、強い叱責だけにとどめた。

ところが酒の酔いで気が大きくなっていたせいもあってか、トコンベは謝るどころか嘲笑的言辞まで弄したため、かっとした定吉は傍にあった火掻棒で、先が曲るほどトコンベを撲ってしまった。

前々から鵜城の日本人とシルトッタンナイ（猿津）のロシア人の睨み合いを知っていたトコンベは、定吉の仕打ちへの報復として、ロシア人の首領ヤチコフ（邪智骨布）のもとに奔って庇護を求めた。

蒼くなった定吉の報告を受けた弥五左衛門は、そのままにしておいては国威に関わると、定吉を南のほうに転住させ、アイヌを使いに立てて再三トコンベを迎えにやったが、ヤチコフはトコンベを御馳走攻めにもてなし、

「ロシア国王から、日本の統治下を逃れてロシアの保護を求める土人があったら保護せよ、という達書が来ているから、なんど迎えに来ても帰しはしない」

といって、こちらの要求に応じなかった。

当時の一般的状況として、日露それぞれが事業を行うばあい、その労働力の多くをアイヌ人に仰がねばならなかったが、日本人のほうが優先者でもあったし、またアイヌ人たちも日本人のほうにより多く親しみを持っていたので、ロシア人は人夫に事を欠く状態であった。したがってヤチコフとしてはトコンベを懐柔することによって今後の労働力補充に役立てようという考えもあったのであろう。

年が明けた。弥五左衛門から報告を受けた久春内勤番所の幕吏は、これを聞き捨てにしておくわけにもいかぬというので、正月早々、同じ久春内在住の露酋イサコフに談判し、角田弥七郎をイサコフと同道させてトコンベを迎えにやったが、ヤチコフはこれも拒否した。

一方、トコンベは、はじめは酔ったいきおいでヤチコフの許に奔ってはみたものの、酔いが覚めてみると親許が恋しくなり、しかもロシア人の歓待も最初のうちだけで、だんだん使役に駆り出され、極寒でも犬の毛皮一枚で酷使されるような状態になったうえに、日本側からは数度の迎えも来ていることだったので、ついにシルトッタンナイを逃げ出し、正月の二

十一日、ひそかに親許のウェンルエサンへもどってきた。

これを知った鵜城詰の幕吏（身分は足軽）の高橋峰三郎は直ちにトコンベを逮捕して、手錠を打って久春内に送り、監禁して箱館奉行の指令を待つことにした。

自分のちょっとした悪戯がだんだん重大化してゆくのに驚いたトコンベは、ついに精神に錯乱をきたしたので、役土人たちの請いを容れて、ひとまず名寄村（久春内から四里ほど南にあたる）の脇乙名サネカリ方に保釈して養生させることとし、ついで役土人見習のモクチャランケの家に移した。

いつのまにか流氷も沖へ去って、冷たいながらも海が動き出す春がやってきた。海が動き出すと、北蝦夷の政治も動き出す。逃亡したトコンベを追っていたヤチコフら十三人のロシア人は、たまたま久春内でトコンベの居場所を耳にし、三月九日、着剣した銃を携えて名寄村のモクチャランケ宅を襲い、トコンベを奪った。

事はアイヌ一人に関する些細な事件のように見えるが、ロシア人が飽くまでトコンベを奪おうとする底意は、アイヌ人が日本の統治を悦んでいないという証拠を握って北蝦夷全有の既定方針を推進する道具に供しようということである。おそらくこの段階においては、国境協定の全権委員を命ぜられたカザケウィッチから、その事前工作として、日本人を喜ばないアイヌを呼び集めて連行せよ、という命令書がヤチコフに届いていたのではないかと思われる。上司からの命令である。ヤチコフも必死にならざるをえなかっただろう。

トコンベを奪われたと知った久春内詰定役出役・山梨佐輔らはその不法をなじり、ヤチコフに厳談、数次の押問答のすえ、兎も角も箱館奉行とロシア本国から指令のあるまでトコンベを久春内に住むロシア人の家に監禁しておくこととした。

いくら食言癖があるといっても、まさか約束したばかりのことを破るまいという日本人側の油断をみすまして、ヤチコフほか七人のロシア人はトコンベを久春内から偸み出し、三月十四日の夕方、船で鵜城に入って、ウェンルエサン部落のベケンシラリ方へ泊った。久春内の事情は知らなかったが、この報らせに不審を抱いた弥五左衛門はすぐにウェンルエサンに行き、ヤチコフと対面した。

『魯細亜人邪智骨布応接取調書控』なる、弥五左衛門自筆の記録が残っている。

文久三年三月十四日の夕刻から六回にわたってヤチコフと激論を戦わした経過を久春内御取締所へ報告したもので、驚くほど詳細綿密なものである。以下これを抄録の形で紹介しつつ、〈トコンベ事件〉の成行きを眺めてみたい。

第一回

問　此度トコンベ同船被罷越候由聞及候右は久春内にて談判済之上召連候儀哉

答　於久春内山梨氏え及懸合召連候

といった形で話は進められてゆく。原文を現代の会話文体に直したほうが読みやすいと考えられるので、以下そのように書き直して進めたい。但しカギ括弧「……」で引用し

てあるものは原文の形である。

問　それでは明朝すぐに出帆の予定か。

答　明日は休息し、明後日、天気がよければ出帆の予定である。

問　トコンベ連行の件はすでに話合い済の上のことだろうが、まだこちらには久春内から連絡がきていない。これについて話合いたいのだが、土人の家に止宿していることでもあるし、また明日も逗留していることだから、明朝、会所に来てくれまいか。

答　あすの朝、おうかがいしよう。

ということでその晩は別れた。

翌十五日九ツ時（正午）、ヤチコフは伴を一人つれてやってきた。

第二回

問　トコンベ連行の件は、ゆうべの話のとおり、久春内で話合い済に間違いないのか。

答　山梨氏が病気とのことだったので、久春内在留の伊芽骨布と私と同道して山梨氏の病床を訪ね、談合した上で連行してきたのである。尤もトコンベはそのときシララオロ（西白浦。名寄の約二里南に当る）にいたので、こちらから出向いて連れてきてから話合いをしたのである。ところが日本側は先般トコンベに手鎖をかけたとのこと。エシトリ（恵須取）で山丹人からきいたところでは、高橋氏がやったとのことだったので、この間ここを通ったときには、

トコンベのことについてなんの懸合いにもおよばなかったのであるが、久春内で山梨氏に問合せたところ、手鎖をかけたのは早川だと聞いた。それに相違はないか。

問　トコンベに手鎖をかけたのは早川だと、確かに久春内で山梨氏が言われたのか。

答　間違いない。高橋に面会して懸合いたいと思ったが、病気ということで面会できなかった。内実は病気ではなかったときいている。

問　手鎖を打ったのはたしかに私である。

答　どんな理由で手鎖を打ったのか。

問　トコンベはウッシュ（宇須）の材木小屋で働かせておいたが、米や酒を盗んだので、小屋番人の定吉が糺明すると、あなたがたのいるシルトッタンナイ（猿津）へ逃げて行った。そこで再三迎えの者をやったが、あなたは国王の達書があるから何度来ても渡せないと言った。国王の命令で囲い置くというのならば、臣下としてはこちらも同じこと。この上はこちらもその筋へ届け出て、こちらからの迎えはもう出さないことにしようと思って、そのままにしておいた。ところがトコンベが正月末に帰ってきたので、早速捕縛を命じたのである。日本とロシアは条約締結国だから、土人たちがロシア人の在留場所へ行くことを禁止するわけにはいかないが、最初盗みを働き、ここから逃亡した者であるから、これに捕縛を命じたことは日本の国法によるものである。私の一存で手鎖を打とうが、高橋の一存で手鎖を打とうが、外国人には何の支障もないはずである。

答　別に支障があると言っているのではないが、トコンベの言い口ではそのようには聞いて

いない。

問　逃亡までした者が自分の悪事をあからさまにいうはずはあるまい。トコンベの言葉を真実だと思っておられるのか。だいたいこのたびトコンベを同道してここを通行するということは、久春内からまだ達しが来ていない。通達のないものを通させては不都合が生じるので、久春内へ早々に飛脚をもって問合せるから、それまでここに逗留して待っていてもらいたい。

答　待つわけにはいかない。明十六日一日は逗留し、明後日の天気工合がよければ船出するつもりだ。天気の工合が悪ければ、きょうから五日以内は逗留するが、五日たってもよくないときは、陸行で帰るつもりである。

問　言われることは承知したが、前にも言った通り、通達がないのにここを通しては私の一分が立たない。ぜひ逗留してもらいたい。きょうから五日の期限つきで久春内へ問合せることにする。

答　待てない。一日だけは待とう。

問　ここから久春内までは三十里。ことに海上は波が高く、止むをえず陸行の飛脚を立てねばならない。ところが現在は川が出水のため行路に手間どることはあなたもご存じだ。とはいえ、いま言った日限より遅延したときは、自由に同行を許そう。

答　どうしても待つわけにはいかない。

第二回目の会談も夕暮になったので、ここで終った。

弥五左衛門は久春内へ早速飛脚を走らせた。その手紙の〈追伸〉で弥五左衛門は、万一ロシア人たちが承知しなければ力をもって争うことも辞さないが、そちらの久春内でさえトコンベを引き渡されたとのことだから、あまり手強くして「兵端を開候も奉恐入候ニ付」、止むをえないときは相手の意に任せて通してやるのも致し方ないと思う。「乍去三寸の舌を以て十九日迄は何分差留度候間若此飛脚足痛いたし帰路差急候義難相成候はゞ別人足被仰付」日限までにお報らせいただきたい、と必死の思いを文面にこめてやった。

十六日と十七日は、海が荒れて、ヤチコフたちは船出ができなかった。弥五左衛門はわざと談判を続けず、時間をかせいだ。

ところが十八日になると、事件は新たにもっと重大な発展をみせることになった。鵜城アイヌのなかで、オフツセリ（トコンベの父）、チセキシュイ、ホクヌの三人が家族全員をつれてロシア人と同行することになったという報告が、惣小使オンバオトエのところから届いたのである。

そこでもっとよく取調べたうえでロシア側と話合おうと、右の三人から事情を聴取しているところへヤチコフがやってきて面会を求めた。八ツ時（午後二時）であった。弥五左衛門は三人の名は出さずに、それとなく応接することにした。

第三回

問　あなたは去年の冬渡来したときも、先般渡来のときも、いつも言っておられたのは『ヤ

チコフはシルトッタンナイに、早川氏はこのウショロに在留している。いわば隣同士だ。互いにこの島のことで言い争いをすることは好ましくないから、親睦の気持を持とうではないか』ということであった。これについては私も同感である。その気持に変りはないか。

答　「実以其通に相違無之候」

問　そこで承りたいのであるが、トコンベの件は久春内から飛脚の帰りを待ち、追って相談することにして、もしトコンベ問題に準ずるような問題が生じたらどうされるか。私としては、万一シルトッタンナイに出奔するような者があったとしても、これをそちらで差押えることはお断りしておきたい。もしこれを差押えるようなことがあれば、折角の親睦の気持も破れ、互いに仇敵となる恐れも生じるだろう。そうなっては甚だ不本意である。

答　トコンベ問題を別に相談するということは承知した。しかしこれに準ずる者の差押えは断るという件については、悉く承知するわけにはいかない。そのわけは、役頭からの達書もあるからである。盗賊などは召捕えて引渡しもいたそうが、そうでない者はこちらで差押えて置くことにする。勿論このサカレン島はロシア領となったのであり、日本人がいままでの漁場に立ち入ることには差障りは言わないが、土人については、日本を好きな者は日本に、ロシアを好きな者はロシアに使われるのは勝手であるということは、すでに日本国王とロシア国王の条約で決められていることであるから、ロシアを好む者はシルトッタンナイに連行して使うつもりである。あすは天気もよいようであるから、順風ならば出帆する。そのときわれわれに同行する土人もあるだろう。また夏になってから大船で迎えに来ることもあるかもしれない。

問　日露両国の条約に本島全部が露領となった云々とあるなどとは、私はいまだかつて聞いたこともない。ことに日本を好きな土人は日本が使い、ロシアを好きな土人はロシアが勝手に使うといったようなことは、どうしても納得しがたい。またあなたはこのたび船出のさい同行する土人もいると言っているように聞えるが、それに相違はないのか。

答　「相違無之候」

問　いったいどんな理由で同行するのか。

答　役頭からの達書があり、いまもって土人の呼び集め方が不行届きだと毎々催促があるので、このたびは同行を願い出ている者だけを同道し、残りの者は夏になってからまた召連れにくる積りである。差止めはご無用、お断りする。

問　只今の話は一切納得がいかない。両国で条約済の儀であるならば、とっくにこちらへも達書が廻ってきているべきが当然である。いまもって廻ってきていない。このたび同行の土人は勿論、追って迎えに来るという土人も、当分見合せてもらいたい。箱館奉行に照会し、あなたの言う通りなら、土人を引渡すのは言うまでもない。国王の命令なら、この島全部を渡しても異存はない。臣下たる身はいずれの国も同じこと。君命なれば水火を厭わず飛入るのは勿論であるが、君命のない事は自分勝手に処置することはしない。他の国は知らず、わが日本では善悪ともに君命に随うことになっている。されば君命がないのにあなたの言いなりになってしまっては、私の一分が相立たない。箱館表に問合せの書面を送っていたのでは

行違いもあろうから、私がこれからすぐに箱館表へ出かけ、とくと納得して来て、たしかにあなたの言う通りなら異議なく土人を引渡すが、それまでは見合せてもらいたい。

答　あなたと同じことをすでに三年前に久春内で成瀬氏（幕吏）も言われ、達書が到来するまで見合せてくれとのことであったが、際限もなく待っていたのでは自分の迷惑になるから、待つわけにはいかない。

問　三年前、あなたが成瀬氏に談判されたとき、成瀬氏が同じことを言っておられたことは私も知っている。この島全体がロシア領となったこと、および土人の取扱いについての件は、何年前にどこでそんな条約が結ばれたかお伺いしたい。

答　江戸神奈川にての取極めである。

問　何年前であるか。

答　フーチャチン渡来の年である。

問　フーチャチン渡来の節の条約は一件一件逐一承知している。その条約にはそんな個条は載っていない。たとえその後の条約であろうとも、私は去年の夏の四月初めに箱館を出帆して当地へ来たものである。その出帆の時までにはあなたの言われるような約定は全く聞いていない。あるいはその後の約定であって、追々冬の氷海にも差臨み、達書がいまもって廻ってきていないということも考えられよう。しかし、いずれにせよこのたびの土人連行の件は承知できない。

答　どのように言われても、役頭からの達書がある上は、ぜひとも連れて行かねばならない。尤も強いて連行するというのではない。希望者だけを連れて行くのであって、その希望のない者を無理に連行するようなことは決してしないのだから、差止めるようなことはやめてほしい。

問　言われることは一切納得がいかない。あなたは役頭の達書があるから連れて行く、私は達書がないからお渡しできない、互いに五分と五分の理である。また力ずくで連れて行くのではない、希望者がいるから連れて行くのだと言うが、そもそも彼らはロシアが撫育していた土人ではなく、今日只今までもこちらで召使い、それぞれに手当まで渡していた土人たちである。たとえ彼らの希望にもせよ、ロシア側が勝手に召使うべき筋もないし、勝手に同行すべき道理もない。どうしても達書が廻ってくるまで待つべきである。

答　待つわけにいかない。ぜひとも連行するから、絶対に差止め無用に願いたい。

問　いくらそう言われたからといって、こちらとして渡すわけにはいかない。さて土人の渡し方につきそのように理非を分たずあなたのほうから争うときは、初めにも言ったように、日本とロシア両国は朋友の交りをなし、日本人とロシア人はどこで会っても同様の交りをなすべきだという条約の文面にも牴触するし、互いに親睦して隣境事を醸さないという約束にもはなはだ叛くではないか。

――同じ議論の繰返しであった。この日もまた日暮れが迫った。ここで通弁役の宗兵衛から、きょうの懸合いはこれくらいで打切り、さらにあしたの話合いにしてはどうか、という

申し出があったので、「双方言葉を残して引分ル」こととなった。

十九日となった。

論理の正当性ではいくらこちらが正しくとも、一向に主張を取下げようとしないヤチコフとの応接に疲れた弥五左衛門は、それでもこの暗礁に乗上げた交渉を打開しようと心をくだいていた。

実際のところ、昨夜も内密に土人たちを取調べたところ、土人三家族のうち、それぞれ三人の妻たちは絶対にロシアに行くことを望まず、いざというときになったら逃亡しようとしているということを耳にした。うっかりするとこの三人の妻たちまでシベリアに連行されてしまうかもしれない。

弥五左衛門もなんらかの決断を下すべき時がきていた。しかしいろいろな矛盾が弥五左衛門を縛っていた。久春内に出した飛脚もまだ戻って来ない。

『応接取調書』中で、この十九日の部分の冒頭に、次の第四回会談に立ち向うさいの、弥五左衛門のおかれた心理的状況についての叙述が前置きされている。

しかしこの文章、はなはだ歯切れが悪い。弥五左衛門ほどの文章家にしては、脈絡が乱れている。心理的矛盾の現れとしか考えようがない。

矛盾の一つは、自分が幕府の役人ではなく、一小藩の藩士にすぎない、つまり陪臣にすぎないというところから来る矛盾である。そのため自分の考えだけでこの土人連行問題を処理できないもどかしさは勿論であるが、久春内にいる幕吏山梨佐輔にしても、鵜城出役の幕吏

高橋峰三郎にしても（しかも高橋はこのとき久春内出張中という口実で鵜城にはいない）、この問題からなんとか逃れようとしていることは明白である。だいたい第二回会談のさい問題となった、トコンベに誰が手鎖を打ったかという件にしても、幕吏二人はそれを弥五左衛門におっかぶせてヤチコフの追及を逃げているのである。しかしこの『応接取調書』は久春内御取締所宛の（したがって箱館奉行、ひいては幕府宛の）報告書であるから、幕府役人の無為無能を言いたてるわけにいかない。それを押えて、しかも自分が陪臣の身でありながら「官府の役の如く弁舌を以」ってヤチコフと応対しなければならぬ立場を理由づける矛盾が現れるのである。

矛盾の第二は、たしかに自分は陪臣であるから、こと外交問題にかかわりのある問題に関しては幕吏の命令に従わねばならぬが、半面、この鵜城の地はすべて領分同様に心得て開拓せよ、という幕命をもらっている土地である、しかも自分はその準領地ともいうべき土地の元会所詰頭（屯田司令）である、その詰頭が、現在みすみす領民同様の土人たちを、たとえ彼らが自ら希望してロシア側にゆくにしても（それがロシア側の脅迫によることは明白であるが）、ロシア人との談判に負けて彼らに土人を引渡したということになっては、なんの面目あって、第一には公儀に、第二には藩主に、申し訳が立つであろう、という矛盾である。「世上え対して僅ニ拾人不足の夷人に恐怖し手を束て相渡候と批判を可請義勿論也」。それを思うと口惜し涙が流れるのをどうしようもない。

鵜城元会所詰頭としての立場を貫こうとすれば、あるいはヤチコフと刃傷沙汰の起る可能

性も考えられる。勿論、自分の議論は「理の当然にして直也邪智骨布（ヤチコフ）之論は義理之弁別なし然らは千万人といふ共恐る、事はなけれ共」、いまここで一時の勇名を取ろうと手を下しては、後日公儀の御処置に容易ならざる影響を与えるかもしれない。

さらに第三の矛盾は、いまここに連行されようとしている土人は、すでにロシア人と同行を約束した者たちである以上、いまここでこれを差止めても、このままここにいてはなにか仕置をされるにちがいないと恐れて、逃亡することは必定である、逃亡してもロシア人の手に入ることだし、これを許可してやっても同じくロシア人の手に付くことである、それならば公然とこれを差許してやったほうがかえって一時の策としてよいのではないか、という矛盾である。

矛盾は山ほどある。それらを腹に納めつつ結局は「舌頭に而都合能く穏便之引合に相成候様」心に念じながら、正午、ロシア側に使を出して、会所で第四回目の応接をした。

第四回

問「昨日追々懸合ニ及候一件返答如何」

答「別に相替候義無之候」

問　いったいどんな理由で、たかが二、三軒の土人を早急に召抱えなくてはならないのか。元来、ロシアは五大州中の大国ではないか。それなのに土人の三、五人の者を、再三対談に及び、今から四、五カ月のあいだ見合せてくれといっているのに承知せず、有無をいわさず

召抱えねばならぬとは、笑止千万と思うが、どうか。

答　ロシアは大国である。土人などは一切使っておらず、好き勝手にさせている。土人を置く場所もあるし、人員に差支えるというのではない。今回土人を召抱えるのはシルトッタンナイだけのことで、久春内とオッチシ（落石）の両所は土人は不用なのである。シルトッタンナイだけが、役頭から毎々言ってくるので、ぜひ入用なのである。今後土人どもを連れて行くことはあなたの言う通りに取計おう。だが今年はシルトッタンナイへ上役が渡来することだから、あなたの言い分もよく伝えることにして、その後は達書が廻って来るまで見合せるということにしよう。

問　達書がないときに土人を一人渡すも十人渡すも同じこと。取極め済だからどうあっても同行するといわれても、当方としては差止めざるをえない。

答　差止められても同行する。「差止候時は口にて差止候哉兵器を以差止候哉承り度候」。こちらからは決して最初に手は出さない。日本側から初めに手を出すなら、仕方なく相手になろう。このことは国王からもよくよく言いつけられていることである。

問　あなたの議論は滑稽である。あなたは自分のほうからは最初に手は出さないというが、手を出すの前後は小さな問題である。相手に手を出させるように仕向けるのこそ大きな問題なのである。「何ぞ手の前後を論ぜんや」。したがってここで私の深く考えた結論を言おう。いままで争ったところはきのうと同様結論が出ない。いま強いて差止めるときは、あなたもその覚悟があるであろうし、私もあえてそれを恐れる者ではない。しかしそれでは条約面に

あった親睦を破ることになるので、希望者は連れて行く、行きたくない者の連行はやめる、ということにしよう。とは言っても、現在私の部下の土人であるから、あなたが同行するについては、それについての書面を出してほしい。私は横文字が読めないから、箱館で訳してもらうことにする。ただし私の読めないことをいいことにして、虚誕を書くことは無用である。

答　はっきりと書面で渡そう。ただ旅行中なので紙がない。日本紙をいただきたい。

問　これでよろしいか。「奉書紙五六枚渡」

答　結構。日本紙使用の件も書いておく。

問　今回同行の土人名が知りたいのだ。

答　明朝までに取調書類と一緒に出そう。

問　承知した。天気なら、あす船出か。

答　手配済なので船出したい。

――以上で第四回会談は終った。弥五左衛門は会談後ただちに役土人全員を呼び出し、きょうの会談の結論を伝えた。

翌二十日早朝、土人の一人ホクヌがやって来て、取次の者に言うのには、私は去る十七日、久春内から帰ってきたところ、私の留守中に「シルトッタンナイへ来い」とロシア人から言われた由を妻から聞き、びっくりしました。その後ロシア人は鉄砲や太刀などを持ってきて無理矢理同行を強要し、そのうえ同じ仲間のオフツセリからも強いて同道するようにと言われたので、威光に恐れて断りかね、うやむやの返事をしました。ところが承諾の旨オフツセリからロシア人に通達してしまったので、同行に取極めはしましたが、先祖の墓所を捨て、御上の御恩沢を忘れてシルトッタンナイへ参りますことは、もとより望まないところでございます。しかしながら一旦同意したことなので、無理に同行を迫られることと思います。どうか御慈悲をもって当所に永住できますようお取計いください、という申し出であった。弥五左衛門は早速対面し、役土人ノホリランケを立会人としてこれを承諾し、「たとえ死んでもいまの言葉を変えるでないぞ」と諭して帰した。

次の反響は、オフツセリの家族のなかで、オフツセリの息子トコンベの妻ヌイクシマ、同じく息子コタントカの妻マウシビリマ、チセキシュイの家族のなかで同人妻シウタトンケマの三人が、ロシア人への同行を嫌がり、出船のさい逃亡して番屋か元会所へ駈込むからかくまってほしいと、女のことなので他人を通じて内々申し出てきたので、これにも承諾を与えておいた。

五ツ時（午前八時）、ヤチコフがやってきた。そこで応接左のごとし。

第五回

（魯）きのう話合った書面を認めて置いたのでお渡ししよう。横文字はよく解らないというお話しだったので、いまこの文章をアイヌ語に訳して読むから、聞いてほしい。

（早）　承知した。それでは通弁の者から聞いたところを、私は日本語に訳して書き留めよう。

〔書面略〕

（早）　それでは連行する三軒の土人名を承りたい。

（魯）　次の通りである。

オフツセリ事イキリマウシならびに同人の妻妾二人のうち、一人を連れて行くか二人ともにするかはいまのところ決めていない。トコンベの妻ヌイクシマ。コタントカならびに同人の妻マウシビリマ。男の子一人

チセキシュイならびに同人の妻二人。子供全部

ホクヌならびに同人の妻一人。悴オタルカ、チュチホマ、ならびに子供全部

（早）　右の名前のうち、トコンベの妻ヌイクシマ、コタントカの妻マウシビリマ、チセキシュイの妻シウタトンケマの三人、ならびにホクヌの家族全員は同行を希望していないとのことである。ことにホクヌは今朝、かようかよう申し出てきた。したがってまだ取極め済ということではないように思われる。ホクヌにしても女どもにしても、同行がいやで駈込んでくるときは、助けおくつもりである。船出となって互いにいざこざが起きてもなんであるから、只今双方立会いの席へ土人を呼び寄せ、吟味してみようではないか。

（魯）　女の所は私が直接聞き糺していないので確実なことはいえないが、男土人のほうは直接確答をえて同行するのである。ホクヌは嘘を言っている。双方立会いの必要はない。私が直接取調べてみる。

（早）　あなた一人で取調べて、本人が承知したと答えても、またこちらへ駈込んで助けを求めてくる者もあるだろう。私の部下の土人男女に限らず、このような願いを持っている者は幾重にも助けてやるつもりである。しかしながら本人の希望で行くものは、一旦これを許可したものである、差止めはしない。私も日本の武士なら、あなたもロシアの武士である。あえて虚誕をいうものではない。立会い吟味のほうがよろしいと思う。

（魯）　一先ず私から取調べをしてみよう。

（早）　それならば勝手に取調べなさるがよい。いまさら言うまでもないことだが、往く者は差止めず、往きたくない者を強引に召捕るときには必ず助けるのであるから、なにぶんごたごたの起きないようにしたいものである。このように申し上げるのも、いつもいうように、親睦の条約を取結んでいる国だからである。

――以上で第五回会談終了。この会談のあと、次のような事件が続いた。

八ツ時（午後二時）前ごろ、ウェンルエサン番屋から注進があり、ロシア人ならびにオフツセリ、チセキシュイらが船出する様子で、舟積みに取懸っている、シウタトンケマが駈込んできたら会所へ送るべきか、と聞いてきた。弥五左衛門は「女が駈込んできたら警固してやれ。その他、往く者は一切構うな。ひょっとしたらロシア人どもが乱妨する心配もあるから、よくよく用心せよ」と命じた。さらに会所の警固のため、ホントケシ番屋に「いますぐ

会所のほうへ十人ほど詰めろ」と言ってやった。

ヌイクシマとマウシビリマの二人が、前言通り、会所へ駈込んできた。会所では早速二人を一室にかくまって保護した。

ロシア人たちは八ツ半時（午後三時）前、三艘の船で海へ乗り出し、ウシトマナイ（牛苫）に船を寄せた。ヤチコフが単身下船して、海岸づたいにウシトマナイの部落に入った。そこからホクヌがまたぞろロシア人に同意して、家族ぐるみ船に乗った。ヤチコフの顔をみただけで顫え上り、今朝の弥五左衛門との約束など吹き飛んでしまったのである。

日本側としては、会所に女二人をかくまっているのだから、ロシア側の乱妨する恐れもあるので物見を出しておき、さらにロシア側の状況を探るために通弁役の宗兵衛をヤチコフのもとへ遣わすことにした。そして、

「きょういよいよ船出の御様子だが、早川が暇乞いに伺うべきところ用事で伺えないので、代って宗兵衛が参りました」

と口上をいわせることとし、宗兵衛が会所を一歩出たところに、ロシアの雑役夫が二人、会所のほうへやってくるという物見からの報告があった。

宗兵衛は立ち止って、会所の前でその二人に来意を訊ねたところ、

「土人の女二人が会所に逃込んだ様子だが、来ていないか」

という。弥五左衛門は、たしかに二人をかくまっている、と答えさせた。

「それではその二人を連れてゆくから、出してほしい」

「いや、それは断る」

と押問答の結果、雑役夫二人は宗兵衛と一緒にヤチコフのところへ行くことになった。

三人がウシトマナイ川のほとりへ来たとき、ちょうどヤチコフと行き逢った。

「土人女を会所に呼びにゆくんだ」

とヤチコフがいうので、宗兵衛は一緒に会所へもどった。雑役夫二人もついてきた。

取次の者からヤチコフの来たことを聞いた弥五左衛門は、いつもの会談のときの席へ案内せよ、といってやると、

「只今出船の時が迫っているので靴を脱ぐわけにはいかないから、台所で早川に会いたい」

という。

「いや、靴のままで結構。汚れたらあとで部下の者に拭かせるから、いつもの席へお通り下さい」

といわせた。

ヤチコフは靴のままいつもの席についた。弥五左衛門は会談の席をいつもと同じようにしつらえさせ、徐ろにヤチコフに対面した。

第六回

（魯）只今船出しようとしたところ、同行の土人女二人が逃亡し、調べたところ会所に来ているとのことなので、迎えに来た次第である。お渡しいただきたい。

（早）言われるとおり、女が二人来たので、会所に置いている。しかし、二人ともロシア人との同行を希望せず、逃亡したのであるから、そのままにして船を出したがよいと思う。

（魯）なにゆえに会所に差置くのか。

（早）女どもの申し立てるには、彼女らの夫どもは同行せよと手厳しく勧めたが、いやだと言っていたところ、「殺伐之色相顕（あいあらわ）し手込にして召連候様子故」、土人を頼んでも頼みがいがないから、私を見込んで駈込訴えをしてきたというので、ここに置いているのである。

（魯）それではどうしても渡さないのか。

（早）渡すわけにいかない。そのわけはすでに今朝ほどの応接のとき言っておいたように、私も日本の武士である。一言たりとも虚誕（でたらめ）は言わない。好んで行く者を止めたのではない。いま同行のうちたった二人くらいの女を差押えたからといって、こちらに何の得があろうか。ただ助力を乞うて来たから助けるのである。これこそ、いわゆる〈窮鳥懐（ふところ）に入る〉ということではないか。あなたもロシアの武士ではないか。今朝も、無理に連れては行かない、希望者だけを同行すると言っていたではないか。それを今になって強いて受取りたいというのは何事であるか。

（魯）それは男土人のことを言ったのだ。女についての議論ではない。

（早）男女の差別などあるものか。土人といえば男女とも土人である。なんで女を別にして論ずるのか。そのうえ、今朝、すでに三人の女が往くことを嫌がって私に訴え出ていることは、あなたにちゃんと話しておいたはずだ。船出にのぞんでこのようないざこざがないようにしたかったからである。私は好んで往く者はだれ一人止めてはいない。

（魯）女は夫に従って往くべきものである。夫が女を捨てて往くときは勝手次第であるが、夫が連行するというのを好まずして逃げ去るのは女の不埒（ふらち）である。その女を助けて留め置くとはどういうわけか。

（早）言われること、一応は尤（もっと）もである。しかしながら、トコンベの妻ヌイクシマの申し立てるには、トコンベはすでに昨年当所出奔のさい、妻を捨置き、しかも土人番人はいうにおよばず、御役人方までが呼迎えにおいでになっても帰って来なかった。その後一年以上もたって帰って来て、いままた無理に連れて行くといっても、このような不心得の夫をもはや夫とみなすことは絶対に嫌である、それに生れ在所を捨て、見も知らぬ遠い所へ行くことはなおさら嫌だと、先日から何度も断わったのであるけれども、オフツセリとトコンベの両人は、無理矢理同行を勧めるので、どんな危害を加えられるかもわからないから、偽って承知の旨を言っておいたのであるが、船出になって身を隠すというのは初めからの心積りだったのだから、どうか助力をいただき、オフツセリとトコンベらの害を防いでくださいと申し上げたのだといっている。またコタントカの妻マウシビリマはまだ若年で、妻といっても寝床を共にしておらず、両親を捨てて他行することは一切好まない。そのうえ両親もこれを望んでいない。そこで両親から再三オフツセリに娘の同行を断わったが、オフツセリは許さなかった。しかもヌイクシマ同様、殺害にも及びそうな様子だったのでこの会所に駈込んだのである。されば夫唱婦随は平常の論であり、いまこの変に臨んで論ずるの道ではない。いった

い、ロシアでは事の善悪を裁かないで、無理矢理女は男に順わせるという道をもって処理するのか。

（魯）わが国俗をもって処置するのである。したがって国俗をもって夫に順わせ、連行するのである。

（早）ロシアが従来から召使っているものならば、国俗をもって行うのもよいだろう。いま連れて行こうとしている者はロシアの国俗をわきまえない者なのである。「日本は日本之法有り土人ニは土人の俗有り」、この地においては土人の俗をもって論ずべきだ。あなたがなにほど言われようとも、私は好んで往く者は止めず、ただ往くことを好まず助力を乞う者を囲い置くのである。あなたも無理には連れて行かないといった前言を思い出して、強情を申し募らずに引取ったがよい。

（魯）いよいよもって渡してくれないのか。

（早）渡すわけにはいかない。

（魯）それなら差押えている二人の女の代りに、他の女土人を連れて行く。

（早）他の女土人とはだれをいうのか。

（魯）見かけ次第に連れて行くのだ。

（早）それは承知できない。さりながら、不法に連れて行くというのなら、連れて行くのもよいだろう。私もまた女に助力して連れて行けないようにしてみせよう。

（魯）なんで二人の女を差押え置くのか。

（早）なんでとはなんのことか。理由なくして差止めはしない。その理由は詳しく前に述べたではないか。あなたも義理の当然を弁知しているだろう。たとえ私のいうところが義理の当然にあらずとしても、窮鳥懐に入るの義である。いまとなってはもう理も非もない、絶対に助力してやるだけだ。あなたも前言をごまかさず、無理に連行するようなことはやめなさい。

（魯）今朝渡した書面の中に〈家内不残〉と書いておいて、いまになって連れて行かないのは、書面に偽りを記したことになる。あの書面を返してくれ。

（早）あの書面は私にはどうしても必要というものではないから、返してもかまわないが、書中に記したことと違っているからなんでもかんでも召連れて行くというのであるならば、私のほうからも〈二人の女はこういうわけで召連れなかった〉という書を遣わそう。その書を証拠として役頭へ出したなら、あなたの迷惑になることはないだろう。

（魯）日本の書を解する者はいない。解しえないものは不用である。

（早）シルトッタンナイを初めニカライスケでも読める者がいないのなら、箱館まで廻送してやろう。あなたの申し訳は立つはずだ。

（魯）日本の書付なんか必要ない。ぜひ二人の女をもらいたいのだ。

（早）これほど理非分別を説いて断わっても無理に渡せというのは納得がいかない。私が偽りを言って二人の女を差押えていると思っているのか。二人の女を差押えたからといって、私になんの得があるというのか。ただ義において渡すわけにいかないので差押えているので

ある。もし私が偽りを言っていると思うなら、二人の女はここにいるのだから、聞いてみるがよかろう。

（魯）それならすぐに聞き糺したい。一先ず土人の家まで下げ渡してくれ。

（早）それはできない。ここで私とあなたの目の前で聞こう。それが承知なら呼び出す。

（魯）二人とも一緒に出してくれ。

（早）一人ずつ聞き糺そう。

（魯）では呼び出してくれ。

（早）役土人も同席させるから、しばらく待ってほしい。

役土人のオンバオトエは先達てから病気なので、シツヘチウを呼び出し、会談の席の次の間にヌイクシマを控えさせ、シツヘチウを同席させて、「さあ、連れてきた」とヤチコフに言うと、ヤチコフは立って次の間の女の傍に行った。弥五左衛門も立ってヤチコフの傍に行った。

ヤチコフはすぐに女に向かって「同行をやめるとはけしからんではないか」と怒鳴ったが、女は無言なので、弥五左衛門が傍から「はっきりと言いなさい。黙っていては埒があかないから」というと、今朝言ったと同じことをたいへん小さな声で言うので、シツヘチウが取次いでその旨をヤチコフに通じた。

ヤチコフが再三利害を説ききかせたが女は黙っているので、弥五左衛門は元の席へもどり、

ヤチコフに声を懸け、「あなたが女の傍で我鳴り立てていては、女の身として、返事がしにくい様子だから、席にもどりなさい」というと、ヤチコフはその言葉に随って席へもどった。

そこでシツヘチウが女の顔に耳を寄せて、たいへん小声でいう女の言葉を聞き取ってヤチコフへ通じたのは、前言と同様、夫に順って行くのは不承知だという断りの言葉であった。ここにおいてまたまた談判となり、女もそのままそこに控えさせ、シツヘチウにも同席させた。

（早）只今お聞きのように、無理に同道させようとするのを拒んだのであるから、そのままここにおいて、あなたはお引取りいただきたい。

（魯）夫のトコンベが妻を捨て置いて行くというなら、私も言うことはない。彼の考えもあることだろう。よってトコンベとこの女とを突合せ、その上で両人の話に任せよう。

（早）それは出来ない。二人を突合せたなら、トコンベは男だから、別なことを話出して女をおどすだろう。そんなことはここでは無用である。行く行かないの一件はもはや明白に分ったことだ。別な話をされても、私もあなたも証拠がないのだから裁断できない。それでは仕方のないこと。この上はトコンベによく利害を話すしかない。私が言ってやってもよいが、トコンベはすでにあなたの部下になって往くものであり、私がとやかくいう筋合ではない。あなたからよく言い聞かすべきである。

（魯）トコンベを突合せることもだめ、女を引渡すのもだめと言われるからは、私はトコ

ンベの味方をする。あなたは女の味方をせよ。

（早）承知した。しかし、あなたがそのように言われることは、心得違いではないのか。すでに先年条約を取結んだとき、前にも言ったが、日本人とロシア人とは朋友の交りをなし親睦しようと、双方の国王の盟約があった。それを今、土人のことでそれぞれに味方をしようというときは、国王の条約面にそむくのではないのか。だいたいこれらの土人は私の部下なのである。したがって、たとえ自分から往きたいという者でも差押えるのが当然であるけれども、それをしては争いとなるは必定、いまここで兵端を開き、両国の一大事となってはゆゆしいことと思い、往きたいという者は差押えることはせず、あなたの意に任せて差遣わしておき、この件を官府へ訴え、官府の差図に任せ、他日請けもどし方もあるだろうと考え、許可したのである。あなたを怖れて許したのではない。こちらも極力味方して、女は渡さないようにするから、あなたもよくよく考えてみるがよい。

（魯）今一人の女も呼び出して聞き糺したい。

（早）呼び出すのはかまわないが、トコンベの妻とは違って、まだ十三、四歳のものである。両親介添のうえ、呼び出すことにしよう。

そこでマウシビリマの両親を呼び出したが、なんやかやと手間どって、時刻もすでに夜の四ツ時（午後十時）を過ぎたので、夕飯を言いつけ、ヤチコフと弥五左衛門は対席して食事をとった。

食事が終って程無く、マウシビリマの両親もやって来たので、彼女を次の間に呼び出した。

ヤチコフが、

「今朝、私が訊ねたときは、マウシビリマはコタントカのところへ行っていると聞いたが、これまでにコタントカと同衾したことはあるのか」

と尋ねた。マウシビリマの母が答えた。

「決してそんなことはありません。それに、コタントカがここにずうっと居ることなら妻にも遣るでありましょうが、遠方に遣ることはできません。私たち両親も娘も同意見です」

それに和して父親も同じことを言った。これにたいしてヤチコフは、

「今朝もコタントカの家へ行っているなどと言っておきながら、日本人をこわがって、遠方だからやらないなどというのは偽りだ。一度聞いたことは聞いたことだ。二度聞く必要はない。連れて行くぞ」

といって、弥五左衛門をふりむき、

「もはや懸合いは無用だ。帰る」

と言いざま、逃げるマウシビリマを追って台所の方に向かった。ヌイクシマもそこにいるはずだ。

「まだ話がある。戻りたまえ」

と弥五左衛門が声を懸けたが、ヤチコフは聞き入れずに、どんどん台所の方へ行くので、弥五左衛門はかねて用意しておいた五連発の短銃を懐に入れ、愛刀越前守助広をさげてそ

れに続いた。

通弁役の宗兵衛もヤチコフの跡を追って台所に出、

「聞き違いをするな。両親のいうことをはっきりと聞きなさい」

といってふたたび両親を呼び、ヤチコフと大声で議論した。弥五左衛門はヤチコフに声を懸けて、

「いまさら議論の余地もないが、日露条約に背く仕打ちではないか」

と、その腕を取って詰じり、ヤチコフは勿論、雑役夫たりとも二人の女を引立てるようなことがあったら一刀両断にしてくれようと身構えながら言い争っていた。

ところがそこへ飛び込んできた者がある。トコンベであった。そもそも自分のことが発端でこんな日露間の大問題が惹き起されるなどとは、この若者の思考力を超えた事柄であった。ただその重大さだけは呼吸の止まるほど感得された。顎がガクガクふるえ、目は吊り上り、顔色は紙のように生色を失っていた。トコンベは文字通り平蜘蛛のように平伏して言った。

「私の妻のことで御両所様が御争論になるとは、まことに申し訳ありません。早川・福永の御両人様はその初めから私どもに不愍をおかけくだされたお方でございます。お伺いしましたところ、ここの土人がロシア側へ勝手に行ってよろしいというお達書が廻って来ていないため、早川・福永の御両人様がわざわざ箱館までおいでになり、お取調べをしてくるまでロシア行きを見合せよとのお話合いがあったそうでございますが、私の妻はそれまで召連れては行きませんから、ヤチコフ様もそのようにご承知くだされ、御争論はお止めください」

訥々とではあるが、恐懼と誠意の溢れる言葉であった。弥五左衛門ははじめは何を言うのであろうかと半信半疑で聞いていたが、そのうちに「あのトコンベがこんなことをいうのか」という感動に襲われた。トコンベのこの言葉だけで、今回の土人連行問題の埋め合せはつく、という感じだった。やはりアイヌ人たちは大野藩士の誠意を知っていてくれたのだ。そう思うと胸が迫って、なにも言えなかった。

一番動揺したのは、なんといってもヤチコフであった。トコンベの言葉で、いままで無理にでっち上げていた論理が瓦解したのである。そうなるとサバサバしたものであった。

「そうか。お前が捨てて行くというのなら、わしの知ったことではない。よしよし、それならすぐに引揚げよう」

そう言うと弥五左衛門への挨拶もそこそこに会所を出て行った。雑役夫たちもそのあとを追った。

日本側は最後まで儀礼をくずさなかった。番人四、五人に提灯を持たせて、ウシトマナイまで見送らせた。ヤチコフたちはそこからそのまま船に乗って漕ぎ出して行った。

見送りの者からその報告を受けた弥五左衛門は、ヤチコフの一行がそれから何をしでかすか心配なので、ウッシュ（宇須）に飛脚を出したところ、ロシア人たちはナイコトロ（内胡）に上陸、土人家屋に入って船出の支度をし、二十一日未明にウッシュに乗寄せ、そこまで出て待っていたオフツセリとチセキシュイたちを呼び集め、朝の四ツ時（午前十時）前に船出して、ホロケシ（幌岸）のほうへ去って行った、と注進がもどってきた。

以上が〈トコンベ事件〉の全容である。

ヤチコフの立ったあと四日目に、久春内の御取締所から彼の言葉は全然虚誕であるという返報が届いた。弥五左衛門にとってはそれはもうどうでもよいことであった。その返報が間に合ったとしても結果にそれほどの違いがあろうとは考えられなかった。ただ自分としてはやれるだけやったということで慰めるだけであった。

たった一つ心に痛みとして残ったのは、連れ去られたアイヌ十八人のなかに、シマ（五歳）マツ（同上）モト（三歳）ソノ（同上）という、大野藩入植後、日本名の名を付けられた幼児が四人いたことであった。それとともに、ヤチコフの船出のさい逃亡して山の中に隠れていたチセキシュイの妻シウタトンケマが残して来たチウケウェンコテという九歳の男の子が、船の中で母の名を呼んでいつまでも泣き止まなかった、という話も弥五左衛門の心を暗くするものであった。

5

現在、筆者の手許に『日本地誌略　北海道・柯太州・琉球国之部』という木版本がある。奥川留吉・富士越金之助の共同編集で、発行は〈官許明治八年六月十七日〉となっている。この本は当時の小学校の教科書であったらしい。

明治八年といえば、五月七日、ペテルブルグにおいて日本のロシア駐在特命全権公使・榎本武揚と露国外務大臣ゴルチャコフとの間に千島樺太交換条約正文及付属公文の調印がなされた年である。そして早川弥五左衛門が福井県大野郡上味見中手小学校の教員となって三年目であった。

この『地誌略』のなかの柯太州の部分は富士越金之助の編集になるものであるが、その一節に、白主ヨリ北百里ヲ距テ、鵜城ト云フ、島ノ西岸ニシテ東南ハ群山蜂起シ、西ハ、東韃ノ地ヲ瞰ミ、巨巌海ニ崛起シ、岸上平坦ニシテ、自ラ弓様ヲ成シ一湾ヲ擁ス、湾内昆布及ヒ海苔多ク、又タ舟泊ニ便ナリ

とある。

わたくしはこの本を手にするたびに、わたくしの育った樺太の寒村の小学校の光景を思い浮べる。まだ昭和となって六、七年目のころである。

その小学校には教室が二つしかなかった。生徒数も全校で三、四十人はいたであろうか。その二つの教室で、一、二、六年生のクラスと、三、四、五年生のクラスの、複式授業が行われていたのであった。

その一方の教室で、胃弱で、顔色の冴えない老校長が、午後になると子供たちに自習をさせて、自分は教壇の上の椅子に坐り、教卓に靠れて、よだれを流しながら昼食のあとの睡魔とたわむれていることがよくあった。

わたくしたちは自習にも飽き、校長の居眠り姿をながめながら、隣りの教室で校長夫人の弾くぼろオルガンにあわせて子供たちが歌っている唱歌をぼんやりと聞いていたりしたもの

であった。

明治のはじめの福井県上味見中手小学校なるものが、どれだけの規模のものだったか、わたくしは想像するよすがを持たない。しかしわたくしには奇妙に、あのわたくしの小学校の校長の萎えた羽織袴姿と、早川弥五左衛門の教員姿とがダブるのである。そして、ものうい午後の教室をつつみこんで耳を聾する蟬しぐれのなかで、五十七歳の早川弥五左衛門が『日本地誌略』を開き、右の鵜城の一節を子供たちに読み聞かせている姿をはっきりと思い描くことができる。

しかしわたくしのイマジネーションはそこからは一歩も進まない。弥五左衛門の声がそこで急に熱を帯びるとも思えないし、子供たちは子供たちで、一時も早くこの退屈な授業が終り、蟬とりや魚釣りに飛び出して行くことを願っているかもしれないのである。そこに雁首を並べている村女牧童どもに、弥五左衛門の胸裡に去来する、いまは燃え尽きた情熱の炎を理解させよというのか。

おそらく弥五左衛門としては、生来北方にたいする共感を持ち合せていない西南諸藩出身者によって壟断されている明治新政府が、鶏の肋骨ほどの惜しげもなく切り捨てた樺太を回顧することは、死児の年齢を数えるよりも辛く、むしろ記憶から抹殺しようとつとめていたかもしれない。じじつ、晩年の弥五左衛門は、樺太経営のことは絶対に口にしなかったといわれる。

〈トコンベ事件〉以後の弥五左衛門の年譜を覗いてみよう。

翌元治元年（一八六四）春、藩主（利忠は隠居し、嗣子捨次郎恒利が襲封していた）の特命により帰藩。その後二度と北蝦夷へ渡航する機会はなかった。しかもこの年、兄事していた内山隆佐が病歿し、続いてあの大野丸も根室沖で坐礁沈没。北蝦夷への夢は消えた。弥五左衛門は次の七言絶句を賦して、北蝦夷への挽歌とした。

長征漫りに身心を苦しむるなかれ。
心事の成らざるは古今同じ。
五載の辛勤、都べて水泡。
空しく費用を投ず、幾千金。

慶応元年（一八六五）七月、少過によって厳譴を蒙り、謹慎を命ぜられる。反対派の妬斥による。やがて藩校教授に転ずる。

明治元年（一八六八）閏四月、藩の精技隊頭取を仰せつかる。九月、箱館戦争勃発し、新政府は大野藩に出征を命じた。北辺の地理風土に明るいとみられたからであろう。これに精技隊も応ずることとなったが、弥五左衛門は頽齢を理由に長男の敏を出征させた。

明治二年、吉田拙蔵・松尾友三らの奔走で、樺太の〈準領地〉全部を新政府に上地し、鵜城にとどまっていた藩士たち全員が引揚げた。弥五左衛門がはじめて鵜城を踏査した安政四年からまる十二年間の開拓事業は、〈徒労〉の一語に終った。

明治四年、致仕して釣叟と号し、北海道への移住を企てて果さず。

明治五年、五十五歳で上味見中手小学校の教師となる。

明治十二年、教職を退き、隣村の下味見村折立に居を移す。金を借りて商店を開いた。その後の弥五左衛門は全くの童顔に返り、鶴髪美髯、昼一合晩二合の酒を友とし、微醺に気が向けば竿と網をたずさえて小川に魚を釣るといった好々爺ぶりであったらしい。そこには朔風狂濤に立ち向った往年の勇姿をしのばせるものは全く見られなかった。

明治十六年十一月十六日、腸を病んで死んだ。数え年六十五歳。邸前の山腹に火葬し、のち円山の北麓に墓碑を建てる。「寛一院釈等斎」と法名が彫られている。

臨終に際し、愛刀助広を持って来いと家人に命じた。家族の者たちが腹でも切られてはたいへんと躊躇していると、

「武士がその魂を手放して逝けるか」

と声を励まし、愛刀を手にして莞爾として長逝したという。

「絶命詞」なる一篇がある。

低頭回首一生中　六十五年与夢同
今日無為吾死矣　蒼天髣髴望明宮

「低頭回首す一生の中。六十五年も夢と同じ。今日為す無く吾死するか。蒼天髣髴明宮を望む」と読むのでもあろうか。

弥五左衛門が正五位を贈られ、『贈位諸賢伝』に入る資格をもったのは、土井利忠（従三位）内山七郎右衛門（正五位）内山隆佐（同上）に遅れること六年、歿後三十二年を経た大正四年十一月十日であった。これは大正天皇即位式の行われた日付である。

維新の狐

戸川幸夫

戸川幸夫（とがわ・ゆきお）
明治四十五（一九一二）年、佐賀県生れ。山形高校卒業。毎日新聞記者を経て、昭和三十年『高安犬物語』で直木賞を受賞。従来わが国に例を見ない動物文学作家として活躍、『野性への旅』などがある。その後、歴史小説、時代小説にも幅を拡げる。『戸川幸夫動物文学全集』全十巻（昭和四十年、冬樹社）がある。

サー・ハリイ・スミス・パークスは一匹の狐を飼っている。

それは彼がこの国に公使として着任した年に赤間ケ関（下関）で手に入れたものであった。

そのときはまだ尾を含めても一メートルに足りない仔狐であった。丁髷の悪童どもが首に縄をつけてひきずり回しているのを見て、同情半分、好奇心半分で求めたのである。

もともと動物好きではあったが、繁忙な日常の生活が彼を動物に近づけさせなかった。上海に居たときは中国犬のチョウチョウ種を飼っていたが、それも日本赴任に際しては残してきたくらいだから、このふわふわとしたやわ毛に包まれている仔狐を得たとしてもいずれ野山に放してやろうという程度にしか考えていなかった。

「ほう、これは珍しい。金眼銀眼でございますな。猫の金眼銀眼は稀に見かけますが狐は初めてです。

日本では金眼銀眼は幸先よい象徴とされて居ります」

接待役として彼につきっきりになっていた長州藩の井上聞多は微笑を泛かべて言った。

その言葉を日本語に堪能なアーネスト・メイスン・サトウが通訳した。

〝幸先のよい金眼銀眼の狐〟という言葉が重大な覚悟を秘めて渡日したパークスにはひどく気に入った。

悪童どもは鼻が高くて澄んだブルーの瞳をもった異人と、その人を案内する身分の高そうな藩士に眼をつけられたということだけですくみ上り、サトウが、

「イクラ　デ　ユズリマスカ?」

とたずねても答えられなかった。

「いや、狐は藩の方で求めて御訪問下さった記念として差し上げることに致しますから……」

聞多は、ご心配なく、と言った。長州藩としては英国の新任公使が長崎から横浜へ着任する途中で、わざわざ船を降りて訪問してくれたことに大きな誇りと喜びを覚えていた。幕府との一戦を避けられないと覚悟していた長州藩では仏国が幕府の後押しをする以上、英国に近づいて協力を得るよう工作して置かねばならない。だから親善の援けとなるべきものであればこの際いかなるものでも利用したかった。仔狐一匹でもパークスが喜ぶものであったらそれは大いに価値のあるものであった。こうして赤間ケ関の仔狐は長州のほほえましい親善使節として横浜にきたのであった。

それから二年の余、狐はもう仔狐ではなく焦げ茶色の剛毛をもった一人前（?）の立派な赤狐に成長していた。

パークスは自分が日本へやって来た慶応元年（一八六五）五月という月日を記念してMayと名づけて可愛がった。

狐の檻の掃除は庭番として傭ってある日本人の老爺にまかせたが、食物はなるべく彼自身が与えるように心がけていた。犬と違って警戒心の強いこの動物はひどく人見知りをして馴れ難かった。事実、メイに近づけるのは彼と庭番だけだった。メイはパークスの足音をよく知っていて、彼が庭に降り立つと姿の見えないうちに小屋からとび出して金網に手をかけて立ち上り金銀の眼を期待で輝かせていた。しかし、それだからといってメイがパークスを許していたわけではなかった。

それでもパークスはメイを愛した。

「公使はどうしてあんな臭い動物を庭の隅に飼ってるんだろう」

と館員の中にはそのもの好きに眉をひそめるものもあったが、サトウはその理由を説明したこともなかった。

この日もパークスはパンにバターを塗って狐の檻に近づいていった。メイは金網から口吻をつき出してパークスがちぎってやるパンをがつがつと鵜呑みにした。

と、突然にメイは身をひるがえして小屋の中に逃げこんだ。パークスはふり返った。果して芝生の庭を横切って気に入りの通訳官サトウがやってくるのが見えた。

パークスは残りのパンを檻の中に投げこむと手をはたいてサトウを待った。

「公使、ニュースです」

サトウは緊張した面持で言った。

「ドルーアン・ド・ルイが辞職してド・ムーティエが外相に就任しました」

「ムーティエが……?」

パークスはちょっとの間考えこむ様子をしたがすぐに嬉しそうに顔を綻ばせると、
「勝ったよ」
と言った。
「は？」
「ムーティエは常識人だ。ドルーアンのように英国に楯をつくような冒険はしない。フランスの極東政策は百八十度の急転換をするよ」その声ははずみを帯びていた。
「そうでしょうか？」
「そうだとも……。メキシコ干渉の失敗につづいて、ルクセンブルグ併合の野望もプロシアの反対で挫折した。
フランスの外交はこのところ失敗つづきだ。ボナパルト政権は下り坂なんだ。
外相を更迭したのは日本の幕府援助に深入りしすぎた政策を改めて、せめて交趾シナだけでも自国の勢力内に確保しようというあらわれだ。見ていたまえ。
フランスはわが大英帝国と対立する冒険政策を改めてくるから……」
パークスは確信をもって言い放つと、
「この機にロッシュが幕府との間で結んだ六百万ドルの借款契約と貿易独占の企図を粉砕すべきだな。そうだ、君、ジャパン・タイムズ紙に仏特使のクーレーが江戸で幕府との間に結んだ秘密協定の内容を暴露してくれ。わが輩はそれを本国に送り、その記事を議会で問題として採りあげ、フランスに条約違反ではないかと糺すように工作しよう。

ドルーアンではうけつけないが、ムーティエならば、震えあがってしまうだろう」
パークスは嬉しそうにくすくすと笑うと再び狐小屋を覗きこんだ。
「メイを貰ったとき、イノウエは金銀の眼をもった狐を飼えば将来ハッピイをもたらすと予言した。その言葉の通りメイは今日、わが輩に勝利をもたらした。
君にいつか聞いたが、日本では狐と狸は人間を欺瞞する獣だという言い伝えがあるそうだが……わが輩がメイを愛しているのを知っている幕府の連中はわが輩のことをイギリスの狐と呼んどるそうだ。だが、それならばわが輩はロッシュをフランスの狸と呼ぼう。狐と狸は日本という檻の中で決闘をして、狐がとうとう勝ったのだよ」
サトウが立ち去ったあともパークスはしばらく庭を歩いた。ひと荒れきそうな雲ゆきだったが、パークスは久方ぶりの晴々とした気持だった。ついこの間の将軍謁見の日の得意そうなロッシュの顔が思い出された。
着任以来の鎬を削った戦いだった。ロッシュはさすがに噂に違わない強敵だったと思う。
ロッシュが在日仏国公使として日本にやってきたのは元治元年の三月下旬のことである。彼は北アフリカに三十年の余もいて植民地戦争で活躍し、チュニス総領事となり、日本に来たとき既に五十五歳。いくぶん肥り気味だが健康で白くつやつやとした皮膚は年齢よりは遥かに若く感じさせた。明敏な頭脳と老練な手腕、自信と闘志に満ちていた。
彼は前任者のド・ベルクールが米国公使や蘭国総領事と共に英国公使のオールコックに追

随し、協調していたのと全く異った方針で動きはじめた。

「わが輩は東洋に於てもボナパルト政権に勝利をもたらすために派遣された選手である」

彼は着任するとまず公使館員にこう宣言した。

その言のように彼の行動は常に独自的であって英米蘭三国とは協調的でなかった。協調的ではないというよりはむしろ凌ごうと力めていた。

ロッシュが日本へ来て最初にぶっつかった重大な事件は下関を砲撃占領するということだった。三国は彼にも同調するように誘ってきたが、ロッシュは乗気にならなかった。

そういった折も折、一方では幕府の長州征討が企図されていた。幕府は禁門に変を起した長州藩の責任を追及して兵をすすめようとしていたのだ。

ある日、外国奉行の竹本正雅がロッシュを訪れた。竹本は老中の命令で参った旨を述べて、

「閣下のお力で長州の懲罰が旨く、且つ心配なく行えるよう推進しては戴けまいか」

ときりだした。

「それはどういう意味ですか？」

ロッシュはたずねた。

「されば申し難いことですが、これを申し上げねば納得なされぬでしょう。どうか閣下だけの胸のうちにおとどめ下さいますよう……」

と念を押して、幕府は長州に圧勝するだけの武力がないことを告げ、また英国がこの機会を摑んで下関を占領するのではないかと案じている。英国は油断のならない国であり米蘭は

これに同調しているし、幕府としては仏国のみが頼りであって、

「もし閣下のお力でわれらの心配が杞憂であるとの保証ができますればこれに越した喜びはありません」

と言った。仏国が眼を光らしていてくれれば幕府としては四カ国の艦隊が長州藩の要塞を砲撃占領するのを黙認しようというのであった。

ロッシュは幕府から信頼されたことを喜んだ。日本の主権は天皇にあるとはいえそれは名のみであって実権は徳川幕府が握ってきた。幕府と結びついて日本との貿易独占権を摑むにはよい機会である。将軍を援けて長州を膺懲し、頑迷な大名たちに攘夷のむだなことを悟らしめるがいい、と考えたロッシュは、

「承知した」

と快諾を与えた。彼の情報網によると英国代理公使ウインチェスターは薩藩と近づき、その領内に開港地を作ろうとしているとのことで、仏国はその点、立ち遅れていた。英国が幕府にあいそをつかして薩長の雄藩に近づこうとすれば、仏国としてはその対抗馬の幕府に賭け、あと押しをせざるを得なかった。

ロッシュと幕府との結びつきはこうしてでき上った。

四国連合艦隊のたった三日間の長州攻撃で惨敗を喫した長州藩は漸く攘夷の無謀なることを悟った。四国の狙いは成功した。ところで英国の目的とするところは薩長を撃滅することでなくて英国の側に立たせることであった。薩摩も長州も英国に接近していった。

一方、ロッシュは幕府部内に対して巧みに反英宣伝をした。幕府部内には勘定奉行の小栗上野介や目付の栗本鋤雲など熱心なる親仏派が現われ、彼らは仏国の力をかりて幕府の軍事力を増大させ権力を盛り返そうと計った。

横須賀軍港の母体となった製鉄所（兵器廠）がロッシュの力で造られた。

十六門のカノン砲も仏国から幕府へ届けられた。

仏外相ドルーアンはロッシュとは親分子分の間柄であった。ロッシュはドルーアンに仏国が日本の市場を独占するためには幕府を強大にしなければならない、英国が尻押しをしている領主たちの軍事力を圧倒するために仏国の絶大な援助が必要なんだ、と要請した。彼はその代償として日本の生糸を独占するのだと告げた。

攘夷から開港へと腹を決めた長州藩は表面幕府へ恭順をよそおいながら力を養う方策を考えていた。高杉晋作らの正義党は俗論党を追放して、長州藩の戦力と経済力を蓄えるためには下関を開港せねばならぬと考え、ウインチェスターに頼った。英米蘭は賛成したがロッシュはこれに反対した。いうまでもなく下関開港は薩長を首謀者とする反幕派へ武器を供給し、貿易によって西国大名を富ますことになるからだった。幕府はロッシュの意向を体して下関開港を拒否した。

しかし、薩長の連合が成って、幕府の監視にもかかわらず多量の兵器が各国の武器商人の手で薩摩を通じて長州に流れこんでいるのを知ると、ロッシュは幕府に、

「長州再征を決定した以上、外国船が長州沿岸にて貿易を行わぬよう各国公使に懇請なさるがよい」

と入れ知恵をした。

こうしてロッシュは英仏米蘭四カ国の密貿易禁止覚書をつくりあげた。

ロッシュが幕府のために為した努力はたしかに凄じいもので、パークスが着任するまでは三国はロッシュのために曳きずり回されていたといってよかった。

パークスがオールコックの後任公使として上海領事から昇格して赴任してきたのはその四カ国覚書ができて数日あとのことであった。

幼少時代から中国で暮したパークスは東洋人の気風をよく心得ていた。まだ三十七歳という若さであったが、阿片戦争にふるった彼の非情なまでの辣腕は本国でも高く買われていた。ロッシュの対抗馬としては彼以外にはないと白羽の矢が立てられたのも、そんなところに理由はあった。

パークスは日本に渡る前に、日本の国情について研究を遂げていた。オールコックの決めた対日根本方針が間違っていないと判断すると彼は、はっきりと賭け馬に西国大名を選んだ。

幕長戦（長州再征）はまさに始まろうとする気配であった。そこで彼は自分の賭け馬の健康状態を見るために赴任の途中で道草を喰った。徳川幕府などというものは彼の眼中にはなかった。

長州藩は果して狂喜して彼を迎え、桂小五郎、井上聞多、伊藤俊輔らはつきっきりの歓待をした。

「戦争はどうします？」
パークスはとぼけて質問した。桂は、
「もちろん」
と憤ったような顔をした。正直な人だな、とパークスは昼間の狐のように眼を細めた。
パークスが横浜に着いたのは五月十六日であった。彼は現実の問題として開戦の不安から貿易が畏縮してしまっているのを知った。
そこで着任の挨拶をかねて江戸城に老中水野忠精を訪れると、
「戦争は避けられませんか？」
と挨拶のあとでいきなり言った。サトウはその言葉を正直に、歯に衣を着せずにそのまま通訳した。
水野は眼を大きく見開いて、
「長州は幕府の寛大なる条件も守らず兵備を進め、叛乱のしるしが見えます。今にして彼を膺懲せねば後日十倍、百倍する悔を残しましょう」
と答えた。
「しかし、武力にうったえて部下の大名を亡ぼすというのは良い策ではありません。それよりも彼がなぜあくまで幕府に叛こうというのか、その意見の不一致の点を研究して話し合いで解決してはいかがですか」
パークスの言葉を水野は腹立たしい気持で聞いた。

〝なにをこの狐めが……陰に回っては長州を焚きつけておいて……赴任の途中で赤間ケ関に立ち寄ったことなどちゃんと判っているのだぞ〟水野忠精は腹の中で怒鳴っていた。むっとしたらしい様子をパークスはすばやく見てとって、
「わが輩は赴任の途中で赤間ケ関に立ち寄り長州藩の軍備と戦意を見てきました。ところでその際、一匹の仔狐を手に入れましてな。いや子供が連れているのを可愛いので買い求めたのですが……」
「狐を……？」
水野は露骨に嫌な顔をした。何を下らない話をするのだ。
「そうです、仔狐です。ところが船に持ち帰る際にわが輩が抱きかかえると嫌ってわが輩の掌に二度咬みつきました。こんな仔狐がと思っていたが傷はかなり深く、横浜に着くまで痛みました。
つまりこれですな。大名も押えつけようとすると止むなく手向かうものです。戦争となれば幕府も長州も出費に苦しむことになり、どちらが勝っても日本国の利益になりません。いや日本だけじゃあない。われわれ貿易国も非常な損害と迷惑を蒙ります。平和的に解決すべきです」
「その方法はもうありますまい」
「ないことはありません。求めるだけではいけませんよ。西国の大名たちがなぜ幕府を恨んでいるか――その謎を解けばいいのです。

貿易です。貿易を幕府の独占にせず彼ら大名にも許してやる。その代り戦備をしないという条件をつける。私が仲裁してもよい」

しかし水野はためらった。

その夏はことに暑かった。パークスは庭番の老爺に言いつけて狐の檻の上に日覆いをつくってやった。それでも強烈な陽ざしは檻の中まで差し込み、メイは一日中狭い小屋の中にもぐり込んで出てこようとしなかった。

警戒心の強いこの獣は馴れているようでなかなかパークスの思うほど親しんではくれなかった。夕方、肉を与えるときだけとび出してくるが、肉をもらうと小屋にすぐ潜り込むのだ。

「まるで日本人のようだ」

とパークスは苦笑した。幕府も、薩長も表面はにこやかにしているが非常に警戒ぶかくて、心からうちとけてこないのだ。ことに薩長は英国から餌（兵器）を手に入れるときは近づいてくるが、それを銜えてしまうともう自分らの洞窟に立てこもってこちらの近づくのを警戒している。

狐と同じようだ——と思った。根気くらべだ——とも考える。メイの方が先に馴れるか、薩長側が先に融合してくるか。ロッシュとはまた別な戦いであった。そして、こうした困難は第一級の外交官を自負している彼の闘志を一層ふるい立たせた。

メイは日陰をつくってやったにもかかわらずひと夏で夥しく脱毛し、見すぼらしく痩せた。

九月に入って間もなくパークスは外相のラッセルから重要な訓令に接した。

それは「数世紀の間、日本を支配してきた政治形態は最近の対外関係の発生で著しい変化をなした。将軍はもはや日本の事実上の君主ではなくなった。将軍の上には天皇が在り、天皇を直接にいただこうとする大領主たちの運動があり、大領主たちは将軍と肩を並べて港を開き貿易を行うことを希望している。大領主たちはその家臣を派遣して攘夷鎖国は将軍の強圧によって行ったもので、将軍は外国との貿易を独占するためにわれわれに鎖国を命じ、貿易の意図をさまたげているのであると告げてきた。これが事実とすれば英国としては幕府のいうなりになっていることはできない。貿易への参加を意図する大諸侯と接近するのもまた止むを得ないことである」というものであった。

そして条約の勅許を得ること、兵庫を開港させること、輸入税率をひき下げることを幕府に要求せよ、と命じてきた。

この三条項を幕府に承認させるためには四国の連合が必要だった。米蘭は心配ないが、幕府にとり入っているロッシュが強硬に反対するに違いないとパークスは心配した。

少なくとも薩長に有利な兵庫開港は、貿易独占を考えている幕府の代弁者としてロッシュは猛烈に反対するに違いない。その時こそ激突しても主張を通すのだ、とパークスは覚悟を決めた。だが、パークスの予想はロッシュの肩すかしに合った。ロッシュは簡単に同意した。それは却ってロッシュの深い企みを感じさせて不気味だった。

ロッシュは兵庫開港をひとり反対しても結局は負けることを知って一応パークス説に同調し、兵庫貿易も幕府の独占にしようと画策していた。

四国の代表者たちは互いに相手の腹の中を探りあいながら九隻の軍艦に護られて横浜を出港、兵庫に向かった。それは将軍はじめ幕府首脳部が長州再征のために大坂に集結していたからであった。

この情報を得た薩藩の西郷吉之助、大久保一蔵は幕府の意志だけでかかる国家の重大事が行われることに猛烈な反対運動を起した。雄藩の大名を召集して、その会議で決定すべきである。天下の公論で決めようと主張したが、その底には幕府を権力者の地位から曳きずり降ろして、薩藩に頭をもたげさせようとする野望が露われていた。彼らは兵庫沖に碇泊中のパークスの艦を訪れて緊密に連絡をとった。

二十三日、老中阿部正外は英艦上でパークスや米蘭代表と会見した。ロッシュはこの席には姿を見せなかった。

「われわれが要求した三条項が聞いていただけるのならわれわれは長州戦争の賠償金を三分の一に減らしてもよろしい。

幕府のご意向を伺いたいのです」

とパークスが代表して述べた。

「されば幕府といたしましては兵庫開港に決して反対ではありませぬが条約勅許が陰謀に妨げられて未だ下りませぬ。幕府として開港を強行すれば陰謀派はそれを口実として騒ぎ立てるでありましょう。

何とぞいましばらくお待ち願いたい」

阿部は苦しげに言った。

「いま暫くとはどれくらいの期間ですか？　われわれと戦った長州藩や薩摩藩も今は非常に友好的です。あなたの言われることは納得できません」

パークスは冷たい微笑をうかべて言った。阿部が口に出した陰謀派というのが薩摩の連中を指していることも、幕府が天皇と外国との間に挟まれてぎゅうぎゅうと緊めつけられていることも――つまり阿部の訴えんとすることは既に百も承知だった。

彼はさらに皮肉な口調で続けた。

「日本の主権者は将軍ではありませんか。われわれはその主権者と交渉をしているのです。将軍が主権者である以上、条約を作り、それを守ることを国内に強いることができる筈です。もし、それができないならば、われわれは薩藩や長州藩と直接に交渉しなければなりません」

「……」

「しかも、聞くところによれば幕府は、そうした用意のある大名の貿易行為を邪魔しているそうですね。これは条約の破壊です。ロンドン覚書条項の不履行です」

激しい論難にあって阿部はほうほうの体で大坂に戻った。そして幕議は兵庫開港と決定した。

パークスは彼が使命とした三つの条項――条約勅許、兵庫開港、税率軽減――の最後の一項、改税約書の調印を幕府との間でとり交わすと、少し生じた余暇を利用して薩長訪問の旅

に出た。幕府がどんな嫌な顔をしようが、国内を自由に旅行できるのは外交官の特権であった。ロッシュが幕府に喰いこんでいる以上、薩長という賭け馬をしっかり摑んでおかねばならなかった。――

彼が西郷吉之助と会ったのは慶応二年六月十八日、英艦プリンセス・ロイヤル号上であった。

パークスは西郷を一目みて、これは容易に腹の底を見せない男に違いないと考えた。そこで彼は逆手を使った。

「やれ幕府がどうの、朝廷側がどうのと言ったところでわれわれから見れば一国内の紛争であります。だからこれは外国人の干渉すべきことではないのですよ」

西郷が、兵庫開港は幕府の詐術によってなされたものであり、日本の天皇も臣民も知らぬ間に協定されたのであるから国際的に認められる条約ではないのだ、と言ったとき、パークスはこう答えた。

「勅許などということもわれわれにはどうでもいいことです。要するに一国の主権者が条約を結び、それを守って実行してくれればいいのです」

大人物の西郷も外交的な手腕ではパークスの敵ではなかった。彼はパークスの誘導にひっかかって日本の国情を懸命に説き、幕府の失政を鋭く衝いた。パークスは西郷に喋らせるだけ喋らせておいて、

「御説ごもっともです。日本の政治を大藩の会議によって決定し、実行してゆこうというご

意見にも賛成です。しかし、われわれ外国人がそれを幕府に言い出すことは内政干渉となり却って悪い結果になりましょう。

わが輩が日本にきて驚いたことは、この国には主権者が二人いることです。天皇と将軍。そんな国は世界中どこにもありません。日本もただ一人の国王にすべきですよ」

と煽った。

パークスは薩藩から最上級の歓待をうけて長崎に引返した。

するとそこにはロッシュが苦りきった表情で待ちうけていた。

パークスは、幕府が英国と薩長の接近を怖れてロッシュに追跡させ、邪魔をしようとしていることを直ぐに見破った。

「徳川将軍が条約に調印してそれを実施しようとしているのに、その敵と見られている大名を訪問するのは少々軽はずみじゃあないか」

ロッシュは果してパークスの抜けがけを非難した。

「いやあ、わが輩は幕府と長州、薩摩との間がうまくいって感情的な対立が平和的に解決されるならば貿易に及ぼしている損害も解消できると考えて打診してみたのさ」

パークスはしゃあしゃあと答えた。

「じゃあ、君と一緒に長州藩を説得しようじゃあないか」

とロッシュは言った。

二人は表面協調した顔をして戦機をはらむ馬関を訪れ、長州側に和平の意志の有無を打診

した。

ロッシュは寛大な条件で長州に降伏をさせ、反抗を封じ、幕府に軍事力を蓄える時をかせがせたがっていた。パークスはロッシュの魂胆を見てとると絶対に幕府と対等の条件でなければ交渉に応じないようにと説いた。

長州は、だからロッシュの説得には応じなかった。

幕長戦争はパークスのあと押しで、そして彼が予想していたように長州側の勝利となり、将軍家茂が陣没するとうやむやのうちに休戦となった。

「そこまでは思い通りにいった。しかし慶喜が将軍職に就いてからは仏幕の結びつきは一層緊密となって、ロッシュは幕府の最高顧問のようにふるまった。

事実、幕政は改革され、軍事力は増大した。それなのに西郷や桂は慶喜ほどに素直になりきっていなかったよ」

パークスは芝生の上を歩きながらふと呟いた。

たしかに幕長戦争以後は失敗つづきだった。彼はロッシュにしてやられていた。

仏国の幕府に対する六百万ドルに上る借款契約が成立し、幕府が最も必要としている武器、軍需品の代価はこの中から引出される勘定になっていた。

慶喜が将軍となって四国代表を謁見しようとしたとき、パークスは、

「慶喜は日本の君主ではなく、首相並の者だから謁見する必要はない」

と反対した。ロッシュはこれに反対して、

「慶喜は新将軍である。将軍は日本の主権者でありわれわれはこれまでも幕府を相手として交渉してきたではないか。そうである以上われわれは将軍を無視することはできない」

と言った。米蘭公使までがロッシュに賛成した。

「しかし、将軍が日本の主権者であるか、天皇が主権者であるかは今日では大いに疑問のあるところだろう。もしわれわれが新将軍に謁見したとすれば、それは将軍が主権者であることを認めることになる」

パークスはなおも反対した。ロッシュとの間に激論が交されたが米蘭公使の説得でパークスは折れざるを得なかった。

「その代り、単なる儀礼的懇親に止まることなく、新将軍から兵庫開港の実行を確約してほしい。勅許が得られれば開港するという口約束でなく、いつから開くという確約だ」

とパークスは言った。西郷たちの運動で兵庫開港の勅許が出る筈のないことを彼は承知していた。

幕府は苦しまぎれに勅許をまたずして開港するだろう。それを口実として薩長は討幕の軍を起す。ロッシュのあと押しで幕府の軍事力が強大にならないうちに、それはやってしまわなければならない。

このことは薩長にとっても、パークスにとっても最後の切り札といえる。

だが、その最後の切り札も慶喜の果断な行動によってみごとにうっちゃられた。

慶喜は強引に勅許の沙汰書を得ると直ちにそのことをロッシュに報告した。長州の処分を寛大にして、その間に軍事力の増大をはかる。兵庫を開港して幕府と仏国とで貿易商社をつくり貿易を独占し、幕府の力を薩長と比べものにならぬほど強大なものに持ってゆこうというのが、ロッシュが幕府に示唆してきた方針であった。それだけにロッシュは躍り上って喜んだ。

パークスには得意満面なロッシュの笑顔が眼に見えて口惜しかった。

慶応三年二月、ロッシュが大坂城に慶喜を訪ねて、

「これからは私のことをフランス公使としてでなく、ただ日本の為を思う真実の外国人と思って下さい。御家来として何ごとも御相談遊ばされますよう」

と語ったということもやがてパークスに聞えてきた。

ロッシュは幕府の力を強めるために外様大名の権力を削り、譜代大名の家臣といえども有能な士はとりたてて親兵とし、無能な者は旗本でも帰農させ、むだな費用を省くがよいと進言した。また将軍は天皇から親任された天下の政事を委されているのだから陰謀家と朝廷の接触を遮断し、天皇や公家は尊敬されるが政事には与らない存在にすべきだと説いた。

「天皇のお許しがなければ何ごともできないという現状を打破することです。天下の統治は幕府がすることだと天皇を教育なさい」

ロッシュは進言した。

慶喜はロッシュの忠言を容れて内政を改め、陸海軍を整備し、財政制度の改革に着手した。ロッシュは幕府がいままで考え及ばなかった家屋や宅地や商業、船舶、酒、煙草、茶、生糸などに税を課して陸海軍建設の費用に充てることをすすめた。

「いまはひたすらに力を蓄積なさいませ。そして討伐するだけの力ができたら薩長の息の根をとめるのです。その時こそ寛大ではなく徹底的であるべきです」

慶喜が家康の再来として薩長はもとより天下の耳目をそばだてさせたのは、陰にあるロッシュの力であった。

しかも、西郷がサトウを通じてパークスに告げたところでは、幕府は借款の返済に日本の生糸や茶をもって充て、対日貿易の独占を仏国に許す方針だというのだった。

「このままに放置しておくならば十年を出ずして薩長は幕府軍のために掃滅されるでありましょう」

とサトウすらが憂わしげに告げるのだった。

それでいながら西郷たちは英国が本腰を入れて軍事力を貸そうとすることには警戒して、

「日本国内の紛争はわれら日本人でやります」

と婉曲に拒否してくるのだ。

「彼らは英国の力が日本を支配することを極力怖れている」

とパークスは日本人の用心ぶかさに呆れた。同時に幕府にあれだけに喰い込んでいるロッシュの辣腕に外交官としての一日の長を認めないわけにはいかなかった。

パークスはこのところずっと安眠していない。ロッシュにしてやられた口惜しさがもやもやと渦を巻いていた。幕府に貿易独占のための商社設立を抗議しても、幕府はロッシュの入れ知恵でのらりくらりと弁解を続けるだけであった。

ところが勝利は意外な方面から来た。仏本国に政情の激変が起ったのだ。ロッシュの行動を全面的に推進していた外相ドルーアンの後退で、ロッシュは日本の諺にいうところの〝木から落ちた猿〟になるだろう。

「今夜はよく眠れそうだ」

パークスはそう独り言をいって、またくすくすと笑った。

その夜から激しい嵐になった。雨と風とは窓をガタガタと鳴らし続けた。

夜半に眼をさましたパークスは、メイはどうしたかな、と思った。ベッドを降りてみたものの、この嵐の中では庭に出ることなど思いもよらなかった。

だからその晩もパークスは安眠できなかった。しかしそれはロッシュのためではなく、メイのためだった。

彼はロッシュはもっと眠れないでいるだろうと思うと可笑しさがこみあげてきて、またくすくすと笑い出し、しまいには声をたてて笑った。笑いは部屋の中を転げ回るように響き渡った。

暁方近くなって嵐は静まった。パークスはガウンをひっかけると庭に出た。明るくはないが、まっくらでもなく、庭面にとび散った木の枝や木の葉がはっきりと見えた。水たまりを

避けて彼は庭の隅の狐の檻に近づいていった。

メイは金網に立ち上り、網の間から鼻をつき出し、パークスが近づいてゆくと前足を出して彼の体をひき寄せようとして、クウクウと啼いた。

「おう、怖かったか。寂しかったんだね」

パークスは檻の前にしゃがんでメイの足を握った。メイがパークスに足を握らせるなどということは、これまでにないことだった。

嵐の不安から救われてやっとホッとして主人が心から慕わしくなったのだろう。パークスは庭番の老爺が二三日前に言った言葉を思い出した。

「檻の中に飼った獣は馴れが遅いといいますがの……たまには外に出して見るといいです」

しかし、メイは鎖も首環も嫌がって人間を近づけないのだ。

こんな時なら……パークスはメイがどんな反応を示すか見たかった。彼は立ち上り檻の戸を開いた。口笛を吹いて呼ぶとメイは犬のように走り寄ってパークスの足に絡みついた。

「そうだ、これだ」

パークスは思い当った。西郷や桂と自分は金網を通して話していたのではなかったか。相手を利用しながら欺されまいと警戒してつき合っていた。こちらの気持はそのまま相手に反映したに違いない。

「そして今は日本の嵐なのだ」

薩長にとってロッシュ政策の成功はたしかに嵐に違いない。西郷や大久保や桂も幕府の強

大化に不安と焦燥を覚えていることは間違いないのだ。こちらが戸を開いてやれば彼らはきっと近づいてくるに違いない。

仏特使クーレーとロッシュが江戸で幕府と結んだ借款に基づく貿易独占の協定はジャパン・タイムズのすっぱ抜きによって、パークスが企図した通り英議会の論議の対象となり、パリ駐在の英国大使は、これが事実であるかどうかをムーティエ新外相に糺した。ムーティエは狼狽した。彼はロッシュに幕府に深入りし過ぎてはならぬと詰問的訓令を発した。

ロッシュはこれに反論し、英国の新聞が書き立てたことで自国の公使を問責するとはなにごとであるかと憤りをぶちまけた。

しかしムーティエは他日反幕派が政権をとった場合に、極端な幕府支持はその報復をうけて、独り仏国のみがしめ出しを喰うであろうと怖れた。ムーティエはロッシュの幕府支持政策を否認して、パークスの線に協調することを厳命した。

ロッシュは最後まで自己の態度を改めなかったが本国に見放された彼はもはや単に幕府に忠実なる一老人――しかも外国の――に過ぎなかった。

徳川慶喜並に幕府が希望を以て企図した幕府再建工作は崩れた。

大政が奉還されたという報告がパークスの許に届くと彼は、

「ロッシュには気の毒な打撃だが、慶喜が主権者の地位を天皇に譲ったのは賢明だった。日本人はその危険をはらんだ政変を平和的方法でなしとげた」

と喜んだ。

しかし、彼が考えていたほど簡単ではなかった。西郷たちはあくまで徳川軍事力を破壊して、いつ勢力を盛り返すかも知れない危険人物の首を欲しがった。

鳥羽伏見の戦で幕軍が大敗して江戸に集結すると、それを追って官軍は北上してきた。

好戦的な小栗上野介に代って幕軍の立役者となった勝安房守は江戸でサトウに会ってパークスの意のあるところを糺した。そして勝はパークスが天皇政府の絶対支持者であるが、江戸の破壊や戦争を好んでいないことを知った。

サトウと勝との間でどのような話合がなされ、賢明な勝が薩長に多大の影響力のあるパークスにどのような働きかけをしたか、それを物語るには紙数がない。

ただ、江戸城総攻撃は決行前日になって突如中止され、江戸と慶喜の生命は救われた。

世上にはこれは勝と西郷の日本的な美挙として伝えられている。

だが三月十五日の江戸城総攻撃の二日前、官軍の先鋒参謀木梨精一郎は西郷の命をうけて横浜にパークスを訪れている。

江戸で戦争が起れば必然的に横浜に大きな影響を及ぼすであろうし、負傷者も多数生ずるに違いない。その時の援助をパークスに求めるためであった。

西郷は当然パークスが快諾してくれるものと考えていた。

木梨からこのことを耳にするとパークスは奇妙な笑い顔をした。彼には西郷吉之助の肥えた顔が、ようやく馴れてきた金眼銀眼の狐に見えてきた。

「それはなりませんぞ」
と激しい語調でパークスは言った。サトウが通訳した。
「なんと言わるる？」
「慶喜は既に恭順しています。恭順した軍隊や都市に一方的に攻撃を加え、殺戮破壊することは人道に反き、また国際公法においても厳重に禁じてあるところです」
「しかし……」
「まあ、お聞きなさい。それだけではなく江戸が灰になれば横浜も影響を受け貿易は混乱しましょう。
これはわが大英帝国だけでなく、アメリカもフランスもオランダも皆同様に望まぬところです。
どうしても江戸を攻撃するというのなら四国は兵を出して横浜を護り、日本兵の侵入を遮断せざるを得ない。
また慶喜にその希望があれば海外に亡命させるということもできましょう。それは国際法でも認めているところです」
木梨の報告をうけると西郷は愕然として暫く言葉もなかった。やがて、
「パークスの狐め！　相談をもちかけるんじゃあなかった。
西郷一代の失敗じゃ」

と吐息をついた。そして翌十四日、田町の薩摩屋敷で西郷、勝の歴史的会見はプログラム通りに進行した。

開化飛龍車

宇井無愁

宇井無愁（うい・むしゅう）
明治四十二（一九〇九）年、大阪生れ。劇作家、大阪新聞記者などを経て、昭和十三年、『ねずみ娘』でサンデー毎日大衆文芸賞を受賞。以降作家生活に入り、ユーモア小説作家として優れた資質を発揮。平成四年没。『きつね馬』『パチンコ人生』『日本人の笑い』等の著作がある。

大助車

どだいおもろない世の中になった。

御一新の、世直しのと騒ぎ立てて、どんなありがたい御時世がきてくれるのかと思えば、案に相違で、不景気風は一そうつめたく身にしみる。

だが——おもろないのは、飛久ひとりだけではない。大阪中が、まるで火の消えたようなさびれ方なのだ。世間の人気ががたりと落ちて、大店がどんどん倒れ、商売というものがさっぱりわやなのだ。

高麗橋の「飛久」といえば、相当の商いをしていた店なら、知らないものはなかった。手紙為替から、両掛荷物、人ひとりが担えるほどのものなら、一刻のうちにちょっくらちょいと西京へ届ける早飛脚で、「飛久」の名を売ったのである。

それが御一新以来、常得意の問屋筋がばたばたと倒れたあおりを食って、飛久の店もてんからひまになった。まだこの上にテレガラフとかいう針金だよりができて、十三里はなれた西京と、たった四半時で話ができる——ほんまか嘘か知らんが、そんなバテレンのようなも

のができてくれた日には、それこそあがったりというものだ。

早いが自慢で男を売った飛久、ここでさきざきの思惑を立て直さねばならぬ。転ぶか起るかの瀬戸ぎわだが、気ばっかり焦っても、何しろ変り方があんまり急だったので、これといういうよい思案も浮んでくれぬ。

五十に手がとどきそうになって、いまさら方途に迷うというのは何の因果か、御一新を恨んでみてもはじまらぬ。飛久は毎日憂鬱である。さりとて、がらんとした閑古鳥のなきそうな店先で、用もなく帳場格子のなかに坐っていてもますます気が滅入ってくるばかり。飛久はへちむつかしい顔をして、理由もなく女中、丁稚を叱りとばしている自分が、いやになってきた。

仕様ことなしにとび出したものの、どこへ行こうあてもない。今日は四月の八日、灌仏会だ。堀江のあみだ池へ行って植木市でもひやかしてやれと、足にまかせてやってきたが、お釈迦さんも相変らず無意味に天地を指しているだけで、飛久のゆくべき道を教えてくれそうにもない。

あみだ池の門前を長堀へぬけて川筋を東へ、四つ橋へやってきた飛久は、吉野屋橋の欄干に肘をついて途方にくれながら、芥をうかべて流れるともなく下ってゆく汚れた川の面を見おろした。

世間は春で、陽気はよし、川ぞいの柳にはうらうらと陽炎がもえて、材木浜では鳶仲仕が五六人で、悠長な唄をうたいながら、長い間かかってたった一本の丸太を剣鳶でひきあげている。家々の物干に立てたてんとう花の上には、鳶がゆうゆうと輪を描き、兜巾鈴懸の山上まいりの一行がほら貝をふきながら、街道筋を通ってゆく。飛久の気も知らず、表むきだけかも知らんが、世間はいたってのどかである。

彼は癇癪を立てて、水の上へペッと唾をはいた。その時、妙なものが彼の目にうつった——。

何というものか、みたこともないおかしげなものだ。往還の人通りの上に、ずぬけて高い天蓋のようなものが二つ、ひょうひょうと宙をとんでくるのだ。よくみると、その天蓋の下に無性にすましこんだ男の顔がならんでいる。飛久は好奇心にかられて、この奇態なものをもっとよく見定めようと、橋のたもとへとってかえした。

だが、この奇妙なものに目をうばわれたのは、無論飛久ひとりではない。往来の人通りが一せいに足をとめて、この妙な天蓋のそばへあつまり出した。天蓋はその人群れをかきわけるようにして、人夫に曳かれながら、やがて飛久の目の前に現れた。

それは、大八車の上に西洋腰掛をとりつけたような、一種の乗りものであった。前の車には山高シャッポンに羽織袴の官員がそりかえり、後の車には、当世風のジャンギリに刈った商人態の男がのって、二人は天蓋の下でさも天下泰平に、悠然と白扇を動かしているのだ。

車を曳いているのはねじ鉢巻の人夫である。駕籠とちがって、一人で楽々と一台の車が曳ける——飛久は思わず膝をたたいた。

「こら、うまいことを考えよったわい！」

群衆は一ように目をみはって、ぞろぞろと車のあとからついて歩き出した。飛久はしばらくその車を見送っていたが、突然くるりと裾をまくった。それからぬいだ雪駄を帯のうしろへはさんで裸足になったかと思うと、一目散に車のあとを追って駆け出した。

妙な車は、今日もまた堺筋へあらわれた。が、後の車にのったのは、昨日と同じ商人風の男であるが、前の車には——今日はなんと、飛久がのっている。

商人風の男はこの車の持主で名前を指田といった。商用で上京した時、日本橋の高札場の前で、はじめてこの奇態な車をみたのである。めずらしもん好きの彼はこの車を大阪へ土産に買ってかえることを思いついた。

一台二十両という高価な東京土産は、しかし大阪へかえるなりその値段に値するだけの評判をまき起した。指田は鼻が高かった。彼は毎日、知人をのせて大阪中をねり歩き、得意になっていた。昨日車のあとを追ってきた見も知らぬ飛久まで、乞われるままに、さあさあどうぞとのせてやるほど、この車が自慢なのである。

もの見高い群衆は、今日もわいわいと車のあとからついてきたが、車上の飛久はじっと腕ぐみをしたまま、群衆のひやかしや笑声など一こう気にもとめぬ様子であった。彼はまるでほかのことを考えていた。

指田の自慢ばなしを何食わぬ顔で聞いているうちに、彼はようやく希望の光を見出したように感じたのである——よし、東京へ行ってこましたろ！

彼は心ひそかに決心した。のるかそるかどう廻るか、ともかくも俺の運をこの車の輪にまかせよう。そして、兵庫から横浜行きの蒸汽船にのったのが、明治三年四月末のことであった。

日本橋茅場町の下総屋へ宿をとった飛久は、東京ではすでにその頃「御免」の二字をかかげた人力車が、旧弊な辻駕籠を圧倒し去っている景況をまのあたりにみた。飛久が、自分の運命を好転させるものは、この車をおいてもはやほかにはないと思いこんだのも、けっして無理ではなかった。

が、よくしらべてゆくうちに、この景気のよさは、飛久にとってはかえって幸先のよくないものであることがわかり出した。というのは、すでに先月末、この車の発案者三人に対して官許が下り、総行司を仰せつけられて、組合まできまってしまったあとで、いまではもう横あいから割りこんでゆくような余地などはまったくなかったのである。

飛久の上京は、わずかに遅かったのだ。

下総屋の主人助三郎から、そういう事情を聞かされた飛久の落胆は、はたのみる目も気の毒なくらいであった。

「しもうたことをした。もう一足早かったら……」

いってみてもあとの祭で、よくよく運勢に見はなされたものだとがっかりした飛久が、あきらめきれずに床柱にもたれ、思案にくれていると、襖の外で、

「御免下さいまし」

案内を乞う声がする。はいってきたのは、下総屋の伜で大助という二十四五の男であった。

「ほかじゃございません。親父から聞きますと、旦那はいま流行の御免人力車に目をおつけになって、わざわざ大阪からおいでになったそうでございますが、実はそのことにつきまして、ちょっと旦那に御相談申し上げたいことがございますんですが……」

「ほう、それはそれは。ま、どうぞこっちへはいっとくれやす。で、相談とおっしゃるのは？」

「もし旦那がですね、私と手を組んでやっておくんなさるなら、私にうまい工夫があるんでございますがねえ」

飛久の顔色をうかがいながら、大助は膝をすすめてきた。

大助のいうところは、こうだ——なるほど、御免人力車は大した人気である。が、東京人の正直な腹のうちをいえば、実際便利なことは十分認めながらも、内心では躊躇してのりたがらない者が多い。なぜかといえば、要するに外観が無体裁だからだ。口の悪い江戸ッ子は、あれをいざり車だといっている。いざり車で、まさか仲へくりこむわけにもいかねえと、そういう。

そこで、いざり車を東京人向きに恰好よく作りかえ、乗心地もよくして、雨がふっても何がふってもぬれっこない工夫をすればどうだろうか。現在の人力車よりももっといいものを工夫して作り上げるのだから、お上も総行司も一言半句文句をいうところはあるまい。

では、どんな工夫をするか——それは大助の胸にある。ただ残念なことに、大助にはそれを具体化するだけの資力がない。相談というのはそこだった。

「なるほど」

と、飛久は手をうった。

大助の工夫というのは、ただの大八車に西洋腰掛をとりつけたような人力車を、一めん漆ぬりにして、極彩色の蒔絵をほどこす。それから雨よけの幌をとりつける。ただそれだけのことだった。

こんな何でもない思いつきに、なぜいままで気がつかなんだのであろう。飛久はこのぬけ目のない若者の顔をみながら、後悔してみたり感心したりした。

大助の工夫に飛久が資本を提供する——話は即座にまとまった。これでこそ飛久も、わざわざ大阪からやってきた甲斐があったというものだ。

親子ほど年のちがった共働者は、翌日からさっそく活動をはじめた。まず、尾張町にあき店をみつけて大助名義で店を借り、組立て職人と漆ぬり職人を入れて、ただちに新型人力車の製造にとりかかった。試作的につくった最初の十輛ができ上ると、成功間違いなしと見込みをつけた飛久は、そのうち三輛を大阪へもちかえるべく、とるものもとりあえず横浜から蒸汽船にのりこんだ。

一輛には紅白の牡丹、一輛には松に日の出、もう一輛には昇天の龍を描いた蒔絵ぬりの車を、以前から出入の足のたっしゃな飛脚人足が曳くのである。久しぶりに仕事にありついた喜びだけでなく、みんなはこの綺麗な車を曳いて走るのが、いかにもうれしそうだった。

彼らはこの新しい仕事に感激して、誰も彼も精を出した。おかげで飛久は、逼塞のどたん場でようやく浮かび上ることができたが、たった三輛の車では何しろ廻しきれない。大助改良の車は、東京でもはたして大した評判となり、注文殺到のため、飛久からの追加を間に合わせるのがやっとのことであった。それでも年の暮までには、約五十輛の蒔絵車が飛久の店先にずらりとそろった。

出入の人足をのこらず車夫にしても、まだ車があまる。あまった車は、人力車に圧倒された辻駕籠かきで車夫に転向した者に貸す。貸は笠ケットつき一日五銭。十二月には府令をもって「御免」の二字を許され、飛久は店頭に「東京銀座尾張町秋葉大助支店」の看板をかかげて、大助車の一手販売権をにぎったのである。

韋駄天の吉五郎

三十石で京へ上るには、まる一日かかる。明治四年に川蒸気ができて、ゴヘダの煙をはき、舳のフラフを川風にはためかせながら、勢いよく外輪で水をけって走り出した。それでも上り船は八軒家から伏見まで約八時間かかった。

飛久の子飼いで、韋駄天と名をとった吉五郎は、高麗橋から京まで一刻で走る。往きしもどり四時間、「三度」の名の通り、日の長い時分なら京大阪を一日に三往復するくらい、屁のかっぱだった。

車を曳かせても、吉五郎は依然としてこのレコードを保持した。むしろ空手の時よりも、車を曳いて走った方がはずみがついて楽なくらいだった。

彼は枚方から八幡まで、川蒸気と競走したことがある。川蒸気は何を生意気なとばかり、勿体ないのにゴヘダを奮発してまっ黒な煙をモクモクとはきながら、一生懸命に波を蹴たてたが、川底の浅い淀川で外輪船の全能力を発揮することは困難だった。堤の上の吉五郎は、楽々と川蒸気をひき離した。おかげで車上の客は、早打にのせられたような目にあわされはしたが、それでも小気味よがってへどを吐きそうな顔で川蒸気をふりかえりながら、

「へヘン、ざまみされ！」

と吉五郎を声援した。

飛久の店にとっては大事な吉五郎だから、文字一つよめない男でも、ときどきは主人の相談にもあずかる。実は、飛久にとってちょっと心配なことができたのだ——

飛久は吉五郎を店先へよんで、東京の秋葉大助からとどいた手紙をよんで聞かせた。

——去る五月より当地にては品川横浜の間に鉄道相通じ蒸汽車もってのほかの評判にて、高輪より八つ山にかけ見物の群衆おびただしく非常なる賑に御座候　右蒸汽車は一日二回品川継立所を発し、五十三分にて横浜に達する由にて、賃金は片道上等一円五十銭、中等一円、下等五十銭、手廻り荷物は三十斤まで二十五銭、六十斤まで五十銭の定めにて殊のほか重宝致居候　来年は汐留まで開通可相成追々盛大の様子にも相見え……

蒸汽車というものをまだ見たことがないであろう飛久のために、大助は親切にも極彩色の

一枚絵をそえていた。

飛久は東京を発つ時、八つ山下から大森へかけて道普請がはじまっていたことを思い出した。大阪へ着くと、大阪でも梅田の墓地をとりはらって、同じような普請をやっている。レーロとやらの鉄の棒の上をどんなものが走るのやら想像もつかなかったが、いま、大助の送ってくれた絵で多少合点が行くように思った。それは、八つ目鰻に雁首をすげたような、阿呆らしいほど長い車であった。

東京横浜七里の道中を五十三分で走る。なら、京大阪十三里を一刻で走る吉五郎と、まずはどっこいどっこいのしろものではないか。ただ、こっちは一人しか客が運べないのにひきくらべ、蒸汽車は五六軒の家を一ぺんに引っぱって走る。そこが開化といえばいえよう。

「どうや、吉公」

親方にいわれて、この極彩色のけったいな車の絵を長い間みつめていた吉五郎は、やがて額の汗をふいた。

「安心しとくれやす、親方。たかが一人の客をのせて走るのじゃ、こないな妙な車に負けやいたしまへん」

彼は自信ありげにむき直った。

「まあ、考えてもごろうじ。こないに仰山な車をひっぱって、あたずぼらな、たとい小半刻に七里の道が走れたにもせよ、それから先いきのつづく道理がない。初手は立ちおくれても、十里先から追いぬくのは屁のかっぱでごわすわいな」

「それもそうじゃな」

飛久も少々自信をとりもどしたが、飛久の蒸汽車に対する関心は、たえず念頭をはなれなかった。それはおのれの敵を知ることである。大助がつづいて送ってくれた「東京開化繁昌誌」のなかに、次のような文句をよんだ時には、正直ギョッとした。

「夫レ横浜ノ如キ僅カ五十三分ヲ費スノミ。痔人ノ厠ヲ出ルヨリ速ナリ。開化知ルベシ、繁昌想フベシ。朝ニ東京ヲ出テ大坂ニ至リ、北新地ニ遊デ一興ヲ買ヒ、夕ニ此車ニ駕シテ東京ニ帰リ、阿爺ヲ欺ヒテ唯今只帰ルトスルガ如何、嗚呼速ニ如此為シ得ンコトヲ。廟議既ニ如此ニ為サントス」

次へよみ進んで、飛久はようやく胸をなでおろした――

「大蔵独抗シテ不可トナス、蓋シ費用ニ乏シキヲ以テ也」

だが、七年の五月には、いよいよ阪神間の鉄道仮営業が開始されたのである。

飛久の杞憂は、もはや単なる杞憂ではすまなかった。岡蒸汽の前景気は大したもので、大助車出現当時の比ではない。

一めん草蓬々たる湿地に墓と畑しかなかった曾根崎村の一角が、立派に埋め立てられて木造の仮ステン所が建った。いま、その東隣に普請中の煉瓦造りの西洋館は、やがて鉄道が西京までのびたあかつきには、本ステン所になる訳だ。仮ステン所の屋根には日の丸のフラフがへんぽんとひるがえり、前の広場には植木がおんごくのようにならんで、蜆川を渡って渡辺橋へつづく新道も開かれた。木柵のなかには、二本のレーロが西へのびてはるか中津川の

堤までつづいている。この上を岡蒸汽は、一時間と十分で神戸まで走るというのだ。

だが、吉五郎ならまちがいなしに、小半刻で走るであろう。ただ競争にならないのは、上等一円、中等六十銭、下等三十銭という岡蒸汽の賃銀である。政府お定めの車賃の勘定でゆけば、神戸まで三十銭で走れぬことはないが、車には祝儀というものがついている。三銭丁場でも場所と客次第では、十銭二十銭の祝儀がつく。それで車曳きの暮しが立ってゆくのだが、それなら祝儀のいらぬ岡蒸汽と、何をもって張りあうか？――

五月十一日開業の岡蒸汽は、当分はお上の官員にかぎり、一般衆庶は十二月からでなければ乗せないという。この半年の間に、大車輪で確実な車客の得意をつかんでおかねばならぬ。飛久は、またもや吉五郎をよんだ。

「近々に走るちゅう岡蒸汽は、神戸まで半刻と十分で走るちゅうこっちゃぜ」

「あんまり早いこともごわへんな」

「そうか。お前はんがそういうてくれたら、わしも安心じゃ。どうや吉公、一ぺん岡蒸汽と走りくらべしてみんか」

「おもろい。やりまひょう」

「やるか」

「やります」

「けど、相手は川蒸汽とちごうて陸の上を走りよるのやぜ」

「ゴヘダで走るもんなら、川蒸汽かて岡蒸汽かて、そないに違やいたしまへんやろ。大がい

知れたある」

「よし、そんなら先曳き後おしは誰がよかろ。誰ぞお前はんと気合のあう相手は？」

「ひとりで結構でごわす。たかが岡蒸汽、大の男が三人もみっともないがな、親方」

「お前はんは岡蒸汽ちゅうもんを知らんさかい――そういうわしかてみたことはないけども、大がい話にも聞いている。何しろ、大そうもない勢いのもんらしいぜ」

「親方、車ちゅうもんは、勢いだけで走れるもんやごわへんぜ。初手から勢いのええ奴にかぎってえてじっきに辛度がりよる」

「うん、そこもあるな」

「それで、車には誰をのせますのや」

「わしがのる」

「親方が……」

「まあ、ちょっとこれをみい」

かけ硯のひき出しから出した一枚の草稿――

「これをチラシにして、鉄道の開業式の日に、車の上からわしが撒いてあるく」

「どういうことが書いてごわすね」

「読んでみよう――浪花御町中は申に及バず色里はじめはしばしまで流行なす大助車、ただお引立をたよりにて値段をはたらくその上に、夏はすずしき団扇を添物寒さの節ハ何がなとほこほこぬくき物をさし上、尤も引人ハ男をえらミ疾きことハ乗て御覧のその上にて御用向

の程偏ニ奉願上候御ひいきを引て車のまハりよく、客もあたいもかるくのせ升」
「なるほど。しかしなあ親方、そないにしてまで客の御機嫌をとらいでものこと、立派に岡蒸汽を負かしてみせますわいな」
「まあまあ、そこはわしにまかしとき。それからなあ、無理ついでにもう一つ、お前はんにたのみがあるのや。ほかやないが、お玉はんを一日わしに貸しておくれやないか」
「お玉を？　どないしやはります」
「ま、ちょっと耳を貸し」
飛久の岡蒸汽対抗策は相当周到だった。
「そらまあ、うちのお玉でもお役に立つことなら、ちょっとも構やいたしまへん。何どきなりと……」
「そらありがたい。実はな、お玉はんが貸してもらえるもんとひとり合点できめて支度はちゃんとしてあるのや」
女中をよんでもって来させたのは、目のさめるような振袖の一かさねである。
「身丈が揃わなんだら、夜なべさせても直させる。まあもっていんで着せてみて」
「さいでござりますか。いえもうこんなええべべ着せてもらうのはあれも生れてはじめて、さぞよろこぶことでござりまっしゃろ」
五年前に女房に死なれてからは、十八になる娘のお玉と親一人子一人の長屋住居、その日暮しの貧乏世帯では、娘に晴着の一枚も買ってやれぬのが吉五郎の苦労の種であった。

走ることにおいてはひけをとらぬ吉五郎、思いがけない娘の晴着をかかえて、嫁入り支度でもできたかのようにとぶがごとく長屋へかけもどってきた。

開通式

仮ステン所前の広場は、岡蒸汽見物の群衆でまだ夜のくらいうちから埋められた。近くは池田、伊丹、堺、天王寺、遠くは京、紀州あたりから、わざわざ泊りがけでやってきた見物もある。
広場はフラフと提灯ではなやかにかざり立てられ、地下の曾根崎村からくり出しただんじりが、チャンチキチャンチキとたえまなく囃立てる。レーロの木柵にそうてズラリと店屋がならび、甘酒にぜんざい、遠出の客にはかやくめしかす汁、ことにめずらしい川口十八番のポン水（ラムネ）がとぶように売れる。
仮ステン所のなかは、紫の幔幕がはりめぐらされて外からはよくみえないが、マンテル、ズボンの官員や羽織袴の役人が、何人もせわしそうに行ったり来たりしている。
やがて花火が上り出した。晴れた空高く、パッと二つに割れる白い煙のなかから、小さな蝙蝠傘や日の丸のフラフが、群衆の頭上にゆらゆらとただよいながら、ゆっくりと舞いおりてくる。
開通最初の蒸汽車が神戸にむかって発車する予定の時刻は午前十時だというのに、見物は

気が永い。六甲能勢の山々にかかった靄がようやく晴れて、梅雨空にはめずらしい明るい太陽がカッと照り出したころから、もう見物の群は木柵の前に黒山をきずいて、ひしめきながら岡蒸汽の発車をいまかいまかと待ちかまえている。

「まだ出まへんか、岡蒸汽は」

「まだらしごわすな」

「私は今朝夜のひきあけから来て待ってますのんや。店の用事が仰山につかえたあるのんで、早よいんで片づけんならんのに、途方ない気の永いこっちゃな」

「そないにおっしゃったかて、岡蒸汽は時刻が来な出まへんぜ」

「えろう難儀なもんやなあ。あんさん。みはったことごわすか」

「ごわへんね。川蒸汽みたいなもんとちがいますやろが。さっぱり見当がつかん」

構内入口には車止めをして、官員が三四人で立番をしていた。荷馬車や牛車を群衆のなかへ曳き入れないためである。それに岡蒸汽が動き出すと、このような奇怪な動物をみた経験のない牛や馬が、恐怖を感じてあばれ出すおそれがあった。現に東京大森附近では、蒸汽車の通過する沿線の農家の牛がことごとく仰天して、一せいに汽車と一しょに走り出した事件があった。それで前日から、神戸までの沿線の村々にふれを出して、蒸汽車通過時刻には牛馬をレーロに近づけないようにいい渡してあったのである。

そうとも知らず、新たに開通した駅前道路を渡辺橋の方角から、まっしぐらに駆けつけてくる異様な車がみえ出した。

児雷也に滝夜叉姫、極彩色の蒔絵をほどこした車の上には、「東京秋葉大助支店高麗橋飛久」の大のぼりをおし立て、山高シャッポンに羽織袴の飛久が傲然とそりかえっているのだ。梶棒をにぎったのは、紺の匂いも新しい股引法被に、豆しぼりの鉢巻をキリッとしめた韋駄天の吉五郎後おし三人をしたがえて、先曳きの綱にこれはまた、姉さんかぶりに振袖のたもとをたすきにとり、からげた裾から派手な長襦袢をのぞかせた娘のお玉、一行六人がハイヨーと威勢よく、広場の群衆のなかへそのままのり入れんばかりの鼻いきで駈けつけて来た。

驚いたのは立番官員である。両手をひろげて車止の前に立ちふさがり、

「こらこら、どこへ行くか」

「へーい！」

ぐっと踵をふみしめて、車は縄張りの一歩手前でみごとにくいとまった。

「この車止が目に入らんのか。見物なら車を下りて入れ」

なにくそ、負けてたまるもんかと、初手から殺気立っている吉五郎、相手が官員でも負けてはいない。こんなどじょう髭にへいこらいうてて車曳きができるもんかと、はや喧嘩腰で、

「見物やごわへん、競走じゃ」

「競走？　競走とは何かい」

「競走を知らんのんか、お前はんは。どじょう髭生やしてみっともない、三つ子でも知ってるぜ。これからこの車と岡蒸汽と走りくらべをしようちゅうのんや。さあ、そこどいてくれや」

「こいつ、途方もないことを吐かしよる」
官員たちは、怒るまえに腹をかかえて笑い出した。
「気ちがいかい、この男は」
「何じゃ、気ちがい？　気ちがいとはおのれ、ようぬかしたな」
「馬鹿なことをいわんと、早くかえれ、かえれ！」
「大の男がこうして五人もそろうてやって来たのじゃ。いまさらおめおめとかえれるかい」
「お前たちは、岡蒸汽ちゅうものを知らんとそんなことをいいよるが、蒸汽車は一時間と十分で神戸まで走るのじゃぞ。よいか」
「ええとも。わしは半時で走ってみせる」
「わハハ……こらやっぱり気ちがいじゃ」
父親を気ちがいと罵られて、お玉は憤然と前へすすみ出た。
「お父つぁんを気ちがいとは何でんね」
「おい、こら女の気ちがいまで揃うていよるぞ。わハハ……」
「吉公、すまんけど下ろしてんか」
飛久は梶棒をおろさせて蹴込からおりた。
発車を待ちかねて退屈しきっていた群衆は、飛久一行の異様な風態に目をひかれて、彼らのまわりへ集まってきた。岡蒸汽と大助車の走りくらべ、そらおもろい、やれやれと口々に吉五郎を声援する。

飛久が車からおりて、立番の官員にていねいに挨拶をしたとき、官員の間から上役らしいのが二人すすみ出て、どうしたのだと立番の者に聞いた。彼は笑いながら飛久にむき直った。
「本官はお前たちが岡蒸汽と競走をしようちゅうのをとめるんじゃない。それはお前たちの勝手だ。大いにやれい。ハハハ……ただ、場所が混雑するによって、このなかへ車をのり入れてはいかんととめたのだ。なかへ入りたければ車をおりてはいれ。競走をするならば車をこのさきの堤の下へまわしてそこで待っているがよい」
「ようわかりました。ありがとうさんで……吉公、そんなら車をむこうの堤へ廻しておくれ」
「へい」
しぶしぶ梶棒をあげて行こうとする時、
「おい、ちょっと待て」
と後の官員がよびとめた。
「その女子も競走の仲間か」
「へい、車を曳いておりますこの男の娘で。親父のあとから走れるところまで走るというております」
飛久が答えると彼はうなずいて、
「それは感心だ。よろしい、行け」
まったく感心したのか呆れたのか、上役はお玉の後姿をそのまま見送っている。

あつまった群衆のなかへ、大助車のチラシをまいてやろうと思った飛久の目算ははずれたが、これだけ人目をひいたことだけでも、目的の半ばは達せられたと思ってよいだろう。

現に物見高い見物は、岡蒸汽の開通にいっそうの感興をそえる大助車との競走をみようとして、ぞくぞくと車のあとからついてきた。

間もなく発車を知らせる鐘の音がカランカランと仮ステン所のなかから聞え出した。群衆はぴたりと静まり、レーロの外の木柵にめじろ押しにならんで、いく千いく万の目が黒い煙の立ち上っているステン所のなかにそそがれた。だんじり囃子はここをせんどと囃し立て、出発合図の花火がつづけさまに群衆の頭上で散った。

堤の下では、飛久をのせた車が競走相手の出場を待っている。先曳きの綱は三人の車夫にふりかえられ、お玉は車のあとにつき添うて、草鞋の紐を結びなおす。吉五郎は無言できっと梶棒をにぎりしめた。

やがてまっ黒な鉄の蒸汽車は白い湯気をはきながら、ゆっくりステン所の建物からレーロの上にすべり出した。

はじめてみる岡蒸汽に、見物は一せいにわーっと歓声をあげた。

まっさきに、汽缶のついた小さな函のなかでゴヘダを焚いている紅毛碧眼の異人が、彼らの目の前を横ぎった。つづいて青い色にぬられた無数の窓が、そうしてその窓からのぞいているいろいろな顔が、風のようにとおりすぎる。まるで長い板塀のように、すっかり眩惑されてしまった見物の目をかすめて通りすぎた。

「さあ、来たぞ」

堤の下で発車を待っていた吉五郎の目にも、それは人をのむうわばみのようなもの凄まじい姿にみえた。好奇心よりもまずはげしい敵愾心が夢中で彼の足を駆り立てた。

「くそ負けるものか、おのれ！」

吉五郎の足は宙をとぶように地面を蹴った。先曳きの三人は、吉五郎のはげしい息づかいにうしろから追い立てられて、逃げるように走った。飛久は無我夢中で肘かけを両手でぐっと握ったまま、背後に近づいてくる岡蒸汽の轟音を聞いた。

はじめのうち、岡蒸汽の速力は思いのほかのろかった。飛久一行の車は悠々とこれをひきはなして、約一町以上のへだたりをおきながら進んでいた。が、中津川の堤にさしかかる頃から岡蒸汽は俄然速力を加えはじめた。

それだけではない。飛久も吉五郎も、自分たちの犯した最大の誤算に気がつきはじめた。彼らはこの時まで、岡蒸汽のレーロというものが従来の街道筋とは何のかかわりもなく、最短距離をえらんで川でも田でもおかまいなしに、傍若無人にまっしぐらにつきすすんでいることを知らなかったのである。それにくらべて飛久一行の車は、曲りくねった中国街道を非常なまわり道をしながら走らねばならなかった。

中津川をはなれ神崎川に近づくまで、岡蒸汽も車も青々とのびた麦畑と桑畑の間をぬって走った。六甲の山々はようやく眉に迫り、空には雲雀がさえずっている。目をひるがえせば、左のかたにもやにかすんだ淡路島もみえたかも知れない。が、飛久一行はそれどころではな

かった。岡蒸汽はやっきとなって黒煙を吐き、濛々と砂ぼこりを舞いあげた。

神崎川をすぎる頃には、岡蒸汽はすでに三町以上も車をひきはなしていた。（しょせん、こいつに勝つことはおぼつかない）——飛久は車上でそう思った。彼は自分たちの犯した誤算が、とりかえしのつかないものであることを覚った。これ以上競走しても無駄である。

「吉公、もうええ。立派に負けじゃい」

車をとめようとして彼はそういったが、吉五郎は耳をかそうともしない。

「なんの親方、勝負はこれからじゃ」

迂回による損失をとりもどそうとして、吉五郎はやっきとなった。血走った彼の眼には、白い街道のほかにはもう何も映らなかった。先曳きの三人はとり残されて、倒れそうになったお玉を介抱しながら車のあとを追ってきた。

飛久は大波のようにゆれる車の上で、観念の眼を閉じた。どうせこの男は倒れるまでは停るまい。気の毒だが、それまで黙って走らせておくより仕方がないとあきらめていた。

レーロと並行せぬ街道では屢々岡蒸汽の進行を見失い、そのたびに吉五郎はあせった。そうした気のあせりと胸をやく敵愾心とが、吉五郎の心身を不必要に困憊させたにちがいない。武庫川の堤に近づいた時、乱れかかった彼の足並はわずかな石に平衡を失って、梶棒をにぎったままつんのめった。そうして蛙のように、街道の上に昏倒してしまった。

飛久は車上から投げ出された。が、すでに心のうちで用意のできていた彼は、大した怪我もしなかった。すぐに吉五郎を近くの百姓家へかつぎこみ、手当をしながら娘たちの追いつ

くのを待った。

間もなく吉五郎は意識をとりもどした。彼は自分が見知らぬ家の寝床に寝かされ、そうして不安そうに自分をとりまいている人々の表情に気がつくと、徐々にいま自分がどうした立場にいるかを覚ってきた。負けたのだ、不覚にも岡蒸汽におくれをとったのだ……

彼はいきなり寝床の上へ起き上ろうとしたが、体がいうことをきいてくれなかった。はげしい疲労のために、体中の骨という骨がこなごなにくだけそうだった。

「じっとして、じっとして。ええか」

飛久の声を聞くと、彼ははずかしさにたえられなかった。

「親方！　すまん！」

「ええわい！　何にも考えるな」

「いや、こうしてはいられん。まだ負けたんやない。親方！　わしはもう一ぺん……」

いきなり立上ろうとしかけたが、

「阿呆、どこへ行く」

ひきすえられたなり、吉五郎はふたたび昏睡状態に陥った。

眠っている吉五郎を車にのせ、お玉がつき添うて、高麗橋の飛久の店へかつぎこんでからも、彼はずっと昏睡状態をつづけ、ようやく夕刻になってから、眠りからさめたように目を開いた。

「お、岡蒸汽は？……」

彼は枕もとにいた先曳きの一人に聞いた。

「吉やん、安心せい。岡蒸汽もな、吉やんと競走してよっぽどしんどかったかして、さきほどな、体中汗みずくになってハアハアいいながら神戸からもどって来よったぜ」

「そうか、汗をかいてな……ふふん」

吉五郎は床の中でニッと笑った。

一刻京上りの記録保持者、淀川の川蒸汽を悠々とひき離した吉五郎も、岡蒸汽にはみじめな惨敗を喫した。どだいが無茶な話と、人はいうだろうが、韋駄天と名をとった吉五郎にはこれはぬぐうべからざる恥辱である。飛久のどんな慰めの言葉にも、意気銷沈の態たらくであったのも無理はない。

吉五郎は元気を回復しても、以前のように店へ出て車を曳こうとはしなかった。体よりも、彼の自負心が無惨にうちひしがれてしまったのだ。そういうある日、飛久の店さきを訪れた一人の官員がある。飛久は思い出した。それがあの日、車止の前で彼らの一行をさとした上役であったことを。

「突然で迷惑とは存じたが、折入ってこなたに頼みたいことがあってきました」

丁寧な挨拶である。そして自分は高知県の士族で、いまは長堀の旧藩邸内の長屋でひとり住いをしているといって、鰹節を手土産にさし出した。飛久は呆気にとられていた。

何はともあれ奥座敷へ通して、一刻ばかりたって官員がかえると、飛久はその同じ座敷へ入れちがいに吉五郎をよびつけた。

「ほかやないが、お玉はんももう年頃や」

「へい……」

と、吉五郎はへんな顔をした。

「わしにちとあてがあるのやが、どうや、嫁にやる気はないか」

「そらもう、ええとこさえあればいつ何時なりと……」

「そうか。実はちと釣りあわん縁やけど、先さんが強っての御所望でな、いえばお前はんもまんざら知らんお方やない。ほら、いつやらの官員さん」

「め、滅相もない。そら途方もない話や」

吉五郎は目を白黒させた。

「釣りあわんことはようわかったある。が、御一新このかた四海平等の世の中、そんな旧弊なことをいうてる時やない。親父をたすけて、どうでも岡蒸汽に勝たせようちゅう娘の心意気に惚れたと、こうじゃ」

「また、妙なとこに惚れよったな」

「しかし吉公。かりにこの縁がまとまったとすれば、お前はん岡蒸汽に負けて、実は勝ったことになるぜ」

「……」

「悪いようにはせん、わしにまかしとき」

あんまり話がうますぎて、気のりのせぬ吉五郎をそっちどけに、飛久がひとりで万事を運

んで漸く婚礼とまでこぎつけたのである。

関西鉄道局二等官山辺靖介の長屋の奥の間で、その夜新郎とならんだ娘お玉の花嫁姿をみると、頑固な吉五郎の胸にも何かいいようのないうれしさが湧き上ってきた。盃がすむと、彼はいつになくわずかな酒に上機嫌になって、めずらしく都々逸をやろうといった。そして低い声でうたい出した——恋の重荷を車にのせて、胸で火をたく岡蒸汽——と。

編者解説

縄田一男

〈時代小説の楽しみ〉の第十二巻は『波濤風雲録』と題して、島国として海外の文化との接触によって歴史の転機を迎えてきたわが国にふさわしく、海の日本史、或いは異文化との接触をテーマとした作品を集めてみた。実際、海というのは、日本の歴史を考える上でのキー・ポイントであり、後に名著『鎖国』を著す和辻哲郎が、中学時代の日記『初旅の記』で既にこの問題に言及していたり、「船の中」と題する海洋小説もどきの作品をものしたりしているのは、誠に興味深いことといえそうだ。

しかし、時代小説では、白石一郎のように一貫して海洋ものを取り挙げる作家がいたものの、そうした傾向の作品は決して多かったとはいえない。かつては後に触れる長谷川伸の作品の他、角田喜久雄の『朱印船系図』や村上元三の『八幡船』といった伝奇性豊かなもの、あるいは南條範夫の『海賊商人』や城山三郎の『黄金の日日』、そして早乙女貢や平岩弓枝の一部の作品があるくらいのものだった。前述の白石一郎の作品や隆慶一郎の『見知らぬ海へ』、津本陽の『天翔ける倭寇』等によってこのジャンルが注目されて来たのは、ごく最近のことなのである。その意味で本書収録の作品は、それらの先駆ともいえるかもしれない。

南條範夫の「燈台鬼」は、遣唐使として唐に渡ったまま行方不明となった父を捜すべく、彼の地に赴いた道麻呂が、〝人間燭台〟となった変わり果てた父と出会う物語である。第三十五回直木賞を受賞した作者の出世作であり、〝人間燭台〟の凄惨な描写ゆえ、この作品を作者の残酷ものの原点として捉えることも可能だが、故国を前に海中に没した石根の心境に涙すべきであろう。作者の言によれば、この作品は、学生の頃に読んだ平康頼の「宝物集」という説話中の物語で、「源平盛衰記」にも引用されているとのこと。内容は、ほんの六、七行くらいのもので、主人公の名は軽大臣となっている。むろん軽大臣という人物は存在せず、遣唐使で父子で使節となっているのは小野石根・道麻呂のみなので、彼らを主人公にしてこの作品を書いたのだという。本書の巻頭を飾るにふさわしい海の秘史である。

新田次郎の「元寇秘話」は、原題を「謀略元寇の役」といい、いわゆる蒙古襲来を扱ったもの。決定版ともいうべき海音寺潮五郎の『蒙古来る』や、歴史ものの面白さの中に伝奇的なうま味を加えた山田智彦の『蒙古襲来』等の大作が有名だが、この作品は、従来あまりスポットを当てられていなかった松浦党の謀略と活躍を通して元寇の役を描いた作品である。史料調査を踏まえつつ、更にその裏面から歴史を捉え直そうとする作者の意欲が感じられる一篇である。また今一つの新田次郎作品「意地ぬ出んじら」は、日本の中にありながら、対本土という関係で常に苛酷な歴史を強いられて来た沖縄にスポットを当てた作品である。最近では大城立裕の長篇『小説琉球処分』が文庫で再刊されているが、現代史と密接な関わりを持つテーマを含んでおり、敢えて一作家二作品となるも、本書に収録した。一女性の忍従

を伝える伝説を逆手にとったところに作者の意図は充分あらわれていよう。

白石一郎の「いれずみ国姓爺」は、歌舞伎でお馴染みの「国性爺合戦」に材を得た作品。この明・清の抗争期に、中国人を父に、日本人を母に持ち、明国の復権を目指して戦った英雄児・鄭成功＝国姓爺の物語は、正徳五年、大坂竹本座で上演され、三年越し十七カ月のロング・ランとなった近松門左衛門の代表作である。長谷川伸の『国姓爺・飛黄大船主』等の先行作品があるが、この短篇は、直木賞受賞作『海狼伝』等で知られる当代きっての海洋時代小説の書き手が、その鄭成功の弟と称する人物を主人公にした異色作。海を渡ることの出来ない、この男の転変を描くという、軸を一つずらした構成が心憎い。

新宮正春の「安南の六連銭」は、「小説現代」新人賞を受賞したこの作者のデビュー作。『鷹たちの砦』『陰の剣譜』等、伝奇的作品を得意とする作者だけに、本篇でも、安南の日本人町を舞台に、六文銭という異名を持つ主人公の出生とその顚末が伝奇的に語られていく。作品集『不知火殺法』に収録されているエキゾチックな味わいの決闘譚とも一脈通じており、作家新宮正春の原点を検証する上でも興味深い一篇といえるだろう。

久生十蘭の「呂宋の壺」は、島津義弘の命を受け、はるばる呂宋まで茶壺を探しに出かけた大迫吉之丞の物語である。太閤秀吉や呂宋助左衛門ら、お馴染みの史上人物も登場し、一種の漂流冒険譚のかたちで物語は進められるが、歴史の中の徒労として物語をしめくくる手法が秀逸だ。主人公の大迫吉之丞は、主君の命令でも心に染まぬ宗旨に帰依するのは不本意だと、一分の自我を立てるほどの屈強な人物だが、そういう男が愚にもつかぬ壺を大名物だ

と思いこまされ、シャムの果てまで流浪艱難する、やる瀬ない姿を書いてみたかったというのが、作者の言である。

菊池寛の「碧蹄館の戦」は、御存じ、豊臣秀吉の朝鮮の役を描いたもので、史譚集『日本合戦譚』に収められた一篇。菊池寛にはこの作品集の他にも、『日本武将譚』『仇討ち新八景』等、秀逸な史譚集や作品集があるが、それらはいずれも、江戸期の逸話や随筆を読むことをよろこびとし、作者自らが興味津々たる面持ちで歴史の中へ分け入って行った楽しみに満ちている。この作品にも、随所に独自の史観をちりばめながら、虚構を排した合戦の実相に迫ろうという姿勢がはっきりとうかがえよう。

陳舜臣の「桃李の剣」は、異色の作品集『漢古印縁起』に収録された逸品である。この作品集では、蘇州唐寅の「日本早春図」、漢代古銅印、敦煌の多聞天踏魔像、そして桃剣・李剣等、芦屋に住む造り酒屋桜井家の主人が聞き手の〝私〟に、自分が蒐集した古美術品の来歴を語るという形式で物語が進められていく。一つの美術品の転変によって日中相克の歴史が重層的に浮かび上ってくるという手法は、同じ作者による直木賞受賞作「青玉獅子香炉」を思わせるものがあるし、神戸生まれの中国人という、いわば「二つの祖国」を持つ作者は、本巻に最もふさわしい書き手といえるかもしれない。

山田風太郎の「スピロヘータ氏来朝記」は、外来文化の中で、封建期からわが国に最も強い影響を持ったキリスト教を扱った切支丹ものの秀作である。山田風太郎の場合、そうした作品でテーマとなっているのは、ほとんど背教・背信だが、このようなテーマの選択は宗教

の欺瞞性を暴くために用いられているわけではない。作品が書かれたのは、終戦後間もない頃で、そこには、敗戦を機にした価値観の転換や、国家という名の宗教に裏切られた人々の苦悩が込められている。作中で、八月十五日という日付が強調されているように、この作品は過去を描いて、同時に、現代史の一面をも捉えている作品なのである。

村上元三の「ポーハタン号の密航者」から、扱われている時代は幕末・維新期へと入る。この作品は安政七年、遣米使節一行がオワフ島へ寄航した時の一挿話として描かれた好篇である。作者の言によれば、風間書房から刊行された『万延元年遣米使節史料集』全七巻の中には、勘定組頭森田岡太郎の日記が出てくるが、その家来石川鑑吉の日記だけは収録されておらず、この作品は、作者の手もとにあった石川鑑吉の日記写本を材料にしたという。作中の坂本伝之助やハワイに住んでいた日本人のことは皆、創作だそうだが、結末の狩野のことばは、歴史の彼方に忘れ去られてしまった者たちの悲哀を余すところなく伝えていて、印象的だ。

綱淵謙錠の「朔」は、樺太開拓に情熱を燃やした旧越前大野藩士早川弥五左衛門を描いた力篇である。樺太に生まれ、日本の敗戦によってこの地を去った作者にとって、北方領土問題の根をさぐることは、自身の血肉につながるテーマでもある。樺太をめぐる日露の交渉の過程を幕末から明治期の歴史と絡めて描いた作品に『狄』『濤』『夷』等があり、本書収録の「朔」にも、早川弥五左衛門の苦闘の軌跡が、作者の内的必然性を伴った重厚な筆致で綴られている。短篇というよりは中篇に近い長さを持つ作品だが、本巻には逸すべからざる秀作

として敢えて収録した。現代史に直結するテーマを真正面から見据えた問題作でもある。

思えば明治維新は、海からの外圧が日本の歴史に大きな影響を与えたその最たるものだが、戸川幸夫の「維新の狐」は、イギリス公使パークスの幕末における対日交渉の過程を、彼が下関で求めた一匹の狐を通して巧みに描いた作品である。いかにも動物文学の第一人者にふさわしい発想が光るが、作者の言によれば、パークスが狐を連れていたという記録は実際にあるとのこと。利権にうごめく欧米列強や、その裏をかこうとする幕府を、狐と狸の化かし合いにたとえる手ぎわも鮮やかで風刺のきいた異色の幕末ものといえるだろう。

最後の一篇、宇井無愁の「開化飛龍車」で時代は明治に入る。所は大阪、新たに開通した岡蒸気と競走しようというもと飛脚の心意気が娘の幸せを呼ぶという、ほのぼのとした一篇である。宇井無愁には、この収録作品を表題作とした作品集や『前将軍退去』といった歴史ものの短篇集があるが、ユーモア作家として知られた人だけに、その本領は、本篇のように暖かな人情味を基調としたものにある。明治になって様々な文物が海を渡ってやって来たが、それら文明の力も一人の男の一徹な心情には叶わないという設定が良いではないか。明るく時代の波を乗り越えてゆく人々の姿に好感が持てる作品である。

以上、十三篇、戦争、漂流、開国等、海をめぐるわが国の歴史にスポットを当てた逸品を集めてみた。〈時代小説の楽しみ〉は、本書をもって幕となり、後は別巻のみとなる。この間、私自身、多くの読者諸兄とともに、新たな〈時代小説の楽しみ〉を発見する喜びを味わうことが出来た。長い間、このシリーズを愛読して下さった方々に心からの感謝をこめて、

解説の任を終えさせていただくことにしたい。

（平成七年五月、文芸評論家）

出典一覧

燈台鬼　『燈台鬼』平成三年、光文社文庫
元寇秘話　『赤毛の司天台』昭和六十二年、中公文庫
意地ぬ出んじら　『六合目の仇討ち』昭和五十九年、新潮文庫
いれずみ国姓爺　『オランダの星』平成三年、文春文庫
安南の六連銭　『小説現代新人賞全作品2』昭和五十三年、講談社
呂宋の壺　『久生十蘭全集第二巻』昭和四十五年、三一書房
碧蹄館の戦　『日本合戦譚』昭和六十二年、文春文庫
桃李の剣　『漢古印縁起』平成元年、中公文庫
スピロヘータ氏来朝記　『山屋敷秘図』昭和五十九年、旺文社文庫
ポーハタン号の密航者　「代表作時代小説11」昭和五十五年、東京文藝社
朔（さく）　『苔』昭和五十二年、中公文庫
維新の狐　『仇討ち異聞』平成元年、PHP文庫
開化飛龍車　『開化飛龍車』昭和二十三年、昭星社

この作品は平成三年四月新潮社より刊行された。

南條範夫著

幾松という女

維新の志士・桂小五郎と京都随一の美妓・幾松。絢爛たるロマンスを経て辿り着いた結婚生活と、悲劇的な愛の消滅を描いた傑作時代小説。

新田次郎著

珊瑚

華やかな珊瑚景気にわく五島列島を襲う空前の海難事故。海に生き、珊瑚採りに愛と野心と生命を賭けた三人の若者を描く海洋ロマン。

白石一郎著

幽霊船

謎の幽霊船に遭遇し若者の船は沈没、そして漂着した島で、彼は思わぬ人物と出会う。時代小説の多彩な魅力を満喫させる短編10編。

陳舜臣著

景徳鎮からの贈り物

―中国工匠伝―

時には権力者の専横を忍び、時には異民族の蹂躙に耐え、名品づくりに精魂を傾けた中国の工匠たちの数奇な運命を浮彫りにした8編。

山田風太郎著

室町お伽草紙

青春！信長・謙信・信玄 卍ともえ

若き日の信長、謙信、信玄が巻き起こす姫君争奪の大騒動。卜伝、伊勢守に護られた美姫香具耶の運命や如何。長編伝奇小説の決定版。

戸川幸夫著

高安犬物語

直木賞受賞

山形地方にただ一匹純血を保つ高安犬の、密林に大熊と格闘する烈しい性格や、飼主の荒くれ猟師を慕う強い愛情を描いた感動的名作。

新潮文庫最新刊

西村京太郎著

別府・国東 殺意の旅

レイプ犯の汚名を着せられた西本刑事。罠の存在を嗅ぎつけた十津川警部は、逮捕された部下の西本を救うため、必死の捜査を続ける。

山村美紗著

猫を抱いた死体

猫を抱いた少女の轢き逃げ事件。ほどなく犯人が自首した。だが……死者の無念を推理で晴らす〈葬儀屋探偵〉明子、シリーズ第2弾。

椎名誠著

気分はだぼだぼソース

誰もが一度は感じる素朴なギモン。シーナマコトの観察眼はやがてそれを怒りに変える。スーパーエッセイの傑作、ついに文庫化！

小林信彦著

世界でいちばん熱い島

これほど甘美で濃密な愛があろうとは……。南海の小国を舞台に、笑いとサスペンスいっぱいに繰り広げる陰謀と熱愛と冒険の物語。

高杉良著

男の決断

―企業合併、社長追放……存亡を賭けた一瞬―

巨大銀行の誕生、興銀の巨額の融資疑惑、三菱油化の社長追放事件など社の存亡を救う決断の一瞬を描く経済小説&ドキュメント6編。

南原幹雄著

幕府隠密帳

尾張徳川家の陰謀を公儀御庭番が摑んだ。尾張と手を結んだ伊賀甲賀の秘術が御庭番を襲う。忍者同士の凄絶な闘いを描く連作長編。

新潮文庫最新刊

佐野三治著
たった一人の生還
「たか号」漂流二十七日間の闘い
直面する死と勇敢に闘い、あの海に今も眠る仲間たちのために——。凄絶な体験のすべてを綴り人間の根源を衝く海と死と生命の記録。

池部良著
そよ風ときにはつむじ風
おやじは生粋の江戸っ子で、素っ頓狂な頑固者。でも根は優しい人情家。昭和初期のユーモア溢れる家族の肖像を活写したエッセイ集。

兼高かおる著
私の愛する憩いの地
〝世界の旅〟でお茶の間を魅了した著者が披露するとっておきの地の数々。人、自然、歴史——美しい星地球への愛情あふれる旅案内。

奥本大三郎著
虫のゐどころ
奥本先生、今日の虫のゐどころは？『昆虫記』の訳者が、大学から世相、虫、文学、食まで、縦横無尽に綴った軽妙辛口エッセイ集。

縄田一男編
波濤風雲録
—時代小説の楽しみ⑫—
海の物語は、いつの時代にも益荒男たちの魂を揺さぶり、しばしばこの国の歴史をも転換させた。海洋もの時代小説の名作13編を収録。

群ようこ著
本は鞄をとびだして
半径500メートルのことにしか関心がない、と公言する著者が、海の向うの文学を読んでみれば……!?　超過激読書エッセイ海外編。

新潮文庫最新刊

R・フォード
北村太郎訳
銀の森の少年
銀の森に育った少年ナブは、小妖精王国への冒険に旅立った。森を苦しめる敵と闘うために。人と自然の関わりを感動的に描く長編。

M・モンテシーノ
石田善彦訳
クロスキラー（上・下）
薬物中毒で狂信的白人至上主義者の脳裏に浮かんだある計画。ロサンジェルスを恐怖に陥れた連続殺人鬼とはみ出し刑事の壮絶な戦い。

R・ブリンク
平田敬訳
アメリア・イヤハート最後の飛行
史上初の世界一周飛行に挑戦中、行方不明となった女性パイロットに与えられていた秘密任務とは。「20世紀最大の謎」の真相に迫る。

T・アービィ
長野きよみ訳
タニア18歳 世界一周
—890日の青春航海記—
風と凪と太陽と勇気と孤独と愛情がいっぱい。大学生活より2年半のヨット生活を選択したタニア18歳たったひとりの世界一周処女航海。

J・ラベル
J・クルーガー
河合裕訳
アポロ13
酸素、電力、水がない。宇宙空間で最悪の大事故に遭遇したアポロ13号はいかにして帰還したのか。船長ラベルの視点で描く実録作品。

A・コルビオ
齋藤敦子訳
カストラート
三オクターブ半の〝天使の声〟に熱狂して失神する女性が続出したと言われる、バロック・オペラの寵児ファリネッリの生涯。映画化。

波濤風雲録

—時代小説の楽しみ⑫—

新潮文庫　　な－29－12

平成七年七月一日発行

編者　縄田一男

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六—五四四〇
読者係(〇三)三二六六—五一一一
振替　〇〇一四〇—五—八〇八

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所

© Kazuo Nawata & SHINCHOSHA 1991　Printed in Japan

ISBN4-10-139722-8 C0193